ISSN 1881−445X

日本語用論学会

第9回
大会発表論文集

第 2 号

Proceedings of the 9th
Conference of the Pragmatics Society
of Japan

2006年12月9日(土)

於 桃山学院大学

The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会
2006

日本語用論学会
(The Pragmatics Society of Japan)
略称：PSJ

日本語用論学会役員

会長	：	澤田治美
副会長	：	山梨正明
事務局長	：	林　宅男
事務局補佐	：	山本英一
会計	：	山本英一
編集委員長	：	山梨正明
編集副委員長	：	林　礼子、東森　勲
編集委員	：	金水　敏、小泉　保、児玉徳美、久保　進、澤田治美、
	：	杉本孝司、高原　脩、田中廣明、西光義弘、西山佑司、
	：	林　礼子、東森　勲、松木啓子、中村芳久
大会運営委員長	：	西光義弘
大会運営副委員長(企画)	：	杉本孝司
大会運営副委員長(実行)	：	田中廣明
企画担当委員	：	内田聖二、杉本孝司、西山佑司、山口治彦
実行担当委員	：	彭　国躍、山口治彦、
事業委員長	：	高原　脩
事業副委員長	：	林　礼子
事業委員	：	高司正夫、中村芳久、松木啓子、余　維
広報委員長	：	久保　進
広報副委員長	：	金水　敏
広報委員	：	田代直也

(2007年 4月1日現在)

学会連絡先

日本語用論学会　事務局 (The Pragmatics Society of Japan)
〒594-1198
大阪府和泉市まなび野1番1号　桃山学院大学　林宅男研究室内
TEL：0725-54-3131　FAX：0725-54-3202
E-mail：psj-hayashi@kcc.zaq.ne.jp

学会ホームページ：http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4/index.html
郵便振替口座　00900-3-130378　口座名：日本語用論学会
年会費　(一般会員：5,000円、学生会員：4,000円、団体会員：6,000円)

ISSN 1881−445X

日本語用論学会

■

第9回
大会発表論文集

第 2 号

Proceedings of the 9th
Conference of the Pragmatics Society
of Japan

2006年12月9日(土)

■

於 桃山学院大学

The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会
2006

日本造船学会

第9回

大会発表論文集

Proceedings of the 9th
Conference of the Japanese Society
of Japan

日本語用論学会
(The Pragmatics Society of Japan)
略称：PSJ

日本語用論学会役員

会長	：	澤田治美
副会長	：	山梨正明
事務局長	：	林　宅男
事務局補佐	：	山本英一
会計	：	山本英一
編集委員長	：	山梨正明
編集副委員長	：	林　礼子、東森　勲
編集委員	：	金水　敏、小泉　保、児玉徳美、久保　進、澤田治美、
	：	杉本孝司、高原　脩、田中廣明、西光義弘、西山佑司、
	：	林　礼子、東森　勲、松木啓子、中村芳久
大会運営委員長	：	西光義弘
大会運営副委員長(企画)	：	杉本孝司
大会運営副委員長(実行)	：	田中廣明
企画担当委員	：	内田聖二、杉本孝司、西山佑司、山口治彦
実行担当委員	：	彭　国躍、山口治彦、
事業委員長	：	高原　脩
事業副委員長	：	林　礼子
事業委員	：	高司正夫、中村芳久、松木啓子、余　維
広報委員長	：	久保　進
広報副委員長	：	金水　敏
広報委員	：	田代直也

(2007年 4月1日現在)

学会連絡先

日本語用論学会　事務局 (The Pragmatics Society of Japan)
〒594-1198
大阪府和泉市まなび野1番1号　桃山学院大学　林宅男研究室内
TEL：0725-54-3131　FAX：0725-54-3202
E-mail：psj-hayashi@kcc.zaq.ne.jp

学会ホームページ：http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4/index.html
郵便振替口座　00900-3-130378　口座名：日本語用論学会
年会費　(一般会員：5,000円、学生会員：4,000円、団体会員：6,000円)

目 次

研究発表

■ 日本語疑問文で起こる後置の談話機能について …… 及川佳寿子 1

■ 比喩表現における意味論的主観性と語用論的主観性 …… 岡本 雅史 9

■ 構文の確立と語用論的強化:「全然～ない」の例を中心に …… 尾谷 昌則 17

■ 連結発話と非連結発話をめぐって …… 海寶 康臣 25

■ スケールに作用する表現としての「まあ」 …… 川田 拓也 33

■ 修辞疑問文の発話解釈に関する一考察 …… 後藤 リサ 41

■ ねじれた条件節を持つ条件文の分析 …… コルクサ, アリ アイジャン・加藤重広 49

■ 定冠詞theの機能と関連性理論 …… 今野 昌俊 57

■ 日本語比較文の2重基準性について …… 澤田 治 65

■ フランス語le定名詞句の照応—非同一性照応からのアプローチ— …… 出口 優木 73

■ 連結的知覚動詞構文の主語をめぐる問題
ゼロ形として表される知覚の主体 …… 徳山 聖美 81

■ 外国語習得における「共同注視」と「身体性」:
認知言語学原理を用いた外国語習得環境の構築 …… 中野研一郎 89

■ 英語アニメーション映画における日本語サブタイトル
—サブタイトルの表現性について— …… 永山 友子 97

■ 「あげる」と「くれる」の受益性について
—話し手の利益と共益関係の観点から— …… 野澤元・横森大輔・白土保 105

■ 2～4歳児における不確定性を示す文末助詞「かな」の使用:
幼児音声データベースを用いた機能の分析 …… 橋本亜井・松井智子 113

■ 談話管理から見た標識「まあ」について …… 水野 吉徳 121

■ Extended Reference in Blended Contexts …… 安原 和也 127

■ 否定疑問文の語用論的機能に関する考察 …… 山嵜章裕・横森大輔 135

■ 数詞を伴うトートロジー …… 山本 尚子 143

ワークショップ

「モダリティとアスペクトの語用論」　司会:澤田治美

- 英語(擬似)法助動詞構文と動機づけ……長友俊一郎　151
- 意志はwillの外から来る:意志・動作主・主体化……片岡　宏仁　155
- 領域副詞と法助動詞……岡本　芳和　159
- 視点の共有とReference Point……岩田　真紀　163

「対人関係の語用論」　司会:東森　勲

- エコー標識としての「やはり・やっぱり」……千田　愛　167
- 力関係(power)の均衡を維持する言語的ストラテジー……町田佳世子　171
- 否定的認知環境における沈黙の解釈……ダフィー美佐　175
- 精神療法面接における心理文と不安喚起との連関とその緩和表現……加藤　澄　179

「形式の語用論」　司会:久保　進

- Inquiring or Requesting? *It* and *That* in Questions.……中島　千春　183
- 受身文の動作主マーカーに関する考察—韓国語との対照を中心として—……千　英子　187
- Small Clauses Revisited……松本　知子　191
- 様態副詞slowlyと動詞の語義……出水　孝典　195

「日本語語用論」　司会:杉本孝司

- 授与関係を示す補助動詞の語用論的考察
  —「て〜やる/て〜くれる/て〜もらう」—……松尾　貴哲　199
- 複合格助詞「にとって」の生起条件について……神戸百合香　203
- 日本語の「直示的アスペクト」について……澤田　淳　207
- 日本語らしさについて—「ものだから」の考察を通して……松田　瑞江　211

「語用論と構文の使用」　司会:李　在鎬

- 英語形容詞の意味拡張:形式と使用の関係について……渋谷　良方　215
- 使役構文の拡張と語用論的条件……鄭　聖汝　219
- 名詞一語を「文」たらしめるのは何か
  —構文成立における意味フレームの役割—……横森大輔・山嵜章裕　223

ポスターセッション

- コピュラ構文の文法化 …… 神田　靖子　227
- 「説明」を表す日韓語の名詞性述語の対照研究
  —「のだ」と「kes-ita」を中心として— …… 金 廷珉・堀江　薫　231
- 疑問文文末における終助詞「か」の付加と省略に関して
  —日本語母語話者と日本語非母語話者の初対面会話データをもとに— …… 工藤　聡子　235
- 数量詞遊離構文の意味用法—日中対照的立場から— …… 洪　雅琪　239
- 実験に基づく「流れる」の語形の意味グループ …… 鈴木幸平・李　在鎬・黒田　航　243
- Procedural Meaning of "Pragmatic Sluicing" Construction …… 瀬楽　亨　247
- Reference and Metaphor in Copular Sentences: Description of Metaphor
  in terms of Extended Mental Space Theory …… 中川奈津子　251

付 録

- 入会案内 …… 255
- 日本語用論学会規約 …… 257
- 『大会発表論文集』(Proceedings) 執筆規定 …… 260
- ＜第10回大会で発表された方へのお知らせ＞ …… 262

Table of Contents

Lecture Sessions

- **Kazuko OIKAWA**: On Discourse Functions of Postposing in Japanese Questions 1
- **Masashi OKAMOTO**: Semantic and Pragmatic Subjectivities in Rhetorical Expressions 9
- **Masanori ODANI**: The Establishment of Construction and Pragmatic Strengthening: The Case of Japanese "Zenzen ... nai" Construction 17
- **Yasuomi KAIHO**: On And-conjunction and Juxtaposition 25
- **Takuya KAWADA**: "*Maa* as a Scalar Operator in Japanese" 33
- **Risa GOTO**: Title: Understanding Utterances of Rhetorical Questions 41
- **KOLUKISA, Ali Aycan and Shigehiro KATO**: Analysis of the conditional sentences with a pragmatically twisted subordinate clause in Japanese 49
- **Masatoshi KONNO**: The Function of the Definite Article "the" and Relevance Theory 57
- **Osamu SAWADA**: On the dual standard of the Japanese comparatives 65
- **Yuki DEGUCHI**: Anaphoric Definite Noun Phrase in French, an Approach from Non-Identical Anaphora 73
- **Kiyomi TOKUYAMA**: The Puzzle over the Copulative Perception Verb Construction 81
- **Kenichirou NAKANO**: Joint Attention and Embodiment in Foreign Language Acquisition: Constructing the Foreign Language Acquisition Environment —A Theoretical and Empirical Study of the Foreign Language Acquisition Environment Designed for Constructing the Dynamic Conception Network in the Learner's Brain— 89
- **Tomoko NAGAYAMA**: Expressivity of subtitles : Japanese subtitles in English-language animated films 97
- **Hajime NOZAWA and Daisuke YOKOMORI and Tamotsu SHIRADO**: On Benefactivity of Japanese Verbs "ageru" and "kureru": An Analysis from the Viewpoint of Speaker's Benefit and Benefit-sharing 105
- **Ai HASHIMOTO and Tomoko MATSUI**: Children's use of sentence-final particle *kana* to express uncertainty: A corpus-based analysis 113
- **Yoshinori MIZUNO**: Japanese Marker "Maa" As a Discourse Management 121
- **Kazuya YASUHARA**: Extended Reference in Blended Contexts 127
- **Akihiro YAMAZAKI and Daisuke YOKOMORI**: Pragmatic Function of Negative Questions 135
- **Naoko YAMAMOTO**: Tautologies with Number Terms 143

Workshop Sessions

■ **"Pragmatics of Modality and Aspect"** **Chair: Harumi SAWADA**

Shunichiro NAGATOMO: (Quasi—) Modal Constructions and Motivation 151

Hirohito KATAOKA: "Will comes from outside the WILL" 155

Yoshikazu OKAMOTO: Sentence Adverb *reportedly* and Modal Auxiliaries —In terms of Subjectivity/Objectivity and Viewpoint— 159

Maki IWATA: A joint viewpoint and the reference point 163

■ **"Interpersonal Pragmatics"** **Chair: Isao HIGASHIMORI**

Ai CHIDA: "*Yahari·Yappari* as an echoic marker" 167

Kayoko MACHIDA: Some verbal strategies employed to maintain power equilibrium in social interaction 171

Misa DUFFY: Interpretation of Silence in the Cognitive Structure of Negation 175

Sumi KATO: The Correlation between Psychological Utterances and Anxiety arousal,and its Mitigating Expressions in Psychotherapy 179

■ **"Pragmatics of Form"** **Chair: Susumu KUBO**

Chiharu NAKASHIMA: Inquiring or Requesting? *It* and *That* in Questions 183

Youngja CHEON: Consideration about an agent marker of a passiveness sentence —Mainly on contrast with Korean— 187

Noriko MATSUMOTO: Small Clauses Revisited 191

Takanori DEMIZU: The Manner Adverb "Slowly" and the Lexical Meaning of Verbs 195

■ **"Japanese Pragmatics"** **Chair: Takashi SUGIMOTO**

Takanori MASTUO: A Study of Japanese Subsidiary Verbs of Benefactives in Case of "*-teyaru / -tekureru / -temorau*" 199

Yurika KAMBE: On a Condition of the Occurrence of Compound Particle *Nitotte* 203

Jun SAWADA: On the Deictic Aspect in Jepanese 207

Mizue MATSUDA: Analysis of *monodakara*: a typical Japanese expression for self-justification 211

■ **"Pragmatics and the Use of Constructions"** **Chair: Jaeho LEE**

Yoshikata SHIBUYA: Semantic extension of English adjectives: focusing on "form" and "use" ... 215

Chung, Sung yeo: The Extension of Causative Construction and it's Pragmatic Conditions 219

Daisuke YOKOMORI and Akihiro YAMAZAKI: Pragmatic Consideration on One Word Sentences 223

Poster Sessions

- **Yasuko KANDA**: Grammaticalization of the copula construction 227
- **Kim Joungmin and Kaoru HORIE**: A contrastive study of nominal predicates
  Japanese and Korean —With particular attention to *noda* and *kes-ita*— 231
- **Satoko KUDO**: Ellipsis and of the interrogative particle —Pragmati approach— 235
- **Ya-Chi Hung**: A Study of Quantifier Floating in Translation Corpus
  —Consideration on the expression of Chinese— 239
- **Kohei SUZUKI and Jaeho LEE and Kow KURODA**: Identifying Meaning
  Clusters of Japanese Verb *nagareru* 'to flow': Psychological Experimental Approach 243
- **Tohru SERAKU**: Procedural Meaning of "Pragmatic Sluicing" Construction 247
- **Natsuko NAKAGAWA**: Reference and Metaphor in Copular Sentences:
  Description of Metaphor in terms of Extended Mental Space Theory 251

研究発表

Lecture Sessions

日本語疑問文で起こる後置の談話機能について

及川 佳寿子
東北大学大学院情報科学研究科

＜要旨＞
従来、日本語後置文の分析では後置文が現れる文脈などが制限されることがなかったため、その談話機能もまとまりがなくなるか、最終的には「強調」や「補正」にまとめられることが多かった。また、分析の際には後置文の先行文脈には着目するが後続文脈との関係に注目するものは少なかった。本研究では神尾(1998)の「情報のなわ張り理論」の概念を用いて、日本語後置文の中でも疑問文内で起こる後置に着目し、先行文脈だけでなく後続文脈も示して日本語の後置疑問文では後置要素に後続する聞き手の発話に制限を加える談話機能があることを提案する。また、データはテレビのトーク番組から引用することで、司会者が質問者でゲストが応答者であるという役割や、収録前の打ち合わせにより質問者が質問内容に関する確信を持っている点なども考慮する。
【キーワード】：　後置疑問文、情報のなわ張り理論、談話機能

1．はじめに

本研究では、(1),(2)のような疑問文で後置が起きた文を分析する。日本語後置文には「強調」や「補正」などの談話機能があるとされ、先行する文脈に着目したり、聞き手に発話をよく理解してもらうために後置が起こっていると言われることが多かった(藤井:1995、坪本:1998、Matsumoto:1998)。本研究では神尾(1998)の「情報のなわ張り理論」の概念を導入し、日本語の後置疑問文では後置要素に後続する聞き手の発話に制限を加える談話機能があることを提案する。その際には、本研究で提案する談話機能が生じる環境の特徴についても触れていくこととする。また、本研究で扱う例文には疑問詞（助詞）が現れない場合があるが「応答や情報を求めるために用いられる文（英語学用語辞典：三省堂）」であることと、クエスチョンマーク表記した部分で上昇イントネーションをとっていることから疑問文とみなしている。

(1) a. ほんとなの？それ。
　　b. 悪役だからすごい上手なんですって？おっかながらせんの。　　（『徹子の部屋』）

(1a)では述語が文末に来る日本語の基本的な語順だと「それほんとなの」という文のそれが、(1b)では「悪役だからおっかながらせんのすごい上手なんですって」という文のおっかながらせんのがそれぞれ文末に後置している。

(2) a. ひと回り上なの、お父様が。　(藤井 1995：184)
b. 涙はどうなるんでしょうか、無重力で？　(坪本 1998：184)

(2a)のお父様がという要素の後置にはこの発話の前の文脈にある「母親」との混乱を避ける「修正」、つまり「補正」の機能がある。一方、(2b)の無重力での後置は質問の意図や意味を明らかにする「強調」の機能があるとされる。

ここでいう後置とは、述語の前にあるはずの要素が文末に移動したということではなく、述語の後に位置していることを意味している。

(3) John が pro 読んだよ, ~~John が~~ LGB を ~~読んだよ.~~ (Tanaka 2001：553)

本研究で扱う後置文の派生の段階には、久野(1978)や Tanaka(2001)のように「コンマの前の先行文内に後置要素と一致する pro がある省略文＋その pro に後置要素を埋められた文の繰り返し文」という(3)のような形式があったことを想定している。コンマの前の文ではもともとは「pro＋述部」という形がとられているため、その pro と一致する後置要素も同様に述部に相当するような説明をその後続部に必要とすると考えられる。

2．情報のなわ張り理論

神尾(1998)によると『情報のなわ張り理論』では、ある情報が誰のもの、すなわち誰のなわ張りに属するかを決定する要因としてはⅰ）情報の内容, ⅱ）話し手・聞き手が誰であるか, ⅲ）話し手・聞き手による情報の認識の度合いの 3 つが挙げられる。さらに、話し手が疑問を発している以上、与えられた情報は話し手にとっては認識できていないが、一方聞き手にとっては認識できている(と話し手は想定している)情報のはずであるとされる。特殊な場合を除き、話し手が、聞き手より自分の方が詳しく知っていると考えられる事柄をわざわざ聞き手に尋ねるのは不自然だからである。よって、質問されている情報は話し手もある程度認識しているものの、聞き手のなわ張りに属すと考えられる。また、実際にどのような情報が話し手または聞き手のなわ張りに属するのかという条件として、本研究では(4)に示す神尾(1998:30)の「情報が話し手または聞き手のなわ張りに入るための条件」を採用する。

(4) a. 情報が話し手または聞き手の内的直接体験によって得られたものであること。
b. 情報が話し手または聞き手の外的直接体験によって得られたものであること。
c. 情報が話し手または聞き手の専門的領域またはその他の熟達した領域に関わるものであること。
d. 情報が話し手または聞き手にとってきわめて個人的な事柄に関するものであること。話し手または聞き手自身に関する事柄をも含む。

(4a)における「内的直接体験」とは、話し手または聞き手の内部で感じられる痛みなどの感覚、喜びや悲しみなどの情緒、記憶や判断などの心理作用のことをいう。また(4b)における「外的直接体験」とは、五感を通じて見たり聞いたりした外部から認識される直接体験をいう。

3．分析

3．1　共同行為としての対話

片桐(1995)では、対話は「複数の参加者によって行われる共同行為」として捉えられ、次のような2つの特徴を有するとされている。

○ 動的変化 ： 対話の参加者は対話の進行に関してあらかじめ確実な予測をすることはできない。対話の場の状態は対話の進行に伴って動的に変化する。参加者はそのような変化に対してその場で臨機応変に対応する必要がある。

○情報共有の保持の必要性 ： 対話を有効に進行させて情報の共有というコミュニケーション本来の目的を達成するには、常に対話参加者間の情報共有状態を保持する必要がある。対話参加者のうちの誰かが発話の内容情報の獲得・理解に失敗してしかもそのまま放置されたならば、その参加者は実質的に対話からはずれたことになる。

このような対話の特徴を踏まえると、疑問文で後置は起こっていないが(5)の例において聞き手が話し手の示す標識に気付き、臨機応変に対応して対話を進めていることがわかる。

(5) K：例えば　えー　食物繊維が豊富に含まれているというのはご存知ですか？
T：そうです。あたしも知らなかったです　これにそういう食物繊維が
で　それうそじゃないかと思って
あれちょっとインターネットで調べてみましたら
K：あ　すごい。
T：10％から20％？　食物繊維が、
K：含まれてるんですねー
T：含まれてる。　('06/7/11『徹子の部屋』)

(5)の下線部では、話し手Tの食物繊維がという発話の後にポーズがある。聞き手Kは話し手Tの発話が不完全なところで途切れていることと少し長めのポーズに気付き、不完全な文となっている食物繊維がという発話にその続きである含まれてるんですねーという述部を補っている。つまり、聞き手Kは話し手Tが示した変化（不完全な文・ポーズ）に反応して、不足部分を補うという臨機応変な対応をしたのである。また、聞き手Kが補った含まれてるんですねーという発話の直後の話し手Tによる発話（含まれてる）において、その聞き手Kの発話を訂正するような発話をしていないことから、聞き手Kは話し手Tの意図を正しく汲み取っていることになる。

3．2　疑問文で起こる後置の談話機能

ここでは(4)の「情報が話し手または聞き手のなわ張りに入るための条件」を導入して後置疑問文の分析をしていく。

(6) T：でも　本当に　おきれいなー　あの今からではちょっと考えられないけど
そういうようなぱなしちゃんていうのは
ずいぶんそういうのはいっぱいあったんですって？ちっちゃいときって。
K：あります。あの　今でも　ちょっとそういうところがあってですね、
T：あ　ご結婚なすったすぐ後に
ほんとにぱなしちゃんだねってご主人がおっしゃったっていうのも
ほんとなの？それ。
K：いやー　あのですね、あたしもこんな話すると恥ずかしいんですけどー、
あのー　なんかわりとー　開けたらそのまんま
こう　ドアを開けたらもう次のこと考えてるんで、
T：わかるー　('06/6/28『徹子の部屋』)

(6)の下線部は疑問文で後置が起こっており、後置要素はそれである。この指示代名詞は聞き手Kの「ご主人」の行為に関する直前の文脈を示し、かつその「ご主人」による発話を聞き手Kが直接聞いたはずなので、(4b)と(4d)により聞き手Kのなわ張りに属すことになる。形式だけを見た場合、この疑問文は後置要素が本当かどうかを尋ねるもので、答えの選択が限定されているはずだが、後続の聞き手Kによる応答文ではそれがtopicとなり、なぜ「ご主人」が聞き手Kに「ほんとにぱなしちゃんだね」と言ったのかという経緯に関して聞き手Kが詳しく説明している。つまり、話し手Tが質問をしかつ聞き手Kのなわ張りに属する情報それを後置したことから、聞き手Kは臨機応変に対応してyes／noで質問に答えるのではなく、それに関する詳しい説明をしたのである。以上のことから、本研究では疑問文で起こる後置の談話機能として(7)を提案する。

(7) 話し手が、答えの選択が限定された疑問文で特定の要素を後置する場合、その要素は聞き手のなわ張りに属し、かつ話し手がそれに関する説明を望んでいることを示す標識となる。

(7)を簡単に言うと、「答えの選択が限定された疑問文の後置要素の情報は聞き手のなわ張りに属したものなので、詳しい知識の持ち主である聞き手に説明をお願いしたい」ということである。話し手が発話した疑問文の文末は、聞き手が発話する応答文の文頭に最も近い位置でもあり、話し手は、聞き手のなわ張りに属し、かつ詳しい説明が聞きたいtopicを後置することで、聞き手がその続きを話しやすい環境を準備したことになる。つまり、話し手は自分の知りたいことを聞き手に話させるための布石を置き、聞き手の次の発話を一定の方向に導くことになるのである。

3．3　疑問文で起こる後置の分析

(8) T：だけどそのー　あの怒るときもー　なんか立てとかって言うとー
　　悪役だからすごい上手なんですって？おっかながらせんの。ふふふ。
　Y：あのねー　あの怖がらせたほうがいいんです。
　T：子供を？
　Y：子供を。　　('06/7/12『徹子の部屋』)

(8)の後置要素はおっかながらせんのである。先行述部のんですってという間接引用表現から、聞き手Yは以前誰かを「おっかながらせ」たことがあり、それを話し手Tが第三者から聞いたことになるので、(4a)の条件により後置要素の情報は聞き手のなわ張りに属すといえる。この後置疑問文は本来後置要素おっかながらせんのが上手かどうかを尋ねているが、伝聞表現により話し手が質問した内容についてある程度確信を持っていることから、この後置疑問文は「yes」の答えと隣接ペアであると考えられるのでyes／noで答えるのではなく、後続文脈では後置要素が「怖がらせる」に言い換えられてtopicとなり聞き手によって詳しく説明されているため、(7)の特徴を示していることになる。

(9) T：さてあなたはー
　K：はい？
　T：今度ナスカの地上絵　こないだ「ふしぎ発見」でー
　K：あ　ありがとうございました
　T：あのクイズのマリア･ライへさんとおっしゃる、
　　あの方の　あの　まあー　あのー
　　いかに情熱をもってナスカの地上絵のことを　あの方はあれでしたよね、
　　絵はあの方のー　なぜ　あのー　なに？　いつ
　　誰がいつっていうのはだいたいわかってるんだけど
　K：はい。
　T：何のためにが
　K：[はい]。
　T：[わかん]ないんでしょ？あのナスカの地上絵がね。
　K：はい。そうですね。ナスカの地上絵の謎はいつ誰が何の目的で
　T：うん。
　K：どうやって描いたのかという、
　　まあ　あのー　いつというのはわかっていますねー　　('06/7/11『徹子の部屋』)

(9)では下線部の後置疑問文の前の話し手Tの発話がかなり複雑になっている。しかし、太字になっている誰がいつという部分は強く発話されており、区切りの印象を与えているため、ここから

話し手 T が自分の発話を整理したとみなすことができる。そうするとこの後置疑問文は「誰がいつっていうのはだいたいわかってるんだけど何のためにがわかんないんでしょ？あのナスカの地上絵がね。」で１つの文と考えられる。聞き手 K はナスカの地上絵の研究をしており、既に論文も発表していることを話し手 T は知っている。よって、この文の後置要素ナスカの地上絵は(4c)の条件により、聞き手のなわ張りに属していることになる。後続する聞き手 K の発話では、この後置疑問文が本来求めている「わからない」ことの確認にはい。そうですね。とそのまま答えているが、(8)と同様にここでも話し手 T がある程度質問内容の正しさに確信があるので「yes」の答えと隣接ペアになっていると考えられる。そして聞き手 K は話し手 T の想定どおりの「yes」を示すはい。そうですね。という応答だけでは終わらず、直後に「ナスカの地上絵の謎は」と発話して、後置要素ナスカの地上絵に関する詳しい説明をしている。よって、この場合も(7)の特徴を示していることになる。

最後に、後置が起こっていない疑問文と後置が起こっている疑問文との比較を見ていく。

(10) A：君はウナギが好きなんだって？
　B_1：白焼きが特に好きです。
　B_2：ウナギよりラーメンですけど。

(10A)は後置が起こっていない伝聞表現のある疑問文である。応答文として、(10 B_1)のウナギを topic にした yes の文でも、(10 B_2)のラーメンを topic にした no の文でも違和感がなく自然である。一方、後置が起こっている(11)では(10)と同じ応答文を後続させてみると違いが生じる。

(11) A：君は好きなんだって？ウナギが。
　B_1：白焼きが特に好きです。
　B_2：??ウナギよりラーメンですけど。

(11)では(11 B_1)の後置要素ウナギを topic にした yes の応答文は自然だが、(11 B_2)の後置要素ウナギではないラーメンを topic にした no の応答文だと不自然になる。(11A)の後置疑問文に見られるなんだってという間接引用表現は、話し手 A が「B はウナギが好き」だということを誰かから聞いていたことを示す。よって話し手 A はこの情報に関する確信を持っていたため、後置疑問文に対する応答は yes であると想定していたのが裏切られたことになる。このことに加え、聞き手 B の好物、つまり個人的な事柄で(4d)により聞き手 B のなわ張りに属するウナギについて詳しい情報を知りたいことを後置によってアピールしたにもかかわらず、聞き手がその意図を汲み取らずに topic を変えてしまったことから生じた不自然さだと考えられる。つまり、(7)を違反した結果生じた不自然さということができる。

4．結論

本研究で扱ったほとんどの例文の出典はテレビのトーク番組であった。Ilie(1999)によると、トーク番組(talk show)は質問者と応答者の role-switching などが起こることから casual discourse の特性を示しているが、一方でニュースのインタビューや法廷での尋問のようにホスト役である司会者が質問者でゲストが応答者という慣習化した(institutional)役割が本来は定まっているため、semi-institutional discourse とされている。質問者である司会者による疑問文の使用は、ゲストの考え・意見・見解を、伝えたり・要求したり・評価したりすることを意図しており、さらに番組における議論や会話のやりとりを操ることも意図されているとされている。つまり、ある程度テーマの定まっているトーク番組において司会者は質問者であると同時に、会話の進行を操作(control)したり、チェック(monitor)したりする役割も担っているのである。よって、トーク番組司会者が使用する疑問文には、ゲストから番組のテーマに沿った情報を引き出し、かつ視聴者がそれについて容易に理解したり楽しんだりすることを促すような談話機能が必要であると考えられる。

また、本研究で提案した談話機能を持つ後置疑問文でトーク番組から引用したものはすべて番組司会者による発話である。このような疑問文が現れる環境には、後置疑問文やその前の話し手の発話に引用表現があるという特徴が見られた。これはデータの出典であるテレビ番組では、どのような話題を扱うのか、番組で使用できるようなエピソードはあるのか、そしてそれはどのようなエピソードかということについて番組収録前に綿密な打ち合わせがなされていることを示している。つまり、本研究で扱った疑問文の質問者である司会者が尋ねた内容について応答者ほど詳しくはないがすでにかなり強い確信を持っていることになり、応答者であるゲストもこのことは既に認識している。このためこの後置疑問文に対する返答は yes になるという制限が働き、yes という答えと隣接ペアになるのである。よって、質問者である司会者は応答者であるゲストに対して、疑問文に単純に答えるだけでなくさらに詳しい情報を教えてほしいと望んでいることになる。また、聞き手のなわ張りに属する要素を後置することから、(7)で示した談話機能は「後置要素に関するより詳しい情報を知りたい」という話し手の発話の意図を明確にし、後続する聞き手の発話の方向や topic を制限するため、Blakemore(1992)がいう談話標識による発話解釈の制限と共通している。

まだ充分な分析ではないが、本研究で提案した談話機能を持つ後置疑問文は、後置要素が topic となっている会話が続いてきた中で小さな topic-switching のきっかけとなっている場合も見られた。話し手と聞き手間の作用だけでなく、談話の冒頭から最後まで着目し、後置疑問文が談話のどのような位置で生じて、全体にどのような影響を与えているのかも興味深い点である。このことに関しては、後置が起こっている場合だけでなく、後置が起こっていない答えの選択が限定された疑問文とその応答文についても併せて考察することが必要だと考えられる。また、トーク番組の中でも今回引用した番組のように事前の打ち合わせが綿密に行われているものだけでなく、司会者が質問者でゲストが応答者という役割は定まっているがもう少し司会者のコントロールが弱まっているようなテレビ・ラジオ番組や雑誌の対談なども分析対象とした更なる分析を今後の課題としたい。

参照文献

Blakemore, Diane. 1992. *Understanding Utterances*. Oxford : Blackwell.

藤井洋子. 1995.「日本語の語順の逆転について―会話の中の情報の流れを中心に―」『日英語の右方移動構文―その構造と機能―』167-198. 東京：ひつじ書房.

Ilie, Cornelia. 1999. "Question-response argumentation in talk shows." *Journal of Pragmatics* 31, 975-999.

鎌田修. 2000.『日本語の引用』東京：ひつじ書房.

神尾昭雄. 1990.『情報のなわ張り理論』東京：大修館書店.

神尾昭雄. 1998.「情報のなわ張り理論：基礎から最近の発展まで」神尾昭雄・高見健一『談話と情報構造』2-111. 東京：研究社出版.

片桐恭弘. 1995.「終助詞による対話調整」『言語』24, 11, 38-45.

久野暲. 1978.『談話の文法』東京：大修館書店.

Matsumoto, Kazuko. 1998. "Detached NPs in Japanese conversation: Types and functions." *Text* 18, 417-444.

Tanaka, Hidekazu. 2001. "Right-Dislocation as scrambling." *Journal of Linguistics* 37, 551-579.

坪本篤朗. 1998.「主題が後置された文―日英語比較とその問題点―」『静岡大学人文論集 49』175-195.

データの出典

『徹子の部屋』テレビ朝日 2006/6/28, 2006/7/11, 2006/7/12.

比喩表現における意味論的主観性と語用論的主観性

岡本 雅史
東京工科大学 片柳研究所
okamotoma@media.teu.ac.jp

＜要旨＞
本稿では，従来の認知言語学的な主観性の議論が，認知主体と話者の混同から生じる「主観性の帰属問題」と，言語表現に埋め込まれた主観性を発見し認知する「主観性の理解過程」の軽視という 2 つの問題を抱えていることを指摘する．そして，こうした〈主観性〉にまつわるこれまでの研究を批判的に検討し，新たに〈意味論的主観性〉と〈語用論的主観性〉という概念を導入する．この観点からメタファーや直喩などの比喩表現がどのように解釈者に理解されるかを分析し，文体やレトリック分析までを包含する新たな認知語用論の可能性を探る．
【キーワード】意味論的主観性，語用論的主観性，レトリック，参照点能力，認知語用論

1. はじめに

言語表現における主観性に関しては，近年多くの研究がなされているが，池上 (2003) が指摘するように，言語学の分野において主観性が直接取り扱われるようになったのは，認知言語学の進展と軌を一にしている．認知言語学の登場以前は，生成文法の言語観に代表されるように，言語使用者の理想化の当然の帰結として，言語と言語使用を媒介する人間の存在を希薄化する傾向が拭えなかったからである．

しかしながら，従来の認知言語学的な主観性の議論は本質的に次の二つの問題を抱えているように思われる．一つは，認知主体と話者の混同から生じる「主観性の帰属問題」，もう一つは，言語表現に埋め込まれた主観性を発見し認知する「主観性の理解過程」の軽視である．前者の問題は，言語表現に埋め込まれた〈主観性〉を単純に「いま・ここ」の話者に帰属させてしまうことによって，言語使用の場において話者が主観的・主体的に言語を用いることと，既に慣習的な言語表現として確立された主観的（とみなされる）言語表現との区別を曖昧にする．一方，後者の点は，言語表現の理解過程において，何らかの主観性を解釈者が見出すとき，その主観性を「いま・ここ」の話者に帰属させることがどのようにして可能となるかという問いを改めて喚起する．

本稿では，こうした〈主観性〉にまつわるこれまでの研究を批判的に検討し，岡本他 (2006) で導入した〈意味論的主観性〉と〈語用論的主観性〉という概念を確立する．そして，メタファーや直喩などの比喩表現がどのように解釈者に理解されるかを通して，主観性の議論に新たな視点を投じ，文体やレトリック分析までを包含する新たな認知語用論の可能性を探る．

2. 意味論的主観性と語用論的主観性

2.1. 主観性の二つのレベル

先に挙げた，認知言語学で従来扱われてきた主観性の関わる言語現象とは，例えば次のようなものである (Langacker 1991: 328).

(1) Vanessa is sitting across the table from me.
(2) Vanessa is sitting across the table.

上記の例はどちらも話し手を〈参照点 reference point〉とした言語表現であるのだが，(1)では話し手が言語的に明示されているのに対し，(2)では明示されていない．これについて Langacker は，(1)のような文を発話する場合とは，例えば自分が Vanessa と一緒に写っている写真を見ながら説明するような場面であり，(2)のような文を発話する場合とは，実際に Vanessa と向かい合って座っている場において発話している場面であると解釈されると説明しており，この(2)のような場合，本来認知的に把握される対象となる事態の中に話者自身が入り込んでいるため〈主観化 subjectification〉が生じていると主張する．

こうした言語表現がある意味で「主観的」なものであることは認められるが，問題なのはこうした言語表現の主観性が果たしてどこまで「いま・ここ」の話者に帰属されるべきなのかは本質的に曖昧であることである．なぜならば，実際にこうした発話を行う話し手が主観的に当該事態を概念化し，言語化したと言うためには，本来主観的で

ない言語表現こそが規範的に用いられるべきであるという前提が必要となる．しかしながら，現実の話し手がそのような可能性をその都度考慮し，選択的に発話しているとは考えにくい．

従って，こうした主観性は，言語表現の中に長年に渡って埋め込まれた慣習的なものであると考え，本稿ではこれを〈意味論的主観性〉と呼ぶこととする（岡本他 2006）．これに対し，〈いま・ここ〉における話し手や書き手の創造的な言語使用において反映され，言語理解の過程において解釈者が見出す主観性を〈語用論的主観性〉と呼ぶことで，主観性の２つのレベルを区別したい．

2.2. 主観性の帰属問題

このように主観性の区別を行うことは次のような問いをその背景として持つ．まず，言語表現の主観性とはそもそも誰の主観性なのかという問題であり，ここではこれを「主観性の帰属問題」と呼ぶ．

この主観性の帰属問題は，従来の認知言語学においてしばしば見受けられる，認知主体と発話主体の同一視の誤謬に大きく関与している．例えば，Langacker はこの点についての自覚から，話者 (speaker) と概念化者 (conceptualizer) の区別を立てている．しかしながら，深田 (2001) が指摘するように，〈主観化 subjectification〉をめぐる議論のほとんどにおいて明らかに両者の混同が見られることは否定できない．

具体的に言うと，Langacker は〈いま・ここ〉の言語使用に関わる諸要因として，話者にとっての符号化に関する問題を以下のように列挙している．

(3) 話者にとっての符号化 (coding) 問題
- 詳細化の程度
- 概念化における強調側面の選択
- 聞き手との社会的関係
- コンテクストと伝達される概念についての聞き手の知識状態の評価
- 談話の流れとの整合性
- 聞き手に対して与えたい効果
- 聞き手の言語的能力に対する見積もり
- 言語慣習からの逸脱の程度

(Langacker 1987: 65)

こうした符号化の問題解決を，話者による言語の使用事象 (usage event) をターゲットとしたターゲット構造に求めるのが Langacker の立場であり，言語慣習としての文法がそうした言語表現の選択や創出にとっての大きなリソースとなることを主張する．この立場に筆者は完全に同意するものの，実際のところ上記の問題が具体的にどのように解決されているかについては不明なままであり，前節で見たような主観性の関わる言語現象についての Langacker 自身の説明と接合するのは困難である．

従って，主観性の帰属問題とは，つまるところ言語慣習としての文法や言語表現がいかにして成立してきたかを問う統語論/意味論的な立場と，そうした言語慣習を発話時点においていかに話者が動的に利用しているかという語用論的な立場とを峻別することによってのみ解決するものであり，一見主観的な言語表現であっても，その主観性が過去の認知主体に帰属するものなのか，それとも「いま・ここ」の発話主体に帰属するものなのかを問う必要があるのである．

3. 主観性の解釈的転回

3.1. 言語表現の交換可能性

意味論的主観性と語用論的主観性の区別を行うもう一つの背景として，「言語表現の交換可能性」の問題について述べたい．

(4) 〈美しい女性を見かけて〉
(ア) 彼女は美しい．
(イ) 彼女は素敵だ．
(ウ) あのコはイケてるね．
(エ) あの女性は薔薇のようだ．

こうした言語表現における話者の主観性を捉える上で問題となるのは，(i) 同一の対象や事態についての言語化は本当に複数可能であるのか，(ii) 解釈者（聞き手）は各発話に対して一様に安定した主観性の指標を適用することが可能か，ということであり，この両者は互いに緊密な相互関係にある．

前者の問題を「言語表現の交換可能性」として捉えると，認知言語学に限らず旧来の言語学では，しばしばこれを前提とする例が数多く見受けられる．例えば認知言語学では，こうした表現の違いは認知主体の捉え方 (construal) を反映しているとか，「客観的事態の主観的把握」であるとか，“Human beings employ a variety of construal operations in language (Croft & Cruse 2004)”など，といった言説でこの言語表現の交換可能性を示唆している．

しかしながら，話者がある言語表現を用いることには，不可避的に言語慣習やその場のコンテクストからの要請や制約が存在し，その意味で当該

発話を話者の「認知の直接的な反映」というのは不適切であることは自明である．例えば，(4)の例において指示対象を「彼女」とするか「あのコ」「あの女性」とするかは話者の事態認知だけでは決定できず，実際には話者自身の持つ言語的慣習や(3)で Langacker が挙げたようなコミュニケーション上の配慮が大きく関わっている．また，その指示対象に対する述定として，「美しい」とするのか「素敵だ」とするのか等についても，同様に様々な要因が絡んでいる．言い換えれば，ある特定の話者にとって「美しい女性」と「素敵な女性」は必ずしも同値でない上に，それが指し示す対象や事態の同一性を保証するものは本質的に存在しない．

従って，言語表現の交換可能性は，結局のところ生成文法的な理想化された話者/聴者のモデルに基づき，脱コンテクスト化された客観的な事態を前提とするものであり，認知言語学が標榜する「用法基盤 (usage-based) モデル」の不徹底を表すものであることを指摘したい．

3.2. 解釈者による主観性の発見

一方，前者の言語表現の交換可能性の問題を踏まえた上で後者の解釈者の観点を鑑みると，従来の主観性の議論は，一般に話し手/書き手がどのように事態を認知するかということにのみ重点が置かれてきた「事態認知中心主義」に基づいたものであると言える．しかしながら，(3)の符号化問題の意義を真摯に受け止め，いかなる言語メッセージも受信者/解釈者の存在を前提としているとする「コミュニケーションとしての言語観」に立てば，そうした事態認知中心主義が多くの欠陥を持つことが容易に推察されよう．

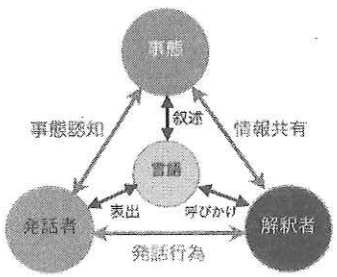


図 1．

ここで，Bühler のオルガノン・モデルに倣い，言語コミュニケーションを発話者・解釈者・事態・言語の 4 項関係で捉えるとするならば，解釈者にとって，言語の主観性は全ての参与項間の関係のうちに見出されるはずである（図 1）．これを発話理解の観点から捉え直すならば，解釈者は図 1 に示される言語コミュニケーションを構成する 3 つの次元から当該発話がなされた事態（＝発話事態）の評価 (assessment) を通じて発話理解を行っていると言える．つまり，発話者は何らかの言及すべき事態を認知し（認知主体），聞き手に何らかの情報を共有するべく言語化し（情報共有主体），その言語化した発話を通じて何らかの行為を遂行し，聞き手に影響を与える（発話行為主体），という 3 重の主体として発話事態に関与しており，この各々に応じた形で（聞き手を含む）解釈者は発話理解を行っているのである．

本稿では，この解釈者が行う言語コミュニケーションの評価を，それぞれ〈事態認知評価〉，〈情報共有評価〉，〈発話行為評価〉とする（岡本他 2006）．これを認知言語学の観点から敷衍すると，Lakoff (1987) の言う「理想認知モデル (ICM)」によって，解釈者の発話事態認知も発話者のそれと同様に言語コミュニケーションに関する ICM によって媒介されていると考えられ，以下のような ICM を解釈者の発話理解のリソースと見なすことができる．

(5) 理想認知モデル (ICM) に基づく言語コミュニケーション評価（岡本他 2006）
- (ア) 事態認知評価の ICM
  発話者の事態認知は解釈者の事態認知と一致していなければならない
- (イ) 情報共有評価の ICM
  a) 発話が伝達する情報は聞き手にとって十分な情報性を有していなければならない
  b) a の達成は必ず話し手と聞き手の双方が既に共有している情報にアクセスすることで達成されなければならない
- (ウ) 発話行為評価の ICM
  発話を構成する言語表現が要請する発話行為タイプと，発話状況が要請ないしは承認する発話行為タイプは一致していなければならない

こうした言語コミュニケーションの ICM という規範に照らすことで解釈者は当該発話の逸脱性を認知し，そこから発話者の主観性を見出している．

このように解釈者の立場から主観性の問題を再把握すると，実際に「いま・ここ」の発話者がどの程度主観的であったかという客観的な実在論を超え，解釈者によって認識論的に見出されるもの

として捉えることが可能になる．つまり，当該の言語表現が主観的であるか否かを〈認知主体〉の側から問題にする限り，言語表現に歴史的に埋め込まれた主観性（＝意味論的主観性）と，その言語表現を表出する時点での話し手/書き手の主観性（＝語用論的主観性）を明確に切り分けるのは困難となるが，〈解釈者〉はそうした主観性を発見し認知する立場であるので，どのような条件の下で当該の言語表現の中に主観性を見いだし，それをどのような認知プロセスにおいて話し手/書き手のものとして帰属させるのか，というタスクに変換することが可能となるのである．

4. 関連性理論の問題点

前節で述べた，解釈者による主観性の発見過程は，発話理解を支える規範と逸脱という観点から説明・記述されたものであるが，語用論的な伝統において，こうした立場は目新しいものではない．そもそも，Austin の言う「慣習性」や Grice の「会話原則 conversation principles」という概念は，共に〈言語コミュニケーションを支える規範〉と〈規範の逸脱としての意図理解〉を示唆していた．例えば，Grice がその会話原則において企図していたものは，逸脱的な「会話の含意 conversational implicature」の存在を告知する装置としてのコミュニケーション規範の定式化であり，また Austin が発語内行為の「適切性条件 felicity condition」として示したものも，発話の言語表現と発話状況の慣習的なカップリングとしての規範性である．

しかしながら，こうした規範性を重視していた Grice 主義語用論を批判的に継承する「関連性理論 (Sperber & Wilson 1986/1995)」は，推論による話者の意図の導出を強調するあまり，Grice や Austin が重視していた規範性の問題を軽視し，その結果次のような新たな問題を抱えていることを指摘しておきたい．

一般に関連性理論の推論モデルでは，意図明示推論的 (ostensive-inferential) コミュニケーションにおいて，ある発話がなされると，まず発話音声として入力され，母語を解する聞き手であれば自動的に論理形式としての心的表示を与えられる．そして当該発話がなされた文脈情報に照らして (i) 曖昧性の除去 disambiguation，(ii) 指示付与 reference assignment，(iii) 富化 enrichment，といった操作によって命題形式（Blakemore (1992)では〈表出命題 proposition expressed〉）に拡充される．さらに，文脈情報と言語形式に基づいた想定スキーマと結びつくことで同定された，〈命題態度 propositional attitude〉に埋め込まれ，〈表意 explicature〉を形成する．それと同時に発話によって顕在化された文脈情報の中で先に同定された〈表出命題〉によって呼び出された文脈情報が〈推意前提 (implicated premise)〉という文脈含意 (contextual implication) を生み出す．そして最後に，〈表意〉と〈推意前提〉から演繹されることにより，〈推意結論 (implicated conclusion)〉が生じる．この〈推意前提〉と〈推意結論〉はどちらも〈推意 implicature〉であるとされる (Sperber & Wilson 1986/1995; Blakemore 1992).

しかしながら，こうした関連性理論の推論モデルは話者によって意図された意味をいかに導くかという点に重きが置かれており，解釈者にとって発話理解がどのようになされるかという点については問題が残る．例えば．発話理解に〈表意〉や〈推意〉の形成が不可欠であるかどうかを考えてみると，必ずしも明確な命題形式でそれらを復元することなく発話理解が達成されると考えられる例は数多く存在する．つまり，〈表意〉や〈推意〉を導出することをもって発話理解を完了するのではなく，発話理解の結果，事後的に話者の意図した意味の一部として〈表意〉や〈推意〉を解釈者が推論することを関連性理論の推論モデルでは考慮に入れていない．このように発話理解の目標 (goal) と副産物 (by-product) を混同する傾向は，推論による発話理解の説明でしばしば見られるものである．

また，Sadock (1986) は (i) 関連性理論の理論は語用論の原則を単純化しすぎており，それだけでは過不足のない説明原理とは言えない，(ii) ポライトネスのように命題的に扱われやすいが，実際は水平的な社会的能力の反映であり，推論能力とは区別されるべき現象が存在する，という２点を挙げ，関連性理論の命題操作的な性質を批判している．

さらに，関連性理論で扱われる〈表意〉や〈推意〉のどこまでを話し手の意図の中に含めるべきかという問題がある．実際，ある発話が聞き手に与える効果は話し手の意図を超えたものがあることは日常頻繁に経験するものであり，また話し手が利用するリソースとしての文脈情報（＝推意前提）は必ずしも聞き手に伝えたい情報ではない．

こうした問題点を鑑みるに，関連性理論がこれまでの語用論的伝統としての「規範と逸脱」モデルからの脱却を試みたことは，結果的に解釈者の立場からの認知語用論を確立する上で妨げとなっているように思われる．従って，以下本稿では「規範と逸脱」モデルを解釈者の発話理解過程からもう一度再考することで，様々なレトリック表現の

分析を行うことにしたい.

5. 語用論的主観性の諸相

5.1. メタファーの語用論的主観性

改めて言語表現における〈主観性〉を認知的観点から見直すならば，まずあらゆる言語表現の成立がコミュニケーションの参与者の相互作用を前提としていることと，その理解が言語使用を支える多元的な規範性に支えられていることを認めなければならない．そうすることで，いわゆる「客観的」な言表とは，当該コミュニケーションにおける発話主体の存在が背景化され，単なる情報として解釈者によって規範的に把握されたものとして，そして「主観性」とは解釈者の理解過程において顕現した何らかの逸脱によって発話主体が前景化される現象と捉え直すことができるだろう．この文脈において，後者の主観性は〈語用論的主観性〉と再定義され，一方〈意味論的主観性〉を担う言語表現は，「いま・ここ」の発話事態において客観的であるか，もしくは〈語用論的主観性〉の低いものであると考えることができる．

ここでいわゆるメタファー表現を考察してみると，近年認知言語学で取り扱われるメタファーは，主に抽象的概念をターゲット領域とし，具体的概念をソース領域とすることで，それらの領域間の写像によって前者を把握する認知能力を指していた (Lakoff & Turner 1989; Ungerer & Schmid 1996). “TIME IS MONEY”等に代表されるこうした概念メタファーは長期的な慣習によって無意識のうちに言語に埋め込まれたものであり，そうしたメタファーこそが最も重要なものであると認知言語学では考えられている．

しかしながら，こうした慣習的で〈意味論的主観性〉の高いメタファーだけがメタファーではない．次のような例では同じメタファー表現が，後の例ほど，後続する表現によってだんだんと〈語用論的主観性〉の高い表現として解釈されていく．

(6)　(指導する学生に将来の進路を相談されて)
(ア) 君は違う道を行きなさい.
(イ) 君は違う道を行きなさい．君が選ぼうとしている道はあまりにも険しい.
(ウ) 君は違う道を行きなさい．君が選ぼうとしている道はまだ全然舗装されていないし，普通の人間が気楽に歩けるものではない.

(ア)から(ウ)に行くに従って，発話者の主体的な認知作用が感じられるのはなぜだろうか．これに答えるためには，(ア)の表現によって伝達される意味が解釈者にとって慣習的/自動的にターゲット領域（＝将来の進路）で解釈されるのに対し，(イ)(ウ)と進むにつれて，ソース領域（＝実際の道）での解釈を要求されるという，メタファーの写像関係自体のダイナミクスを捉える必要がある．つまり，「将来の進路」というトピックに対して規範的にはその文脈での解釈を本来要請する表現が，「実際の道」の性質を述べる後続発話のためにどんどん逸脱していくのだが，最終的には元のトピックでの解釈に帰着する．この理解過程における逸脱度が〈語用論的主観性〉の違いとなって現れているのである.

同様に，次のような慣用句を用いた表現を比較する.

(7) 表題作の主人公も，私と同じ小心者だ．でんと構えていればいいものを，疑心暗鬼を消す事ができない．嘘の上塗りで，藪をつついて蛇を出す.
(http://www.bk1.co.jp/product/2325344/review/227567，下線は引用者)
(8) おいおい，藪をつついたら大蛇が出ちゃったよ.
(木尾士目『げんしけん(8)』，下線は引用者)

(7)の例では「藪蛇」という慣用句が規範的に使用されており〈意味論的主観性〉が強い表現であると言える．一方，(8)では「藪蛇」を土台に「大蛇」という表現を新たに使用することで，「藪蛇」のことわざの「必要もないことをしたために危難にあう」という意味を拡張し，「予想以上の危難」という含意を喚起する点で〈語用論的主観性〉が強いと考えられる．この(8)の表現は，(6)の(ウ)の表現とは異なり，ソース領域の「蛇」での解釈を解釈者に強く要請するものではない．むしろ，「藪蛇」という元々の慣習的な見立て自体に根ざして，それを意味的に拡張することで，新たな用法を創出しているのである.

こうした「新奇な (novel) メタファー」を Lakoff & Turner (1989) では，(i) 慣習的メタファーの拡張，(ii) 総称レベルのメタファー（例：Necessity is the mother of invention.），(iii) イメージメタファー（例：My wife...whose waist is an hourglass.），の３種に区別し，従来の概念メタファー理論では説明が困難なものとしている．本稿の立場では，単なる慣習化された命題構造的な領域間の概念写像のみで分析するのではなく，解釈

者の立場から規範的なメタファー表現と逸脱的な新奇なメタファー表現の違いをより精細に分析する必要があると考える．言い換えるならば，新奇な見立てがなぜ可能になるのか（＝話し手の動機付け）という問題と，新奇な見立てをなぜ理解できるのか（＝聞き手の認知過程）という問題を混同せずにこうしたメタファー表現を説明する手だてが求められているのである．

5.2. 直喩の語用論的主観性

一方，直喩については，メタファーと異なり，従来の認知言語学ではほとんど考察されることがなかった．しかしながら，佐藤 (1978) が正しく指摘したように，直喩は一般的な通念と異なり，《類似性に基づいて直喩が成立する》のではなく《直喩によって類似性が成立する》というような，書き手や話者の主観性の直接的な反映であると考えられ，本稿にとっては重要な言語現象である．例えば，'X is like Y'という，英語では最も一般的な直喩形式を持つ言語現象を分析すると，以下に見るように発話に隣接した形で話し手の発見した類似性の根拠を明示的に詳細化する場合が多い (岡本他 2006).

(9) The Dalai Lama said, "The mind is like a parachute, it works best when it is open." (http://techref.massmind.org/techref/quotes.htm)
(10) Men are like gum anyway -- after you chew they lose their flavor. (Ally McBeal, 1997)

この理由を考察すると，これらの直喩表現によって喚起される類似性は「いま・ここ」の話者の主観的な事態認知が直接反映しており，その事態認知が聞き手/読み手と共有されたものではないため，情報共有の観点から類似性の根拠を後続発話として示す目的でなされていると考えられる．また，Roncero et al. (2006) がウェブサイト上の談話/テクストにおけるメタファーと直喩の分布を調査し，やはりメタファーよりも直喩の方が類似性の説明表現が伴うことを検証している．

一方，日本語の直喩標識としては「ーのような」「ーみたいな」などが代表的なものであるが，以下のような慣習的な直喩を，言語形式の観点から単純に直喩であるとみなすのは問題がある．

(11) 玉のような汗／赤ちゃん
(12) 彼ってバカみたい．
(13) 謎めいた台詞

こうした例では，〈語用論的主観性〉は薄れ，〈意味論的主観性〉が強い表現となり，もし佐藤の言うような直喩の性質が本質的なものであるのならば直喩とは言いがたいことになる．先のメタファー表現の例も併せて，メタファーも直喩も，改めて主観性の観点から捉え直すべき問題であると言えよう．また，近年盛んとなっている，コーパスにおけるコロケーションの調査に基づいた慣用句の発展可能性についての研究も，本稿で掲げる主観性の指標に大きく寄与すると考えられる (Stathi 2006; 後藤 2002).

6. 参照点能力に基づく発話理解

6.1. 言語コミュニケーションにおける参照点能力

2.1.節でも触れたが，Langacker の提案する認知文法において，重要な概念の一つに〈参照点能力 reference point ability〉が挙げられる (Langacker 1993).

一般に，認知主体が何かをターゲットとして探索する場合，常に探しているターゲットとしての対象が直接的に把握できる保証はなく，実際には，そのターゲットに到達するための〈参照点〉（＝対象に到達するための手がかり）を認知し，この参照点を経由して，問題のターゲットとしての対象を認知していくのが普通の探索のプロセスであると考えられる (山梨 2000: 86). この参照点とターゲットの条件を考察すると，参照点は話し手と聞き手の認知環境において目立ったものでなくてはならず，ターゲットは目印である参照点から離れすぎていてはいけないので，参照点の支配域の中に存在しなくてはならない．

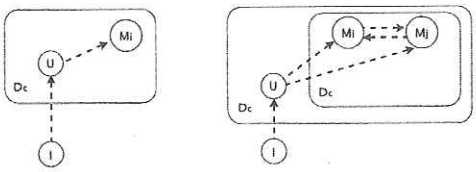
この参照点能力を本稿の立場で援用するならば，話者であるか解釈者であるかを問わず，認知主体は「アクセスしやすいものを手掛かりにアクセスしにくいものに到達する」傾向にある，とひとまずまとめることができるだろう．これを詳細化すると，意味理解過程においては，《現前するもの（言語）を手掛かりに，その背後のもの（意味）に到達する》と読み換えることができ，情報共有化過程においては《既知のものを手掛かりに，未知のものに到達する》と考えられる．後者は，具体的には《未知のものを理解するために既知のものを呼び出す（Cf. 推意前提）》ことや，《既知の語彙を手掛かりとして、話し手/聞き手に共有されている情報に到達する（Cf. メトニミーリンク）》ことなどを含んでいる．また，言語習得過程においては，《共同注意を利用して話者の意図に到達する（Cf. Tomasello 1999）》ことと解釈することができる．

この言語コミュニケーションにおける参照点能力については，実証的な研究はまだほとんど存在しないが，上記のように読み換えることで，かなり統一的な言語コミュニケーションモデルを構築できる可能性がある．

6.2. 言葉遊びの理解における意味のゆらぎ

こうした参照点能力の応用モデルの一つとして山梨 (2004) が提案する〈参照点起動の推論モデル〉では，次のような言葉遊びの例を慣用句としての意味（＝死ぬ）と字義通りの意味（＝バケツを蹴る）の「ゆらぎ」という観点から説明する．

(14) (&) If you've got to kick the bucket, it's best to die with your boots on. (山梨 2004: 87)



I: 解釈者 (interpreter)　U: 参照点としての発話 (utterance)
Mi/Mj: 解釈ターゲットとしての意味
Dc: 潜在的に規定する解釈ターゲット候補のドメイン (dominion of candidates)

図２．

図２に見るように，(15)の例では，曖昧性が解消されるのではなく，複数の異なる意味が相互にせめぎあいながらどちらとも解釈できないところに当該言語表現の面白さがあるとしている．

こうした意味の多義性を「ゆらぎ」として積極的に捉える視点は，次のような文字解読のゆらぎの例も上手く説明できる．

(15) 電子掲示板〈２ちゃんねる〉でのやり取りの一例：

6 名前：Mr.名無しさん 投稿日：2005/08/13(土) 02:56:34
七味を一気に一瓶飲んだらさすがに辛かった

22 名前：Mr.名無しさん 投稿日：2005/08/13(土) 02:57:44
>>6
辛かった？辛かった？

33 名前：Mr.名無しさん 投稿日：2005/08/13(土) 02:59:00
>>22
後者

35 名前：Mr.名無しさん 投稿日：2005/08/13(土) 02:59:15
>>33
辛かったんだ

この例のような，文字の多義性が維持されたまま会話が進行することの面白さは，書き言葉と話し言葉で異なる理解のモードの存在を示唆しており，話し言葉とは異なった書き手の主観性を読み解く鍵となる．

7. 文体の認知語用論に向けて

さて，これまで述べてきた意味論的主観性と語用論的主観性，そしてそれを支える規範性と逸脱を考慮すると，これまで言語学では正面切って論じられることの少なかった「文体」の認知語用論分析の可能性が拓かれる．この点について，小説とニュース記事を比較することでその展望を探る．

(16) 町田康『告白』(2005)：冒頭部分

(ア) 安政四年、河内国石川郡赤阪村字水分の百姓城戸平次の長男として出生した熊太郎は気弱で鈍くさい子供であったが長ずるにつれて手のつけられない乱暴者となり、明治二十年、三十歳を過ぎる頃には、飲酒、賭博、婦女に身を持ち崩す、完全な無頼者と成り果てていた。

(イ) 父母の寵愛を一身に享けて育ちながらなんでそんなことになってしまったのか。

(ウ) あかんではないか。

(16)を例に取ると，小説の冒頭(ア)では通常の物語的な説話法が用いられており，読者は主人公の登場とその時代背景を読み取る．ここでは物語文学の規範的な文体が支配しており，語り部である作者の存在は背景化されている．しかしながら，(イ)に至って，突如として作者の主観性が挿入される．そこでは，情報共有評価の ICM から想定される，語り部である作者が本来持っているべき知識状態の逸脱が露呈する．さらに，発話行為評価の ICM からすれば規範的には〈叙述〉のみを行うべき作者が，逸脱的な〈問いかけ〉を行うことで，作者の能動的な主体性 (conativity) を読み手に喚起する．そして，(ウ)に至って，これまでの文体と異なる関西方言の使用，および一文による言い切りが，文体に寄る逸脱効果をさらに高めている．

こうした逸脱において重要なのは，作者がその時点までで読者と取り結んでいる規範性であり，それを担うのが(ア)の先行文脈なのである．この

先行文脈こそが逸脱を逸脱たらしめている規範であり，逸脱の帰属先としての作者の前景化が結果として詩的効果を生んでいるのである．

一方，ニュース記事，中でも記名原稿はしばしば書き手の主観性・主体性を文末において顕在化させる．

(17) 記名原稿のニュース記事の例

「Xbox 360 の最近の売れ行きは期待ほどではないと米アナリスト」 (2006.11.02)

米アナリスト団体"Lazard Capital Markets"の Colin Sebastian 氏は、「Xbox 360 の販売台数は米国市場の期待を下回っている」とのレポートを公開したことを、"Next Genaration" ほか米国の複数ニュースサイトが報じた。(中略)

ただし年末商戦では、リリースタイトルの増加と、ライバル機である PLAYSTATION 3 と Wii の供給不足が予想されることから、販売台数を伸ばす可能性もあるとのこと。次世代ゲーム機競争はここからが正念場だ。(中島理彦)

(http://www.gpara.com/kaigainews/eanda/2006110205.php；下線は引用者)

(17)の例では，最後の文に至るまではニュース記事が規範的に要請する客観的な叙述が行われているのだが，最後の文で明らかに書き手の存在が前景化し，語用論的主観性の高い表現が用いられている．これによって，書き手は読者への注目を惹き，その結果としてニュース記事全体の印象を強めることに成功している．

8. おわりに

本稿では，主観性にまつわる従来研究を批判的に検討し，新たに〈意味論的主観性〉と〈語用論的主観性〉という概念を導入した．そして，メタファーや直喩などの比喩表現がどのように解釈者に理解されるかの分析を通して，主観性の議論に新たな視点を投じ，文体やレトリック分析までを研究の射程とすることができた．その成果はまだまだ未知数ではあるが，今後の詳細な議論と分析を通じて，認知とコミュニケーションを基盤とする新たな認知語用論を確立していきたいと考える．

参照文献

Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances*. Oxford: Blackwell. (武内道子・山崎英一(訳)『ひとは発話をどう理解するか』, 東京: ひつじ書房, 1994)

Croft, W. and Cruse, D. A. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

深田智. 2001. 「"Subjectification" とは何か：言語表現の意味の根源を探る」, 言語科学論集 第 7 号, 61-89.

後藤斉. 2002.「慣用句と自由な語結合の間―『博する』を例にして―」, 東北大学言語学論集, 第 11 号, 1-8.

池上嘉彦. 2003.「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (1)」, 山梨正明 (他) 編『認知言語学論考』No.3, 1-60, 東京: ひつじ書房.

Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*, Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他 (訳)『認知意味論―言語から見た人間の心』, 東京:紀伊國屋書店, 1993)

Lakoff, G. and Turner, M. 1989. *More Than Cool Reason: A field guide to poetic metaphor*, Chicago University Press.

Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar Volume 1*. Stanford: Stanford Univ. Press.

Langacker, R. W. 1991. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*, Berlin: Mouton de Gruyter.

Langacker, R. W. 1993. "Reference-point Constructions," *Cognitive Linguistics* 4, 1-38.

Numberg, G. Sag, I. A. and Wasow, T. 1994. "Idioms." *Language* 70, 491-538.

岡本雅史・河原大輔・黒橋禎夫. 2006. 「表層的語彙分布に基づく談話/テクストの主観性・主体性分析に向けて」. 日本認知言語学会論文集第 6 巻, 423-433.

Roncero, C., Kennedy, J. M., Smyth, R. 2006. "Similes on the Internet Have Explanations", *Psychonomic Bulletin & Review*, 13(1), 74--77.

Sadock, J. M. 1986. "Remarks on the Paper by Deidre Wilson and Dan Sperber", *CLS 22*.

佐藤信夫. 1978.『レトリック感覚―ことばは新しい視点をひらく』, 東京: 講談社.

Sperber, D. and Wilson, D. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition. Second Edition*, Oxford: Blackwell. (内田聖二・中逵俊明・宋南先・田中圭子 (訳) 『関連性理論―伝達と認知』, 東京: 研究社出版, 1993)

Stathi, K. 2006. "Corpus Linguistics Meets Cognitive Linguistics: A Framework for the Analysis of Idioms." In *A theme session, Cognitive-linguistic Approaches: What Can We Gain by Computational Treatment of Data?, DGKL-06/GCLA-06*.

Tomasello, M. 1999. *The Cultural Origin of Human Cognition*, Harvard Univ. Press.

Ungerer, F. and Schmid, H-J. 1996. *An Introduction to Cognitive Linguistics*, Addison Wesley Longman Ltd. (池上嘉彦他 (訳)『認知言語学入門』, 東京: 大修館書店, 1998)

山梨正明. 2000.『認知言語学原理』, 東京: くろしお出版.

山梨正明. 2004.『ことばの認知空間』. 東京: 開拓社.

構文の確立と語用論的強化：「全然～ない」の例を中心に*

尾谷昌則
東北学院大学

＜要旨＞
副詞「全然」は否定表現と共起するのが正しい用法である、という規範意識が昭和 20 年頃から生まれた。本論では、この規範意識はなぜ生まれ、なぜ定着したのかについて、語用論的推論／語用論的強化という視点から論じる。また、近年多く見られる「“全然”＋肯定」表現が昭和初期までの＜語彙否定用法＞とは違い、＜文脈想定否定用法＞とでも呼ぶべき新たな機能を有する「構文」として確立されつつあることを論じる。

【キーワード】：　否定、文脈想定、程度強調、語用論的強化、構文

1．はじめに

若者言葉というものは、しばしば中高年世代からの批判に晒される運命にある。しかし中には、一過性の流行とは呼べない現象も存在する。その一例が「“全然”＋肯定表現」である。この表現に対する批判は、半世紀以上も前から存在するのである。

(1)　近頃気になるのはよく、「全然よくできるの。」式のコトバを使ふことである。「全然」とは否定の意味であつて、「全然出来ない。」とか、「全然駄目だ。」と云ふのならわかるが、これでは意味を成さない。（小堀杏奴「思ひ出」『言語生活』昭和 28 年 3 月）
(2)　が、この呼応のあやまりは、これまた戦前からあった。私は中学校時代（昭和二年―五年）にさかんに使った記憶がある。（金田一 1966:131）

しかし北原(2004) などにも紹介されているように、戦前の小説にも「“全然”＋肯定表現」は頻繁に使用されていたという事実がある（下例参照）。それゆえ、「「全然」は否定と呼応するのが正しい」という意識に基づいた上記のような批判がどうして湧き起こったのかという疑問が生じる。

(3) a.　私は（中略）殿様に全然騙されましたのでございます。（尾崎紅葉『金色夜叉』1897）
　　b.　新聞に在る通だけれど、不具になるやうな事も無いさうだが、全然快くなるには三月ぐらゐはどんな事をしても要るといふ話だよ。（尾崎紅葉『金色夜叉』1897）
　　c.　暴風雨に左様して居られては済むまい、瓦が飛ぶ樹が折れる、戸外は全然戦争のやうな騒ぎの中に、汝の建てられた彼塔は…（幸田露伴『五重塔』1890）

小池(1994)は「全然」が否定と呼応すべき表現であるという規範意識を＜迷信＞と呼んだが、本稿のテーマの１つは、どうしてそのような規範意識が生まれたのかを探ることである。規範意識が定着したということは、「“全然”＋否定表現」が１つの「構文」として確立したと見ることもできるため、Langacker(1999)の動的使用依拠モデル(Dynamic Usage-based Model)や、Fillmore(1988)、Croft(2002)、Tomasello(2003)といった構文文法(Construction Grammar)の観点から見ても非常に興味深い。

本稿のもう１つのテーマは、現代語でも批判されている「“全然”＋肯定表現」が以前のそれと同じ意味・機能で使用されているのかどうかである。若者言葉を「規範から外れる間違

った用法」と見るか、それとも何らかの動機付けによって「規範を越えて新しく生み出された用法」と見るかは意見の分かれるところであるが、少なくとも本稿では後者の立場に立ち、「全然」が「文脈想定の否定」という新たな語用論的機能（手続き的意味：Wilson and Sperber 1993、Sperber and Wilson 1995）を獲得しつつあると主張する。

2．規範意識の発生と定着

まず「全然」の呼応に対する＜迷信＞についてであるが、これにはいくつかの先行研究が存在する。梅林(2000)は、第二次世界大戦後のアプレゲール批判の材料として規範意識が利用されたのが始まりとしているが、宮内(1961)は、昭和 10 年(1935 年)頃に「当時の自称文化人仲間」が「新語を流行させようという意識」をはたらかせて用いたのが始まりであるとしている。柄沢(1977)は、大正末期に芥川が「とても＋肯定」が本来の用法ではないと指摘した影響で、当時の知識人達の間に「全然＋肯定」も誤用だという＜迷信＞が広まったとしている。宮内(1961)は、「全然彼女には冷淡だつた」という芥川の文を「「全然」に対する呼応を忘却した誤用」と書いている。しかし 1961 年は梅林(2000)のいうアプレ批判が盛んだった時期にあたるため、宮内も＜迷信＞に影響されていた可能性がある。ただし、梅林のアプレ批判説も資料が乏しいため、完全に証明するのは困難であろう。[1]

これに対し、あながち＜迷信＞とは呼べないとするのが新野(1997)の説である。新野は「全然」がかかる先の表現について明らかな否定表現である A 類から、徐々に否定のニュアンスが弱まる F 類までの 6 段階に分類し、それぞれの用例数を集計している。そして、＜迷信＞に違反するような肯定表現や積極的なプラス評価の例が F 類のごく一部にすぎないので、あながち「迷信」とも言えない（新野 1997:282）としている。しかし裏を返せば、F 類のごく一部とはいえ、そのような表現が存在することに対して十分な説明がなされていない。

そこで本研究では、「青空文庫」（http://www.aozora.gr.jp/）から作成した自作コーパスを用い、「全然」の用法の変遷を調べた。収集したテキストを年代別に分類した結果、以下のようなテータ量となった。

テキストの年代	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980
データ量	2.35 MB	6.59 MB	10.0 MB	5.89 MB	8.20 MB	6.20 MB	2.15 MB	8.99 MB	4.96MB	3.17 MB
ファイル数	42	90	112	149	132	101	12	18	11	7

表 1：　収集したデータ量

今回の調査では、「全然」がかかる先の表現により「否定」「疑似肯定」「肯定」の３つに分類した。分類に厳密を期すため、述部に「ない」もしくは「ず」を含むような純粋な否定文の場合のみ「否定」類とした(下例 4)。たとえ接頭辞に「非」「反」「不」などを伴う表現が含まれていて、意味的には否定的なニュアンスの述部であっても、述部の最後が「～です」「～だ」のような肯定形になっている場合は、形式的には全て肯定文の一種と見なし、「疑似肯定」類とした(下例 5)。[2, 3]　「肯定」類は意味的にも形式的も肯定と見なすことができる表現であり、新野分類では F 類の一部（新野が例外扱いしたもの）に相当する(下例 6)。[4]

(4)　a. 私の体ぢや戸外の様子が全然解らないのですものね（尾崎紅葉『金色夜叉』1897）
　　b. 鮎なんぞの立派さには全然くらべものになるのぢやあない。（泉鏡花『化鳥』1897）
(5)　a. 其間に酔が全然醒めて了つて（石川啄木『病院の窓』1908）
　　b. 何か全然無神経で、敵の事情を探らうとはしなかつたな。（泉鏡花『海城発電』1896）
(6)　a. 私はね、何もかも全然憶えていて、　（国木田独歩『恋をする人』1907）
　　b. 不具になるやうな事も無いさうだが、全然快くなるには三月ぐらゐはどんな事をしても要るといふ話だよ。（尾崎紅葉『金色夜叉』1897）

以上のような基準で調査・分類したのが以下の表 2, 3 である。表 2 は各年代ごとにヒットした「全然」の使用数をまとめたもので、それが「全然」の使用数全体に占める割合は括弧内に示してある。表 3 は表 2 をグラフ化したものである。

年代	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970
肯定	8 (36.4)	30 (30.0)	13(24.1)	10(21.7)	5(7.8)	4(4.3)	2(3.6)	1(2.0)	0(0)
疑似肯定	4 (18.2)	29 (29.0)	25(46.3)	23(50.0)	18(28.1)	28(30.4)	13(23.2)	13(26.0)	3(7.7)
否定(ない)	10 (45.4)	36 (36.0)	16(29.6)	12(26.1)	41(64.1)	60(65.2)	41(73.2)	36(72.0)	36(92.3)
その他[4]	0 (0)	5 (5.0)	0(0)	1(2.1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
合計	22 (100)	100(100)	54(100)	46(100)	64(100)	92(100)	56(100)	50(100)	39(100)
件数／1MB	9.4	10.4	5.4	7.8	7.8	14.8	26	5.6	7.9

表 2：　「全然」の検索結果　　ヒット数（%）

表 3 から、「全然」の用法変遷を 3 つの時期に分けることができる。1890～1900 年代の時点では、肯定表現と共起する「全然」が全体の 30%以上を占めており、否定類の割合とほぼ拮抗していることから、この時期は両用法が認められる共存期と考えられる。

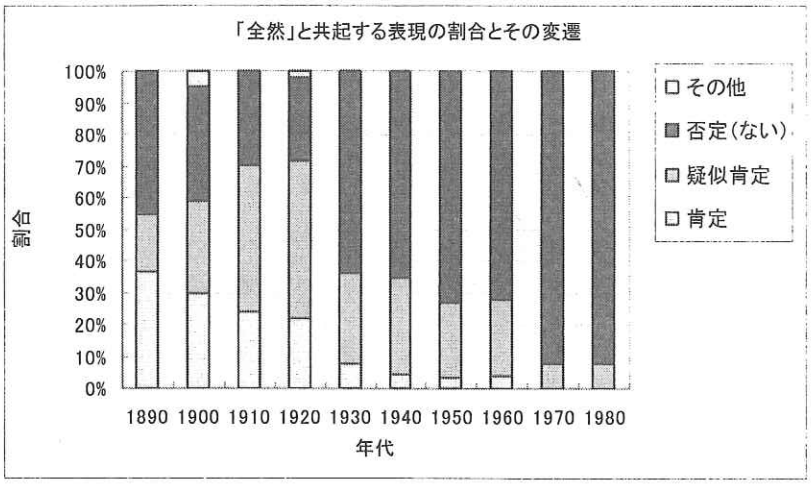


表 3：　表 2 に基づいた年代別の使用割合

一方、1910～1920 年代は疑似肯定が勢力を拡大する疑似肯定期である。疑似肯定類は、形式的には肯定であるが、意味的には否定であるため、肯定と否定が共存する表現である。ゆえに両者のバランスが保たれていた共存期をきっかけに生まれ、発達したものと考えられる。

このバランスが崩れたのが 1930 年代以降である。この時期は肯定類はもとより疑似肯定類も減少し、代わりに否定類が全用例数の 6 割以上を占め、70 年代以降は 9 割を占めるまでになる。どうやら「“全然”は否定表現と呼応するものだ」という＜迷信＞はこの時期に定着し始めたと見て間違いなさそうである。つまり、梅林(2000)によるアプレゲール批判説よりも若干早い時期から＜迷信＞は定着しつつあったことになる。

さて、問題はその＜迷信＞が生じた原因についてであるが、本論では、流行や偶然に帰結させた先行研究とは一線を画し、意味論・語用論的な観点から考察する。特に本論が注目するのは、＜迷信＞の定着と入れ替わるように衰退した疑似肯定の存在である。同時期に起こっているということは、これが＜迷信＞の定着と無関係ではあるまい。[5]　疑似肯定は形式が肯定であっても、意味は否定というねじれた表現であるが、コミュニケーションにとって重要な役割を果たすのが意味であると考えれば、形式よりも意味の側面が優先された（もしくは、強く意識された）と考えるのが自然であろう。その結果、「「全然」は否定と呼応して、

否定を強調するために使用するものである」という推論が働き、それが語用論的に強化されて一種の規範意識にまで発展したものと考えられる。単なる推論であれば不安定なままであるが、それが強化されて規範意識として定着すれば、その表現の使用が安定し、生産性も高くなることが予想される。これを裏付けるのが表4である。これは今回調査したテキストデータにおける1MBあたりの「全然」の出現数をまとめたグラフである。これを見ると、1930年代以降の使用割合が急激に高くなっているのが分かる。これは「"全然"＋否定」という構文パターンが規範として定着したおかげで、表現自体が安定し、生産性が高まった結果であると考えられる。ただし、その使用割合は1960年代以降に激減している。この理由は不明であるが、梅林(2000)が論じるようなアプレ語批判の気運が1950年代に高まったことで、全然の使用が控えられたと考えることもできる。もしくは、「まったく」などの副詞に比して「全然」が口語調のニュアンスを持つという意識が定着したために、小説などの文語体における使用頻度が減少したためとも考えられる。（今回の調査対象は主に小説などの文語データである。）

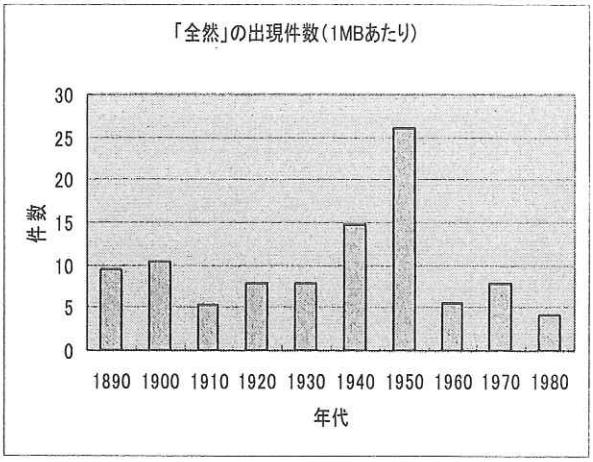


表4

3．「全然」の意味が変わったのか

次に「全然」の意味について議論する。先行研究を見ると、昭和戦前の「全然」は「何から何まで、完全に」という意味であったが、「とても、非常に」という程度強調の意味は現代語に加わった新しい意味であるため、両者は異なる用法であると分析した研究が多い（松井1977、若田部1993、播磨1993、鈴木1993）。『日本国語大辞典』の第二版(2000:108)でも、意味の違いがはっきりと明記されている。

(7)　「(4)二③は、昭和二〇年以後に現れた用法で、肯定表現を伴う点では二①と似ているが、①のように「残らず」「全部」の意味は含まず、ある状態の程度を強調するだけの働きである点が異なる。多くの人がこれを奇異な使い方に感じたのは、否定表現を伴わないということだけではなく、二①とは違って、「とても」「非常に」と同様、単なる程度強調に使われたということが大きな理由である。

一方、意味が変わっていないと主張する研究もある。金田一(1966:132)は、「「全然いい」も、「全然欠点がないくらいいい」の意味で、否定の意味はやはり隠れて存在しているように思う」とし、意味は「まったく」のままであり、単なる「呼応のあやまり」としている。また新野(1997:278)は、「昭和戦前までも現代でも、肯定と呼応する"全然"は（否定と呼応する場合と同じく）＜完全に、百パーセント＞の意で基本的に変わっていない。五十パーセントや六十パーセントではなく百パーセントなのであるから、結果的には被修飾語句の意味を強調することになり、したがって＜とても、非常に＞と置き換えても文が成立する（しかしニュアンスは変わる）ような例が出てくる。」としている。梅林(1997)は基本的に新野に参道しているが、新野が述べた<百パーセント>の概念が原田(1982)のいう「十全性副詞」に相当すると紹介した上で、さらに言葉を補って「厳格に十全性が問われないような文脈では、意味が弱まり、『とても、非常に』などの、かなりの程度であるといった意にも解せる例が出

てくることになる」としている。さらに梅林は、当時の新聞記事などを根拠に「意味差に違和感を覚えた人が、当時、研究者に限らず一般にも見受けられたということになる。だとすると、なぜこういう人々が、「非常に」「たいへん」という意味に違和感を覚えたのであろうか。それはやはり新奇な意味であったからではないだろうか、と考えられてくるのである。」とも指摘している。

本論の主張も新野や梅林の主張と軌を一にする。「全然」が単なる程度強調の意味で使用されているのであれば、確かに肯定表現の一種として使用されても不思議ではないであろう。しかし「全然」の基本的な機能は、やはり否定という域を完全に脱していないというのが本論の主張である。つまり、近年よく奇異だと指摘される「全然美味しい」のような肯定表現と共起する用法も、基本的には否定に基づいたものであると考える。その根拠として、次のような例がある。

(8)　【恋人の手料理を食べているときに「美味しいでしょう？」と聞かれて】
a.「全然。」
b.「とっても。」

この場合、「全然」とだけ応答した(a)の文は、「全然（美味しくない）」という否定解釈はできても、「全然（美味しい）」という肯定解釈はできない。一方(b)では、「とても（美味しい）」という肯定的な解釈はできても、「とても（美味しくない）」という否定解釈ができない。「とても」は純粋な程度強調副詞としての用法をすっかり確立してしまっているが、「全然」は完全に否定の意味から脱却しきれていないため、このような違いが生じるものと考えられる。

さらにもう１つの根拠は、否定の対象になるものが何か存在していなければ「全然」を用いた文が不自然になるという事実である。例えば以下の(9)では、「この料理はまずい（かもしれない）」という想定が質問者の側に存在しており、被質問者にもそれが伝わっている。そこで被質問者は「全然美味しいよ」と応答することで、単に「美味しい」ことを肯定的に強調するだけでなく、「あなたはこの料理がまずいという想定を持っているようだが、決してそのようなことはない」ということを表明し、相手の持つ想定を強く否定しているのである。

(9)　【「まずいでしょう？」と言われた際の返答として】
「これ、全然美味しいよ。」

ところが、会話の冒頭で「全然」を肯定表現と共に使用すると不自然に感じられる。

(10)　【先行文脈がなく、会話の第一声として】
*#「これ、全然美味しいよ。」

これは、「全然」が否定であると考えれば説明がつく。会話の冒頭は、特別な場合を除けば何も際立った文脈想定が存在しない。そのような状況で「全然」を使用しても、「全然」によって否定されるべき想定が何も存在しないため、不自然になってしまうと考えられる。

「全然」による本来の否定は後続する述語を否定するものであるが、上で見たように、発話時に存在する想定を打ち消すという語用論的機能は、いわゆる手続き的意味と呼ばれるものに相当すると考えられる。例えば(11a, b)では述部にある語彙「面白い」と「美味しい」が否定されている。このような従来の用法を、本論では＜語彙否定用法＞と呼ぶことにする。しかし近年見られる「“全然”＋肯定」表現は、述部に否定辞が存在しないことからも分かるように、後続する述部の中にある語彙が否定されているわけではない。例えば(12a, b)では、「面白い」や「美味しい」といった述語が否定されているわけではない。

(11) a. この映画は全然面白くない。
　　b. このラーメンは全然美味しくない。
(12) a. この映画、全然面白い。
　　b. このラーメン、全然美味しい。

これらの表現で否定されているのは「全然」に後続する述語ではなく、発話に先行して存在する文脈想定なのである。例えば(12a)は、「この映画はそれほど面白くないだろう」という想定を持っていた人物が、実際に見終わった後でその想定を自ら否定した発話である。本論では、これを＜文脈想定否定用法＞と呼ぶことにする。先に論じた(9)と(10)も同様である。

他にも＜文脈想定否定用法＞の具体例を見てみよう。以下の例は、インターネット上の匿名掲示板（http://www.2ch.net/）から採取した。左の数字はその掲示板における発言の番号／順番を表す。ページ数の制約により、会話に直接関係ない発言は省略した。まず以下の例Aであるが、これは「POD 2」と「POD xt」という２つの音楽機材について議論している文脈である。39 番の発言者は、POD2 に負けず劣らず PODxt の音も素晴らしいという想定を持っている（だから購入しようと考えている）。しかし 41 番では、２つの「全然」を使用した発言によって、39 番の発言者が有している想定を否定している。

39 ：POD2 の JCM800 が好きで、ｸﾘｰﾝﾄｰﾝとｴﾌｪｸﾀｰに不満がある俺は xt 買うべきでしょうか？
　ﾌﾞｰｽﾄ、ﾃﾞｨｽﾄ、ﾌﾟﾚｾﾞﾝｽは切って使ってるから xt の JCM800 でも歪みはｲｹると妄想中…。
41 ：JCM800 は pod2 と pod-xt で全然変わっちゃってるから XT の JCM800 が好きになるとは限らないよ。俺的には JCM800 は POD2 のほうが全然良かったな～。

例 A

以下の例 B も音楽機材について議論している掲示板である。277 番の発言からは、PSA-1 という機材が古くて劣っているものだという認識が伺えるが、278 番による発言はその想定を否定している。

277 ：いいなあ。おれなんかいまだに PSA-1 だよ。
278 ：>>277　そっちのが全然いい。

例 B

次の例 C はドライブ情報を交換している掲示板である。ここでは R285 が運転しにくい道路であるという想定が談話中に形成されつつあるが、「全然」を用いた 160 番の発話がそれを否定している。

155 ：R285 ってきついんですか？　R105 の山道とどっちがきついですか？
156 ：285 の方がはるかにきつい
157 ：具体的にどのようにきついのですか？
159 ：道狭いアップダウンきついカーブの連続　　前に大型トラックがいたら悲惨
　　ノロノロ運転黒煙噴き付け追い越しも出来ず
160 ：Ｒ２８５ってそんなに走りにくいかなぁ？　全然ラクチンだと思うけど・・・。

例 C

ここで注意しておきたいのは、以上の例における「全然」の意味が単なる＜程度強調＞ではないということである。『日本国語大辞典』（第二版）をはじめ、多くの先行研究で「全然」には＜程度強調＞という新しい用法が存在すると指摘されてはいるが、そのような用法はまだ十分に脱文脈化が完了しておらず、十全的否定という域を脱していないというのが本論の見解である。先にも見たように、単なる＜程度強調＞であれば特定の先行文脈など必要としないはずであるが、「“全然”＋肯定」表現には、必ず否定の対象になる想定が欠かせないからである。上に挙げた例は、どれも発話時に存在する想定を否定するような文脈で使用されており、「全然」はその発話によって行われる打ち消しに対する確信度が十全であることを表明しているだけである。そこから「それほど自信を持って否定できるということは、誰が見ても確信が持てる程に両者の違い（＝差）が大きいということなのだろう」という語用論的推論がなされた結果、＜程度強調＞という含意が解釈されるに過ぎないのである。つまり、十全性こそが「全然」の明意(explicature)であり、程度強調は暗意(implicature)でしかないのである。

4．おわりに

以上、肯定表現と共起する「全然」について考察した。データの取り方や分析の緻密さなど、まだまだ稚拙な内容であることは否めないが、「全然」の意味・用法の変遷において、語用論的な要因が非常に重要な役割を果たしていることだけは確認できたと思われる。昨年の研究発表時にはアマルガム構文や関連性への貢献といった観点からの分析にも触れたが、今回は紙面の制約により割愛させて頂いた。近々稿を改めて論じることにしたい。

注

* 本論は、第9回日本語用論学会（2005/12/9 於桃山学院大学）における口頭発表に加筆・修正を加えたものである。会場にて貴重なコメントを下さった諸先生方には、この場を借りて感謝申し上げたい。

1 松井(1977)は、すでに昭和20年代(1945-54)にこの「迷信」が存在していたと指摘している。しかし、昭和20年代の中高年層にとっての言語形成期（彼らが幼児～子供であった大正～昭和初期）には「全然＋肯定」が問題なく使用されていたはずなのに、その当時はどうしてそれを誤用だと思わなかったのだろうかという別の問題が生じる。当時の「全然」は「ぜんぜん」と発音されていた保証がなく、「すっかり」「まるで」「まるきり」の当て字として使用されていた事例もあるため、別の表現として認識されていた可能性もある。

2 「非」「無」「不」などの接頭辞を伴う表現が述部に存在するにもかかわらず、その文を否定文に分類しないことに違和感を覚える人も少なくないかもしれない。しかし、例えば「そのような行為は非人道的だ」という文は本当に否定文であろうか。「そのような行為は人道的ではない」という具合に否定文でパラフレーズすることは確かに可能である。しかしBolinger(1977)をはじめ所々で指摘されているように、一見するとパラフレーズ可能に見える文同士でも厳密には意味やニュアンスが異なる場合は多い。少なくともこの文は、「人道的な行為」と「非人道的な行為」という2つのカテゴリーが想定されており、「そのような行為」が後者のカテゴリーに属することを強く主張している文である。前者のカテゴリーには属さないという主張はその結果に生じる含意でしかなく、語用論的な視点から考えるならば決して同義の文とは見なせない。

3 可能性の問題として、疑似肯定という類があるのならば疑似否定という類を想定することも可能であるはずである。つまり、肯定的な意味を持つにもかかわらず否定文という形式をとっている場合である。例えば「全然悪くない」という表現である。幸いにも、今回の調査ではそのような例は見あたらなかったが、述部に否定の「ない」や「ず」が含まれている場合は無条件で否定類としたため、今回はそこまで考慮していない。これは今後の課題にしたい。

4 公正を期すため、以下のようなどちらに分類すべきか迷った用例は「その他」として今回の3分類からは除外した。
「古来からこの難事業に全然の績を収め得たる画工があるかないか知らぬ。」（夏目漱石『草枕』）

5 『日本国語大辞典』でも「否定表現との結びつきが強まるのは大正末から昭和にかけてである」としており、本論における調査と時期がほぼ一致する。

参照文献

Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form.* London: Longman
Croft, W. 2002. *Radical Construction Grammar.* Oxford: Oxford University Press.
Fillmore, C. J. 1988. "The mechanisms of 'Construction Grammar.'" *BLS* 14, 35-55.
原田登美 1982.「否定との関係による副詞の四分類 — 情態副詞・程度副詞の種々相—」、『国語学』128、国語国文学会
播磨桂子 1993.「「とても」「全然」などに見られる副詞の用法変遷の一類型」、『語文研究』75、11-22、九州大学
柄沢 衛 1977.「「全然」の用法とその変遷 — 明治二、三十年代の四迷の作品を中心として」、『解釈』264、38-43、教育出版センター
金田一春彦 1966.『新日本語論・第三編』東京：筑摩書房（1975 年第 3 刷）
北原保雄（編）2004.『問題な日本語』 東京：大修館書店
工藤真由美 1999.「現代日本語の文法的否定形式と語彙的否定形式」、『現代日本語研究』第 6 巻、1-22.
小池清治 1994.『日本語はどんな言語か』ちくま新書
Langacker, R. W. 1999. *Grammar and Conceptualization.* Berlin: Mouton de Gruyter.
松井栄一 1977.「近代口語文における程度副詞の消長 — 程度の甚だしさを表す場合」、『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』、737-758、東京：明治書院
宮内和夫 1961.「「全然」の改新 —「とても」にふれて—」、『実践国語教育』3 月号、7-13、穂波出版
野田春美 2000.「「ぜんぜん」と肯定形の共起」、『計量国語学』22(5)、169-182.
新野直哉 1997.「「"全然" ＋肯定」について」、佐藤喜代治（編）『国語論究 第 6 集 近代語の研究』、258-281、東京：明治書院
Sperber, D. and D. Wilson 1995. *Relevance: Communication and Cognition.* Oxford: Blackwell.
鈴木英夫 1993.「新漢語の受け入れについて —「全然」を例として—」、松村明先生喜寿記念会（編）『国語研究』、428-449、東京：明治書院
鈴木英夫 1996.「「全く」の用法の推移と副詞としての特性について」、『山口秋穂教授還暦記念 国語学論集』、458-484、 東京：明治書院
Tomasello, M. 2003. *Constructing A Language: A Usage-Based Theory Of Language Acquisition.* Mass.: Harvard University Press.
梅林博人 1994.「副詞「全然」の呼応につて」、『国文学 — 解釈と鑑賞』59、103-110、東京：至文堂
梅林博人 1995.「「全然」の用法に関する規範意識について」、『人文学報』226、35-53、東京都立大学
梅林博人 2000.「流行語批判とその背景 — 「全然」の場合について」、『相模国文』27、57-70.
若田部明 1993.「「全然」の語誌的研究 II」、『多々良鎮男先生傘寿記念論文集』
Wilson, D. and D. Sperber 1993. "Linguistic Form and Relevance," *Lingua* 90, 1-25.

連結発話と非連結発話をめぐって*

海實康臣
立命館大学言語教育センター嘱託講師

＜要旨＞
本稿では、S1. S2.という形式の非連結発話では、どのような場合にS1とS2の間にKehler (2002, 2004)のいうExplanationという関係が成立していると解釈され、どのような場合に出来事が起こった順序通りに文が生起していると解釈されるのかということを明らかにした。また、S1 and S2という形式の連結発話においてandが果たす役割を示すとともに、その役割がこのタイプの連結発話の解釈や容認度を左右することを明らかにした。
【キーワード】
連結発話、非連結発話、一貫性、Explanation、隣接

1.はじめに

本稿では、連結発話と非連結発話を考察するに際して、Kehler (2002, 2004)の一貫性 (coherence)の分類に若干の修正を加えたものを利用している。本節ではまず一貫性の整理を行い、その後で本稿の目標を提示したい。Kehler は、Hume (1740)の観念を連合させる原理を応用して、一貫性を因果関係 (cause and effect)、類似性 (resemblance)、隣接 (contiguity)の3つに大きく分類している。Kehlerが因果関係と呼ぶ一貫性は、2つの命題間に前提が認められる場合に成立する関係である。例えば(1a)の and の前後の命題間には因果関係が成立しているが、因果関係の成立を支えているのは、「政治家であれば不正直である」という前提である。

(1) a. George is a politician, and therefore he's dishonest. [Result] (Kehler 2002: 20)
b. George is dishonest because he's a politician. [Explanation] (Kehler 2002: 21)

Kehlerは、(1a)のように命題が「条件→帰結」の順序で生起している場合をResultと呼び、(1b)のように「帰結→条件」の順序で生起している場合をExplanationと呼んで、因果関係を下位分類している[1]。次に類似性であるが、これは、文間で対応する存在物 (entity)と関係 (relation)の間に共通性や対比が認められる場合に成立する関係である[2]。例えば(2)の文間にはこの関係が成立している。

(2) Al supports a medicare drug benefit. George favors a tax cut. (Kehler 2002: 13)

第1文の述部のsupportsが第2文の述部のfavorsに対応しており、ほぼ同じ意味を表している。また、第1文の主語のAlと第2文の主語のGeorgeの間には、米大統領選挙に出馬したという共通点があり、第1文の目的語のa medicare drug benefitと第2文の目的語のa tax cutの間には、米国民の負担を軽減させる政策であるという共通点がある。次に隣接であるが、この関係だけは(3)の引用が示すように全体像がはっきりしていない。

(3) [Contiguity] is a bit murkier than the other two in several respects, and I will tentatively posit only one relation for it: Hobbs's (1990) *Occasion* relation.
(Kehler 2002: 22)

Hobbs's (1990: 87) によると *Occasion* relation は、S1の断定から状態の変化を推論することが可能であり、S1の最終状態をS2から推論することが可能な場合、もしくはS2の断定から状態の変化を推論することが可能であり、S2の最初の状態をS1から推論することが可能な場合に成立するという。

本稿では、「隣接」を「知覚・認識される順序に一般的な傾向がある事態が連続している場合に成立する関係」と解釈する。例えば、(4a)-(4d)では、矢印の左側の方が先に知覚・認識される一般的傾向がある。

(4) a. 先に起こった出来事→後に起こった出来事
b. 大→小
c. 全体→部分
d. 所有者→被所有物

Kehler は(5)を隣接の例として挙げているが、これは(4a)の場合に相当する。

(5) George picked up the speech. He began to read. (Kehler 2002: 22)

上述のように、Kehler は一貫性を３つに分類しているが、本稿では一貫性は大きく隣接と類似性の２つに分類されると考える。因果関係は隣接の特殊な事例であるとみなしたい。因果関係が成立している２つの命題の条件を表す部分と帰結を表す部分を比較すると、前者の方が後者よりも先に認識されるので、因果関係は隣接の一種であると考えたい[3]。因果関係の特殊性は、写像一貫性の原則との関連をみると明らかである。写像一貫性の原則とは、「われわれは外界における事象を時間的順序に従って認知する。この認知順序は語順にも投影される(児玉 1998: 63)」というものである。(6)の文の順序を逆にした文連鎖が容認不可能なのは、写像一貫性の原則に違反するためである。

(6) 太郎は眠りについた。空を飛んでいる夢を見た。＝*太郎は空を飛んでいる夢を見た。眠りについた。
(児玉 2006: 52)

このように、通常文の生起順序は写像一貫性の原則に従う。しかしながら、(7)のように、文間に因果関係が成立している場合には、この原則に対する違反が許容される。

(7) John cut his finger. The knife slipped. ≒ The knife slipped. John cut his finger.
(児玉 2006: 111)

ここで根本的な疑問が２つ生ずる。１つ目は、そもそもなぜ(7)では文間に因果関係が成立していると解釈されるのか、という疑問である。第１文と第２文の命題間に前提が認められるということだけでは説明として不十分である。というのは、例えば(8)では命題間に「警察が来れば泥棒は逃げるものだ」という前提が認められるにもかかわらず、因果関係が成立しているとは解釈されず、写像一貫性の原則に従って、出来事の生起順序通りに文が配置されていると解釈されるからである。

(8) The robber ran away. The policeman came. ≠ The policeman came. The robber ran away.
(児玉 2006: 111)

２つ目の疑問は、(9)のような and を用いた連結発話では、(7)の非連結発話の場合のように因果関係の解釈がなされないのはなぜなのか、という疑問である。

(9) John cut his finger and the knife slipped. ≠ (7)[4]

本稿では、この２つの疑問への回答を提示したい。本稿の目標は、(10a)(10b)である。

(10) a. S1. S2.という形式の非連結発話では、どのような場合に S1 と S2 の間に Kehler (2002, 2004)のいう Explanation という関係が成立していると解釈され、どのような場合に出来事が起こった順序通りに文が生起していると解釈されるのかということを示すこと。
b. S1 and S2 という形式の連結発話において and が果たす役割を示すとともに、その役割がこのタイプの連結発話の解釈や容認度を左右することを示すこと。

2. 非連結発話

本節では、非連結発話において Kehler の Explanation と写像一貫性の原則が競合する事例について考察する。Kehler (2002, 2004)は Explanation を(11)のように形式的に定義している。

(11) Explanation: Infer P from the assertion of S_1 and Q from the assertion of S_2, where normally $Q \rightarrow P$.

Kehler のいう Explanation という関係は、連続する 2 つの文の第 1 文の意味を P、第 2 文の意味を Q と表記した場合に、前提が Q → P という関係を成立させている場合に成立する関係である。(7)では S1 と S2 の間に「使用中のナイフを滑らせれば、指を切るかもしれない」という前提が認められる。また(8)では、§1 で述べたように命題間に「警察が来れば泥棒は逃げるものだ」という前提が認められる。このように(7)(8)はともに命題間に前提が認められるが、両例の間で解釈が異なる。(7)では命題間に Kehler の Explanation が成立していると解釈される一方、(8)では S1、S2 の順序で出来事が生起していると解釈される。(12)と(13)の間にも(7)と(8)の間にあるものと同様の解釈上の相違が認められる。

(12) John broke his leg. He slipped on a banana skin. (Carston 1993)
(13) She made the incision; he handed her the scalpel. (Carston 1993)

(12)(13)では、いずれにおいても命題間に前提が認められる。(12)では「足を滑らせることで、骨折することがある」という前提が認められ、(13)では「手術中の外科医は、メスを手渡されれば切開を行うものだ」という前提が認められる。しかしながら、S1 と S2 の間に Kehler の Explanation が成立していると解釈されるのは(12)だけで、(13)は S1、S2 の順序で出来事が生起していると解釈される。

本稿では、どのような場合に S1 と S2 の間に Kehler の Explanation が成立していると解釈され、どのような場合に出来事が起こった順序通りに文が生起していると解釈されるのか、という問いに対して、まず(14)のように回答する。

(14) 非連結発話は、S1 の意味 P と S2 の意味 Q の間に Q → P という関係を成立させる前提が認められ、かつ S1 と S2 の出来事がほぼ同時に起こっていると常に解釈される場合に、Kehler の Explanation が成立すると解釈される。他方、そのような前提が認められる場合でも、S1 と S2 の出来事がほぼ同時に起こっていると解釈されない（ことがある）場合には、出来事が起こった順序通りに文が生起していると解釈される。

(7)(12)の 2 文がほぼ同時に起こった出来事であると常に解釈されると主張する根拠は、(15)(16)が示すように after a while を文間に挿入できないという事実である。

(15) *The knife slipped. After a while John cut his finger.
(16) *John slipped on a banana skin. After a while he broke his leg.

他方、(8)(13)の 2 文がほぼ同時に起こった出来事であると解釈されない（ことがある）と主張する根拠は、after a while を文間に挿入できるという事実である。

(17) The policeman came. After a while the robber ran away.
(18) He handed her the scalpel. After a while she made the incision.

§1 で因果関係は隣接の一種であると述べたが、(7)と(12)の S1 と S2 の時間的位置関係は常に隣接である。これは、John の意思だけでは指が切れるのを回避することが不可能なためと思われる。これにたいして、(8)と(13)の S1 と S2 の時間的位置関係は常に隣接とは限らない。(8)では泥棒の意思により逃げないという選択も可能であ

り、(13)では医者の意思により切開しないという選択も可能だからである。

(14)に示した場合以外にも、S1 と S2 の間に Kehler の Explanation が成立していると解釈される場合がある。(19)の場合である。

(19) S1 の意味 P と S2 の意味 Q の間に Q → P という関係を成立させる前提が認められ、かつ S2 の出来事の影響が一度も途切れることなく継続している間に、S1 の出来事が起こったと解釈される場合にも、Kehler の Explanation が成立すると解釈される。また、当該の前提が認められ、かつ S2 の出来事が起こった場合には必ず S1 で述べられている行為を行う必要がある場合にも、Kehler の Explanation が成立すると解釈される。

(14)もしくは(19)の要件を満たしている場合には、出来事間の隣接性が認識されやすい。逆にいえば、出来事間の時間的な断絶が認識されにくい。S1 と S2 の間に Kehler の Explanation が成立していると解釈されるのは出来事間の隣接性が認識されやすい場合ということができる。

(20)(21)は(14)に示されている要件を満たしていないが、S1 と S2 の間に Kehler の Explanation が成立していると解釈される。

(20) He died. She fed him poisoned stew.

(21) I went to the dentist. This morning I had a toothache. (van Dijk 1985: 109)

これは、(19)の要件を満たしており、出来事間の隣接性が認識されやすいためである。毒を摂取してから死に至るまで時間がかかることもあり得る。また、歯に痛みを感じてから歯医者に行くまでの間にかなりの時間が経過していることもある。よって、(20)(21)は(14)の要件を満たしているとはいえない。しかしながら、これらの例の S1 と S2 の時間的位置関係は常に隣接していると捉えることが可能である。(20)に関しては、毒入りの食べ物を食べさせられた人物の意思だけでは死の回避が不可能なためである。換言すれば、毒の影響が及んでいる間に死亡するためである。(21)に関しては、歯の異常の感知と歯医者に行くという行為が常に時間的に隣接していると捉えることが可能なためである。このように捉えることが可能なことは、「歯に異常があるけれども、歯医者に行く必要が無い」という状況が想定不可能であるという点からも裏付けられる。(21)と区別する必要があるのは(8)である。(8)の S1 と S2 が常に時間的に隣接しているとは限らないのは、「警察が来たけれども泥棒が逃げる必要が無い」という状況が想定可能なためである。例えば、泥棒の居る場所まで警察が来たが、泥棒の存在に気付かない状況や、やって来た警官が弱々しく泥棒が力でねじ伏せることができそうな状況である。このような状況が想定可能なので、(8)の S1 と S2 の時間的位置関係は常に隣接しているとはいえないのである。

3. 連結発話

3.1. 先行研究

本節では、S1 and S2 という形式をとる連結発話について考察している先行研究の問題点を指摘する。以下では、Schourup & Waida (1988)、Bar-Lev & Palacas (1980)、出水 (1998)、Carston (1994)の順序で考察する。

Schourup & Waida (1988: 229)は、「AND の意味はコンテクストの中において決定される。したがって、この語は話がまだ続いているということを示すにすぎない」と主張している。and の働きが単に話がまだ続いているということを示すだけであるのならば、and は後に話が続く限り、無制限に使用可能なことになる。しかしながら、実際には、(22)-(25)のように、and を付加することで容認不可能になることがある。

(22)*Peter was late again and he never comes on time.
cf. Peter was late again. He never comes on time.

(23) *Peter never comes on time and he was late again.
cf. Peter never comes on time. He was late again.

(24) *Peter was shabbily dressed and his jeans had large holes in them.
cf. Peter was shabbily dressed. His jeans had large holes in them.

(25) *Peter's jeans had large holes in them and he was shabbily dressed.
cf. Peter's jeans had large holes in them.　He was shabbily dressed.

また、この見解では連結発話と非連結発話の解釈上の違いを説明することができない。例えば、(7)のような非連結発話は「ナイフが滑って指を切った」と解釈されるが、(9)のような連結発話はそのように解釈されない。その理由を説明することができない。こうした理由から、Schourup & Waida の主張を支持することはできない。

Bar-Lev & Palacas (1980)は、「S2 は S1 に (時間的もしくは因果的に) 先行しない」という Semantic Command という制約を提案している。しかしながら、この制約では Blakemore & Carston (1999)が挙げている(26)(27)の容認可能性を説明することができない。

(26) She did her BA in London and she did her A levels in Leeds.
(27) A: Did Bill break the vase?
B: Well, the vase broke and he dropped it.

(26)および(27)の B の発話は、S2 の方が S1 よりも時間的に先行しているが容認可能である。このように Semantic Command は制約として強すぎるので支持することができない。

出水 (1998)は、「and によって結ばれる 2 つの節の線形順序は、われわれの認知順序を表している」という見解を提示している。しかしながら、and で結ばれる文の配置順序がわれわれの認知順序を反映していても容認不可能な場合がある。例えば、(23)では話し手が「Peter は時間通りに来たためしがない」ということを認識しているからこそ、he was late again と発話していると考えられる。出水の見解が正しいとするとこの例は容認可能な筈であるが、事実は逆である。また、この見解では、S1 と S2 の生起順序が出来事が起こった順序と逆になっている(26)および(27)の B の発話が容認可能な理由も説明することができない。

Carston (1994)の主張は、「and は等位接続詞である。このことは等位項が対等の地位を有するということを意味している。すなわち、等位項のいずれかが、いずれかに対して、統語的もしくは意味的に従属することはない。(28b)とは違い、(28a)が(28c)のように解釈されないのは、(28c)の解釈は一方の等位項が別の等位項に従属的になる解釈のためである」というものである。

(28) a. He hit Mary and she screamed at him.
b. He hit Mary.　She screamed at him.
c. He hit Mary because she screamed at him.

この見解を支持することができないのは、and が 2 文を結合している場合には、一方の等位項が別の等位項に従属的になる解釈が常に許されない訳ではないからである。いわゆる「命令文＋and」では、S1 が S2 に対して従属的であると解釈される。

(29) Get up at five, and you'll catch the train.　(荒木編 1997: 315)
≒ If you get up at five, you'll catch the train.

次節で述べることを先回りしていうと、一方の等位項に従属的になる解釈が許されないのは S2 のみである。

3.2 提案

本稿では、S1 and S2 という形式をとる連結発話は(30)に示す役割を果たすと主張する。

(30) and の果たす役割：S1 and S2 という形式の連結発話において、and は聞き手(読み手)を S2 に注目させる役割を果たす[5]。S1 and S2 という形式の連結発話がこのような役割を果たすとすると、S2 に生起する情報は聞き手にとって注目に値する情報でなければならない。

ここでいう聞き手にとって注目に値する情報とは、談話の要点を把握する上で不可欠な情報のことを意味する。したがって、談話の要点に関与しない直前の文の単なる補足説明は、聞き手にとって注目に値する情報とはいえない。文間に成立している一貫性が隣接のみの場合には、聞き手が注目するに値するのは、後に認識される事態である。先に認識される事態は起点と、後に認識される事態は着点といいかえることができるが、聞き手は起点よりも着点の方に注目する傾向がある。

以下では(30)の見解に基づいて、用例の解釈や容認度を説明する。まず(9)の解釈について説明したい。(9)が(7)のように「ジョンは指を切った。ナイフがすべったのだ」とは解釈されず、「ジョンは指を切りナイフがすべった」と解釈されるのは、前者の解釈の場合、S2 は補足説明ということになり、聞き手が注目するに値する情報とはみなされず、後者の解釈の場合は、S2 は直前の S1 の補足説明ではなく、S1 と対等な、独自の意味内容を有する情報とみなされるためである。つまり、前者の解釈は S2 を起点とみなす解釈であるのにたいして、後者の解釈は S2 を着点とみなす解釈であるためである。

次に(22)が容認不可能な理由を説明したい。前節で述べたように、話し手は「Peter が時間通りに来たためしがない」ということを認識しているからこそ、he was late again と発話しているといえる。だとすると、S2 は単なる補足的な追加情報であり、談話の要点を把握する上で不可欠な情報とはいえない。また、話し手による Peter に対する非難の気持ちは、S2 だけでなく S1 からも伝達されるので、話し手の意図の伝達という観点からみても S2 は補足的だといえる。(22)は S2 が補足的な情報を表しているので容認不可能なのである。(23)が容認不可能なのも S2 が補足的な情報を表すためである。(22)同様に、Peter に対する非難の気持ちは、S2 だけでなく S1 からも伝達されるので、話し手の意図の伝達という観点からみて S2 は補足的である。ところで、(23)の文間には、類似（言い換え）と隣接の２つの一貫性が成立している[6]。この例の S1 と S2 の間には「いつも遅刻する人物であれば、再び遅刻をしても不思議ではない」という前提が認められる。つまり、S1 を起点みなした場合、S2 を着点とする解釈が可能である。起点と着点を比較した場合、聞き手の関心は通常着点の方なので、S2 は聞き手を注目させるに値する情報といえるように思われる。成立している一貫性が隣接のみの場合にはそのようにいえる。しかしながら、隣接以外に類似（言い換え）が成立している場合には、S2 が着点であるとしても、聞き手を注目させるに値する情報とはみなされない傾向がある。(31b, d)を容認不可能と判断する人がいるのも、S2 が S1 の単なる言い換えとみなされるためと思われる。

(31) Wars are breaking all over;
  a. Champaign and Urbana have begun border skirmishes.
  b. *and Champaign and Urbana have begun border skirmishes.
  c. for example, Champaign and Urbana have begun border skirmishes.
  d. *and for example, Champaign and Urbana have begun border skirmishes.
(Bar-Lev & Palacas 1980)

次に(24)(25)が容認不可能な理由と(26)(27B)(29)が容認可能な理由を説明したい。(24)(25)が容認不可能なのは、S2 が S1 の内容を言い換えているにすぎず、S2 が補足的な情報とみなされるためである。他方、(26)が容認可能なのは、S2 の内容が S1 から予測不可能であり、聞き手の注目に値する情報とみなされるためである。なお、S1 と S2 の間には類似性が成立しているが、成立しているのは「言い換え」ではなく、「平行 (parallel)」である。また、(27B)が容認可能なのは、B の連結発話の S2 が A の質問に対する回答を提供しており、聞き手の注目に値するためであり、(29) が容認可能なのは、and 以下の S2 の有無で伝達内容がまったく変わってしまうので、S2 が談話の要点を把握する上で不可欠な情報であるとみなされるためである。

次に(32)を見られたい。

(32) We've been wondering how many people can get into the back seat of a Ford and my grandmother decided to try the experiment. She tried it two days ago and she wrote me a letter yesterday and six men can fit in the back seat of a Ford. (Kempson 1975: 58-9)

この例の下線部は、文脈が提供されないと容認不可能とみなされる。これは、文脈が提供されていない場合、下

線部の and に後続する文が注目に値する情報である理由が判然としないためである。文脈の存在によって、下線部の and に後続する文が、聞き手が談話の要点を把握する上で不可欠な情報であることが明らかになっているのである。最後に(33)を見られたい。

(33)　She owned a company in those days—and I don't mean a small one.

(Schourup & Waida 1988: 216)

この例は、補足的な情報であっても、聞き手の誤解を回避させるための情報であれば、S1 and S2 という形式の連結発話の S2 に生起可能であることを示している。聞き手の誤解の回避を目的として提示された情報は、当然聞き手が注目すべき情報といえるので容認可能なのである。

4．おわりに

本稿では次の２つの主張をし、その妥当性を示した。

(34)　a.　非連結発話において、出来事の生起順序とは逆の Kehler の Explanation の解釈がなされるのは、２つの出来事が時間的に隣接していると認識されやすい場合に限られる。

b.　S1 and S2 という形式の連結発話において、and は聞き手を S2 に注目させる役割を果たす。

注

*　本稿は、日本語用論学会第 9 回大会（2006 年 12 月 9 日、於：桃山学院大学）で口頭発表した内容に加筆と修正を加えたものである。当日司会をして下さった高原脩先生、コメントや質問をして下さった会場の方々に感謝申し上げたい。また、児玉徳美先生、佐野真樹先生、出水孝典先生、西田光一先生、西山淳子先生、吉田幸治先生（50 音順）には発表の前後に貴重な御助言を頂戴した。この場を借りて御礼申し上げたい。言うまでもないが、本稿における全ての不十分な点および誤りは筆者の責任である。

1)　Kehler (2002, 2004) は因果関係の下位分類として Violated expectation と Denial of preventer という関係も示している。

2)　「関係」は述部のことを、「存在物」は述部がとる項のことを意味している。

3)　Hobbs (1990: 89)は *Occasion* relation を因果関係の特殊な事例であると述べている。この陳述から Hobbs も両者の関連を認めていることが分かる。

4)　出典が明示されていない用例の解釈や容認度の判断は、アメリカ出身の英語母語話者によるものである。

5)　以下では聞き手（読み手）のことを単に聞き手と記す。

6)　Kehler (2002:18) は類似性の下位分類の中で、「言い換え」に相当する関係を Elaboration と呼んでいる。Elaboration 以外の類似性の下位分類には Parallel、Contrast、Exemplification、Generalization、Exception がある。

参考文献

荒木一雄. 『新英文法用例辞典』研究社出版.

Bar-Lev,Z., and A. Palacas. 1980. "Semantic Command over Pragmatic Priority." *Lingua* 51:137-146.

Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances*. Blackwell. [武内道子・山崎英一(訳)『人は発話をどう理解するか—関連性理論入門—』1994, ひつじ書房.]

Blakemore, D. and R. Carston. 1999. "The pragmatics of *and*-conjunctions: The non-narrative cases." *UCL Working Papers in Linguistics* 11:1-20.

Blakemore, D. and R. Carston. 2005. "The Pragmatics of Sentential Coordination with *and*." *Lingua* 115: 569-589.

Carston, R. 1993. "Conjunction, Explanation and Relevance." *Lingua* 90: 27-48.

Carston, R. 1994. "Conjunction and Pragmatic Effect." In R. E. Asher & J. M. Y. Simpson (eds.) *The Encyclopedia of Language and Linguistics*." Pergamon Press.

出水孝典. 1998. 「節と節を結ぶ and に関する一考察」『六甲英語学研究』創刊号, 27-40.

Hobbs, J. R. 1990. *Literature and Cognition*. CSLI Lecture Notes no.21.

Hume, D. 1740. *A Treatise of Human Nature, Being on Attempt to Introduce the Experimental Method of Reasoning into Moral Subjects*. [木曾好能（訳）『人間本性論　第一巻　知性について』1995, 法政大学出版局.]

Kehler, A. 2002. *Coherence, Reference, and the Theory of Grammar*. CSLI Publications.

Kehler, A. 2004. "Discourse Coherence." In Horn, L.R.,and G. Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*. Blackwell.

Kempson, R. M. 1975. *Presupposition and Delimitation of Semantics*. Cambridge University Press.

児玉徳美. 1998.『言語理論と言語論―ことばに埋め込まれているもの―』くろしお出版.

児玉徳美. 2006.『ヒト・ことば・社会』開拓社.

Lakoff, R. 1971. "IF's AND's, and BUT's about Conjunction." In C. J. Fillmore and D. T. Langendoen (eds.), *Studies in Linguistic Semantics*, 114-150. Holt, Reinhart & Winston.

Mann, W.C. and S. Thompson. 1988. "Rhetorical Structure Theory: Towards a Functional Theory of Text Organization." *Text* 8: 243-81.

Schourup, L. and T. Waida. 1988. *English Connectives*. Kurosio Publishers.

Sköries, Ulrike. 1998. "Features of a Blame Type *and*: An Analysis of an Example." *Journal of Pragmatics* 30: 49-58.

高見健一. 2001.『日英語の機能的構文分析』鳳書房.

坪本篤郎. 1986.「and と「と」: 文連結のプロトタイプと範疇化」林四郎（編）『応用言語学講座 2　日本語と外国語』明治書院, 172-197.

van Dijk, T. A. 1977. *Text and Context: Explorations in the Semantics and Pragmatics of Discourse*. Longman.

van Dijk, T. A. 1985. "Semantic discourse analysis." In T. A. van Dijk (ed.) *Handbook of Discourse Analysis* vol. 2, 103-136. Academic Press.

スケールに作用する表現としての「まあ」

川田 拓也

京都大学大学院

要旨

本稿は、談話中に頻繁に現れる「まあ」の機能をスケールの観点から記述するものである。「まあ」の性質を「スケールの上限設定要素」とみなすことで、「まあ」の持つ緩和表現的な機能など、談話的な機能をも包括的に記述することができることを示唆するものである。

【キーワード】「まあ」、scalar implicature、ヘッジ、フィラー、談話標識

1　はじめに

日本語にはいわゆる発話の「和らげ (hedge / mitigation)」や「ぼかし」のために使われる表現が多く存在することが知られている。例えば、"sentential hedge" として機能する「ちょっと」(Matsumoto 2001) や、名詞修飾成分である「ような」、概数表現である「ほど」(井上 1993) などが挙げられる。文副詞、もしくは応答詞的に振る舞う「まあ」にも「発話の和らげ」と捉えられる性質があると考えられる。例えば、下の (1a) では、B による花子の足の速さに対する評価が必ずしも高くないこと 、(1b) では、B が A に対して必ずしも同意できないことが「まあ」によって聞き手に伝わる。

(1) a. A: 花子って、足速いの？　B: まあ、速いよ。
　　b. A: この仕事を手伝ってもらえる？　B: まあ、いいよ。

本稿では (1) で見られる「まあ」(以下「まあ$_s$」と表記する) の性質と機能をスケールの観点から考察することを目的とする。すなわち、「まあ$_s$」はある要素に伴われることによって、その要素の持つスケールに作用することを論じる。「まあ$_s$」が「発話の和らげ」のような機能を持つのは、「まあ$_s$」と共起する表現のスケールが「まあ$_s$」によって一定に制限されることに起因することを主張する。その上で、「まあまあ」や「ちょっと」といった「まあ$_s$」と意味的に類似する表現と比較し、「まあ$_s$」特有の本来的な性質を述べる。

2　スケールに作用する「まあ $_s$」

2.1　森田 (1983)

「まあ$_s$」の機能をスケールの観点から記述したと思われる先行研究としては森田 (1983) がある。

森田 (1983) は、下の (2) のような例で使われる「まあ」を「軽く抑えた判断」(森田 1983: 279) を表すとしている。具体的には、「小から大へと伸展していくある状況や何かの働きが、何かの条件でストップする限界点を冷静に認め、現実の事実として受け止める、もしくは自身の控えめの判断として示す意識である」(森田 1983: 280) と述べられている。

(2) a. 子供のやることだからまあ、仕方がない。　(森田 1983: 280)
　　b. まあ、我慢しましょう。　(森田 1983: 280)

その他に以下の例を挙げている。

(3) a. まあ、やってやれないことはないが。 (森田 1983: 280)
b. 僕がやればまあ、ざっとこんなものさ。 (森田 1983: 280)

森田 (1983) によると、(3a) は「限界点で終止符を打たずに、とにかく可能なかぎりその先へと "大" の方向へ向けて努力する気持ち (森田 1983: 280)」を表すという。また、(3b) は「大へと伸びていくレベルを "低く見積もってもこの程度" と下限の限界点で示す発想 (森田 1983: 280)」があるとする。筆者の解釈では、森田 (1983) による「まあ」の基本的な性質は「話し手による限界点の設定・認識」にあると思われる。

森田 (1983) のいう「限界点」とは、「伸展していく状況や何かの働きがストップする点」であるとされ、明示的に限界点とは何かは示されていない。本稿では、「限界点」とは「まあ$_s$」の与えることのできるスケールの限界点と解釈し、森田 (1983) の観察を拡張した分析を行う。

2.2 Scalar Implicature

「まあ$_s$」によって与えられるスケールを観察するにあたり、まず scalar implicature (Horn 1984, 1989) を導入する。

本稿では、ある二つの異なる表現の一方が他方よりも高い（低い）スケールを表すといえる条件を Horn (1989: 231) , Kay (1990: 63) に従い、以下のように規定する

(4) For distinct d_i, d_j in D_x, $P(d_i)$ entails $P(d_j)$ iff d_j is lower than d_i
(P = Propositional function, D_x = Domain of P, d_x = Members of D_x) (Kay 1990: 63 (i))

すなわち、ある異なる二つの表現について大小関係があるとき、またはそのときに限りその表現を含む命題間に一方的な含意関係があると考える。これ以降、含意関係 (entailment) を p -> q、推意関係 (implicature) を p +> q と表す。(4) に従い、$P(x)$ -> $P(y)$ が成り立つことと、x が y よりも同一スケール上でより高いスケールを表す（$x > y$）ことは同義と考える。

(5) a. 太郎の部屋はまぶしい
b. 太郎の部屋は明るい
c. 太郎の部屋はまぶしくない。
d. 太郎の部屋は暗い。

通常、(5a) が成り立つ時、(5b) も成り立つ。従って、(4) より、明るさのスケールは、「まぶしい」の方が「明るい」という表現より高くなる。ただし、上記定義に従うと、(5b) は (5d) を含意しないので、「明るい」と「暗い」の間のスケールを問うことができない。

また、(5b) の発話に対して、例えば (5c) という推意が生じる。この推意は下の "Maxim of Quantity" のうちの (6a) に従うことで生じるとされる (Horn 1984, 1989)。

(6) Maxim of Quantity:
(a) Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange).
(b) Do not make your contribution more informative than is required. (Grice 1989: 26)

すなわち、以下のような関係が成り立つ。

(7) $P(x)$ +> $P(\neg y)$ $(x < y)$

この推意を scalar implicature という。現実には、太郎の部屋がまぶしかったとしても、(5b) を発した話し手は偽の言明をしたことにはならない。つまり、(5c) はキャンセルが可能である。例えば以下のような例が成り立つ。

(8) A: 君の部屋明るいの？
　　B: 明るいよ。実際、まぶしくて勉強どころじゃないよ。

2.3　否定の環境における Scalar Implicature

否定の環境では、肯定の環境とは逆の含意関係が成り立つ。例えば、(9a) は常に (9b) を含意する。

(9) a. 太郎の部屋は明るくない。
　　b. 太郎の部屋はまぶしくない。

すなわち、以下のような関係が成り立つ。

(10) $P(\neg x)$ -> $P(\neg y)$ $(x < y)$

それに伴い scalar implicature も逆になる。つまり、(11) のように表すことができる。

(11) $P(\neg y)$ +> $P(\neg\neg x)$ $(x < y)$

例えば、以下のような例が成り立つ。

(12) X: 君の部屋、まぶしくないか？
　　Y: まぶしくないよ。勉強はかどるし (+> 明るい)

2.4　「まあ $_s$」 の作用するスケール

本節では、「まあ$_s$」が後続表現に対して作用するスケールを観察する。「まあ$_s$」と後続表現の関係を明瞭にするために、観察する対象を「まあ$_s$ +形容詞」に限定して観察する。また、「まあ$_s$」と類似する表現として「まあまあ」を挙げ、二つの表現の差異についても言及する。

まず、肯定の環境で「まあ$_s$」が現れた場合をみる。肯定の場合、(13a) のように、「まあ$_s$」を「まあまあ」に置き換えても、文全体の解釈はさほど変わらない。

(13) a. X: 君の部屋は明るい?
　　Y: まあ（まあまあ） 明るいよ。
　　b. Y: ??まあ$_s$ 明るいよ。実際、まぶしくて勉強どころじゃない。

(13) は「まあ$_s$」のない (8) の場合とは異なり、scalar implicature のキャンセルを明示的に表現することが難しくなるという現象がみられる。ただし、この振る舞いは「まあまあ」とも共通する。

(14) X: 君の部屋は明るい？
　　Y': ??まあまあ明るいよ。実際まぶしくて勉強どころじゃない。

上記観察より「まあ$_s$（まあまあ）」は scalar implicature のキャンセルを制限することがわかる。
次に否定の環境をみる。

(15) a. X: 君の部屋はまぶしくないか？
Y: {まあ$_s$/??まあまあ}まぶしくないよ。
b. X: 君の部屋はまぶしくないか？
Y: {??まあ$_s$/??まあまあ}まぶしくないよ。実際明るくなくて困ってるんだ。

否定の環境においては、スケールを表す表現に対して「まあまあ」が付加されることは許容されない。一方で、(15b) のように「まあ$_s$」が付加されることによって肯定の場合と同じように scalar implicature のキャンセルが制限される。

以上のように、肯定否定の環境にかかわらず「まあ$_s$」が付加されることによって scalar implicature のキャンセルが制限される。スケールを持つ表現に「まあ$_s$」が付加されることで、常に当該表現より高いスケールの否定が推意として生じることになるので、「まあ$_s$」は共起する表現よりも高いスケールを指定できない。その結果、聞き手に対して例えば「多く見積もって…」という解釈を促すことになり、消極的な評価としての意味合いを帯びる。

まとめると以下のようになる。

(16) a. 「まあ$_s$」が「まあ$_s$」に作用する要素に付加されることによって、その要素の解釈されるスケールの上限が明示される。
b. その結果、「多く見積もって…」という解釈を聞き手に促す。

3 緩和表現としての「まあ $_s$」

3.1 先行研究の問題点

「まあ」の機能については、これまでにいくつかの提案がされている。川上 (1993, 1994) は「まあ」を概言として扱っている。冨樫 (2002, 2004) は「まあ」の統一的な機能として「曖昧性」を挙げている。さらに、対人的には、"Reduction of Face thread" (Fukuda-Karlin 2003: 59) や命令などの和らげ (ibid: 64) としての機能が指摘されている。しかし、概言や曖昧性を表す言語表現は「まあ」に限らない。例えば、「だろう」や「かもしれない」といったモーダル表現や「たぶん」「おそらく」といった副詞も概言を表す。また、緩和表現としての機能は「ちょっと」(Matsumoto 2001) といった表現にも当てはまる。現状では、「まあ」と上記の類似する表現との差異は明確に記述されていない。「まあ」だけが持つ特性を抽出する必要がある。

本節では、前節で述べた「まあ$_s$」の持つ (16) の性質が、結果として概言や曖昧性、緩和表現としての機能を帯びる余地を与えることを述べる。

3.2 「まあ$_s$」による発話行為への作用

まず、緩和表現としての「まあ$_s$」についてみる。ここでいう緩和表現とはいわゆるヘッジのような発話行為の和らげとして機能する表現を指す。

Matsumoto (2001: 6) では、「ちょっと」に緩和表現としての機能があることを遂行動詞との共起関係によって示している。下の (17) のように、「ちょっと」を伴って命令を宣言することはできないが、依頼を宣言することは可能である。

(17) a. ??ちょっと 一週間の謹慎を命じます。
b. ちょっと ここ一週間は顔を出さないようお願いします。

(17) で使われている「ちょっと」を「まあ$_s$」に置き換えても不自然さのコントラストは変わらない。つま

り、「まあ$_s$」を伴って命令を宣言することはできないが、依頼を宣言することは可能である。

(18) a. ??まあ$_s$ 一週間の謹慎を命じます。
　　b. まあ$_s$ ここ一週間は顔を出さないようお願いします。

「まあ」がなぜ「発話の和らげ」として機能するのか論じるために、以下では、「命令」と「依頼」の関係について再考する。本稿におけるスケールは (4) によって含意関係のみで定義されている。Searle (1969) における「依頼 (requesting)」の適切性条件は以下のように規定される。

(19) **Preparatory**: 1. H(earer) is able to do A. S(peaker) believes H is able to do A.
　　Preparatory: 2. It is not obvious to both S and H that H will do A in the normal course of events of his own accord.
　　Sincerity: S wants H to do A.
　　Essential: Counts as an attempt to get H to do A.　(Searle 1969: 66)

「指令 (commanding)/命令 (ordering)」は (19) の全ての条件に (20) を加えることで成り立つ。ただし、「命令の場合は指令ほど話し手の地位を占める人物は限定されない」(山梨 1986: 43)。確かに命令の場合は必ずしも話し手と聞き手との間の地位関係についての条件は必要ないと思われる。ただし、本稿では「命令」と「指令」の差異については言及しないこととする。

(20) **Preparatory**: S(peaker) must be in a position of authority over H(earer). (Searle 1969: 66)

「指令/命令」は「依頼」の条件を常に含意しているので、命令行為が成り立つときには常に依頼行為が含まれていることになる。従って定義上「{指令/命令}> 依頼」というスケールを考えることができる。また、本稿におけるスケールとは異なるが、発話行為にスケールを仮定したものとして Leech (1983) もある。そこでは、話し手と聞き手にもたらされる利益もしくは負担の度合に応じて命令と依頼が関係づけられる「負担・利益の尺度」などが提案されている (Leech 1983: 178 (池上他 訳))。

そこで、「まあ$_s$」を伴った「命令」に (16) を適用する。ただし、「「まあ$_s$」の作用する要素」とは、当該発話行為を指すこととする。「まあ$_s$」が伴われた命令行為は少なくとも命令よりもスケールの低い行為に限定されることになる。その結果、指令 (命令) を和らげること自体が許されない文脈や状況では、「まあ$_s$」の使用は不自然となることも予測される。例えば、以下の例のように、聞き手に対する強制力が強い命令がなされる文脈・場面では通常「まあ$_s$」が付加されることはないと思われる。

(21) ?? 火事だ！　まあ$_s$ 早く逃げろ！

同一スケール上にある (= 一方が他方を含意する) 発話行為について、「まあ$_s$」は (16) の性質から、その発話行為を和らげる機能を果たすことを示した。ただし、以上の例からは「ちょっと」との差異は示すことができない。

3.3　「ちょっと」と「まあ$_s$」の差異

前節で示したように、「ちょっと」と「まあ$_s$」は緩和表現としての機能を共有する。このことは必ずしも「ちょっと」も (16) のような性質を持っていることを意味するものではない。以下では「ちょっと」と「まあ$_s$」の振る舞いの差について述べる。特に英語の緩和表現として知られる *I guess* (Brown and Levinson 1987) のような表現に対応すると思われる「まあ$_s$」の振る舞いに注目した。

(22) a. X: カレーの消費量が世界一の都市はどこだ？
Y: {まあ$_s$ / ??ちょっと}ニューデリーだと思います。
b. Y': {まあ$_s$ / ??ちょっと}ニューデリーだろう。
c. Y': （その場で Google で調べて）{??まあ$_s$ / ??ちょっと}ニューデリーです。
d. Y": {??まあ$_s$ / ちょっと}知りません。
e. Y"': {??まあ$_s$ / ちょっと}なにそれ？

上記例では、「まあ$_s$」と「ちょっと」の分布に差がみられる。「まあ$_s$」に注目すると、以下の場合において「まあ$_s$」との共起が不自然となることがわかる。

- 発話時において、当該命題についての知識がある場合 (22c)
- そもそも要求された情報に対する知識がない場合 (22d, 22e)

逆に「まあ$_s$」が使える環境は、話者の 100% 確実ではない、推論の結果得られたような信念について述べるときに限られる。言い換えれば、「まあ$_s$」によって話者の多く見積もって 100% 確実な信念 (言い換えれば不確実な信念) が示される。

話者の 100% 確実ではない、推論の結果得られたような信念に対しては「まあ$_s$」が使え、知識など話者が 100% 確実だと信じている信念については「まあ$_s$」が使えないという観察から、話者の信念についても (16) が適用できる。いわば、「まあ$_s$」は話者の確信の度合を反映する。しかし、「ちょっと」は話者の確信の度合に関して言及することはできない。

以上より、本節では、「まあ$_s$」が緩和表現として機能すること、そして、他の緩和表現とは振る舞いが異なること、さらに、「まあ$_s$」は話者の確信の度合を反映することを指摘した。

「まあ$_s$」と「ちょっと」の振る舞いに差があることから、緩和表現としての機能を果たす表現すべてが (16) の性質を持つとは限らないことが明らかになる。このことはある表現が緩和表現であることと、(16) の性質を持つことは自明な関係ではないことを意味する。

3.4 応答表現としての「まあ$_s$」

依頼に対して同意（もしくは拒絶）をするような行為に対しても「まあ$_s$」の持つ (16) の性質があてはまる。

(23) a. X: この仕事をやってもらえますか？
Y: まあいいです
b. Y': ??まあイヤです

(23) のような例でみられる「まあ$_s$」は川上 (1993: 72) において、「消極的肯定」などと呼ばれているケースである。依頼に対して聞き手が行う選択は同意するかしないかの二値に限られるわけではなく、その間にスケールがあると考えることができる。(23) に (16) を適用すると、次のような分析ができると思われる。すなわち、「まあ」は完全な同意を最大値とするスケールを与える。従って、「まあ」によって「同意はできるが、100% 同意（もしくは拒絶）できるわけではない」という解釈が得られることが予測される。

これまでの観察から、「まあ$_s$」は発話行為のスケールに対しても作用することができるといえる。その結果、「まあ$_s$」の使われる環境によって弱い命令や、不確実な信念、もしくは消極的な同意のような解釈が生まれる。

4　フィラーとしての「まあ」

最後にフィラー（言いよどみ）として現れる「まあ」（以下では「まあ$_f$」と表記する）について扱う。本節では、「まあ$_f$」は「スケールへの作用」という性質は失っているものの、ケド節との共起関係をみることで、ケド節の談話的な機能に対し、「まあ$_s$」の持つ緩和表現としての性質が間接的に寄与している可能性について述べる。「まあ$_f$」には以下のような例がある。

(24) あのー **ま** 父親がですね あのー **まー** 今の JR 東日本 えー かつての日本国有鉄道と言ういわゆる国鉄の **まー** 職員だったということもありまして えー **まー** 県内 新潟県内ですけれど **ま** 転居しました (国立国語研究所 2003: S01M0950)。

上の例は国立国語研究所 (2003) の自然談話資料から採ったものである。フィラーはその性質上、話者の意図的な態度などを示すものではない。従って、「まあ$_s$」のように話者の確信の度合いや、態度を反映することはない。(24) の例をみてわかるように、「まあ$_f$」が何らかのスケールへ作用しているようにもみえない。

ただし「まあ$_f$」は後続発話においてケド節を伴って現れやすいという傾向がみられる。以下の例も (24) と同様に講演の例から採ったものであり、「まあ」を取り除いても発話全体の解釈には一切影響を与えず、かつ焦点アクセント等を伴うことがないという点で典型的なフィラーであると考えられる。

(25) a. 例えば東京球場の後に神宮球場とか後楽園球場とか色んな野球場 **まー** 東京です**けど** 近いところ 行きました (国立国語研究所 2003: S09M0986)

b. その頃の サザンオールスターズというのは 歌は そんなにね えー うまくなかった と言われています えー 僕も **まー** 直接ね えー そこで 聞いた訳じゃないんで分からないんです**けど** (国立国語研究所 2003: S09M1705)

上記例のような、談話中に挿入されたケド節について扱った研究として Nakayama and Nakayama (1997) がある。Nakayama and Nakayama (1997) によると、(25a), (25b) に現れるケド節は談話の "Background clause" を形成するとされ、談話において次のような機能を果たすと分析している。

- The non-contrastive *kedo*-clauses in our narrative data serve to provide background information for the main line of the narrative (ibid: 612)
- *Kedo* serves to mitigate the force of illocutionary acts in order to maintain harmony among speakers (ibid: 614)

例えば、(25a) では、「色んな野球場」という主張が「まー」以降で「東京限定の色んな球場」に弱められ、(25b) ではサザンオールスターズの歌のうまさに関する情報の信頼性が「まー」以降で弱められている。

「けど」が上記機能を果たすとすれば、フィラーの「まあ」は「けど」によって構成される談話の "Background information" の導入部として挿入されていると考えることができる。「まあ$_f$」はフィラーである以上、それ自体では意味機能を持つことはない。つまり挿入節が Nakayama and Nakayama (1997) のいう "Background clause" として機能するには、「けど」の存在は必須であるが、「まあ$_f$」の存在は選択的である。一方で、ケド節が果たす「主張の弱め」と「まあ$_s$」の持つ緩和表現としての機能は矛盾しない。いわば、ケド節が果たす「主張の弱め」に「まあ$_f$」は間接的に寄与していると考えられる。すなわちケド節は「まあ$_f$」と共に "Background clause" を形成し、発話全体の主張を弱めるという談話的な機能を果たしている。

5 まとめ

これまでの観察から、「まあ$_s$」は本来的に scalar implicature のキャンセルを制限することで、作用するスケールに対して上限を与えるという性質を持つ。

上のような性質から、「まあ$_s$」は適切な環境もしくは文脈が与えられると、それに応じた機能を果たすことができる。例えば、形容詞など程度を表す表現と共起すれば、その表現の程度に作用し、ある発話行為と共起すれば、その発話行為の持つスケールに作用して、ヘッジとしての機能を果たす。さらに「まあ$_s$」を伴って、話者の主観的な判断などが表明される場合も「まあ$_s$」の持つ性質から予想される。「まあ$_s$」が「軽く抑えた判断」(森田 1983) や、いわゆる「発話の和らげ」として使われ、そのように解釈されるのは「まあ$_s$」が本来的に持つ (16) の性質に依るものであると考えられる。

「まあ$_f$」は直接的にはスケールへの作用という性質は持たないが、談話の "Background clause" を形成するケド節と機能的に合致し、共に現れやすい。このことから、ケド節が果たす「主張の弱め」に「まあ$_f$」は間接的に寄与していることを示唆した。だが、それ以外の環境で現れた「まあ$_f$」について、本稿では扱うことができなかった。今後の課題としたい。

参照文献

Brown, Penelope. and Levinson, Stephen. 1987. *Politeness.* Cambridge University Press, Cambridge.

Fukuda-Karlin, Atsuko. 2003. Functions of the Attitudinal Discourse Marker *maa* in Japanese Conversation. In Clancy, Patricia. (Ed.), *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 11, pp. 53–66. CSLI Publications.

Grice, Paul. 1989. *Studies in the Way of Words.* Harvard University, Cambridge.

Horn, Laurence. 1984. Toward New Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-based and R-based Implicature. In Schiffrin, Deborah. (Ed.), *Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic Applications*, pp. 11–43. Georgetown University Press.

Horn, Laurence. 1989. *A Natural History of Negation.* The Universitiy of Chicago Press, Chicago.

井上優. 1993. 「日本語の「ぼかし表現」をめぐって」. 『日本学研究』, **3**, 74–91.

国立国語研究所. 2003. 『日本語話し言葉コーパス』. 国立国語研究所.

川上恭子. 1993. 「談話における「まあ」の用法と機能 (一) - 応答型用法の分類-」. 『園田国文』, **14**, 69–79.

川上恭子. 1994. 「談話における「まあ」の用法と機能 (二) - 展開型用法の分類-」. 『園田国文』, **15**, 69–79.

Kay, Paul. 1990. *Even. Linguistics and Philosophy*, **13**, 59–111.

Leech, Geoffrey. 1983. *Principles of Pragmatics.* Longman, London. [池上 嘉彦・河上誓作訳. 1987. 『語用論』. 紀伊国屋書店].

Matsumoto, Yoshiko. 2001. *Tyotto*: Speech Act Qualification in Japanese Revisited. *Japanese Language and Literature*, **35**, 1–16.

森田良行. 1983. 『基礎日本語 3 - 意味と使い方 -』. 角川書店, 東京.

Nakayama, Toshihide. and Nakayama, Kumiko. 1997. Japanese *kedo*: Discourse genre and grammaticization. In Sohn, Homin. and Haig, John. (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 6, pp. 607–638. CSLI Publications, Stanford.

Searle, John. 1969. *Speech Acts: An essay in the Philosophy of Language.* Oxford University Press, London.

冨樫純一. 2002. 「談話標識「まあ」について」. 『筑波日本語研究』, **7**, 15–31.

冨樫純一. 2004. 『日本語談話標識の機能』. 博士論文, 筑波大学.

山梨正明. 1986. 『発話行為』. 大修館書店, 東京.

修辞疑問文の発話解釈に関する一考察

後藤リサ
奈良女子大学大学院

＜要旨＞
修辞疑問文は、通常の疑問文とは異なり情報を求めず、何らかの話者意図を伝達するものである。修辞疑問文の表面に現れる命題の極性と、話者が意図する想定の極性は逆になると一般に考えられている（Quirk et al. 1985）。ところがこの一般的な定義を満たさないタイプの修辞疑問文が存在する。修辞疑問文の研究は広範にわたるが、後者の研究についてはあまり注目されていない。後者のタイプの修辞疑問文が、先行疑問文の答えが明らかであることを暗に示すために用いられ、その多くの場合においてユーモアが生み出されているという点については Schaffer(2005)が明らかにしている。本稿ではさらに、このタイプの修辞疑問文が持つエコー性が Wilson(2000)他のいう echoic allusion（エコー的ほのめかし）と並行的である点に注目し、それが発話解釈のプロセスにおいて認知効果に与える影響について考察する。

【キーワード】: 修辞疑問文（RQ）、RQ-as-retort、エコー発話、echoic allusion、dissociative attitude

1．はじめに

修辞疑問文の広く知られている伝統的な定義として、まず Hudson（1975:16）のいう「返答を求めない」というものと、Quirk et al.（1985:825）のいう「疑問文形式であるが、強い断定の効力を持つ」という 2 点を挙げておく。(1)がその典型例であり、(1a-c)の話者の意図はそれぞれ(1'a-c)となる。

(1)　a. Is that a reason for despair?
　　b. Isn't the answer obvious?
　　c. Who knows?　(Quirk et al 1985:826)

(1)'　a. Surely that isn't a reason for despair
　　b. Surely the answer is obvious
　　c. Nobody knows / I don't know　(*ibid.*)

このように修辞疑問文は極性に影響をうけ、発話内容の極性とは反対の極性の想定を示すものである。

ところが次の(2B)のように、反対の極性を持つ想定を示さない例がある。

(2)　A: Is Clinton a liberal?
　　B: Is the Pope Catholic?　(Han 2002: 216)

(2)'　The Pope is indeed Catholic.

(2B)は情報を求めていない点で明らかに修辞疑問文であるが、話者の意図する想定(2)'は発話内容と

同一の極性を持ち、さらに(2)'が誰にとっても明らかであるのと同様に、先行疑問文(2A)が持つ命題 Clinton is a liberal.についても明らかなことである（It (=(2A)) is too obvious.）という含意をも伝達する。

このタイプの修辞疑問文には、(2B)のような広く知られたものから、発話者と聞き手との間でのみ正しい意図伝達がなされるような一般性の低いものまで種々みられるが、英語圏では一般的に用いられているレトリックの手法の一つである。本稿では、従来の修辞疑問文の典型とは異なる、極性に影響を受けないこのタイプの修辞疑問文の、特にそのエコー性によりもたらされる効果という観点から考察したい。

2．先行研究

Schaffer(2005)は、「先行疑問文をエコーし、先行疑問文への答えを示すという目的で使用される」修辞疑問文を RQ-as-retort と呼ぶ（以下においては、Schaffer に倣い RQ-as-retorts の名称を用いる）。(2B)のような修辞疑問文は先行疑問文の答えとして認識される。その答えは、世界の、あるいは文化的によく知られた情報を土台にして、yes, no,そして Nobody knows という３つの値の一つに該当する。(2B)は先行疑問文の答えが yes であることを含意し、次の(3)は先行疑問文の答えが no であることを含意する典型的な RQ-as-retorts である[1]。同様に、(4)は先行疑問文への答えを知らない、あるいはその命題の真偽性については誰にもわからない類のものであるときに、Nobody knows.であることを伝達するために使用される。反語タイプの修辞疑問文の典型とされる Who knows?も、この３つ目に分類され得る。

(3) Do chickens have lips? (Schaffer 2005:436)
(4) Is the sky blue? (Green 1989, cited in Schaffer 2005:444)

Schaffer では、RQ-as-retorts の多くの例において、先行疑問文の統語形式のエコーが見られる。(2B)においては、助動詞 Is で始まる yes/no 疑問文の形式がエコーされており、次の(5)においても同様に、助動詞と動詞 know がエコーされている。

(5) A: Do you know me?
B: Does an art student know Picasso? (*ibid.* 440 より修正引用)

次の(6)のように、発話の大部分がエコーされている例もある。

(6) A: Have you learned how to program it [a VCR] yet?
B: Have you learned how to play basketball yet? (*ibid.*:438)

RQ-as-retorts がエコーするものは、統語形式と、その疑問文が示す答えであるが、このような発話は「内容と形式のエコーである」という性質を持つ echoic allusion（エコー的ほのめかし、Wilson 2000:434）の例と並行的である。次のセクションでは、関連性理論（Wilson and Sperber 1992 他）において論じられているエコー発話という概念について概観し、echoic allusion と RQ-as-retorts との並行性について見ていく。

3．エコー発話解釈

Sperber and Wilson(1986)では、発話の使用について、記述的使用と解釈的使用の2種に分類されるとする。記述的使用とは現実の状況を表示する方法で、真偽値にかかわるものである。一方解釈的使用とは、発話が他者の思考や発話を表示したもので、つまり表示の表示である。他者の発話をエコーしているRQ-as-retortsは解釈的使用であるといえる。Wilson and Sperber(1992)によると、エコー的な使用は、他者の発話や思考の引用に、話者の態度が加わったものであり、単なる引用とは区別している。

3.1. アイロニー発話の分析

アイロニー発話は字義的な意味の反対を示すものであるという一般的見解があるが、Wilson and Sperber(1992)では従来の定義に当てはまらないアイロニーがあることを指摘するとともに、それらも含め、あらゆるタイプのアイロニーがエコー発話解釈で分析可能であるという。(7)を見よう。

(7) a. Peter: Bill is an officer and a gentleman.
b. Mary: An officer and a gentleman, indeed. (Wilson and Sperber 1992:60)

Maryは翌日返すという言葉を信じてBillにお金を貸し、Billが約束を守るかどうかについてPeterに訊ねているという状況があるとする。それに対しPeterは(7a)を発話し、Billが信用できる人間であることを保証する。しかし翌日、BillはMaryとの約束について知らないといい、MaryはPeterの発話が全く当てにならないものであったということを伝達するためにPeterに対し(7b)を発話する。(7b)のアイロニー性は、MaryがPeterの発話をエコーしていることにより明示化される。つまり、アイロニーの認識には、その発話がエコーであると理解する必要がある。

Wilson and Sperberによると、エコー発話とは、引用に話者の態度が加わったものである。ここで言う話者の態度とは、(8)への返答としての(9)において示されるような様々な態度である。

(8) Peter: That was a fantastic film.
(9) a.(happily) Fantastic.
b.(puzzled) Fantastic?
c.(scornfully) Fantastic! (Wilson 2000:432)

(8)に対する返答としての(9a,b,c)のエコー発話はそれぞれ異なる態度を示している。(9a)では同意を示し、(9b)では疑問を投げかけており、(9c)では発話とは切り離された態度(= dissociative attitude)を示す。アイロニーの場合、(9c)のように、他者に帰する発話や思考がエコーされるときにdissociativeな態度が示されるという（*ibid.*:433)。

3.2. Echoic Allusion

また、Wilson(2000:434)では次の(10b)をechoic allusion(エコー的ほのめかし)であるとしている。

(10) a. Prince Charles: Hello, I'm Prince Charles.
b. Telephone operator: And I'm the Queen of Sheba. (*ibid.*)

(10)' (speaker believe that) it is not true that I'm X.

(10b)は先行発話(10a)と共通の抽象的な属性を持っていることを話者が伝達しようとしている点で、エコー発話の一つのタイプであるといえる。(10b)の話者である電話交換手は(10a)の発話を皇太子本人からの発話であるとは信じておらず、並行的な統語形式を用いた発話により、その意図をアイロニー的な態度とともに伝達している。ここでエコーされているのは、I'm X.という統語形式であり、(10b)の話者の意図、すなわち(10)'で示されるような先行発話(10a)の内容が「偽である、そんな馬鹿なことはありえない」とする話者の意図を、同じ形式の発話によって伝達しているのである[2]。

統語形式のエコーにより、先行発話についての話者の想定を伝達するという点において、(2)のやりとりは(10)と並行的である。よって(2B)もまたechoic allusionの一種であると考えられる。次のセクションではその並行性について、形式のエコー性と話者の態度という側面から確認する。

4. RQ-as-retortsのechoic allusionとの並行性

4.1. 統語形式のエコー性

(2)を便宜上以下に再び挙げる。

(2) A: Is Clinton a liberal?
B: Is the Pope Catholic? (Han 2002: 216)

(2B)においては、Be動詞＋主語＋補語という形式がエコーされ、(2B)で含意される話者意図 It is obvious that X is true.が明示化されるとともに、それが(2A)への答えであることが伝達される。ここで、話者意図にある変項Xの命題 the Pope is Catholic から Clinton is a liberal にシフトされる。一方、noの返答を伝達する次の(11)の例を見よう。

(11) A: Do you know me?
B: Do chickens have lips?

(11)においては、Do 助動詞＋主語＋一般動詞＋目的語という形式がエコーされ、(11B)により明示化された話者意図 It is obvious that X is false.が明示化され、それが(11A)への答えであることが伝達される。ここで、話者意図にある変項 X の命題 Chickens have lips が you(speaker) knows me(hearer)にシフトされる。

4.2. エコーされた発話や思考に対する話者の態度

前述のように、Wilson and Sperberのアイロニーの分析において、エコーされた発話内容や思考に対する発話者の態度はいつもdissociativeであるということであった。RQ-as-retortsについても、エコー性の高いものが(9)のようなechoic allusionの一種であると仮定すると、そこで伝達される話者態度はdissociativeなものであるといえるかもしれない。ただし、RQ-as-retortsは発話が疑問文形式であるため、発話内容そのものに対するdissociativeな態度を示すことはできない。一つの可能性として、例えば(2B)において、それが示す答えとしての肯定命題 X に対する話者意図 It is obvious that X (=the Pope is Catholic) is true.に対しdissociativeな態度であるということはできるだろう。また、関連性理論では、疑問文発話は次の(2)"のような高次の表意を持つものとして表

され得ることから、この付加された高次表意への態度と捉えることができる。

(2)" a. エコー元となる表意の形式： the speaker of (2a) is asking X.
(X=whether Clinton is a liberal)
b. エコーされた表意の形式： the speaker of (2B) is asking X.
(X=whether the Pope is Catholic)

つまり、(2B)の話者は、先行疑問文自体が持つ「情報を求める」という高次表意に対して、「そのようなことは聞くまでもない当たり前のことだ」(=There is no use of asking X.) という dissociative な態度を示していると考えられる。

5．考察

RQ-as-retorts の多くの例において、先行疑問文の統語形式のエコーであり、echoic allusion と並行的であることを確認した。先行疑問文との統語的なエコー性が高ければ、RQ-as-retorts であることが顕著であり、聞き手の解釈プロセスで要求される労力も少なくてすむと予測できる。しかし、(2B)の Pope の例は英語圏において非常によく知られた RQ-as-retort であるため、次の(12)に現れた場合のように、先行疑問文の形式にかかわらず正しい伝達がなされるようである。

(12) A: Does Ed McMahon drink?
B: Is the Pope Catholic?

また、次の(13)のように、パロディ化されている例があることからも、非常に慣習化されているといえるだろう。

(13) Is the Pope Cadillac? (Schaffer 2005:449)

では、それほど慣習化されていないものや、話者の独創性の高い、全く慣習化されていないものと比べ、このように非常に慣習化された RQ-as-retorts は、どのような先行疑問文に対しても同じ処理労力と認知効果を与えるのだろうか。fat chance のように、非字義的なアイロニーの使用が無標であるような例と同じレベルで慣習化されているといえるだろうか。しかし、(2B)が非常に慣習化されているとはいえ、その使用範囲については制限があるようだ。次の(14)(15)を見よう。

(14) A: Do you know me?
B: Does an art student know Picasso? (*ibid.* 440 より修正引用)
(15) A: Do you know me?
B: ??Is the Pope Catholic?

(14)とともに、(15)のやりとりに、文法上何ら問題はないが、筆者のインフォーマント[3]によると、(15B)の容認度は低く、通常の会話としては抵抗感を感じるようだ。(14B)も通常の会話としてはやや抵抗感が残るとするインフォーマントもいるが、これは先行疑問文(14A)(15A)の性質を考えると、

A と B はそれほど親しくない間柄であることがわかり、よって RQ-as-retort のような手法がここではふさわしくない、という観点からである。つまり、(14A)(15A)のような話者個人に関わる質問の返答としては、RQ-as-retort が非礼な印象を与えることは避けられず、非礼が意図されたものである場合を除いて、不自然な返答であるという。ただし(14B)では、先行疑問文の形式をエコーしていることによりそれが緩和されるという。ここでは、助動詞 Do と動詞 know がエコーされている。また、次のように公的な人物についての質問では、RQ-as-retort を使用することにはまったく問題がないが、それでも (17)の容認性がやはり劣るようだ。

(16) A: Do you know Michael Jackson?
B: Does an art student know Picasso?
(17) A: Do you know Michael Jackson?
B: Is the Pope Catholic?

ここでいう容認性とは、日常会話において実際に使用するかどうか、という観点からである。Is the Pope Catholic?は、通常の情報を求める疑問文としての使用はありえず、RQ-as-retort としての使用が無標であるという点で fat chance と類似している。しかし、RQ-as-retort としてどのような先行疑問文の返答においても容認されるというわけではない。エコー性が高いほど、RQ-as-retort としての効果がより顕著となり、容認度もそれに比例して高くなるといえる点では、他の RQ-as-retorts と同様である。

ただし、エコー性がもたらす認知効果がいつも最優先されるのではない。例えば多くの地域において、先に触れた(10B)Do chickens have lips?は(2B)と同様によく知られた RQ-as-retort であるが、中には「鶏のくちばしは beak であり lips とは言わない」という前提自体について考え込んでしまうインフォーマントもおり、このような「考える間」を作る余地のある例が RQ-as-retort としての認知効果を持つかどうかについては疑問が残る。次の例も統語形式のエコー性は高いが、認知効果の低い例である。

(18) A: Do you surf?
B: Does Michael Jackson surf?

(18B)において、助動詞と動詞 surf がエコーされているが、Michael Jackson と surf という行為の間に何ら相関関係が見出せない。よって「おそらく no であろう」と推察できるかもしれないが、(11B)の例と同様に、聞き手に「考える間」を与えてしまい、認知効果は低くなる。Michael Jackson を使いたいのであれば、次の(19)のように Michael Jackson と最も相関関係のある語を用いるべきであろう。

(19) A: Do you surf?
B: Is Michael Jackson 'bad'?
(注：'bad'は Michael Jackson が歌う歌に繰り返し出てくる語であることから)

慣習化されていない多くの RQ-as-retort において、エコー性が低いものでも、そこに現れる語句の

相関関係が顕著であれば、話者意図の曖昧性が回避される。

さらに、I don't know.あるいは、Nobody knows が与えられるタイプにおいても曖昧な例がある。(20)を見よう。

(20)　A: Can she work?
　　B: (1)Is Batman a transvestite? (2)Who knows?　　(Schaffer 2005: 445)

(20)において、(B2)は、発話内容の反対の想定を示す典型的な修辞疑問文(=1c)だが、Schaffer によると類似の話者意図を示す RQ-as-retort の強化のために使用される場合がある。(B1)は RQ-as-retort として用いられており、話者の意図が I don't know.あるいは Nobody knows.であることを伝達しているが、このような独自性の強い RQ-as-retort の場合も、聞き手に「考える間」を与える可能性があり、よってそのことを周知の話者は(B2)のような、典型的な RQ の使用によって補足を加えているといえる。

I don't know.あるいは Nobody knows.を含意する RQ-as-retorts の中で統語形式のエコー性が高いものしては次の(21B)がある。

(21)　A: How many feet long is this ferry?
　　B: How many hamburgers are sold per month in Tartu?　　(*ibid.*:444)

以上のように、RQ-as-retorts には、先行疑問文の統語形式のエコー性の高い、echoic allusion と並行的な例と、それほどエコー性が見られないケースがある。このエコー性の差異は、関連性理論でいう処理労力と認知効果の関係性にも影響を与えていると考えられる。例えば(20)では、(B1)が形式のエコーといえないにしても、yes/no 疑問文形式を使っている点で(B2)よりはエコー的である。慣習性の高い(B2)の方がより少ない労力で関連性が達成されるだろうが、一方(B1)では聞き手の理解に課す労力がより多く要求されるため、関連性が最大となり伝達が達成されれば、より大きな認知効果（例えばユーモア性が高くなり笑いを誘う等）が見込まれる。

6．結論

本稿では、先行疑問文の答えとして認知効果を与える RQ-as-retorts と Schaffer の呼ぶ修辞疑問文のエコー性に注目し、労力と効果の観点からの考察を行った。エコー性が認知効果に与える影響は大きく、発話が RQ-as-retort であることを明示するための一要因となる。このことは、Pope の例のように慣習化された RQ-as-retorts でさえも、エコー性が低い場合には容認されないことがあることからも裏付けられる。このように、エコー性が重要な要素であることは疑いないが、現れる語句間の相関関係も無視できない要因である。この問題については、稿を改め考察したい。

また、統語的なエコーであるという側面からは、Wilson(2000)のいう echoic allusion と並行的な例であるといえ、それが帰する発話や思考への dissociative な態度を示すことからも、アイロニーとの類似性が示唆される。しかし、RQ-as-retorts タイプの修辞疑問文が示す話者の dissociative な態度とは、は必ずしもアイロニーが示す態度と等価ではなく、情報を求めるという疑問文固有の発話行為それ自体から切り離された（dissociative な）態度である。関連性理論では、疑問文は the speaker is asking という高次の表意により示されるが、この高次の表意に対する態度が

dissociative なものであるといえるだろう。

RQ-as-retorts の分類に焦点を置いた Schaffer に対し、本稿では先行発話のエコー性がその認知効果に貢献しているという観点から発展的考察を加えた。RQ-as-retorts のエコー性に注目した研究はこれまでにほとんどなく、様々な修辞疑問文を、先行発話やコンテクストとの関係性から分析していくことは、今後の修辞疑問文の研究において大きな意味を持つものであると考える。今後さらに、労力と効果という観点から、RQ-as-retorts の再分類を行いたい。

注

1 Pope の例には他にも次のような変異形がある。
Is the Pope Polish/Italian?

2 パロディもまた、ある人物や作家の特徴的な言葉の使い方を真似する点で形式のエコーであるとされるが、形式だけではなく話者の意図が伝達されている点で、(12B)は、パロディとは区別されるべきものである。

3 インフォーマントとして、アメリカ人1名（30代、男性）とカナダ人1名（40代、男性）にご協力いただいた。

*本稿は、2006年12月9日、日本語用論学会第9回（於桃山学院大学）の口頭発表に加筆・修正を加えたものである。本稿執筆にあたり、ご指導くださった指導教官の内田聖二先生、吉村あき子先生、また、発表の際、西山佑司先生を始め、多くの方から貴重なご指摘をいただいたことについて、ここに感謝の意を表したい。

参考文献

Green, G. 1989. *Pragmatics and natural language understanding.* Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

Han, C.-H. 2002. 'Interpretation interrogatives as rhetorical questions.' *Lingua* 112, 201-229.

Hudson, R. 1975. 'The meaning of questions.' *Language* 51, 1-31.

東森勲・吉村あき子. 2003. 『関連性理論の新展開—認知とコミュニケーション』東京: 研究社.

Noh, E-J. 2000. *Metarepresentation: A relevance-theory approach.* Amsterdam: John Benjamins.

Quirk, R., S. Greenbaum., G. Leech. and J. Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language.* London: Longman.

Schaffer, D. 2005. 'Can rhetorical questions function as retorts? Is the Pope Catholic?' *Journal of Pragmatics* 37, 433-460.

Sperber, D and D. Wilson. 1986/1995. Relevance: Communication and Cognition. Oxford: Blackwell.

Wilson, D. 2000. 'Metarepresentation in linguistic communication' In Sperber, D. ed. *Metarepresentations a multidisciplinary perspective,* 411-441. New York: Oxford University Press.

Wilson, D and D. Sperber. 1988. 'Mood and the analysis of non-declarative sentences.' In J. Dancy et al. eds. *Human agency,* 77-101. California: Stanford University Press.

_____. 1992. 'On verbal irony' *Lingua* 87, 53-76.

_____. 1993. 'Linguistic form and relevance' *Lingua* 90, 1-25.

ねじれた条件節を持つ条件文の分析

KOLUKISA (コルクサ)　Ali Aycan (アリ アイジャン)（北海道大学・大学院文学研究科・博士課程）
kolukisa_aycan@hotmail.com

加藤重広（北海道大学・大学院文学研究科・助教授）
kato@lit.let.hokudai.ac.jp

＜要旨＞

条件文には様々な種類がある。「学生なら，入場料が 2 割引になります」のように，前件が導入する世界において後件の事態が実現することを述べる，基本的な条件と帰結の関係を表すものもあれば，「トイレなら，2 階にあります」のように，基本的な条件と帰結を表さないものもある。後者のような，基本条件文と分析できないものでは，前件は後件の発話が適切あるいは有効になる条件を提示しており，「A（という事態）なら，B という情報が有効だ」と示しうるような語用論的な条件・帰結関係を述べている。つまり，A という前件は後件が有効になる発話状況に関する「メタ発話的な」あるいは「語用論的な」条件提示であり，B という後件は A で示される状況下で有効・適切な情報内容である。興味深いのは，この種の文が確定しているはずの事柄に条件辞をつけて作れるということである。本論では，「確定事態であっても，確定とする判断の排他的権利（優先権）が相手にあり，発話者にない場合，相手に判断の優先権を尊重していることを示すために，条件辞を用いる」と考える。そして，相手が優先的に判断を下し，確定後も判断を変更したり撤回したりする余地を認めることは，Brown and Levinson(1987)で言う negative politeness の一種だと考えられる。

【キーワード】: 基本的条件，条件辞，消極的ポライトネス（negative politeness），排他的権利，ねじれ

1．はじめに

本論では，条件節をつくる接続助詞など（以下，条件辞と呼ぶ）を用いていながら，基本的な条件と帰結の関係を表しているとは考えられない条件文を分析する。この種の条件文は，日本語に固有かつ特有なものとは言えないが，日本語で多用されることから，日本語の条件文の特質を考える上で重要である。基本的な条件と帰結の関係を表す，標準的な条件文（以下，基本条件文と呼ぶ）が同一の世界における事象として条件と帰結を対応させているのに対して，基本条件文と分析できないものでは，条件節が帰結節を叙述するメタ発話レベル（つまり、「発話関係レベル」）にあり，条件節が帰結節と対応しない関係になっていると本論では考える。これを語用論的に異なるレベルにある条件節が帰結節に対してずれている条件文と捉え，「ねじれた条件節」を持つ条件文とし，その主たる談話機能がポライトネスに関わるものであることを主張する。

2．「基本条件文」とは

基本条件文と呼ぶのは，以下のような，前件が導入する世界において前件が後件の成立を左右しているものである。

(1) a. 参加者が 20 名を越えないなら，旅行会社はこのツアーを中止する。
b. 参加者が 20 名を越えていなかったら，旅行会社はこのツアーを中止していた。

また，基本条件文の中には，(2)のような，前件の確定度が高いため，条件性が低いと見られるものもある。

(2) a. {* もし} 春になれば，桜が咲く。
b. {* もし} 春になると，桜が咲く。
c. {* もし} 春になったら，桜が咲く。
d. {* もし} 春になったなら，桜が咲く。 *注1

(2)の条件形式は条件提示より時間的な関係の提示が明らかに主たる働きになっている。これは，前件の確定度が高いため，前件で「もし」が許容されないことからも確認できる。日本語の条件形式の四つである「バ・ト・タラ・ナラ」には，文脈によって異なる，条件を表す以外の機能がある。これらは，特に前件命題の確定度が高い場合に顕在化する。

また，条件辞が付く品詞の種類が異なる場合もある。(1)と(2)では動詞類であり，(3)では名詞類である。

(3) 学生なら，入場料が２割引になります。

条件辞が付く品詞を形態的に整理すれば，以下のようになる。

{動詞／形容詞} { と / ば / たら / なら }

叙述性があるもの

{名詞／形容動詞語幹} {
*と → だと
*ば → であれば
*たら → だったら／であったら
なら → であるなら
}

「なら」を除き、叙述性がないもの　　叙述性があるもの

上の図で見られるように，「なら」だけは，名詞類とそのまま共起できる。これは「なら」が本来は断定の助動詞に由来するからである。また「なら」は名詞類と共起する場合に，「であるなら」という形でも見られる。その場合は，叙述性が強まると考えられる。

一方，(3)のような文は，前件は名詞＋条件辞の形をしており，条件「節」としてよいか検討を要する。これは「学生なら」を「学生であるなら」と置き換えることが可能であるが，「学生は」とも置き換え可能だからである。前者の場合は，下の(4)のように，前件と後件に同一の不定項が潜在的に存在していると見ることができる。

(4)　　Xが学生なら，Xは入場料が2割引になります。

これに対して(3)の「学生なら」を条件節としないのであれば，「なら」は「は」と同じカテゴリーに含めることになるが，高梨（1995：168 - 170）で，このような「なら」を「は」と同様な扱いができないという点で下の二つの例があげられる。

(5) a.「後でかけます。いつ｛なら／*は｝いいでしょう」
　　「何曜日｛なら／*は｝　都合がいいですか」
　b.「ドイツ語かフランス語が読めますか。」
　　「ドイツ語なら読めますが，フランス語 *なら 読めません。」

(5a)で，「なら」には「は」に一般に見られない特徴がある。上の構文で一般に，「何」，「いつ」，「だれ」などの疑問語が「なら」で許容されるのに対し，「は」で許容されない。また(5b)のような文脈の場合に，対比を表すために「は」を両方の節で使えても，「なら」の同様な使用は認められないという指摘がある。（高梨：1995：168 - 170）。

また，先の「学生なら，入場料が2割引になります」の例を，(4)の「Xが学生なら，Xは入場料が2割引になります」のように解釈すれば，前件が導入する「X が学生である」という世界において，「Xは入場料が2割引になる」という事態が生じることを述べると見ることができ，基本条件文と同じように考えることができる。つまり，(3)は基底において，条件節と帰結節に同一の不定項を含むものの，その不定項を2つの節から消去する形で実現しているために，形式上は複文よりも単文に近いが，内容的には複文として解釈できるのである。Xは「入場しようとする人」を指すと言ってもいいだろう。

3．「ねじれた条件節を持つ条件文」とは

ねじれた条件節を持つ条件文と呼ぶものは，前件が導入する世界において後件の成立が左右されないタイプのものである。

(6)　　トイレなら，2階にありますよ。

(6)のような文については，先の(3)と同様の説明が適用しにくい。これも，「トイレなら」は「トイレは」にも，「トイレでしたら」「トイレを探しているなら」などにも置き換え可能である。(6)について，(3)に対する(4)に相当する潜在的構造を考えるとすれば(7)のようになるだろう。

(7)　　Xがトイレなら，Xは2階にありますよ。

ここでXに「あなたが探しているもの」を挿入して考えることは可能である。しかし，(3)では「なら」を「でないなら」に変えて後件も否定文にした(8)を考えることが可能であるのに対して，同じ操作を(6)にした(9)は明らかに不自然で，成立しない。

(8)　　学生でないなら，入場料は2割引になりません。
(9) *　トイレでないなら，2階にありません。

このことは，(3)と(6)の条件と帰結の関係が構造上類似していても，意味的に異なるタイプであることを示している。また，このことは，「学生である」かどうかが「入場料が2割引になる」かどうかを左右する条件であるのに対して，「トイレを探している」かどうかが「トイレが2階にある」かどうかを左右してはいないことからも確認できる。興味深いのは，この種の文が確定しているはずの事柄にも条件辞をつけて作れるということである。

(10)　　A「田中さんはどこですか」　　B「田中さん｛は／なら｝もう帰りましたよ」

例えば，(10B)ではAの発話からAが「田中さん」の所在を知ろうとしていることがわかり，既知のこととして「は」を用いることに疑いはないが，「田中さんなら」のように条件辞をつけることが可能である。(10B)では「田中さんの所在が知りたい」という前件の成立不成立が，「田中さんはもう帰った」という後件の成立を左右しない点で(6)と同じである。

本論では，「確定事態であっても，確定とする判断の排他的権利（優先権）が相手にあり，発話者にない場合，相手に判断の優先権を尊重していることを示すために，条件辞を用いる」と考える。(10)であれば，「Aが田中さんを探している」ことはAが排他的に判断できることであり，BはAが述べることを受け入れて回答するしかない。

(11)　　A「あのー」　　B「田中さん｛は／なら｝もう帰りましたよ」

一方，(11)のように「Aが田中さんを探している」ことが確定しない状況でも，「なら」を用いることは可能である。しかし，(11B)で「は」を用いると，本来Aが判断できるはずの事象について，Bが越権的に決めつけている印象を与える。逆に，(10B)の「なら」は，確定事態についてもAについて優先的に判断する余地を与えることになる。

相手が優先的に判断を下し，確定後も判断を変更したり撤回したりする余地を認めることは，Brown and Levinson(1987)で言う negative politeness の一種だと考えられる。また，トマス（1998：184 - 185）は，この negative politeness について，人間の「面子」に相当するものである「フェイス」には，「積極的」(positive) と「消極的」(negative)の二種があり，これらの中から「消極的なフェイス」は「他の人から邪魔されたくない，抑え付けられたくない，行動を自由に選択したいといった要求に表れる」としている。つまり，先の(6)，(10)，(11)と下の(12)で，

発話者が前件で「なら」を使って自分の発話で相手に優先的な判断を下す権限を渡すというのは，相手に判断を変更したり撤回したりするなど，発話行動を自由に選択できる余地を与えることになっている。相手に行動を自由に選択させる余地を与えるということは，相手を押し付けたくない，相手に自分の判断でプレッシャーをかけたくないという行動にも繋がるものである。

(12)　　ビールなら、やっぱりアサヒだ。

また，(12)を先の(11)と同様に考えるのが不可能ではない。(11)では，二人の会話参加者AとBがいるが，(12)の場合に会話参加者はBのみであるかのように見える。しかし，(12)の発話者にとって文を聞く相手がAとなる。(11)と同じく，「Aが探しているもの」が確定していない状況で，発話者に「Aが探していると想定されるもの」が「ビール」だと決め付けられる。そして，その事態に対して潜在的な聞き手であるAに優先的に判断する権利が，「なら」の使用で発話者からあげられる。しかし，状況が(11)と異なり，相手による何の文脈提示もないため，「ビール」という概念は文脈提示上中立的なもので，「ビールであるかどうか」ということに関する判断は相手が独占的に持っているわけではない。よって，相手が探しているものを発話者が自ら「ビール」だと決め付けているため，消極的なポライトネスは明確に感じられない。また(12)でも，「なら」の代わりに「は」を使うことが可能である。しかし，「は」が使用されると，発話場面にAの存在が問題とされず，単なる発話者の判断が表されるようになる。(12)のような使い方もまたnegative politenessの範囲に入ると考えられる。特にCMなどでは，相手に判断の優先権を与えることで，聞き手の注目を引くことが図れるから，よく使われるのであろう。

また，(6)のように「あなたがトイレを探している」ことを前件に，後件として「トイレが2階にある」ことを述べると，後件の成立に前件が関与せず，条件と帰結の関係がずれていることは，本論では以下のように考える。前件は，後件の発話が適切あるいは有効になる条件を提示しており，「A（という事態）なら，Bという情報が有効だ」と示しうるような語用論的な条件・帰結関係を述べているのが，この種の条件文である。つまり，Aという前件は後件が有効になる発話状況に関する「メタ発話的な」あるいは「語用論的な」条件提示であり，Bという後件はAで示される状況下で有効・適切な情報内容である。言い換えれば，Bという発話の成立条件をAが提示するという関係になっており，発話内容たるBとメタ発話的条件であるAとは，レベルがずれており，これが論理的なねじれをつくっているのである。したがって，(6)については，「あなたが探しているものがトイレなら，《トイレが2階にある》という情報提示が有効になる」のように再解釈できる。

4．「のなら」と「ポライトネス」

【13と14に共通の状況文脈：発話者は相手がガタガタと震えている姿を観察した場合】

(13)　　寒いのなら，暖房をつけるよ。

(14)　　寒いなら，暖房をつけるよ。

次に，(13)と(14)の違いについて考えたい。通常，(13) と(14)のいずれでも，「寒さを感じると想定される者」は聞き手である。但し，例えば(14)を「君は，寒いのがまんしてたの？　僕は寒いなら暖房つけるけどね」などのように，少しくだけた反事実的で特殊な文脈の下で考えると，発話者に相当するものにもなる。しかし，同じ文脈で「君は，寒いのがまんしてたの？　*僕は寒いのなら暖房つけるけどね」という形で「のなら」を使うと，不自然になる。「のなら」の「の」の基本的な意味を文末の「のだ」の「の」と一緒だと考えてみよう。加藤（2001：132）は，「のだ」について，すでにそうなっていて確定しているということであり，すでにそうすることの判断が終わっているということで，「判断済み」の意味を表すとしている。ここで，「判断済み」を提示する「の」に条件辞が付くと，その「判断の確認」を相手に要求することになると考えられる。また，発話者は自分の判断を自分に確認する必要はないため，例えば「*僕が行くのなら，彼も行く」などと先の文脈の場合も，「のなら」の使用は不自然になる。したがって，(13)では「寒いのなら」を、相手が「寒いかどうか」という判断の確認だと考えられる。特に相手の何の前発話もない場合，部屋の寒さや相手の発話場面での状況から，発話者が「相手が寒いかどうか」という推論を相手の代わりに行い，「相手が寒いかもしれない」という結論に辿り着く。(13)で，発話者はその判断が「相手にだけ確認できるものである」ということを有標な形で「のなら」で，相手に提示し確認を明示的に求めるが，あわせて同じ文脈から相手に自分の判断を押し付けたくないという意味も非明示的に得られる。しかし，(14)では，その判断が「相手にだけ確認できるものである」ということが無標の解釈であるため，相手の判断に関する確認の要求もそもそも非明示的である。したがって，(13)の場合に明示的な意味から連鎖的に得られる「相手に自分の判断を押し付けたくない」という非明示的な意味が(14)では得られない。

(13)で発話者が「相手が寒いかどうか」ということの議論を自ら相手の代わりに行って，それの結果，確定的な判断を有標的に相手に任せるということは，相手への負担を最小限にするための発話者の行動であるという点で，Leech(1983)の Tact Maxim（気配りの公理）と Generosity Maxim（寛大さの公理）のポライトネスに繋がるものとして考えられる。井上（2001：128 - 129）は，「気配り」は「他者への負担を最小限にし，他者への利益を最大限にすること」，「寛大さ」は「自己への利益を最小限にし，自己への負担を最大限にすること」と説明している。また，発話内容によって，相手にとって負担と利益と考えられるものは様々であり，相手の利益になるような事柄がその相手に丁寧だと考えられるものであるとされる。この点から考えると，上の例(13)と(14)の両者も，後件が相手の利益になるような情報を有する。しかし，(13)と(14)の最大な違いは，(13)で相手が確定できる判断の存在が「のなら」の使用によって有標的に示されるため，非明示的に得られる「相手に自分の判断を押し付けたくない」という「気配り」のニュアンスも伝わっているのだが，(14)にはそのようなニュアンスは存在しない。

(15)　A 「あれ，冷蔵庫に何も残ってないじゃない。買い物に行かなくっちゃ」
　　B 「ねえ，買い物に行く {のなら／なら}，ピザも買って来てよ」

(15)で，BはAの前発話（形式文脈）に基づいて「Aがこれから買い物に行く」と考えており，これを確認するため，「のなら」で有標形として自分の発話に導入する。その判断の確認が相手から求められることは，(6)と同じく相手にその判断を変更したり撤回したりする余地を与えることになる。しかし，(15)の後件は相手の利益になるような情報ではなく，逆に相手への負担となる，発話者の依頼である。そのため，相手に丁寧だと認識されない。一般に条件文で，丁寧さと関連付けられるのは，後件が相手への何らかの利益を表すタイプだと考えられる。

更に，(15B)で発話者は「なら」を使うこともできる。しかし，「なら」を使うと，相手の「買い物に行く」ということに関する判断は問題とされず，そのことは直接に発話者から提案されるものとして認識される。ここで，発話者が「のなら」を使うことで，その提案が発話者からである場合に相手にかかるであろう負担から解放される。つまり，そもそも後件で相手への負担となる依頼があるため，前件が発話者からの提案ではなく，相手自身が決めたものであるということを示すことで，その前件が成立した場合にのみ後件が相手への負担となるということが示唆される。

「のなら」は相手の判断を有標の形で相手に確認を求めるという働きを果たすが，発話の場面から相手のことで得られそうな何の情報もない場合（つまりBの発話に対応するような，相手の形式的または状況的な文脈がない場合に），使用されると不自然になる。

(16)　【状況文脈:　Aが発話場面にいても，Aの行動や状況に関して何の情報もない場合，冷蔵庫の空っぽな状況に気づいたBはAに言う】
B「ね，買い物に行く｛なら／?のなら｝，千円をあげるよ」

(16)で観察される通り，後件が相手への利益になるような情報を表しても，「のなら」の使用は不自然である。したがって，「のなら」の場合，後件は相手への利益になるような情報，或いは前件が成立した場合に，有効となるような情報を表しても，「のなら」を使える条件とはならない。また，後件が相手への利益を表す場合に，ポライトネスの機能の点から考えても(13)，(14)，(15)，(16)は前件が後件の成立に関与するものであるため，メタ発話的な条件・帰結関係を表す(6)とは種類が違い，基本条件文の一種であるということは変わらない。

4. まとめ

以上見てきたポライトネスに関わる現象は，ある判断内容をもっとも確定的に述べるために使用される断定的な表現に，その判断の未確定さを表す役を果たす条件辞が付くことで生じる対立に起因するものだと考えられる。（6）の場合に感じられるポライトネスの効果は実際に，「なら」だけに限ったものではないようである。例えば，(6)の「なら」を，(17)で他の条件形式に換えても，(17)は(6)と同じく，基本条件文として分析できないものであり，前件に関する確定的な判断の優先権が相手にあるという点に変わりはない。したがって，「なら」の場合と同じく，消極的ポライトを有する言い方になるといえる。

(17) a. トイレであれば，２階にありますよ。
b. トイレだったら，２階にありますよ。
c. ???トイレだと，２階にありますよ。

(17c)で「だと」の使用は落ち着きが悪いが，これの背景に「と」形式の時間性が，他の形式に比べ，条件性より強いという特質があるのであろう。また，(17a)で「ば」はやや古めかしい言い方かもしれないが，不自然ということはない。

本論は，条件文の類型と特性を整理して述べた上で，基本条件文と分析されないものに「ねじれた条件節」を持つものがあることを指摘し，それが上述のメタ発話的条件と発話内容という「ずれ・ねじれ」を形成していることを論証している。また，その機能が，消極的な丁寧さにあることをあわせて主張したものである。

注 1. 例 2 の d は，文末に「だろう」「はずだ」など，発話者の判断などを表すモダリティ表現を伴うのがより一般的であるが，発話者の強い判断や断言を表す場合に，モダリティ表現がない「春になったなら，桜が咲く」という形でも成立する。

《参考文献》

Brown P. & Levinson S. 1987 [1978 - 1st pub.], *Politeness. Some universals in language usage*, Cambridge : Cambridge University Press, pp. 129-211

加藤重広 2001『日本語学のしくみ』研究社出版 pp. 130-133

井上逸兵 2001「丁寧さ」『入門語用論研究－理論と対応－』小泉保 (編) 研究社出版 pp. 124-139

Leech G.N. 1983, *Principles of pragmatics*, New York : Longman, pp. 104-150

高梨信乃 1995「非節的なナラについて」『複文の研究（上)』くろしお出版 pp. 167-187

トマス，ジェニー (Jenny Thomas) 1998『語用論入門 － 話してと聞き手の相互交渉が生み出す意味』研究社出版 pp. 162-197

定冠詞 the の機能と関連性理論*

今野　昌俊
専修大学大学院文学研究科(mkonnobristol2004@hotmail.com)

<Abstract>
The purpose of this article is to show that a relevance-theoretic approach covers a wide range of usages of the definite article "the", by modifying Uchida (2000a)'s work, introducing the notion "reminding reference". First, the fundamental function of the definite article is defined, and three different usages of it are identified, within the traditional grammatical framework: "exophora", "anaphora", and "cataphora". It is pointed out, then, that there is a case of "the" which none of them can appropriately deal with. We will further see that the problematic case cannot be accounted for even by the relevance-theoretic approach advocated by Uchida (2000a), who postulates six categories for procedural meanings of the definite article: "coreference", "bridging reference", "loose reference", "summing-up reference", "suspended reference", and "ad hoc reference". It is demonstrated that by postulating another category "reminding reference", the relevance theory gives a plausible account to the problem.

【Keywords】: Definite Article "the", Relevance Theory, Procedural Meaning, Reminding Reference

1．はじめに

本論文は、定冠詞 the の指示機能を関連性理論の視点から述べた内田(2000a)を補足することで、より広い範囲を覆うことを目的とする。内田は、定冠詞 the に続く名詞句の同定を関連性の視点から理論的に保証できると示している。しかし、それでは扱えない現象を指摘し、当該現象は関連性理論の別解釈で解決できることを示す。

2．定冠詞 the の役割

2．1．情報共有理論

定冠詞 the の使用に、何らかの話者の認知が関与していることは、長年論じられている（(1)以外には、Hawkins(1978)、安井(1978, 1996a, 1996b)、Halliday(1985/1994²)、Quirk et al.(1985)、池内(1985)、正保(1996)、Lyons(1999)、武田・小原(2001)、石田(2002)、樋口・ゴーマン(2003)、久野・高見(2004)、安藤(2005)、田中・佐藤・阿部(2006)などがある)。

(1) a. いま話そうとしている対象について、話し手が、聞き手は場面や文脈、あるいは聞き手の経験や一般的な知識からすぐにそれとわかるはずだ、と判断したとき、話し手はその対象を定冠詞 the を用いて表す。(加藤 2000b: 139)

b. 名詞に the がつくかどうかは、聞き手が、その名詞の指し示す指示対象が、どれであるかを理解できると話し手が考える場合に用いる。(聞き手指向) (高見 2005)

(1)をはじめとする同様の主張も含めて要約すると、「定冠詞 the は、話し手あるいは書き手が、定冠詞 the のついた名詞によって指し示されるものが何であるかを聞き手あるいは読み手は分かってくれるだろう、と認識しているときに使用される」ということである。加藤(2000b: 140)は、話し手が聞き手はすぐにそれとわかるはずだと判断して the を使用しても、聞き手にはそれがすぐには分からず失敗している例(2)を挙げている。

(2)　話し手: Have you fed *the cat*?
　　聞き手: WHICH cat?

(2)の聞き手は、それがどの猫か、すぐには分からず聞き返している。加藤によると、これは、「聞

き手はすぐにわかるはずだ」という話し手の判断が誤っていたことを表している。たしかに(2)の話し手の判断は失敗に終わるわけだが、話者が聞き手は分かってくれるだろうと思っていたのであれば、定冠詞の使用原則としては問題ない。このような見地からのアプローチを、田中・佐藤・阿部(2006: 119)は、「情報共有理論」と呼んでいる。以降では、まず、情報共有理論に基づいた先行研究の特徴的な主張を見ていく。ここで注記しておくことは、本稿は定冠詞 the の用法または現象を網羅することが目的ではなく、より多くの現象を扱える理論を考察していくことである。

2.2.外界照応、前方照応、後方照応

安井(1996a)では、情報共有理論の範疇として、外界照応、前方照応、後方照応が提示されている。また、加藤(2000b)、石田(2002)でも、Halliday and Hasan (1976)の指示の構造の枠組みを援用し、それらの用法と情報共有理論が述べられている。そこで、ここからは、以上の照応的用法をより体系的に述べた石田(2002)を中心にみていくことにする。

(A)外界照応(exophora)

外界照応とは、加藤(2000a: 736)によれば、「照応形の意味解釈に必要な先行詞が言語的文脈の中にはなく、それを取り巻く場面、あるいは話し手と聞き手が共有している知識や経験の中にあるような指示の形式」であり、「現実の世界にある事物や概念を直接指示する用法であるため、テクストの文と文を意味的につなぐ結束性には寄与しない指示の形式」である。この用法は、Leech(1981: 158)の分類を基に、石田(2002: 117)が、より体系的に(3)としてまとめている。

(3) Ⅰ. 人類全体が共有している一般的知識(general knowledge shared by the whole human race)
Ⅱ. 特定の共同体あるいは国民が共有している一般的知識(general knowledge shared by a particular community or nation)
Ⅲ. ある特定の場面に当てはまる個人的・背景的知識(private background knowledge which is specific to a given situation)

(4) *The sun* is the center of our solar system. (石田 2002: 118)
(5) *The president* gave her approval for the interview. (*ibid.*: 123)
(6) Please pass *the salt*. (*ibid.*: 124)

(4)の The sun が何を指し示すかは、国が違っても人類であれば誰もが同定できるはずであり、故に(3) Ⅰに対応する。(5)は、話し手・聞き手が共にアメリカ人で、president が「大統領」の意味であるとすれば、the president が指し示すものが何かは容易に同定できる。故に、(3) Ⅱに当たる。(6)は、その場の状況から the salt が何を指し示すのかが分かるはずであり、(3)Ⅲに対応する。

(B)前方照応(anaphora)

石田(2002: 131)によると、前方照応は(7)のように３つに下位分類することができる。

(7) Ⅰ. 同一語による前方照応
Ⅱ. 同義語による前方照応
Ⅲ. 連想による前方照応

(8) A boy and a girl were sitting on a bench. *The boy* was smiling but *the girl* looked angry.
(9) Fred was wearing trousers. *The pants* had a big patch on them.
(10) I had to get a taxi from the station. On the way *the driver* told me there was a bus strike.
(石田 2002: 132, 134, 136)

まず、(8)の the boy と the girl は、先行する文の A boy と a girl にそれぞれ当たる。故に、(7) Ⅰの場合に当たる。次に、(9)は、The pants が先行する文の trousers の代わりとして用いられている。石田(2002: 134)では、このことが可能なのは、日本語で「ズボン」を意味する同義語 pants

が使用されることで、trousers と語彙的な結束性が保たれるからであるとされている。故に、これが(7)IIの場合に対応する。最後に(10)は、先行する文の a taxi から、タクシーには運転手はつきものであるという連想が働き、「そのタクシーの運転手」ということで the driver となるわけである。これが(7)IIIのケースである。この現象は通称 bridging とも呼ばれている。

(C)後方照応(cataphora)

後方照応に関しては、上述の2つのような、体系的な分類はなされていないが、いくつかの文献の共通事として、名詞が後続する修飾語句に限定されることによって the がつけられるとされている（石田(2002)の他に、Halliday and Hasan (1976)、加藤(2000b)、武田・小原(2001)）。例えば(11)では、それぞれ、後続する that 節と関係詞節によって fact と city が限定されている。

(11) a. The man concealed *the fact* that he had once been arrested by the police.
b. He visited *the city* where he was born.

(武田・小原 2001: 43)

定冠詞 the の後方照応に関して、見解の相違もある。Halliday and Hasan (1976)や加藤(2000a, 2000b)では、その名詞句内の修飾する要素を指示するのみであると考えている。故に、その文の中でしか後方照応は考えられない。一方で、McCarthy(1991)は、(12)のように、報道文や文学作品の冒頭などでいきなり用いられる the を「これは文章を読み進めていけば分かりますよ」という機能をもつと考え、後方照応とみなしているのである。

(12) *The* trip would hardly have been noteworthy, except for *the* man who made it. In mid-July a powerful American financier flew to Mexico City for a series of talks with high-level government officials, including President Miguel de la Madrid and his finance minister, Gustavo Petricioli. (Newsweek, 21 September 1987: 44) (McCarthy 1991: 42)

3．問題事例(1)

ここで、前節で述べた外界照応、前方照応、後方照応では説明できない事例を提示したい。これは、John が Patty に John が賞を獲ったことを思い出させようとしている場面である。

(13) John, a professor of Camford College, got a prize for his novel in a local publishing company contest. He assumed that everyone on campus knew this and would make some comments on his feat. Now, Patty came up to him. She was one of his colleagues. He thought that she should know his achievement, and that she would congratulate him. Of course, she knew that John got the prize, but at that time she forgot all about it. In a conversation below, John was trying to make her recall in an implicit way that he got the prize.

Patty: What's up?
John: Nothing in particular, but I'm a kind of busy.
Patty: Why?
John: Well, in fact I'm writing an essay on *the prize*.
Patty: Pardon? ...Oh, of course, congratulations on the prize!

ここで問題となるのは、John が発する the prize である。まず、石田の分類を遡行して、(13)を考察してみる。後方照応は、the prize の後には何も後続していない、故に該当しないことになる。次に、先行文脈を見てみると、何か同一のもの、あるいは連想させるようなものは見当たらなく、故にこれも該当しない。最後に外界照応であるが、同じ community に属していることを考慮すると、これが適当であろう。しかし、Patty の最後のターンを見ると、Patty は the prize が何を指しているかすぐには理解できず、考えていることが伺える。従来の研究では、すぐに分かる場合、あるいはすぐには分からず失敗する場合が主に取り上げられ、当該現象のように、考えるという

時間をかけた結果として理解に成功する現象はあまり光が当てられていない[1]。故に、本稿では、この現象を問題点として提起し、それを関連性理論の枠組みから理論的に保証できることを示す。

4．関連性理論の視点

4．1．関連性理論

Sperber and Wilson (1986/1995[2])によって提示された関連性理論は、認知効果と処理労力の観点から定義される。それでは関連性があるとはどういうことなのだろうか。それは情報を入力する人の認知環境に何らかの変化があるということである。ここで以下の定義が説明できる。

(14) Relevance of an input to an individual
  a. Other things being equal, the greater the positive cognitive effects achieved by processing an input, the greater the relevance of the input to the individual at that time.
  b. Other things being equal, the greater the processing effort expended, the lower the relevance of the input to the individual at that time.
(Wilson and Sperber 2004: 609)

まず(14a)は、入力を処理することで達成される認知効果が大きければ大きいほど、その人にとっての関連性は大きくなるということである。次に(14b)は、費やされる処理労力が大きければ大きいほど、その人にとっての関連性は小さなものになるということである。つまり、できるだけ最小限の労力で最大限の効果を！ということが目標というわけである。そして、関連性理論では、伝達原則として(15)が、また、その中の最適の関連性の見込みに関して(16)が規定されている。

(15) Communicative Principle of Relevance
Every ostensive stimulus conveys a presumption of its own optimal relevance.
(Wilson and Sperber 2004: 612)

(16) Presumption of optimal relevance
  a. The ostensive stimulus is relevant enough to be worth the audience's processing effort
  b. It is the most relevant one compatible with communicator's abilities and preferences.
(Wilson and Sperber 2004: 612)

つまり、発話には最適な関連性があるようでなければならず、(16b)から、伝達者が可能な限り努力した場合、その能力の範囲内において、それ以外のより関連性の高い発話はないとされる。

4．2．概念的意味(conceptual meaning)と手続き的意味(procedural meaning)

関連性理論を扱う際の重要な概念として概念的意味と手続き的意味がある。前者は dog, table, get, happy などの具体的なものを表す。後者は Blakemore(1987)によって提案されたもので、聞き手の解釈に何らかの制約を課すものである。つまり、解釈に制約を課すことで余計な労力を減らすのに役立つわけである。そこで手続き的意味の例として so の分析を見てみよう。

(17) a. Tom ate the condemned meat. *So* he fell ill. (Blakemore 1988: 184)
  b. *So* you've spent all your money. (*ibid.*: 189)

(17a)は先行する発話の結果として So に後続する発話を解釈するように制約を課している。つまり、Tom は廃棄処分となった肉を食べた結果として、病気になったということである。(17b)は、荷物を山ほど抱えて帰宅した聞き手に発せられた言葉である。(17a)とは違い、そこには先行発話が存在しなく、その状況を見て想定したことから導かれた結果が(17b)として発せられたのである。

4．3．内田(2000a)の定義と6つの用法

内田は、定冠詞 the は手続き的情報を伝える機能を持つと考え、(18)のように規定した。

(18) 定冠詞 the は続く名詞句を同定するために聞き手が選択する文脈を限定し、よって、処理労力を減ずることにより関連性を高めるのに貢献する。(内田 2000a: 117)

そして、この規定に基づけば、指示表現一般の同定を理論的に保証できると述べ、用法を6つに分類し、例示している。ここで注意しておきたいことは、この分類は定冠詞のみではなく、定名詞句全般を扱ったものであるため、本稿の対象である定冠詞以外を扱ったものに関しては、その用法名を述べる程度にする。

(19) (a) coreference: I saw a professor in the park last night. *The* professor was drunk.
(b) bridging reference: I went to a French restaurant. *The* waiter was very sexy.
(c) loose reference
(d) summing-up reference: the story, the conclusion, the fact, the opinion, the excuse, etc.
(e) suspended reference:
anaphora, cataphora など文法的保証はなく、読み手が一時的に指示関係を仮定し、物語を読み進むにつれ、それが確認されたり、修正されたりする指示関係。例えば、物語冒頭の定名詞句、代名詞など。
(f) ad hoc reference:
語の意味のレベルで厳密な対応関係のない場合。ときに、定冠詞を伴い、通常の状況では連語しない「名詞＋名詞」結合が見られる。the turtle boy, 'The Umbrella Man'など。

まず(19a) coreference と(19b) bridging reference[2]であるが、これは石田の前方照応である(7) I．同一語による前方照応とIII．連想による前方照応に各々対応するものであり、同様に(13)の現象には該当しない。(19c) loose reference は、本稿の対象である定冠詞 the を扱わないので省略する。

それでは、ここからは(19d)～(19f)を概観する。(19d) summing-up reference は、前段で述べられている事象を一つの名詞を用いてまとめる機能であり、その例は上述の(19d)の通りである。(19e) suspended reference は anaphora や cataphora といった文法的保証はなく、読み手が一時的に指示関係を仮定し、物語を読み進むにつれ、それが確認されたり、修正されたりする指示関係である（詳しくは内田(1996, 2003)、Uchida(1998)を参照)。物語冒頭の定名詞句、代名詞などがその例であり、その点で、この現象は、McCarthy(1991)の cataphoric reference とも共通するところがある。しかし、それとは違う点は、遡及的に認知効果を高めることが出来るといった、cataphoric reference の説明にはない、より深い洞察が関連性の視点からなされていることである。さらに、一時的に不安にさせるといった、心理面からの説明は、以降で述べる ad hoc reference や reminding reference とも相通ずるという妥当性がある。次に、(19f) ad hoc reference は、語の意味のレベルで厳密な対応関係のない、その場限りの指示である[3]。例えば、短編'The Umbrella Man'は、それだけでは理解不可能であるが、その物語を読んだ人ならば、それが何を意味しているか圧縮して込められている情報を同定できるはずである。内田(2000a)によると、この例のように、タイトルに用いられている場合は、接する者を一時的に不安定な状態にさせ、そのアドホックな関係を確認すべく読み始めるきっかけにさせるという。

ここで、(13)の現象とこの(19d)～(19f)の用法を照らし合わせてみることにする。まず、(13)からは、何も要約しているような文脈は見つからないので、(19d) summing-up reference は適当ではない。(19e) suspended reference は指し示すものが相手にはすぐには分からず、不安にさせるという点では同じであるが、suspended reference は読み進めていくなどして後に分かるのに対し、(13)の現象は読み進めるなどといった過程による更なる情報の入力はなく、その場で立ち止まって考えなければならない。故に、これも適当ではない。最後に(19f) ad hoc reference であるが、まず、(13)の現象は上記したような「名詞＋名詞」結合とは違う。しかし、その場限りの情報の圧縮という点、不安定な状態にさせるという点では、一見適当であるように思えるかもしれない。だが ad hoc reference とは、語の意味のレベルで厳密な対応関係のない場合であり、つまり、語の意味そのものに若干のその場限りの変化が見られるものである(詳しくは Carston(2002))。(13)の現象は、意味そのものに変化はない。故に、これも不適当である。

4．4．reminding reference

それでは、(13)の現象は一体どのようなものなのだろうか。もう一度、先程提起したことを確認する。定冠詞 the は、定冠詞とそれに続く名詞句が何を指し示すかを聞き手はすぐに分かってくれるだろう、と話者が判断したときに使用される、という情報共有理論のもとでこれまで研究がなされてきた。しかし、本現象では、それがすぐには分からず、同定するまで、つまり分かるまで少し時間がかかっている。この点が従来の研究ではあまり取り上げられなかった点である。

定冠詞 the と続く名詞句は、聞き手はそれが何を指し示すのかを分かってくれるだろうと話し手が考える場合に用いられる。故に、内田(18)でもあるように、聞き手は文脈を制限され、関連性の高い文脈を選択するようになるのである。それだけにもし聞き手が定冠詞 the と続く名詞句をすぐに同定できなければ、聞き手はどのような状態になるだろうか。それが何を指し示しているのかを急いで探そうとするだろう。なぜなら、本来ならばすぐに同定できるだろうとの前提の下で定冠詞が使用されているにもかかわらず、この聞き手はすぐには分からなかったからである。つまり、定冠詞 the には話し手と聞き手がそれが指し示す対象を共有できるという前提があるために、聞き手に対してそれを同定するよう注意を促すという作用もあるのである。そのため、聞き手は自分が持っている、あらゆる想定を駆使して、一生懸命に探すのである。

抽象的な議論はこの程度に留め、再び(13)に戻り、当てはめて考えてみたい。John は、the prize によって何が指し示されるかを Patty は分かってはくれないだろうと認識しながらも、Patty は記憶をたどることで Patty 自らがその内容を思い出すことを期待し、the を使っているのである、あるいは the を使うという現象なのである。これは the＋名詞句には聞き手は分かってくれるだろうという前提があるからこそ、それを逆手に取ることによって生み出せる効果である。逆に the＋名詞句でなければそのような注意を促す効果は期待できなかったであろう。したがって、このことから(20)のような手続き的意味が定義できる。

(20) 定冠詞 the は、それ以外の表現では饒舌になる情報を持つという関連性の伝達に貢献する。

また、(21)にもあるように、関連性の対象となるのは、必ずしも発話だけではない。自ら記憶をたどることで、その眠っていた記憶を呼び覚まし、認知環境に変化をもたらすことも範疇である。

(21) relevance is a potential property not only of utterances and other observable phenomena, but of thoughts, memories, and conclusions of inferences. (Wilson and Sperber 2004: 608)

そしてこのような、たとえ相手の意識にはなくても定冠詞を使うことで、相手を一時的に不安にさせ、それを同定するよう注意を促す、この現象のことを便宜上、"reminding reference"と呼ぶことにする。これは相手の記憶を呼び覚ますという機能を持つ指示のことである[4]。ただし、この指示機能は、記憶を呼び覚ますだけでなく、相手を不安にさせたり、驚かせたりする効果が伴うことがあることも付け加えたい。

(22) reminding reference: たとえ相手の意識にはなくてもそれを同定するよう注意を促すことによって、相手の記憶を呼び覚ましたり、気づかせるという機能を持つ指示。

以上のことから、この指示は、たとえすぐには同定できず、時間がかかっても話し手の意図した認知効果を達成させるためであれば問題ないのである。最後にもう一例見てみることにする。

5．問題事例(2)

これはレストランの経営者ブラショフが、食材を仕入れる際に、注文した米が届いていないのに気づき、配達員に質問する場面である。

(23) Brashov: Where is *the rice*?
Delivery Man: What rice?
Brashov: The rice that is supposed to be here.

Delivery Man: Let me take a look at that. Well, what do you know? It does say rice.
（NHK テレビ英会話『クロスロード・カフェ 3』2002 年 4 月第 1 週放送）（鳥飼 2002: 89）

Brashov は rice を定冠詞で、配達員は無冠詞で言っていて、認識の差異が分かる。最初のやり取りは、話者の判断は失敗しているが、話者が聞き手は分かるだろうと思ったのであれば問題ない、というのが従来の情報共有理論である。しかし、ここはそうではない。Brashov は自分で注文したはずの米が届いていないことに対してとがめているのである。つまり、まさしく米が届いていないという事実から、配達員が米のことは意識にない、すなわち the rice は特定できないと認識しているにもかかわらず、敢えてわざと the を使っている。これは、恐らく相手は the rice の内容は分からないであろうけれども、敢えて the を使うことで、配達員に注意を促すか、あるいは彼の不注意に対する若干の皮肉とも解釈できる使い方をしている。そうすることで、配達員に気づかせるという効果を狙っているのである。つまり、Brashov の最初の発話である"Where is the rice?"は、「君が気づくべき、君が忘れている、そしてそのため私が憤っているあの」米という情報を the に封じ込めているのである。そして、そのような情報を the に封じ込めることができるという点で、それ以外の表現では饒舌になる情報を持つという関連性を伝達しているのである。つまり(20)が適用されるわけである。（これはもちろん、内田の定義(18)を補足するものであり、相反するものでもなければ、定冠詞の機能を網羅するものでもない[5]。）そして、the rice が何を指し示すのかをすぐには分かってくれないだろうと知りながらも、注意を促すために使う、そして気づかせるという点で、この例も reminding reference の範疇である。つまり、時間をかけて気づかせるという現象は、この reminding reference の射程になりそうだが、現時点ではまだ大それたことを言うだけの確信がないため、この reminding reference がその候補になるかもしれないという程度に留めておきたい。そして、この指示は(20)の定義とも密接な関係にあることも述べる程度に留めておきたい。

6．結語

本稿は、内田(2000a)を補足することで、より広範囲に、とりわけ reminding reference の用法も含めて、定冠詞の使用を捉えられることを確認した。また、関連性理論は従来の情報共有理論の保証にも役立つだろう。その点に関しては、稿を改めたい。

注

*発表の際、また、発表後の懇親会の際、児玉徳美先生、西田光一先生をはじめ、多くの方から貴重なご指摘を頂いた。ここに記して感謝したい。本稿は、それらを基に、加筆・修正がなされている。また、(13)に関しては、専修大学の Jeffrey C. Fryckman 先生に協力を頂いた。併せて感謝したい。

1. 内田(2003)では、定名詞句、代名詞の同定におけるタイムスパンが述べられている。
2. bridging を関連性理論の視点から詳しく扱ったものとして Matsui(2000)がある。
3. アドホック概念に関しては、詳しくは Carston(2002)を参照。
4. 久野・高見(2004)では、there 構文の意味上の主語における the のついた定名詞句には、相手が忘れてれているような文脈で、相手に思い出させる機能があると述べられている。
5. 従来の枠組みである後方照応は、the＋名詞だけでは表せず、余分に付け加えているという点で饒舌であるように思えるかもしれないが、これは遡及的に効果を高めるものの一種で、サスペンス現象のタイムスパンの長さの違いとも関わってくる。この点に関しては、稿を改めたい。

参考文献

安藤 貞雄. 2005. 『現代英文法講義』 東京: 開拓社.
Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance.* Oxford: Blackwell.
Blakemore, D. 1988. "'So' as a Constraint on Relevance." In R. Kempson ed. *Mental Representations: The Interface between Language and Reality*, 183-195. Cambridge: Cambridge University Press.
Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics.* Oxford: Blackwell.
Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication.* Oxford:

Blackwell.
Clark, H. H. 1977. "Bridging." In P. Wason and P. Johnson-Laird eds. *Thinking: Reading in Cognitive Science*, 411-420. Cambridge: Cambridge University Press.
Halliday, M. A. K. 1985/1994². *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold.
Halliday, M. A. K. and Hasan, R. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
Hawkins, J. 1978. *Definiteness and Indefiniteness: A Study in Reference and Grammaticality Prediction*. London: Croom Helm.
樋口 昌幸・ゴーマン, マイケル. 2003. 『[例解] 現代英語冠詞事典』 東京: 大修館書店.
池内 正幸. 1985. 『名詞句の限定表現』 東京: 大修館書店.
石田 秀雄. 2002. 『わかりやすい英語冠詞講義』 東京: 大修館書店.
加藤 雅啓. 2000a. 「談話における結束性とその指導(1)—同一物指示—」、『上越教育大学研究紀要』、19: 2、733-746.
加藤 雅啓. 2000b. 「談話における結束性とその指導 (2) —冠詞、語い的結束性—」、『上越教育大学研究紀要』、20: 1、137-150.
久野 暲・高見 健一. 2004. 『謎解きの英文法—冠詞と名詞—』 東京: くろしお出版.
Leech, G. 1981. *Semantics: The Study of Meaning (2nd ed.)*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin.
Lyons, C. 1999. *Definiteness*. Cambridge: Cambridge University Press.
Matsui, T. 2000. *Bridging and Relevance*. Amsterdam: John Benjamins.
McCarthy, M. 1991. *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
織田 稔. 2002. 『英語冠詞の世界—英語の「もの」の見方と示し方—』 東京: 研究社.
正保 富三. 1996. 『英語の冠詞がわかる本』 東京: 研究社.
Sperber, D. and Wilson, D. 1986/1995². *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and Svartvik, J. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
高見 健一. 2005. 「a と the の使い方—定冠詞 the はどんなときに使う?—」 朝日カルチャーセンター新宿校「a と the の使い方」第 2 回講義資料.
武田 修一・小原 純子. 2001. 『英文法のからくり—英語表現の意味を「推理」する—』 東京: 丸善.
田中 茂範・佐藤 芳明・阿部 一. 2006. 『英語感覚が身につく実践的指導—コアとチャンクの活用法—』 東京: 大修館書店.
鳥飼 玖美子. 2002. 『TOEFL·TOEIC と日本人の英語力—資格主義から実力主義へ—』 東京: 講談社.
内田 聖二. 1996. 「強い推意、弱い推意と「ひねり」の構造」、奈良女子大学文学部英語・英米文学科尾崎寄春・大沼雅彦両教授退官記念論文集刊行委員会(編) 『尾崎寄春・大沼雅彦両教授退官記念論文集』、175-188、京都: あぽろん社.
Uchida, S. 1998. "Text and Relevance." In R. Carston and S. Uchida eds. *Relevance Theory: Applications and Implications*, 161-178. Amsterdam: John Benjamins.
内田 聖二. 2000a. 「定冠詞の機能—関連性理論の視点から—」、小泉 保 (編) 『言語研究における機能主義—誌上討論会—』、105-124、東京: くろしお出版.
内田 聖二. 2000b. 「関連性理論研究集会討論記録」、『学習院大学言語共同研究所紀要』、第 24 号、157-208.
内田 聖二. 2003. 「同定のプロセスとテクスト」、『英語青年』、52: 4(7 月号)、7-9.
Widdowson, H. G. 1990. *Aspects of Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
Wilson, D. 1992. "Reference and Relevance." *UCL Working Papers in Linguistics* 4, 167-191.
Wilson, D. and Matsui, T. 1998. "Recent Approaches to Bridging: Truth, Coherence, and Relevance." *UCL Working Papers in Linguistics* 10, 173-200.
Wilson, D. and Sperber, D. 2004. "Relevance Theory." In L. R. Horn and G. Ward eds. *The Handbook of Pragmatics*, 607-632. Oxford: Blackwell.
安井 稔. 1978. 『新しい聞き手の文法』 東京: 大修館書店.
安井 稔 (編). 1996a. 『コンサイス英文法辞典』 東京: 三省堂.
安井 稔. 1996b. 『英文法総覧—改訂版—』 東京: 開拓社.

日本語比較文の 2 重基準性について
(On the dual standard of the Japanese comparatives)

澤田　治 (Osamu SAWADA)
シカゴ大学大学院
sawadao@uchicago.edu

＜Abstract＞
The *yori* construction and the *kurabe-tara* construction can be used to convey the same comparison but they have different pragmatic properties. The *kurabe-tara* construction, but not the *yori* construction, implies that the target and the standard of comparison are construed as low on a scale. This paper investigates the pragmatic aspects of *kurabe-tara* and argues for the following three points. (i) Both conventional and conversational implicatures are involved in the *kurabe-tara* construction. (ii) Unlike the *yori* construction, the *kurabe-tara* construction has a dual standard and the truth value of the main clause is evaluated differently by each standard. (iii) If the contrastive *wa* is attached to the marker of standard *yori*, i.e. *yori-wa*, the sentence also posits a dual standard and behaves like the *kurabe-tara* construction.

【キーワード】：1. 慣習的推意、2. 会話的推意、3. 二重基準性、4. メタ言語性、5. コンテクスト依存性

1. はじめに

(1)における比較構文と(2)の「比べたら」構文は、２つの比較対象に関して同一の序列化を行っている。すなわち、背の高さというスケール上で、太郎は次郎よりも上位に位置している。

(1) 太郎は次郎より背が高い。　　(太郎＞次郎)
(2) 次郎に比べたら太郎は背が高い。　　(太郎＞次郎)

しかしながら、(1)の比較構文と異なり、(2)の「比べたら」構文からは、(3a)と(3b)の推意が生じる。

(3) a. 次郎は背が低い。　　(比較節から生じる推意)
b. 太郎は背が高いとは言えない。(どちらとも言えない、ボーダーラインの可能性もある)
(主節から生じる推意)

本稿の目的は、「比べたら」構文の有する語用論的特性を明らかにすることである。具体的には、(i)「比べたら」構文における二つの推意はどのようなメカニズムにより生じるのか、(ii)「比べたら」構文と「より」構文は「比較の基準」に関してどう異なるのかといった点を問題とし、以下の 3 点を主張する。

(4) (i)「比べたら」構文の比較節からの推意は慣習的推意(conventional implicature)であり、主節からの推意は会話的推意(conversational implicature)である。
(ii)「比べたら」構文の主節からの推意は内容条件文から生み出されれる誘導推論に似ているが、「比べたら」構文は常に名詞に焦点を当て、それ以外のもの(=非明示的比較基準)を想起させており、焦点(focus)構文の一種であると考えられる。

(iii)「より」構文と異なり、「比べたら」構文は 2 重基準性を内在させた、比較文であり、メタ言語性を持った比較文である。対比の「は」が「より」に付加した「よりは」構文も、「比べたら」構文と同様の 2 重基準性を持つようになる。

1. 慣習的推意と会話的推意の共存

1.1. 比較節から生じる推意

「比べたら」構文の比較節から生じる推意は「比較の基準がスケール上で低く捉えられている」という推意である。たとえば、上の(2)の「次郎」を「バスケット選手」に変えると不自然になってしまう。

(5) ??バスケット選手に比べたら太郎は背が高い。(cf. 太郎はバスケット選手より背が高い。)

この推意は取り消し不可能であるため「慣習的推意」であると考えられる。

(6) 次郎に比べたら太郎は背が高い。#実は次郎は 1 メートル 80 センチある。

1.2. 主節から生じる推意

「比べたら」構文の主節から生じる推意は「主節の命題は真であるとは言えない」という推意である。この推意は「会話的推意」であるとみなすことができる。なぜなら、主節に関する推意は取り消し可能であるからである。

(7) 次郎に比べたら太郎は背が高い。いや、(普通に考えても)、太郎は背が高い。

主節から生じるこの推意は「スケール推意」であると考えられる。以下のスケールから、Grice (1989)の量の公理の前半部「必要とされる最大限の情報を与えよ」により「(通常の基準では) 太郎は背が高くない」という推意が生まれる。

(8) informativeness

↑
-[通常の基準]に比べたら太郎は背が高い。 ←否定
-[次郎]$_F$に比べたら太郎は背が高い。

1.3. 推意の依存性

重要なことは、主節から生じるスケール推意が生じるためには、「比較の基準 (=次郎) がスケール上で低く捉えられている」という、比較節に関する推意が前提となっていなければならないということである。すなわち、「会話的推意」(主節に関する推意) は慣習的推意 (比較節に関する推意) に依存していると考えられる。(9)は不自然な文である。

(9) ?? バスケット選手に比べたら、太郎は背が高い。
#→太郎は背が高いとは言えない。

(9)からは、「太郎は背が高いとは言えない」という推意が生じないが、それは、比較節から生じる「バスケットの選手は背が低い」という推意自体が、不自然であるからである。(9)から想定可能なスケールは(10)であるが、このスケールからは「太郎は背が低い」というスケール推意は生まれない。

(10) informativeness

↑
-[バスケット選手]$_F$に比べたら太郎は背が高い。
-[通常の基準]に比べたら太郎は背が高い。 ←否定不可能

1.4. ボーダーラインケース

コンテクストによっては、「主節の命題が真か偽か分からない」という弱い推意が現れるケースもある。

(11) (コンテクスト:花子には犯人が背が高いかどうかよく分からない)
花子: 太郎に比べたら犯人は背が高い。
→(ⅰ)犯人は背が高くない。
→(ⅱ)犯人は背が高くないかもしれない。　(=Epistemic uncertainty)

このコンテクストでは、話し手は(11ⅰ)というより(11ⅱ)の推意を意図していると思われる。(ⅱ)の推意は(ⅰ)の推意よりも（断定していない分だけ）認識的に弱い。[1]

2. 誘導推論と主節から生じる推意の共通点と相違点

2.1. R/I Principle と Q-Principle

「比べたら」構文の主節から生じる否定的推意は、内容条件文(content conditionals)が持つ"if p then q→if not p then not q"という誘導推論（invited inference）(Geis and Zwicky 1971)とパラレルな面がある。

(12) a. If you mow the lawn, I'll give you $5.
b.→If you don't mow the lawn, I won't give you $5. (誘導推論)
c.→If and only if you mow the lawn, I'll give you $5.

Horn (1989, 2000) および Atlas and Levinson(1981)は、誘導推論は R-Principle(もしくは I-Principle)に基づいていると主張する。この原理は以下に見られるように、「必要以上のことを言ってはならない」という原理である。

(13) R/I Principle: The speaker should limit his/her contributions to what is necessary.

この原理により、"if p, q"と言うことから "(if and) only if p, q"という推意が生み出される。

(14) - (If and) only if p, q
↑- If p, q

それに対して、van der Auwera (1997)は 誘導推論は Maxim of Quantity に基づいていると主張する。

(15) Maxim of Quantity (前半部): Make your contribution as informative as is required for the current purposes of the exchange. (Grice 1989: 26)

van der Auwera (1997a, b)は、以下の追加的(additive)スケールに Q principle が適用された結果、誘導推論が生じると主張している。

(16) - If p, q and if r, q and if s, q
- If p, q and if r, q
↑- If p, q

すなわち、"if p, q"と主張することにより、スケール上でより強い（複数からなる）命題が否定される。

2.2. 誘導推論と「比べたら」構文主節に関する推意との違い

「比べたら」構文の主節に関する推意は、Q 推意であると論じた。その点で van der Auwera(1997a, b)の説明法に近い。しかしながら、以下の図からも分かるように、「比べたら」構文が想定するスケールは「追加的スケール」ではなく、「代替的スケール」である。その点で Horn (1989)や Atlas and Levinson(1981)と同種のスケールである。

(17)

内容条件文の誘導推論(R based, substitutive scale)	内容条件文の誘導推論(Q based, additive scale)	「比べたら」構文の主節からの生じる推意 (Q-based, substitutive scale)
↑ ・(If and) only if p, q ・If p, q Horn (1989), Atlas and Levinson (1981)	… ↑ ・If p, q and if r, q and if s, q ・If p, q and if r, q ・If p, q van der Auwera (1997a, b)	↑ -[x]に比べたら q は A -[p]$_F$に比べたら q は A (x= コンテクスト的基準)

3. フォーカス性と前提

内容条件文と異なり、「p に比べたら q は A」構文は、常に名詞 p に焦点を当て、それ以外のもの x(=非明示的比較基準)を想起させており、焦点(focus)構文 (Rooth 1985, 1992)の一種であると考えられる。「それ以外のもの」は通常の基準に対応する。(19)は(18)の前提を表している。

(18) [トム]$_F$に比べたら、ジムは背が高い。
(19) (i) $\exists x[C(x) \wedge x \neq$ トム $\wedge \neg$(ジムは x に比べたら背が高い)]
(ii) x=contextually determined ordinary standard

(19)では、(i)トム以外の要素 x が存在し、ジムは x に比べたら背が高いというわけではない、(ii) x は通常コンテクストによって決められた基準であるということが表されている。

4. メタ言語性

「より」構文と異なり、「比べたら」構文は、**主節における命題の真偽性**（メタ言語性）を問題としている。それは以下の事実から明らかである。

第 1 に、「比べたら」構文では、2 つの比較対象間の差を具体的に数値で表すことができない。たとえば、(20b)では、数量詞「3 センチ」が挿入されているため不適格となる。

(20) a. 太郎は次郎より 3 センチ背が高い。
b. ??次郎に比べたら太郎は 3 センチ背が高い。

第 2 に、命題の真偽性をあいまいな形で表す副詞「方だ」は「より」構文にはつくことができないが、「比べたら」構文にはつくことができる。

(21) a. ??太郎は次郎より背が高いほうだ。
b. 次郎に比べたら太郎は背が高いほうだ。

第 3 に、「より」構文と異なり、「比べたら」構文の主節には形容詞などの程度述語が現れなくても適格である。

(22) a.*太郎は次郎より全然お金を使っていない。
　　b. 次郎に比べたら太郎は全然お金を使っていない。
　　→次郎はかなりの額のお金を使った。　　(比較節から生じる推意)
　　→太郎はいくらかの額のお金を使った。　　(主節から生じる推意)

重要なことは、否定の強調を表す「全然～ない」が使われているにも関わらず、(22b)からは「太郎は実際はある程度お金を使っている」という推意が生じるということである。(22b)は、次郎が使った金額があまりに多額であるため、太郎の使った額があたかもゼロであるかに見えるということを述べている。すなわち、ここでは、比較対象間の「差」が、量に関する捉え方を（有から無へ）と変換しており、話し手の「主観性」、「捉えかた」が反映している。

第 4 に、「比べたら」構文と「より」構文は、先行発話の情報構造に関して異なる。

(23) A: 太郎は背が高いですか？　　(極性疑問)
　　B: 次郎に比べたら、(太郎は背が高いです。)
　　B': ?? 太郎は次郎より背が高いです。
(24) A: 太郎と次郎ではどちらが背が高いですか？　　(wh 疑問)
　　B: 太郎の方が次郎より背が高いです。
　　B': ?? 次郎に比べたら太郎は背が高いです。
　　cf. (??太郎は次郎より背が高いです。)

「比べたら構文」の先行発話として、(23A)のような極性疑問文は適切であるが、(24A)のような wh 疑問文は不適切である。逆に、「より」構文の先行発話としては、wh 疑問文は適切であるが、極性疑問文は不適切である。ここで注意すべきは、(23B)の「太郎は背が高いです」は削除可能であるが、(23B')の「太郎は背が高いです」は削除不可能であるという点である。

5. 対比の「は」:「よりは」

次の例に示されるように、対比の「は」が「より」の後に付加されれば、「比べたら」構文と同様の推意が生じる。[2]

(25) a. 太郎は次郎よりは背が高い。
　　b. 次郎は次郎より背が高い。

対比の「は」を含む文「NP は P」は条件文「NP（である）ならば P」と近い意味・機能を有している(三上 1972: 207)。

以下の(26)-(30)のテストからわかるように、対比の「は」が「より」に付加されると「比べたら」構文と同様に主節の真偽性を問題とするようになる。

(26) (差異比較)

?? 太郎は次郎よりは3センチ背が高い。

(27) (「方だ」の挿入)

太郎は次郎よりは背が高い方だ。

(28) (非程度述語の生起可能性)

太郎は次郎よりは全然お金を使っていない。

(29) (先行文＝極性疑問文)

A: 太郎は背が高いですか。

B: (太郎は)次郎よりは(背が)高いです。

(30) (先行文＝wh 疑問文)

A: 太郎と次郎ではどちらが背が高いですか。

B: ??太郎は次郎よりは(背が)高いです。

6．比較の2重基準性

以上の議論に基づくならば、「比べたら」構文の持つ推意とメタ言語性は「比較の2重基準性」という概念を用いて統一的に説明することが可能である。

(31) 比較の2重基準性の原理： 「比べたら」構文においては、話し手は、通常の基準に基づくと真とは断言できない主節の命題（[F]または[?]）を、もうひとつの極端に低い比較の基準を導入することによって真なる命題([T])へと変換する。

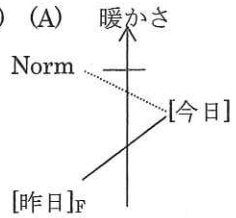
この原理を(31)に適用してみよう。

(32) 昨日に比べたら今日は暖かい。

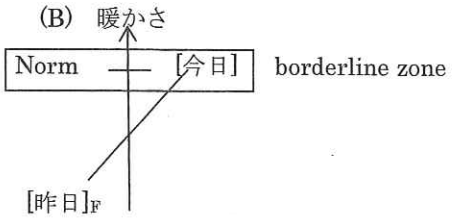
(32)では、「今日は暖かい」という命題は真であるとは言い切れない（[F]、もしくは[?]）が、昨日という（特別に寒い）日と比べたら真ということが表されている。以下の図に示されているように、「今日」の暖かさは、通常の基準よりも下にあるか、ボーダーラインゾーンにあるかのどち

らかである。

(33) (A)



(B)



7. 結論

本稿では、日本語の「比べたら」構文の有する語用論的特性を「より」構文と比較しながら「比較文の 2 重基準性」という概念を導入することによって明らかにした。最後に、本稿の分析を英語の場合にあてはめてみよう。

(34) a. Jim is taller than Tom.
　　b. Compared to Tom, Jim is tall.

英語の compared to 構文と形態的比較構文は語用論に異なる (Sawada 2005, 2007a; Kennedy 2005)。(34a)と異なり、(34b)からは(35a)と(35b)の 2 種類の推意が現れる。

(35) a. Tom is not tall.
　　b. Jim is not definitely tall. (possibly borderline)

推意のレベルにおいて、compared to 構文は日本語の「比べたら」構文に対応し、英語の形態的比較構文 (-er/more)は日本語の「より」、「比べて」構文に対応する。ただし、英語の場合、比較形態素が形容詞に付加されているか、原級のままの形を取っているかで、推意の有無、2 重基準性の有無がはっきりと区別されているという点に注意されたい。[3] それに対して、日本語には、-er/more と言った比較のマーカーがないため、形容詞の形によって、2 つの比較モードを区別することができない。今後は、通言語的な観点から 2 重基準性を有する比較文の意味論、語用論について考察していきたい。

注

1. Hirschberg (1985: 75ff) は「スケール推意」(scalar implicature)を強い認識的関与(commitment)と弱い認識的関与の 2 つに区別することが望ましいと述べている。Hirschberg によれば、(ⅰ)には 2 種類の推意がある。

(ⅰ) Some came.
　　→S believes that not all came.

→S does not know whether all came.

2. 対比の「は」はトピックの「は」とは異なり、「は」でマークされた要素以外の要素が想起され、それが否定される（詳しくは、Kuno 1973; 寺村 1991; 野田 1996; Nakanishi 2001; Hara 2004; Oshima in press, Sawada 2007b 等を参照されたい）。
3. Sapir(1944: 97)およびKennedy (2005)によれば、英語の比較には2つのモードが存在する。ひとつは、(34a) のような比較形態素 er/more を用いた「明示的比較」(explicit comparison)であり、もう一つは(34b)のような形容詞の原級を用いた「非明示的比較」(implicit comparison)である。後者における文全体の意味は形容詞の原級が持つコンテクスト基準(contextually determined standard)に依存している(Kennedy 2005)。

参照文献

Atlas, J. D. and S. C. Levinson. 1981. "It-cleft, Informativeness and Logical Form." In Peter Cole (ed.), *Radical Pragmatics*,1-61. New York: Academic Press.

Geis, M. L. and A. M. Zwicky. 1971. "On Invited Inferences." *Linguistic Inquiry* 4: 561-566.

Grice, H. P. 1975. "Logic and Conversation." In Cole, Peter. and Jerry Morgan (eds.), *Syntax and Semantics, 3 Speech Acts*, 41-58. New York: Academic Press.

Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way of Words.* Cambridge, Mass: Harvard University Press.

Hara, Y. 2004. "Scope inversion in Japanese: contrastive topic requires scalar implicatures." *Japanese/Korean Linguistics* 13.

Hirschberg, J. B. 1985. *A Theory of Scalar Implicature.* PhD dissertation, University of Pennsylvania.

Horn, L. R. 1984. "Toward a New Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-Based and R-based implicature." In Schiffrin, D (ed.), *Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic Applications.* Washington: Georgetown University Press.

Horn, L. R. 1989. *A Natural History of Negation.* Chicago: University of Chicago Press.

Horn, L. R. 2000. "From *if* to *iff*: Conditional Perfection as Pragmatic Strengthening." *Journal of Pragmatics* 32: 289-326.

Kennedy, C. 2005. "Parameters of Comparison." Paper for the talk at Cornell University.

Kuno, S. 1973b. *The structure of Japanese language.* Cambridge, MA: MIT Press.

三上章. 1972. 『現代語法序説—シンタクスの試み』東京：くろしお出版.

Nakanishi, K. 2001. "Prosody and information structure in Japanese: a case study of topic marker *wa*." In N. Akatsuka and S. Strauss (eds.), *Japanese/Korean linguistics* 10, 434-447. Stanford: CSLI.

野田尚史. 1996.『「は」と「が」』東京:くろしお出版.

大島資生. 1995. 「「は」と連体修飾節構造」、(益岡隆志（他）(編) 『日本語の主題と取り立て』、pp-109-138. 東京：くろしお出版.

Oshima, D. In press. "Morphological vs. phonological contrastive topic marking." *Papers from the 41st meeting of the Chicago Linguistic Society.*

Rooth, M. 1985. *Association with focus.* Doctoral Dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Rooth, M. 1992. "A Theory of Focus Interpretation." *Natural Language Semantics* 1: 75-116.

Sapir, E. 1944. "Grading: A Study in Semantics." *Philosophy of Science* 11: 93-116.

Sawada, O. 2007 a. "Pragmatic aspects of implicit comparison." Paper presented at the 81st annual meeting of the Linguistic Society of America. Anaheim, CA.

Sawada, O. 2007 b. "The Japanese Contrastive wa: A mirror image of Even." Paper presented at the 33rd Annual conference of the Berkeley Linguistics Society.

Sawada, O. 2005. "The Possible Semantic Diversity of the Comparative Constructions in English and Japanese: A Construction-based Approach." Paper presented at the 9th International Cognitive Linguistics Conference. July 19th, Yonsei University, Korea.

寺村秀夫. 1991. 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』東京：くろしお出版.

Van der Auwera, J. 1997a. "Conditional Perfection." In Athanasiadou Angeliki and René Dirven (eds.), *On Conditionals Again*, 169-190. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Van der Auwera, J. 1997b. "Pragmatics in the Last Quarter Century: The Case of Conditional Perfection." *Journal of Pragmatics* 27: 261-274.

フランス語 le 定名詞句の照応－非同一性照応からのアプローチ－

出口優木 (yukideguchi@hotmail.com)
京都大学大学院博士課程

<Abstract>
This article investigates *Paradoxe de la reprise immédiate*, an anaphoric phenomenon of french definite noun phrases. When I explaine this phenomenon, I point out that the concept of "Comparison" insisted on in early research Corblin(1983) is only one special example, and give importance of "Shared Knowledge (to participant of *discours*) " as explanation for it. At the position of *reprise immédiate*, the participates of *discours* should understand that anahpora, excluding information obtained by the progress of the conversation, becouse there is no progress of time in such a situation.

【キーワード】: Anaphora, Shared Knowledge, Frame, Discours

1．「直後の受け直しのパラドックス」(Paradoxe de la reprise immédiate)という問題

1．1　先行研究、Corblin(1983)の対比説

(1)　*Une femme* entra dans la pièce. J'avais vu **cette femme** chez un ami.
(2)　*Une femme* entra dans la pièce.* J'avais vu **la femme** chez un ami.
(3)　Tu verras *un garçon* et *une fille*. Tu dois donner une poupée à **la fille** et une voiture **au garçon**.

例1のように、直後の受け直しの位置では ce による照応が行われ、le による照応はできない。しかし、例2のように、先行詞が等位接続をともなっている場合には、le による照応が義務的となる。この現象を、Corblin(1983)は「直後の受け直しのパラドックス」(即時反復のパラドックス)と名づけた[1]。

(4)　Il y a *un dictionnaire* sur la table. ***Le dictionnaire*** est ouvert.
(5)　Il y a *un dictionnaire* et un roman sur la table. **Le dictionnaire** est ouvert.
(6)　Il y a *un dictionnaire* sur la table. La pièce est sombre. **Le dictionnaire** est ouvert.

直後の受け直しは、例3や例5のように対比関係を持つ場合に顕著に観察されるが、例6のように、等位構造を持たなくとも照応が可能とされる例がある。Corblin は対比の概念を拡張し、等位接続がなくとも、複数の潜在的な先行詞の存在があればそこに語彙領域の対比が作られ、照応が可能となるとした（例6では、*un dictionnaire* と La pièce)。つまり、名詞句の語彙領域の複数存在し対比があれば、機械的に leN の照応の可能となる説明する。しかし、機械的な語彙領域の対立があればよいというのならば、例4では何故、*un dictionnaire* と la table は対比を生み出さないのかという問題点が残る。

1．2　先行研究、春木(1986)、井元(1989)

春木の先行研究は、Corblin(1983)の対比説に対して、指示対象の安定性という観点から別の仮説を提案している。「ある定名詞句の指すものが discours の流れの中で指示対象としての資格が確立していればいるほど、leN による反復がより可能になる」として、先行詞の指示対象に関する情報が増えることで談話の文脈が明確化し、先行詞の資格が確立に向かい、le による照応が可能になるとする。

(7) *Un homme* descendit du train. **L'homme** avait une valise.
(8) *Un homme* descendit du train. **Ce homme** avait une valise.
(9) *Une femme* entra dans la pièce.* J'avais vu **la femme** chez un ami.(例2と同じ)
(10) *Une femme* entra dans la pièce. **La femme** portait un chapeau rouge..
(11) *Une voiture* s'arrêta devant chez moi. ?**La voiture** était rouge.
(12) *Un homme* entra dans la pièce. Sans dire un mot, Pierre tira sur **l'homme**.

さらに、例7、8において、leNで照応した場合に、「この人物(l'homme) は物語の中の登場人物として確立された(重要な)位置をもったものとして感じられる－より厳密には再解釈される－」ということを指摘し、ce を用いた場合の照応との違いを述べる[2]。文脈の流れが自然な場合は、直後位置でも le 照応できるとされ、例 11 が照応不可能なこととの違いに関しては、先行詞の指示対象が談話のテームであるかどうかの違いであるとし、主語位置におかれた方が文のつながりが確かであり、確立された指示対象として再解釈を受けやすいからだとする。重要視されるのは、受け直された定名詞句が、談話の流れの中で、定冠詞をつかって照応しても自然に受容される、つまり、他の指示対象ではなく、先行詞の指示対象との同一性が容易に確認できるという意味で受容されるか否かということになると考えられる。直後という先行詞と照応詞を含む談話に関して、情報量が非常に限られた場面においても、その二つを結ぶ関係性を明示できるような語句が使用されれば十分に談話世界が構築され、それをもとに指示対象の確立は可能であり、le 定名詞句による照応は可能であると言うことになる。

井元(1989)では、春木の研究を受けて、次のような仮説を提案する。「指示対象が『発話内世界』の中に唯一存在し、かつ『発話内世界』における位置づけが明確になっている時、それを leN で指示することが可能である」ここにおける発話内世界の定義は、「発話が語る場面であり、発話内容が有効性を持つ場」であるとされ、例7では「ある男が電車を降りた」という行為は、この動詞の時制が限定する特定の時間、そして特定の場所の中においてのみ有効でありその限定された時空間が「発話内世界」であるとされる。位置づけが十分かどうかの基準は、同じ発話内世界の中に、他にも言及に値する対象が存在していると感じられるかどうかということで決まる。

(13) Il y a *un dictionnaire* et une montre sur une table. **Le dictionnaire** est ouvert.
(14) Il y a *un dictionnaire* sur une table. **Le dictionnaire** est ouvert.
(15) Il y a *un dictionnaire* sur la très jolie table que mon oncle a achetée dernière. **Le dictionnaire** est ouvert.

例 13 のように新たな名詞句「時計」を導入すれば、「辞書」の他にも言及する価値のある存在を構築でき、また、例 14 のように、table の冠詞を定冠詞 la から不定冠詞 une に変えると容認度が上がると指摘し、机が辞書と同様に後に言及される可能性を感じさせることで、le による照応が可能になることもあると説明する。例 15 では、「机」という名詞句が、修飾されていることで、この文脈において、重要な役割を果たすものであると感じさせていることから、のちに言及されうる対象になりうるので照応が可能になっていると指摘する。この考え方は、先に Corblin が指摘した名詞句の語彙領域の「対比」の概念を「対比」という概念を薄めつつも受け継ぎ、春木の指摘する「談話の流れ」からの談話世界における安定性という考察を無理なく融合させた考え方であると思われる。

1．3　先行研究の問題点

先行研究にはいくつかの問題が存在している。一つは、取り上げられている例文に関してである。Corblin の等位構造を伴った例 3 などを除くと、自然な会話の中で用いられる類の発話ではないということが指摘できる。逆にいえば、等位構造を伴っていない例文は、すべて書かれた文である印象を与え

る。春木の挙げた例 7 や例 10 は、春木自身が指摘しているように le 定名詞句で照応した場合は、小説の一節であるような印象を与える。また Il y a...で始まる例文類は Kleiber(1986)が指摘しているように舞台のト書きを思わせ、以下のような Il était une fois...で始まる例文は、昔話に特有の書き出しであることは周知のとおりである。

(16)　Il était une fois *un prince* très malheureux. *Le prince ne pouvait pas avoir de fils.
(17)　Il était une fois *un prince* très malheureux malgré *son beau château*. Le prince ne pouvait pas avoir de fils.
(18)　Il était une fois *un prince* très malheureux : Le prince aimait *une belle princesse* qui ne l'aimait pas.　Corblin(1983)

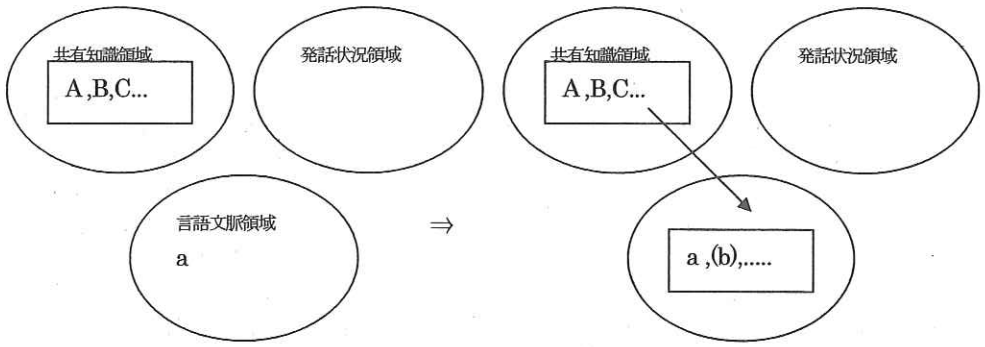
これらの等位構造が伴わないタイプの例文に共通する特徴は、先行詞を含む第一文が提示文の仲間であるということであり、先行詞で表されるものの対象が存在していることのみを表現する文であるということである。しかし、これは直後の位置における受け直しの本質的問題であって恣意的な例文の選択ではないと考えられる。直後の位置における le 照応の問題が起こるのは、先行詞に関してそれ以前には談話の文脈で言及されていることがないのが普通であり、先行詞を含む文がその談話における初めの発話であることが要求されやすい。物語などの文頭表現になることが多く、故に例文は提示文が多くなる。ここに本稿で扱う例文には二つのパターンがあることが理解されると思う。そして、提示文と等位構造を含む文の間には、le 定名詞句による照応に関して違いが存在している。等位構造含む文においては、le の使用が義務的なのに対して、提示文の場合には、非義務的である(ce/le の使い分けが可能で le を使うことで、ce 照応とは異なる効果を出している)。さらに、その例文の二つのタイプと関連して、先行研究では二つの概念「対比」と「談話の流れ」が示されたが、本稿としての最大の問題点は、例 7 が「談話の流れ」だけで理解されるかという点である。例 7 の前半が、先行文脈なしに発話された場合、照応する定冠詞は le よりも ce が一般的である。明示的に「その男」として受ける ce が適当であり、le を用いると、同一性の観点から「男」と言われても「どの男」なのかという問が生じる。春木が指摘しているように、これをインフォーマントに提示した場合の反応は、「何か書かれた話の一部、小説などに感じる」というものであり、会話においてこの一文を発した場合は、照応の理解はかなり困難となる。例 9 と 10 を比べた場合も、une femme の位置が目的語であるので、「談話の流れ」・関係性が例 9 は薄いという見方もできるが、後文に新たな主語である je が存在することで、この文がある小説の書き出しであるような体裁を失うことで、この照応の可否に影響を与えていると考えられないだろうか。例 12 では「銃撃する」という劇的な出来事が、これが推理小説的文体であるという印象を補強している感があり、ひいてはこの文の容認度向上に役立っていると考えられる。これら「談話の流れ」が重視される(「対比」が存在しない例文)においては、その文に現れた明示的な関連性だけでなく、それが「小説」の一部であるというような認識が手伝っていると思われる。言語外的な知識からもたらされるそのような知識、これらの例文が「小説」や「ト書き」であるといった認識の方が、実はこの照応の鍵なのではないだろうか。

2　直後の受け直しのパラドックスの拡張

2．1　上位概念語(hyperonymie)による照応

(19)　J'ai rencontré *un chien*. *Le chien m'a suivi.
(20)　J'ai rencontré *un chien et un chat*. Le chien m'a suivi.
(21)　J'ai rencontré *un chien*. L'animal m'a suivi.
(22)　J'ai rencontré *un chien*. Je m'étais aventuré plus loin que d'habitude et revenant sur mes pas je fus étonné. Le chien me suivait.　Theissen(1998)

Theissen(1998)は、例 21 のように直後の受け直しの位置において、上位概念語における照応が可能であるという例を指摘し、「直後の受け直しが起こる環境においては、un N で導入された要素は、心的モデル内に自立した要素として確立されておらず定名詞句で受けられない。他の文の介在や、等位接続による語彙領域の対照、hyperonymie による再カテゴリー化といった、認知的、心理的な距離というものの存在が、直後の位置における定名詞句の照応を可能とする」とする。このことが意味するのは、照応が可能となるには、一般の忠実照応におけるような談話の進展(時間・空間の経過)か、またはそれに変わるもの、認知的・心理的な距離(それが表す何らかの情報というもの) の必要性ということであると思われる。春木は談話の進展の方を拡張させ「談話の流れ、関係性」により、ここで言う認知的・心理的距離もカバーしていたように思われるが、本稿では逆の方向性、ここでいわれている認知的・心理的距離というものを、言語外的な知識から来る「枠組み」として定義し直し、それを直後位置の照応における第一義的な原理として考えたい。一般には談話の進展によってもたらされている情報の代わりに、直後位置の照応においては、言語外的な知識からの「枠組み」が要請されていると考える。上位概念語の受け直しでは、「枠組み」を担うのは、語彙のカテゴリーではないだろうか。動物のカテゴリーに犬が入ることは、言語的な決まりというよりは、言語外的な世界における共有の知識に属するものであり、この知識・「枠組み」の有無が例 19 と例 21 の違いを生んでいると考えられる。また、それ以外の差は明示的な文脈上には存在していない。この状況を図示するために、言語文脈、発話状況そして共有知識という三つの領域に分けて談話を理解する談話モデル[3]を用いたい。



J'ai rencontré *un chien.*　　**L'animal** m'a suivi.

a ; un chien の指示対象　A ; 「犬」の総称的な知識　長方形 ; 「動物」のカテゴリー的知識
B,C ; 犬以外の動物のカテゴリー存在する種の知識(例えば、猫、兎、、、)
(a),(b),,, ; 文脈によって顕在化していない動物に含まれる種の知識

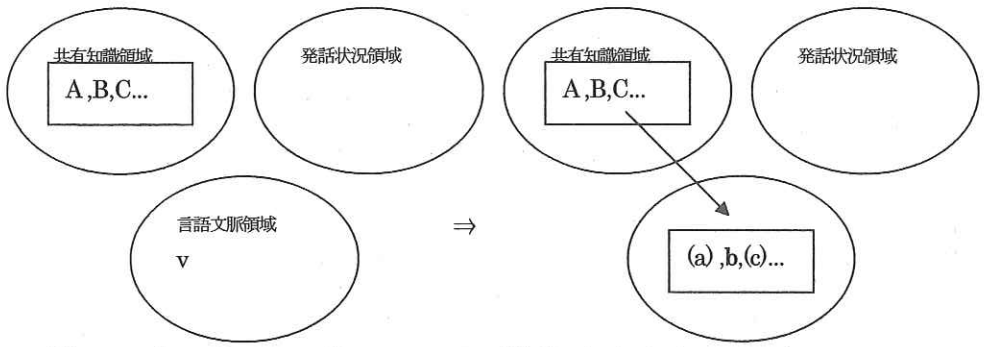
上図において言語文脈領域に書き込まれている a は、不定名詞句「犬」で導入された指示対象であり、一方、共有知識には、知識として「犬」A が「動物」という四角い括弧で表されたカテゴリーの一部として包摂される形で表示される。そのカテゴリーを言語文脈へコピーすることで、照応詞 L'animal の指示対象が、もとからある不定名詞句「犬」の指示対象 a を取り込む形で確立される。この照応では、言語文脈領域で直接照応するのではなく、共有知識を介することによって、初めて照応が可能になる。これが、先に言及されていた認知的・心理的距離に相当する。

2．2　連想照応

上位概念語における言い換えによる照応と同様に、直後の受け直しの位置で起こる照応に連想照応があり、連想照応とは、次の例 24 から 26 のように、照応表現が文脈上間接的な指示対象を採る現象であり、専攻する表現の指示対象を介して新たな指示対象を導入することと定義される。この現象も直後の受け直しの位置において成立する照応現象である。

(23)　Il s'abrita sous *un vieux tilleul*. **Le tronc** était tout craquelé.　　Fradin(1984)
(24)　Nous entrâmes dans *un village*. **L'église** était située sur une butte.
(25)　Nous entrâmes dans *un village*. ***Le grand magasin** était située sur une butte. kleiber(2001)

連想照応においては、全体と部分の関係が存在しているような場合に容易に照応が可能となり例 23 の「菩提樹(全体)」と「幹(部分) 」のように、包摂関係が認められるような関係があることが照応の鍵となる。例 24 のように包摂関係は物理的な木というものを離れ、村と教会といったより文化的な共有知識に基づいたものにも適用される。このような共有知識は、一般にフレーム[4]と呼ばれているが、先に見た認知的・心理的距離と重なる概念であり、本稿で言う「枠組み」というものに相当する。明示的な文脈上には、教会と村を結び付けられる統語的特長はなく、言語外的な知識である村のフレームが「枠組み」として利用されていると考えられる。ここで照応詞「教会」は、村のフレームという「枠組み」の中でのみ理解されており、「ある村の一部として存在している教会」という情報しか持ちえないことが重要である。これは、先行研究でみた、井元の『発話内世界』においてのみ確立されている関係とほぼ同じことを表していると考えられる。ここでも図示すると、共有知識領域に存在する村のフレームを言語文脈領域にコピーすることで、初めて L'église が正しく理解される。



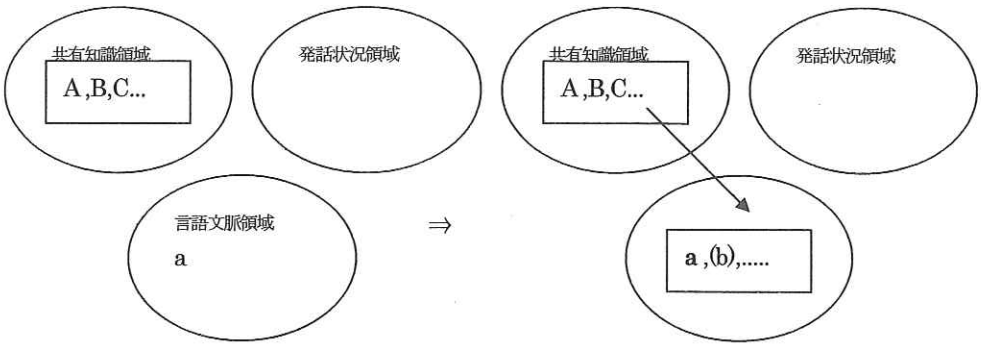
Nous entrâmes dans *un village*.　　**L'église** était située sur une butte.
v ; *un village* の指示対象　　b ; L'église の指示対象
長方形 ; 「村」のフレーム　　B ; 総称的な「教会」の知識　　A,C,... ; 村に存在する他の要素
→ v が長方形で表される「村」として再解釈されることで、「教会」を含みえる

2．3　直後の受け直しのパラドックス、再考

直後の受け直しのパラドックスで問題となっている照応においては、カテゴリーやフレームにあたる「枠組み」とはいかなるものであろうか。ここで見られる照応には、時間の経過に伴って蓄積される言語的な文脈というもものは存在しない、もしくは、非常に希薄であると考えられる。また、例文から見てわかるように、通常の会話として発話されることは稀な例が多く、発話の場の状況というものが、直接関わっているとも思われない。照応において考慮されるべき特徴は、先の連想照応が顕著に示すように、やはり談話の参与者が共通して持っている言語外的な世界に関する知識を利用している点である。

(6)　Il y a *un dictionnaire* sur la table. La pièce est sombre. **Le dictionnaire** est ouvert.
(7)　Un homme descendit du train. L'homme avait une valise.
(12)　Un homme entra dans la pièce. Sans dire un mot, Pierre tira sur l'homme.
(17)　Il était une fois *un prince* très malheureux malgré *son beau château*. **Le prince** ne pouvait pas avoir de fils.

先行研究でも言及したが、春木(1986)は例7に関してleNの照応が可能な場合は「この人物(l'homme)は物語の中の登場人物として確立された(重要な)位置をもったものとして感じられる－より厳密には再解釈される－」ということを指摘し、また例12においては、推理小説的文体において許容度が高まる由のことを指摘している。これらの例は、談話の顕在的な文脈、当該の例文中の語彙領域の対比などとは別の次元、すなわち、この文章が、「物語(全体)」との関連を念頭において解釈されていることを示している。「物語」の中の「登場人物」として解釈される、その再解釈される場というものが、明示的な文脈を離れた、言語外的な共有知識のレベルの利用ということになる。

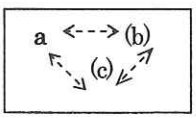


Un homme descendit du train.　　L'homme avait une valise.

a；un hommeの指示対象　　長方形；「物語」という枠組み(フレーム)

A；「物語」における「登場人物」という要素　B,C,,,；「物語」を構成する他の要素

「物語」という枠組みを通してはじめて、ある男は「登場人物」として解釈することが可能となり、言語文脈に、共有知識からのフレーム「物語」をコピーすることで、unNで導入された指示対象に、それが解釈される場、「枠組み」を与えることができ、それによってこの照応が成立していると理解される。例6に対するKleiber(1986)の指摘、「舞台台本のト書き」であれば照応の容認度が向上する、というのも「物語」とおなじ枠組みがそこに明確に用意されるからであろう。つまり、重要なのは、言語外的な知識からもたらされる知識、この例文が「小説」や「ト書き」であるといった認識が、この照応の鍵だということである。例7の「ある男」は単にこの明示された文章における不定名詞句の「ある男」ではなく、「ある小説の登場人物であるのでは」と認識された場合において、初めて定名詞句leによって照応が可能になると主張したい。小説と登場人物という「枠組み」が存在すれば、井元の言うところの「発話内世界」＝小説と、そのなかにおける位置づけ＝登場人物というものが明確化されるためこのタイプの照応が容易になっていくと考えられる。ここにおいて「対比」は必要不可欠な要素というよりは、あればあるだけその「枠組み」が決まりやすいという関係になる。つまり、例6のLa pièceや例17の*son beau château*などの名詞句は、それらを含む文脈が「小説」的であり、「ト書き」的であることに大きく貢献しており、その意味では、談話の流れが重要であることを否定はしない。Il était une foisから始まる書き出しで、多分に「おとぎ話」的な枠組みを用意するが、物語を感じさせる要素がおおければ多いほど「枠組み」は強化され、照応の自然さは上がると考える。

un N＝a　　le N＝ 

以上、見てきたように、leNで照応している状態とは、unNが導入する裸のaではなく、文脈やフレームによってもたらされたaと比較されうる要素類を潜在的に含む状態、図で言う長方形の全体を伴っ

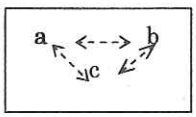
たものを表していると考える。すなわちそれが、談話世界における指示対象のかかわり方を示しており、春木が指摘した「談話の流れ」が見える状態であると考えられる。そして、この長方形で表される枠組みは、直後位置の場合、言語外的な知識からもたらされるというのが、本稿の主張である。

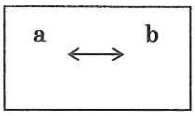
3．　等位接続の問題

共有知識を利用するという考えで、直後の受け直しの位置における照応を見てきたが、最後に、もっとも典型的な例とみなされている等位接続の例を最後に取り上げたい。Colbrin をはじめこの等位接続を伴う例から研究を進め、等位接続の持つ対比という概念を直後の受け直しの照応の解決におけるポイントのようにしている説明は多い。しかし、実際に重要なのは対比に伴って行われる先行詞の指示対象の談話世界内での確立である。対比は非常にわかりやすい形で貢献するものの、対比そのものの存在が照応を可能にしている原則ではないことは、これまで見てきたとおりである。

(4)　Il y a *un dictionnaire* et un roman sur une table. **Le dictionnaire** est ouvert.
(14)　Il y a *un dictionnaire* et une montre sur une table. **Le dictionnaire** est ouvert.
(21)　J'ai rencontré *un chien et un chat*. **Le chien** m'a suivi.

例 4 と例 21 では、等位接続において結ばれている要素は、同じカテゴリー・本であったり、動物であったりし、そのことが、先に見た動物－犬のようなカテゴリーを想起させるという考え方もあるかもしれない。確かに、この手の等位接続で結ばれるものは、例 1 ではじめに見た、息子・娘というペアや犬・猫といった、その二つのペアで用いられることが慣用的に多いものが多いことも事実である。しかし、例 14 で見るように、辞書・時計とカテゴリーが違うと思えるものでも直後の受け直しは可能である。また、例 21 で、un chat の代わりに殆ど誰もしらない未知の生物 A を、un A という形で用いても、同様に照応は可能である。このことから考えても、等位接続される名詞句の問題というよりは、等位接続の構造自体が、ここでは照応を可能にしていると考えられる。二つの名詞句が等位接続されていることは、その二つはすでに関連があるものとしてみなされやすい。等位接続であるので、二つの名詞句は対等の関係を表しており、当該の談話においては、何らかの意味で、二つだけが対等にもちうる性質がある。これは、要素が二つしかないカテゴリー、もしくはフレームというものを形成しているのと似ている。例 4 において、先行詞は「ある辞書」と「ある小説」を導入しており、それ以外の文脈情報は、それが机の上にあるということだけである。照応詞で、受けているのは「小説ではない、辞書の方という」解釈である思われる。等位接続で作られた、辞書と小説という閉じられた枠組みのなかから、片方を選び出している。つまり、等位接続されているということが、le N の照応に必要な、多要素間の比較という原則を肩代わりしているものとみなせる。通常、比較には二つ以上の潜在的な要素が想定されるところを、顕在的な二つの要素が代行している形である。

le N =　

等位接続の le N=　

ここにおいては、等位構造自体が、指示対象の談話世界での確立を担っている。よって、これは共有知識を直接使用した例ではないかもしれない。その意味で、例外を作ってしまうことになる。等位接続の構造がもつ特殊性を考えると、これは別の問題として研究する必要がある。しかし、等位接続における leN の照応の形は、一般的な leN のものサブクラス的なものとしてみなせないだろうか、というのが本稿の主張ある。

4．まとめにかえて

以上のように、フランス語の直後位置における定名詞句照応の問題において考察したが、一見すると矛盾するように見える現象においても、談話の構築と定名詞句の解釈される場の構築という観点から見るならば統一した理由によってその照応の可否は決められていることが解る。そこにおいては、談話の参加者が予めもっている共有知識というものが、照応そして談話の理解に重要な役割を果たしている。ただし、等位接続の例に見られるように、統語的な環境が直接的に照応の可否に関わる例も存在しており、談話の流れに代表される語用論的な理解への統語的環境の影響を、この問題に関してさらに深めるという課題が残っている。また、定名詞句が解釈されるに必要だと主張した「枠組み」に関しても、語彙的カテゴリー、フレームなど下位区分が存在するが、それぞれのより詳しい特徴や差異というものを検討し精査していきたい。そして、ここでは取り上げなかった一般的な同一性照応に関して、この非同一性照応の原理がどう関わっていくのかも今後の研究課題としたい。

注

1 同様のことはMilner(1976)ですでに指摘されている。

2 ce を使った場合は、物語の中の(主要要素ではなく)単なる一要素として解釈される。

3 言語知識領域と共有知識領域の明確な区別ができるため使用。談話モデルの詳細は、東郷(1998 他)を参照。

4 フレーム(Frame)は Fillmore(1982)から。例２５では、フランス語圏で、「村」いうものが潜在的に持ちうる要素に「教会」というものが含まれており、この「村」が潜在的に持ちうる要素に関する共通の知識をフレームと呼ぶ。「村」のフレームには、例えば「郵便局」なり「カフェ」なり文化的に通常一つは存在しているであろうものに関する知識が含まれる。例 ２６が不適な理由は、「村」には「百貨店」は、通常に存在しないからであり、村のフレーム外の存在だからであると説明される。

参照文献

Charolles, M. (1990) "L'anaphore associative.Problèmes de délimitation" , *Verbum 13(3)*, 119-148.

Cornish,F.(1999)*Anaphora,Discourse,and Understanding*, Oxford, Clarendon Press.

Corblin, F. (1983) "Défini et démonstrarif dans la reprise immédiate", *Le francais moderne 51,* 118-134

Fillmore, C. (1982) "Frame Semantics", The Linguistic Society of Korea (ed.),*Linguistics in the Morning Calm*, Seoul: Hanshin Publishing Co.

Fradin, B. (1984) "Anaphorisation et stéréotypes nominaux" , *Lingua 64*, 325-369.

春木仁孝(1986)「指示形容詞を用いた前方照応について」『フランス語学研究』20 号

井元秀剛(1989)「leN と ceN による忠実照応」『フランス語学研究』23 号

Kleiber,G(1986) "Pour une explication du paradoxe de la reprise immédiate", *Langue française 75*

Kleiber,G(2001) *L'anaphore associative*, puf

Milner, J.-Cl. (1976) "Réflxions sur la référence," *Langue française 30*

Theissen, A. (1998) "Quand est-ce qu'un chien devient l'animal?*", *French language Studies 8*

東郷雄二(1998)「談話モデルと指示」『話し言葉のフランス語に見る文法の形成課程の研究』基盤研究(c)研究成果報告書

東郷雄二(2000)「談話モデルと指示－談話における指示対象の確立と同定をめぐって－」『談話における名詞句の指示性確立のメカニズム』基盤研究(c)研究成果報告書

連結的知覚動詞構文をめぐる問題

神戸市外国語大学大学院

徳山 聖美

Abstract

In this paper, I would like to solve the puzzle over the Copulative Perception Verb Construction (henceforth CPV construction) such as "She looks young" : (i) Why is it that *she* takes up the subject position instead of *I*?; (ii) Why is it that *look* is selected instead of *see* as the verb? The CPV construction is a construction in which an implicit speaker or Experiencer evaluates a perceptual object through the effect of the exploratory activity. By focusing on *seem* and *appear* which share the same peculiarities as CPVs, I demonstrate that the development of the CPV construction is cognitively motivated, and that the CPV construction is not peculiar at all in terms of meaning extension observed in natural language.

Keywords : 連結的知覚動詞、探索活動、メトニミー、類推的拡張、*seem*

1. はじめに

本稿で取りあげる "She looks young." における *look* のように補語を伴う自動詞は、一般に copula verbs として捉えられていることから(e.g. Quirk et al. 1985)、このような知覚動詞は連結的知覚動詞 Copulative Perception Verbs (以下 CPVs)、CPVs を含む"She looks young."のような表現は、連結的知覚動詞構文(Copulative Perception Verb Construction)(以下 CPV 構文)と呼ばれている。

CPV 構文というのは、主体 (経験者) が探索活動を通して知覚経験した結果を、対象の属性評価として補語で表す構文である。また、CPV 構文は経験者を音形として表さない、つまりゼロ形で表現するのが特徴である。特に明示されなければ、話し手あるいは総称的存在であると考えられる。なぜなら、探索活動をする主体となる経験者は話し手と考えるのが最も自然であり、話し手以外で次に主体となることができるものとして、総称的存在が考えられる。

このような CPV 構文は次に示す 2 つの問題を含んでいる。①「彼女を見る」のは「私」なのに、文法上の主語の位置にはなぜ「私」(知覚の主体) ではなく、知覚の対象が来るのかといった CPV 構文の主語選択に関する問題と、②「彼女は若く見える」という意味にもかかわらず、なぜ *see* ではなく *look* が選ばれるのかという動詞制限を動機づける理由、すなわち CPV 選択に関する問題である。

本稿では、まず 2 節で考察の土台となる先行研究 (e.g. Taniguchi 1997) を概観する。3 節では先行研究が人間の五感 (look, taste, feel, smell, sound) に限定した CPVs が、"John seems happy." に見られるように、*seem* からの拡張であるという観点から、CPV 構文成立のプロセスを再考する。その上で 4 節では、CPV 構文における上記 2 つの問題：主語選択と CPV 選択について解明する。つまり、*seem* とこれに類似した意味・機能を持つ *appear* を考察の主軸に加え、CPVs が持つ内在的性質を観察することによって、CPV 構文が特殊な構文ではなく、人間の認知システムに基づいたプロセスによる意味拡張の点から、きわめて自然な表現であることを証明する。

2. 先行研究：Taniguchi (1997), 谷口(1997, 2005)

Taniguchi(1997)、谷口(1997, 2005)は CPV 構文を認知文法の枠組みで多角的に論じた、先駆的な研究である。文法範疇間の類推および事態解釈上の類推について歴史的観点から検証することで、動詞の意味拡張と構文成立

の相互作用について分析し、また主体化といった言語使用者の認知的要因との関係、さらに Construction Grammar、Dynamic Usage-based Model の観点からも考察を行っている。ここでは、本稿の議論に関連する CPV 構文における主語に関する問題、知覚動詞の種類、および歴史的観察に絞って概観する。

2.1 CPV 構文における主語

Taniguchi(1997)などでは、*look, taste, feel, smell, sound* といった人間の五感を表す 5 つの CPVs を使った(1)のような構文を CPV 構文と呼んでいる。

(1) a. John looks happy.
b. This cake tastes good.
c. This cloth feels soft.
d. That sounds reasonable.
e. This flower smells sweet　　(Taniguchi 1997:270-271)

(1)の CPVs はいずれも人間の五感を通じた知覚経験を表すが、それらの主語は知覚経験者ではなく、知覚の対象である。

2.2 2種類の知覚動詞

Taniguchi は Kemmer(1993)の分析をもとに、刺激の放出性の有無によって知覚動詞を 2 種類に分類している。つまり、(2a)のように経験者(Experiencer)から対象へのメンタルコンタクト[1]を表す Experiencer-based の知覚動詞[EB]と、対象から経験者に対して刺激(Stimulus)を放出する(2b)のような Stimulus-based の知覚動詞[SB]の 2 つに分類している。嗅覚と聴覚に関する刺激は、匂いや音といった刺激を自ら放出する[SB]と、経験者がそれを匂ったり聞いたりする[EB]の 2 つの方向性を持つ知覚であるとしている。一方、視覚[2]・味覚・触覚に関する刺激にはそのような放出性はなく、[EB]のみの一方向性知覚であるとしている。

(2) a. John smelled the garlic.　[EB]
b. The garlic smells good.　[SB]　　(Taniguchi 1997:275)

Taniguchi は[EB][SB]それぞれの主語選択に関して、「主語は非対称的関係の先頭(head)に位置する参与者が選ばれる」(Taniguchi 1997:275)という、Langacker(1990)の subject schema を採用している。つまり、参与者間に非対称的関係が見られる場合は、その先頭である参与者(その関係の「開始者(Initiator)」)が主語として選択されるとしている。

(1)に示した CPVs は知覚対象が主語である点から、明らかに Stimulus-based [SB]に相当するが、[SB]用法を持たない視覚・味覚・触覚のような一方向性知覚の動詞に、なぜ(1a)-(1c)の CPV 構文が成立するのかということが問題となる。そこで、Taniguchi は CPV 構文の発達過程を歴史的データから観察している。

2.3 CPVs の歴史的観察

谷口(1997)では次ページの表 1 のように、それぞれの用法の初出を OED によって通時的に観察している。二方向性知覚では[EB]用法と補語をもたない[SB]用法、さらに補語をもつ CPV 用法の出現が、それぞれほぼ同時期である。しかし、一方向性知覚では[EB]用法よりもかなり遅れて CPV 用法が出現し、二方向性知覚での CPV 出現時期よりもさらに後に生じている。以上のことから、Taniguchi は「CPVs がはじめに二方向性知覚動詞で成立し、後に一方向性知覚動詞に拡張した」(谷口 2005:222)としている。

さらに Taniguchi も指摘するように、初期の CPVs は形容詞ではなく、副詞と共起していたことがわかる。

(3) a. [1445: in *Anglia* XXVIII. 273]　Of ripe thyngis which sounde sadly thou techist men...
b. [1590: SHAKES. *Com. Err.* IV. iv.7]　I tell you 'twill sound harshly in her ears.

(4)　a. [1220: *Bestiary* 751 in *O.E. Misc.*]　Al ðat eure smelleð swete[3].
　　b. [1310: in Wright *Lyric P.* xxx. 88]　Hire erbes smulleth suete.　(OED)

つまり、もともと "This flower smells sweetly." であったのが、(1e)の "This flower smells sweet." のように形容詞に再解釈されることで、CPV 用法の意味において、対象から発せられる刺激はもはや必要とされず、際立ちを失う。逆に形容詞補語が対象の属性評価を表すために、経験者から対象へのメンタルコンタクトが前景化される。したがって、「対象から経験者への刺激発散」から「経験者から対象へのメンタルコンタクト」へとプロファイル・シフトが起こり、それが二方向性知覚動詞から一方向性知覚動詞へと拡張されたとしている（谷口 2005:228)。

e.b.: Experiencer-based
s.b.: Stimulus-based & non-copulative (e.g. "That smells." "The bell sounded.")
cpv: Stimulus-based & copulative

	11	12	13	14	15	16	17	(C)
[二方向性知覚]								
smell (e.b.)			1175	----------	----------	----------	----------	→
(s.b.)			1175	----------	----------	----------	----------	→
(cpv)				1220	----------	----------	----------	→
sound[4](s.b.)					1352	----------	----------	→
(cpv)					1374	----------	----------	→
[一方向性知覚]								
look (e.b.)	1000	----------	----------	----------	----------	----------	----------	→
(cpv)						1400	----------	→
taste (e.b.)					1340	----------	----------	→
(cpv)							1552	------→
feel (e.b.)	897	----------	----------	----------	----------	----------	----------	→
(cpv)							1581	----→

表 1.　(谷口 1997:221)　[太字(筆者): CPV 用法の初出]

このように、Taniguchi(1997)などでは CPV 構文の発達・成立過程を、歴史的データから分析することによって、現在の CPV 構文の特異性を動機付けている。本稿では、このようなデータを土台にした上で、"John seems happy." に見られるように、1 節に示した CPVs と同様の問題を抱える *seem* が CPVs のプロトタイプであるという観点から、先行研究とは別の解釈を示しながら CPV 構文を再考してみたい。

3. Seem から拡張された CPV 構文成立のプロセス

本稿は Taniguchi(1997)などが人間の五感に限定した CPVs に *seem/appear* を加えて、さらに *seem* が CPVs のプロトタイプであることを示した上で、CPV 構文の成立過程を明らかにし、その特異性を人間の認知プロセスによって解明するものである。ここでは、CPVs としての *seem/appear* を示した上で、*seem* を CPV のプロトタイプとする理由を述べ、*seem* から他の知覚動詞への拡張の過程について説明する。

3.1 CPVs としての seem と appear

Quirk et al.(1985:1171-1172)は、連結詞的なふるまいをする動詞の補語が主語の現在の特性を表す current copulas の 1 グループとして *seem*・*appear*・*look*・*taste*・*feel*・*smell*・*sound* を挙げている。(5)-(8)に示すように *seem*、さらに *seem* と類似した意味を持つ *appear* は CPV 用法を持つにもかかわらず、他の CPVs と比較すると、そのふるまいに違いが見られる。

(5) a. John seems (appears) happy.
b. John seems (appears) to be happy.
c. It seems (appears) that John is happy. (谷口 2005:215)

(6) a. John looks happy.
b. John looks to be happy.
c.*It looks that John is happy. (ibid.)

(7) a. The cake tastes good.
b.*The cake tastes to be good.
c.*It tastes that the cake is good. (ibid.)

(8) a. It seems (appears) to be a pity.
b. It seems (*appears) a pity.[5] (Swan 2005:50)

他にも *seem/appear* はbe動詞以外の状態を表す不定詞をとることができ、There構文やhedge表現も可能である。つまり、*seem/appear* と比較して、他のCPVsにおける統語的制約がきついということ、その中でも *look* は他のCPVsよりも *seem/appear* に近いふるまいをすることがわかる。さらに、*seem* と *appear* に注目すると、*seem* は *appear* ほど感覚システムを限定しないため、そのふるまいにおいて最も自由であるといえる。

Visser(1963:189)は、補語を要求する連結的な動詞をcopulaと呼び、*seem*・*appear*・*look* などの知覚動詞をCopulas of Modality、また要求される補語がpredicative adjunctとして解釈できるものや、それらの補語がもともとは副詞であった *feel*・*taste* ・*smell*・*sound* などを、copulaと自動詞の中間という意味でQuasi-Copulasとして分類している[6]。

このように、*seem/appear* が他の知覚動詞と同様にCPV用法を持つことや、知覚に関してさらに広い適応範囲を持つことなどから考えて、Taniguchiが5つの知覚動詞に限定したCPVsに、*seem* と *appear* を加えて再考する必要性がある。

3.2 CPVのプロトタイプとしてのseem

(3)(4)で見たように、二方向性知覚の *sound* や *smell* がもともと副詞共起であったことから、Taniguchi(1997)などは2.3で示したように、"This flower smells sweetly." のような形がCPV構文の原型であるとしている。これはTaniguchiも指摘する通り、「この花は甘く匂いを放出する」という表現であることから、文法的・意味的にも、また主語に関しても、現在のCPV構文が抱える問題を全く含んでいない。しかし、本稿ではこのような表現をCPV構文とは捉えない。つまりこの時期における、"This flower smells sweetly." のような表現はCPV構文でなく、副詞を伴うごく普通の自動詞構文として見る。

一方、(9)に示すように *seem* には初めからCPVとしての用法が存在する。つまり *seem* は当初から現在のCPV構文と同様に、副詞ではなく形容詞、または叙述的名詞を伴っている(下線は筆者による)[7]。

(9) a. [1225 : *St. Marher*.9] His grisliche teeð semden <u>of swart irn</u>,... (OED)
b. [1349 : Hampole. *Form of Living*] Þat semes <u>confortabell</u>. (Visser 1963:211)

また、*seem* には "to have a semblance or appearance; to appear to be." (OED)や "to appear to exist or to be true, or to have a particular quality." (LDOCE)というように、「出現」を表す意味があり、これはTaniguchiの「刺激の放出・発散」とパラレルであると考える。

このように、*seem* には当初からCPV用法が存在していたことと、他のCPVsや、意味の近い *appear* との比較においても感覚システムの限定がないため、知覚に関して最も広い適応範囲を持つ。このような理由から、*seem* は(5)-(8)で見たように他のCPVsよりもふるまいが自由である。したがって、*seem* がCPVsのプロトタイプであると説明できる。

3.3 CPV 用法の拡張：appear とその他の知覚動詞

(5)(8)に示したように *appear* は *seem* と類似した意味を持つことから、(10)のように早い時期から CPV 用法受け継いでいる(下線は筆者による)。

(10) a. [1388 : WYCLIF *Isa.* lix. 15]... and it apperide yuel in hise iȝen. (OED)
b. [1528 :*St.Th. More.*127 F8]... thinges that by reason and nature...appere impossible.
(Visser 1963:209)

また、*appear* には "to come forth into view, as from a place or state of concealment, or from a distance; to become visible; to seem." (OED)というように、*seem* 同様「出現」を表す意味があり、*appear* も「刺激の放出・発散」であると考えられる。

表 2 は表 1 で示した谷口(1997)の表を基にして、*seem* と *appear* を加えたものである。Taniguchi が *smell* と *sound* において CPV であるとした副詞共起のものは、CPV ではなく副詞を伴う自動詞として(s.b.)の欄に(副)としてある。ここでも太字は CPV としての初出を表している。表 2 から見ると、*smell* が形容詞を補語とする CPV 用法の初出が 1667 年、*sound* の場合が 1605 年ということから、*smell* と *sound* の形容詞共起、つまり CPV 用法の成立は *look*・*taste*・*feel* の CPV 用法初出よりも後であることがわかる。このことは 3.1 で Visser (1963)が *smell/sound* を Quasi-Copulas と分類したことにも合致する。これは Taniguchi(1997)などが、最初に二方向性知覚動詞で成立した CPV 用法が一方向性知覚動詞へ、つまり *smell*、*sound*、*look*、*taste*、*feel* の順に拡張していったとする主張とは異なった解釈の可能性を提示することができる。

		11	12	13	14	15	16	17	(C)
[二方向性知覚]									
seem	(s.b.)			1200	----------	----------	----------	----------	→
	(cpv)			1225	----------	----------	----------	----------	→
appear	(s.b.)			1250	----------	----------	----------	----------	→
	(cpv)					1388	----------	----------	→
smell	(e.b)		1175	----------	----------	----------	----------	----------	→
	(s.b.)		1175 / 1220 (副)	----------	----------	----------	----------	----------	→
	(cpv)							1667	→
sound	(s.b.)					1325 / 1374 (副)	----------	----------	→
	(cpv)							1605	→
[一方向性知覚]									
look	(e.b.)	1000	----------	----------	----------	----------	----------	----------	→
	(cpv)						1400 ---1500	----------	→
taste	(e.b.)			1340	----------	----------	----------	----------	→
	(cpv)							1552	→
feel	(e.b.)	893	----------	----------	----------	----------	----------	----------	→
	(cpv)							1581	→

表 2

Taniguchi(1997)などは、構文文法や動的使用基盤モデルによって、CPVs の副詞共起から形容詞共起への変化や CPV 用法の拡張を説明している。しかし、意味と形式の対応から考えても、副詞共起のものとは区別する必要がある。つまり、当初から CPV 用法が存在していた *seem* を CPVs のプロトタイプとし、その用法が意味の近い *appear* に受け継がれ、その後、元来 CPV 用法を持たなかった知覚動詞へと類推的に拡張されて行ったと考えることで、その発達過程を自然に説明することができる(4.2 参照)。

ここまで CPV 構文の成立と拡張のプロセスを見てきた。次節では CPVs の内在的性質を観察することによっ

て、CPV 用法が他の知覚動詞にも拡張して行った必然性について考察する。

4. CPV 構文の２つの問題

本節では、冒頭で挙げた 2 つの問題を通して、一見特異な CPV 構文が人間の認知システムに基づいたプロセスによる意味拡張の点から、きわめて自然な表現であることを示す。

4.1 主語選択の問題

Postal(1971)や大江(1975)から、*seem* が純粋主観の述語であることは知られている[8]。深田(2005:188)が示すように、一旦、主観的な意味が成立すると、対象の知覚・認知に基づいて様々な判断・推論を行なうことができる。つまり、「見る」という探索活動があって、「見た」結果「見える」という原因・プロセス・結果のメトニミーも関わっている（4.2 参照）。

知覚において探索活動は不可欠であるが、その探索活動が終われば、その結果として知覚した対象とその性質が顕在化する。逆に、主体である経験者の行為性は減少する。したがって、「メアリーを見る」"I look at Mary." という探索活動の結果、*Mary* が若いということを知覚すれば、主語の行為性が減少することで経験者はゼロ形、つまり表現されず、その代わりに「メアリーは若く見える」"Mary looks young." というように、対象である *Mary* が主語の位置に来ることになる。CPVs が形容詞補語を伴うということから、本多(2005:88)も指摘するように、探索活動によって述部がある対象の性質を記述したものであれば、動作主ではなく対象が主語の位置に来るのはきわめて自然である。これは Taniguchi(1997)などが挙げた Langacker(1990)の Subject schema による主語選択条件にも合致する[9]。

4.2 CPV 選択の問題

4.1 でも触れたように、原因・プロセス・結果といった時間的隣接関係に基づく指示転換であるメトニミーとの関連から、CPV 選択の問題である各知覚動詞の動詞制限について考察する。表 3 は *seem/appear* から類推的に拡張された CPVs としての知覚動詞を、①感覚刺激の放出を表す刺激放出性動詞、②感覚刺激に対する探索活動を表す能動的知覚動詞[10]、③感覚刺激の認知を表す受動的知覚動詞の 3 つに分類したものである。感覚刺激に対するこの認知過程の 3 つの段階は、表の最上列に示したように、それぞれ知覚の「原因」・「プロセス」・「結果」に対応する。この表から、各知覚システムの横列の最も左に来る動詞(太字)が CPV として選択されることになるが、それはどのように説明できるだろうか？

	知覚の原因	知覚のプロセス	知覚の結果
	①刺激放出性動詞	②能動的知覚動詞	③受動的知覚動詞
嗅覚	**smell**	smell	smell
聴覚	**sound**	listen	hear
視覚	∅	**look**	see
味覚	∅	**taste**	taste
触覚	∅	**feel**	feel

表 3

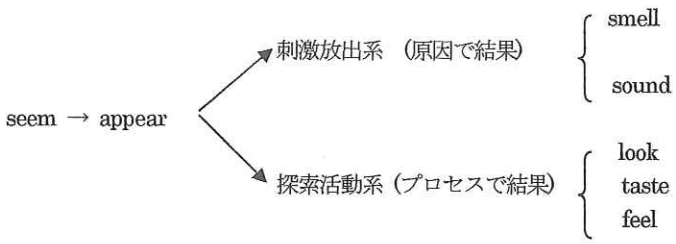
視覚の CPV "She looks young." を例にとって見ると、直感的には「彼女は若く見える」となることから *see* が来るはずである。ではなぜ *see* ではなく *look* が選択されるのだろうか？ CPV 構文というのは、主体が探索活動をした結果、知覚経験する対象の属性を表すことが基本の構文である。つまり、CPV 構文において、探索活動の含意は不可欠である。しかし、「知覚の結果」としての感覚刺激の認知を表す受動的知覚動詞 *see* では、探索活動を含意しづらい。しかも、「知覚の結果」は補語という形で必ず表されることから、「結果」から「結果」への働きかけでは、いかなる interaction も引き起こされない。したがって、探索活動を表す行為性の高い能動的知覚動詞 *look* が CPV として選択されることになり、これには「プロセス」で「結果」を表すメトニミーが関

わっている。

ではなぜ聴覚において、探索活動を表す能動的知覚動詞 *listen* ではなく、「知覚の原因」に対応する刺激放出性動詞 *sound* が選択されるのかという疑問が生じる。これは主語と述語の関係に着目すると、容易に説明できる。放出に関わる刺激は放出性の動詞と意味的な結びつきが強いのは当然である。つまり、聴覚において放出性動詞 *sound* が CPV として選択されることは、主語と述語の関係に矛盾がない。さらに、メトニミーの観点から見ると、「原因」は「プロセス」ないし「結果」を生じさせる条件、あるいは要因であると言える（瀬戸 2005:151）。したがって、「原因」に対応する感覚刺激の放出段階で、感覚刺激の認知にあたる「結果」を表すことのできる *sound* が *listen* よりも優先され、CPV として選択されることになる。

さらに、拡張のプロセスを図で表すと(11)のようになる。

(11)



CPV 用法は、感覚システムを限定しない CPVs のプロトタイプである *seem* から、意味の類似した *appear* へと拡張した後、(11)に示したように、元来 CPV 用法を持たない知覚動詞にも類推的に拡張していった。その拡張のパタンには２つのタイプがあり、１つは *smell*・*sound* のように刺激放出性動詞が、「原因」で「結果」を表す CPV 用法を獲得し、他方は探索活動を表す *look*・*taste*・*feel* などの能動的知覚動詞が、「プロセス」で「結果」を表す CPV 用法を獲得したことを示している[11]。

5. 結語

CPV 構文は明示されない経験者による探索活動の結果として得られた、対象の属性評価を補語として表す構文である。本稿では CPV 構文について、Taniguchi(1997)などの先行研究を土台にした上で、*seem* を CPVs のプロトタイプとすることによって、先行研究とは別の発達過程を示した。その上で、冒頭に挙げた CPV 構文における２つの問題について、難解な理論を持ち出すことなく説明することができた。第一の問題点である CPV 構文の主語選択については、CPV が形容詞補語を伴うことから、探索活動によって述部がある対象の性質を記述したものであれば、動作主ではなく対象が主語の位置に来るのは自然であることを示した。第二の問題点である CPV 構文における動詞制限を動機づける理由、すなわち、CPV 選択については、知覚のための探索活動を表す行為性の高い動詞が、対象とその属性を結びつけるために選択されることを示した。さらに、主語・述語の関係に矛盾のない *smell*、*sound* などの放出性動詞は知覚の「原因」で「結果」を、*look*、*taste*、*feel* などの能動的知覚動詞は、探索活動といった知覚の「プロセス」で「結果」を表すメトニミーが関わっていることを示した。

このように考えると、CPV 構文は本来、「知覚の原因」と「知覚のプロセス」を表す動詞によって、探索活動を前提とする「知覚の結果」、すなわち感覚刺激の認知を表す構文であるといえる。以上のことから、CPV 構文は初めに考えていたような特異な構文ではなく、人間の認知プロセスによって動機づけられた、きわめて自然な表現であることを示すことができた。

＊発表の準備段階から、山口治彦先生、谷口一美先生、本多啓先生、深田智先生に貴重な助言と多大なご指導をいただきました。また発表に際しては、橋内武先生、出水孝典先生、金澤俊吾先生から有益なご意見を頂戴しました。この場をお借りして心から感謝申し上げます。

[1] 経験者(Experiencer)からその対象に向けて意識や注意を包括する作用

[2] 視覚に関しては、「光」のように刺激の放出と考えられるものもあるが、概念化の次元では、放出性のないものと考えてよいだろう。

[3] OE(古英語)では一般的・生産的な副詞として-e の語尾が多いが、ME(中英語)では-e の脱落が見られることもあるので、形容詞と副詞の見分けが困難である (Visser 1963:230)。しかし、.MED (*Middle English Dictionary* 1952)の *smellen* の項では "swet(e adv." と但し書きした上で、*swete*、*suete* を副詞としていることから、(4)の場合も副詞であると見てさしつかえない。

[4] *sound* に[EB]用法の出現時期が記されていないのは、メンタルコンタクトを表す *listen*、*hear* が独立して語彙化されているためである。

[5] to be の省略には主体化が関係している。つまり、(8b)は話し手の主観的評価が関わっている。したがって、*appear* は他の CPVs よりも主観的な動詞ではあるが、*seem* の方がより主観性が高いといえる。

[6] この分類から見ても、Quasi-Copulas である *smell* と *sound* において、構文としての CPV が初めに成立したとするのには少し無理があるように思える。

[7] Quirk et al.(1972:241)は形容詞であるかどうかの判断基準として、*seem* のあとに来ることを挙げている。"He seems a fool." や "Your remarks seem nonsense to me." のように、名詞を伴っていたとしても、それらは意味的にきわめて形容詞に近いと説明している。

[8] 物語などの語り以外では一般に、(a)のようには言えても、(b)は不自然である。

(a) It seems to me that Mary is ill.
(b) ?It seems to John that Mary is ill.

つまり、"Mary seems young." のような表現の知覚主体は一人称が最も自然であるということから、*seem* は本来主観的な動詞であるとしている (Postal(1971:265-268), 大江(1975:190-191))。

[9] このことは "...the semantic role which is most likely to be relevant for the success of an activity is placed in syntactic subject relation,..." という Dixon(1991:322)の 'promotion to subject' にも合致する。また高見・久野(2000:25)も、一旦主体が対象を見ると、意味的に注意は対象に向けられ、その結果、対象を主語とする自動詞構文が成立するとしている。

[10] Rogers(1971:260)は知覚動詞を active perception verbs、passive perception verbs などに、国広(1981:31)は能動的知覚動詞、受動的知覚動詞に分類している。

[11] 知覚のハイアラーキーに注目すると、Sweetser(1990:36)が示すように、視覚、それに次いで聴覚が一般的な知覚から最も識別される。したがって語彙も豊富であり、一つの感覚モダリティに一つの語が対応すると考える必要はなく、複数あっても問題なく棲み分けができている。例えば、出現・放出性の高い視覚動詞 *loom* や聴覚動詞の *ring* は、*loom large*、*ring false* といった限られた形容詞と共起することで、それぞれの役割を担っている。

参照文献

Dixon, R.M.W. 1991. *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford: Oxford University Press.

深田智. 2005. 「英語と日本語における出現の知覚：主体性との関連で」、『日本認知言語学会論文集』、5、186-196.

本多啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論：生態心理学から見た文法現象』 東京：東大出版会.

Kemmer, S. 1993. *The Middle Voice*. Amsterdum : John Benjamines.

国広哲弥. 1981. 「語彙の構造の比較」、『日本語比較講座第3巻 意味と語彙』 東京：大修館書店、15-52.

Langacker, R.W. 1990. *Concept, Image and Symbol: A Cognitive Basis of Grammar*. Berlin and New York : Mouton de Gruyter.

大江三郎. 1975. 『日英語の比較研究：主観性をめぐって』 東京：南雲堂.

Postal, P.M. 1971. "On the surface verb 'Remind'." In C.J.Fillmore and D.T.Langendoen (eds.) *Studies in Linguistic Semantics*, New York: Holt, 181-270.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman

Rogers, Andy. 1971. Three kinds of physical perception verbs. *CLS* 7, 206-222.

瀬戸賢一. 2005. 『よくわかる比喩』 東京：研究社.

Swan, Michael. 2005. *Practical English Usage* (3rd edition). London: Oxford University Press.

Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

高見健一・久野暲. 2002. 『日英語の自動詞構文』 東京：研究社.

Taniguchi, Kazumi. 1997. "On the semantics and development of copulative perception verbs in English : A cognitive perceptive," *English Linguistics* 14, 270-299.

谷口一美. 1997. 「補語を伴う知覚動詞の意味と成立に関する考察：認知的視点から」、*JELS* 14 : Papers from the Fourteenth National Conference of the English Linguistic Society of Japan. 日本英語学会, 221-230.

谷口一美. 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 東京：ひつじ書房.

Visser, F.T. 1963. *An Historical Syntax of the English Language*. Part 1. Leiden : E. J. Brill.

外国語習得における「共同注視」と「身体性」：認知言語学原理を用いた外国語習得環境の構築

―学習者の脳内に動態概念ネットワーク形成を目的に意匠された言語習得環境の理論・実証研究―

中野　研一郎
京都府立東稜高等学校
京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻言語情報科学講座
E-mail: anri98@hera.eonet.ne.jp

<要旨>
言語習得に関わる認知言語学的な事実のひとつとして、語彙レベルにおける「言語形式(linguistic forms)」と「概念(concepts)」の直接的な結びつきは、「身体性(embodiment)」を媒介にした認知活動が経験・記憶化されることが挙げられるだろう。また、英語において典型となる「主語」・「動詞」・「目的語」などの基本的「言語形式(linguistic forms)」の習得は、特定の状況下において言語情報の受け手が言語情報の送り手の「意図(intentions)」を理解しようとする、「共同注視(joint attention)」を土台としたコミュニケーション活動の結果から生じるという事実も挙げられるだろう。

認知言語学のパースペクティブ及び認知言語学が依拠するパラダイムが、言語習得において妥当性を持つものであることを実証するために、外国語学習者の脳内に「動態的な概念ネットワーク(dynamic conception network)」の構築を可能とする、コンピュータ・ゲームソフト・プログラムを企画・立案した。

【キーワード】:「身体性」、「共同注視」、「動態概念ネットワーク」、「言語習得人工環境」

1. 序論

学校教育の現場である教室を、様々な現象が立ち顕れる括弧付きの概念である「教室」として捉えてみると、外国語の学習・習得に関しては、大きく分類して３つの問題が複合的に立ち顕れていることに気がつく。１つ目は、外国語学習が日本の学校・入試制度に位置づけられることによって生じる、いわゆる「学力」と呼ばれるものの問題がある。2 つ目は、母語・外国語に関わらず、言語習得というメカニズムの根底に横たわる「概念形成・獲得」に関わる問題である。「概念形成・獲得」においては、主体である人間が外界の潜在的な可能性をカテゴリー化し、それに対応する言語形式との関係を同定化及びボトムアップ式にネットワーク化することに、最大の特徴があるだろう。3 つ目は、固有の言語形式を条件とする個々の社会(文化・歴史)状況において、特定の「概念」と特定の言語「形式」の関係が、個人的・社会集団的・通時的に、創発・定位・変容・再編される現象である「意味拡張」の問題がある。「意味拡張」においては、コミュニケーションという他者との情報交換の成否(コード化･社会化)の問題が深く関与しており、また同時に、新たな概念に新たな形式が組み合わされる新たな意味の創発現象や、新たな意味の創発の結果、人間が脳内に持つ概念ネットワークが、量的な拡大のみならず質的に変化する現象などが、特徴として挙げられるだろう。

当然のことながら、個々の問題領域は多層に重なり合い、領域間に明確な線引きを行うことや、複合領域に生じる問題を単純化することはできない。しかしながら、例えば、日本の大学入試等における英文和訳や和文英訳、また、語句の並び換え等の問題においては、言語間の差異に関する知識を、学習者の持つ英語の「学力」と特定化して測定している事実に目を向けておくことは

必要であろう。

認知言語学において同義として取り扱われる「概念形成」と「意味形成」の問題も、「身体性(身分け・言分け)を基盤として概念の有機的な結い上げ(ネットワーク化)」という次元と、特定の言語形式・文化・歴史を条件として、他者との情報交換(コミュニケーション)の成否(コード・社会化)による共時的・通時的な意味の定位と変容という次元の両方において観察・考察されることが必要となる。こうした視点を以ってすれば、「意味」とは、可能性存在としてあるものが、新たな概念表象として、語・句・節・文レベルにおいて各形式と対応関係を持つことで創発され、定位されていく現象として捉えるべきであろう。そして、その創発及び定位のされ方(コード化・社会化)には、その言語固有の制約(固有の統語の制約、意味の生成・拡張・消滅に反映される歴史性・社会性)が働いており、共時的及び通時的なその言語固有の「概念」と「形式」の関係の創発及び定位のされ方にこそ、「意味拡張」という問題の本質が見出されるべきだと考えられる。したがって、認知主体(conceptualizer)の個々が持つ「動態的に構造化(ネットワーク化)される概念網(ニューラル・ネットワーク)」自体も、「概念 = 形式」の関係からなる「意味」が創発・拡張・破綻させられる過程を通して、常に質的・量的な変化を受けていることが予測される。したがって、このような考察結果から、言語における「意味」とは、概念化という人間の認知プロセスを通して、特定の「心理表象(概念)」に特定の「言語形式」が結び付けられる「創発現象」、及び，それがコミュニケーションという認知活動を通して定位・変容させられる、「コード・社会化現象」と定義付けることができるであろう。

私達は、弟子達の理解の範囲内という条件によりまとめられたフェルディナン・ド・ソシュールの『一般言語学講義』を読むとき、また、テクストの中心において「価値」と「貨幣」の問題を巡る苦闘が繰り広げられているカール・マルクスの『資本論』を読むとき、解かれたものではなく、彼らが解こうとしてなお解き得なかったものにこそ、彼らの思想の本質を読み取らなければならない。言語活動における「概念表象」と「言語形式」の問題は、経済活動における「価値」と「貨幣」の問題にも、根底において通じている。

外国語教育を論ずるにあたっても、言語の本質を従来の生成文法のように統語規則を中心とした静的な知識体系として捉え、その構成要件から言語表現を分析・解釈するのではなく、「身体性」を基にした、時・場所・動き等に関わる人間の認知活動条件に制約を受けた世界理解の顕現として捉えるべきである。そのように捉えれば、外国語教育の問題を認知言語学のパラダイムから問い直すことになり、その外国語教授法における目標・手立て・評価の仕方に、新しい地平線が立ち現れて来ることが予測される。

「学力」の問題に少し焦点を当ててみれば、上に簡略に述べたように、高校や大学での入試における和文英訳や英文和訳などの問題は、英語や日本語は対応する言語へと「意味」として等価に再生・再現が可能であるという考えを前提条件にしている。その前提を基に、特定の視点によって見出される言語間の差異に対する知識を、正解・不正解として判別するものである。そこでは、正解を得る上でのルール(特定の視点によって見出される差異に関する知識・理解＝文法・語義等の知識)の習熟が必要とされる。同様に、例えば英文和訳問題においては、英語の言語形式を意図的に認知活動の対象として選択し、その言語形式を分析・評価することで、その形式に対応する日本語の意味・内容を選択・表現する力、すなわち学習者が「メタ言語能力」を有していることも前提とされている。和文を英訳するときに行われる認知言語活動の場合は、和文による特定表現を主語・動詞・目的語等の英語固有の文法概念に対応するように内容・意味を変容させ、変容した内容・意味に対応する英語の語彙及び統語形式(構文)の選択をおこない、ここでも同様に、学習者が「メタ言語能力」を持つことが前提とされている。ただし、言語使用者にこの認知作業の常態化が強いるのは、英語の「形式」と「(意味)内容」の分断であり、英語の「(意味)内容」は日本語の「形式=(意味)内容」を介在させてしか理解されないという、パラドックスを生じさせることになっている。すなわち、英文和訳・和文英訳の問題で問われるのは、日本語と英語を静態のテキストとして固定化し、それぞれの言語の意味・内容は、事前に対応する言語の形式制限によって変容させられ、その結果生じる意味・内容に対応する言語形式を選択・表現する力である。

つまり、「形式」分析に関わるメタ言語能力を前提にして得られる「解釈」と、その「解釈」に対応する「形式」を選択する力が、問われるのだと言える。

外国語習得の側面から見れば、ここに見出されるパラドックスは、英語を英語として成り立たせている英語固有のパラダイムの中で、言語情報を自律処理する力(習得)の伸長を妨げるというものである。ただし、「思考」という側面から見れば、多くの中学・高校においてコミュニケーション活動重視の名目の下に、「コミュニケーション」が意味するものの本質を見据えることなく活動が誤多用されていることは、学習者の「メタ言語能力」を発達させることの重要性に目を閉ざす結果になっている。つまり、学習者は、異なるパラダイムによって成り立っている2言語間に、母語を介在させる形態であるにしても、差異の体系を「見出す力」、また、差異の体系から得た知識を基に「思考する力」、これら2つの力を奪われる状況に置かれていることになる。

再度、上記のような視点で外国語学習における「学力」の問題を考察してみれば、「教室」で授業を英語で行なうことに必要とされる条件とプロセス、また、日本語訳の先渡し授業や外国語教育における学力評価の基準を「態度・意欲・関心・知識」に置くこと等の妥当性に対し、一定の考察が可能になるであろうが、本稿においてはその目的が「人工言語環境下における外国語による概念形成」の可能性の検討すること、また、その研究過程から得られると予測される新しい文法観の可能性を述べることにある為、論をまたの機会に譲ることにしたい。

2. 本研究の目的

英語教育に関わる本研究の目的は次の4項目である。

1. The Total Physical Response Method (Asher, 1965,1966,1969,1972,1977)に代表されるDirect Methods の共通指導過程を抽出・分析することにより、外国語教育において語彙・文法レベルの「概念」と言語「形式」の関係を説明しうる理論を構築すること。

2. その理論・考察を軸に、目標言語を学習者に直接習得させるプロセスをプログラムしたコンピュータ・ゲーム・ソフトウェアを、外国語習得環境プロジェクト(foreign language acquisition environment project — FLACQEN Project)として、特許取得(特許第3814575号)に基づき企業との提携により開発すること。

3. 上記企画により開発された言語習得環境(FLACQEN)を学習者に経験させ、f-MRI 等を用いたブレインイメージング研究法により、時間軸に沿ったデータ収集とその分析を行うことで、外国語習得の研究に新しい方法論を提示すること。

4. 学習者のコンピュータソフトウェアにプログラム化された上記目標言語習得プロセスの学習段階及び経験回数と、目標言語の使用結果の相関分析から、学習者の脳の「目標言語構造化(初期バイリンガル化 — the incipiency of bilingualism)」が、言語習得環境(FLACQEN)を段階的に経験していくこと*1により実現可能であることを実証する。

外国語教育に関わる上記4項目は、認知言語学においては次の6項目の研究目標に対応している。

1. 外国語教育の分野を用いて、認知言語学のパラダイムを用いた言語習得の研究プログラムを提示すること。

2. 認知主体である人間が環境世界を基本レベル及び中心的なレベルで範疇化して行く段階においては、「対象概念」と「言語形式」は、「身体経験」を基盤にして、その結び付きの動機付けと関連性が高められ、その結果「意味(概念 = 形式)」が形成されることを証明すること。

3. 「意味(概念 = 形式)」形成は、コミュニケーションの場における言語使用を通して、ボトムアップ式に動態ネットワーク構造として構築されることを証明すること。

上記 2,3 の証明目標に対しては、DUB モデル(dynamic usage-based model 動態用法依存モデル) *2 を援用する。その理論においては、言語習得は、概念学習(分節・範疇化・記憶) *3 という形態でボトムアップ式に形成されたニューロン・ネットワークが機能的に結合・定着した結果*4、という結論が予測される。

4. 上記 2,3 を証明するために、認知主体が外国語の領域で「概念形成」を図ることが可能な人工言語習得環境を実験プログラムとして創出すること。

5. 上記実験プログラムによる言語習得プロセスで獲得される「意味(概念 = 形式)」は、動態的なネットワーク構造を持つことを、fMRI 等を用いた画像データの比較で証明し、言語習得は生成文法理論が前提とするような領域固有な自律的モジュールとしての言語知識に基づくものではなく、人間の持つ一般認知・運用能力発現の一形態としてあることを証明すること。

6. 上記の理論・実証研究を基に、「概念形成」及び「意味拡張」に基づく言語習得過程に即した語彙習得・文法習得理論の体系化を図り、外国語習得の教育現場に還元すること。そこで得られる文法は、Cognitive Acquisition Grammar (認知獲得文法)と銘打たれるような性格のものであり、外国語習得の実践で効果を証明できるものでなくてはならない。

3. 「言語形式」と「概念形成」の関係に関わる認知基礎理論の概要

この世界(「人間によって体験可能なすべての非言語的現実」丸山 1981)は、一面において潜在的な可能性の集積として存在しているが、集積の中に存在しているものは、言語「形式」によって切り取られる(分節される)まではあくまでも言語外部の「存在」として留まるものであり、言語の内部には「存在」していないことになる。世界(潜在的な現実)は、言語「形式」によって切り取られた時初めて、その言語の内部に切り取られたもの(分節されたもの)の「存在」が定位(差異情報に基づいてボトムアップ式にネットワーク化:embodiment)され、その定位された結果が、言語形式と結びついた形で是認される「概念」*5 となる。それゆえ、言語において語彙形式として「概念」が存在することは、主体が言語「形式」を用いて、可能性の集積体としてのこの世界から「存在」を切り取った(分節した)こと[切り取らされた(分節された)こと]が、主体によって「了解され・記憶された」ことの左証である。したがって、言語「形式」=「概念」と「記憶」の不可分の関係は、言語「形式」を用いた「切り取り行為(分節)」により、仲立ちされること(「仲だちする系」、「身分け」、「言分け」市川 1992)が必要である。こうしたことから、言語における「意味」の問題においては、言語「形式」を用いて可能性の集積体からの「切り取り(分節)行為」を通して得られた「概念」が、他者と共有(コード・社会)化される現象が立ち顕れる。つまり、コミュニケーションという「交換の場」において、使い手と受け取り手の双方がその使用に対し了解する現象が現れなければならない。または、その使用を交換することにおいて、使用に訂正・変容・拡張等を付け加える現象*6 が現れてくる。つまり、「意味」の問題においては、分節活動に基づいてボトムアップ式にネットワーク化された個々の主体が持つ「概念」形成とは異なり、コミュニケーションという場(交換)における「概念」使用の「承認・訂正・変容・拡張・縮小」といった語用論的な特徴が伴うことになる。そういったことから、言語における「意味」とは、概念化という人間の認知プロセスを通して、「概念化による表象」に「形式」が結び付けられる現象、または，それがコミュニケーションという場を通して変容又は定位される現象であり、結果であると定義付けることができる。

言語学習者は言語習得の初期段階において、必ず言語「形式(*language form*)」によって世界を

「切り取る(分節)行為(embodiment)」を経験(experience)し、「語形式を用いた切り取り(分節)行為→(複数の対象に対して同一語形式を用いた切り取り行為の繰り返しによる)情報の集約(categorization)・般化(generalization)・記憶(memorization)→概念形成(*concept formulation*)」というプロセスを経験する。「集約(categorization)・般化(generalization)」された「概念」自体は、他の「概念」と構成情報の差により差異化された状態(階層化されたネットワーク構造 → ニューロンネットワーク)で、経験の反復により学習者の脳に記憶され、特定の音韻情報に対して反応することになる。概念が構成情報の差により差異化された状態で記憶され、特定の音韻情報に対して脳の特定領域が反応できること、また逆に差異化された状態で記憶された概念が、脳の特定領域の反応（語単独・文に組み込まれた語・文法に対しての parallel distributed processing）を通して、特定の音韻情報を選択し産出できる現象こそが、学習者の脳の「目標言語構造化(初期バイリンガル化 — the incipiency of bilingualism)」と定義することができるだろう。このことから、概念の形成・獲得時の現象として、「特定の音韻情報 = 特定概念」という関係を保障するにあたり、言語情報処理に当たる脳の特定部位が、特定の音韻情報に対して特定の賦活現象を示すことが予測される。その賦活状態を、「特定語形式 = 特定概念」の「認知」現象として定義することができる。つまり、本研究の理論とその応用である言語習得環境(FLACQEN)を経験(experientialism / embodiment)することで形成された学習者の言語情報処理機構(parallel distributed processing function / ボトムアップ式ニューロン・ネットワーク)は、目標言語情報の処理時におけるウェルニッケ領域の賦活部位の違いを除いては、学習者が母語情報を処理する時と同様の賦活状態を示すことが予測される。したがってその賦活時のブレインイメージング画像を以って、「目標言語構造化(初期バイリンガル化 — the incipiency of bilingualism)」のデータとして提示が可能である。

4. 人工言語習得環境（学習者の脳に、母語の介在しない目標言語情報処理機構を創出する特許に基づくコンピュータ・ゲーム・ソフトウェア・プログラム)の概要　(特許第 3814575 号)

従来、外国語の学習にあたっては、多数の学習者対教師という学習環境が強制されることが多かった。それゆえ、学習者は各自の習得段階に合わせた学習進度も採ることができず、また、外国語によって表現されたものの「意味」を理解するためには、母国語による説明を介在されなければならず、外国語による言語「形式」=「概念」の関係を直接理解・記憶し、その結果による外国語による言語情報を直接処理できる機構を、脳内に得ることはできなかった。

本特許は、ゲームソフトという仮想空間内で、目標言語の指示音声とゲームのキャラクターの動きを一致させる言語習得活動を、3 段階にわたってゲーム使用者に経験させることで、目標言語の言語情報を直接処理できる機構を、学習者の脳内に創り出すものである。

本ゲームソフトの第１段階においては、音声化された目標言語の指示により、インストラクター役割のゲームキャラクターはその指示内容の動きする。学習者は自身のゲームキャラクターを用いて、インストラクター役割のキャラクターの動きを模倣した動きをする。このゲーム内での擬似的な言語・身体活動を通して、学習者は母語の介在なしに、直接的に目標言語で表現されたものの「概念」を形成することができる。その結果、目標言語による指示音声及びゲームキャラクターの動きを通した身体活動経験の記憶として、学習者は目標言語の「音声形式」とその「概念」の関係をダイレクトに理解し、記憶できる。学習者はこのインストラクター役割のキャラクターの動きを、目標言語の音声指示を聴きながら模倣し、実際の生活に見られる場面やスポーツ、また物語の世界を仮想世界で段階的に経験することで、母語の介在しない目標言語による指示音声の直接理解の領域を、拡大していく。　(フローチャート　01-1,2,3)

ゲームの第２段階においては、画面上にインストラクター役割のキャラクターは存在せず、学習者は目標言語音声の指示のみを聴きながら、自身のキャラクターを操作していく。学習者はキャラクターの動きを通して、生活場面やスポーツ・物語を経験し、その場面の問題を解決していくことで、言語形式と身体活動の一致という形で顕れる言語「形式」=「概念」の関係(コード)を確認・内在化していく。そうした仮想現実世界でのキャラクターによる言語と身体活動の一致と

いう経験を通して、学習者は母語の介在を必要としない構造化(ネットワーク化)された言語処理機能を強化していく。　(フローチャート　02-1,2)

第３段階においては、ゲームソフトが学習者の発話音声の音韻論的なパターンを記憶することで、学習者はゲームのキャラクターを自身の音声によって動かすことができる。場面に合った正確な発話によるキャラクターの動きと、場面の問題解決という成功体験を通して、目標言語によるコミュニケーション能力(自身が持つコードに対する自信)に裏付けを得ていく。

(フローチャート　03-1,2)

上記理由により、外国語学習者はゲームソフトという形態を通して、1 対 1 の関係において、学習者自身の学習ペースに合った外国語習得段階を経験することができる。学校という制度内で語学教師を確保し、授業という形態で多数の生徒を相手にする従来の外国語教育に比べ、一人ひとりの学習者にとって教育効果が直接的であり、教師の数も必要とされない。従来の外国語教育よりも、学習時間を軽減しながらの高い学習効果と、経済負担の削減が可能である。

このゲームソフトにおいては、仮想世界においての日常生活や物語の場面での問題を、言語・身体活動の一致という形態で解決しながら自身の「コード」を確認することができるので、それによって得られた自信は、現実のコミュニケーション場面において対処する能力の裏付けになる。また、ゲームという仮想世界で言語習得活動を行なうために、従来の外国語学習のように他者による評価を気にしながら、間違うことを気に病むなどのストレスを感じる必要がない。したがって、外国語習得を阻害する心理要因を大幅に軽減することができる。また、原理的にこの理論に基づいたゲームソフト企画は、英語に関わらずどの国の言語を学習する時にも適応が可能で、学習効果においても、どの国の言語に対しても高い習得効果が期待できる。

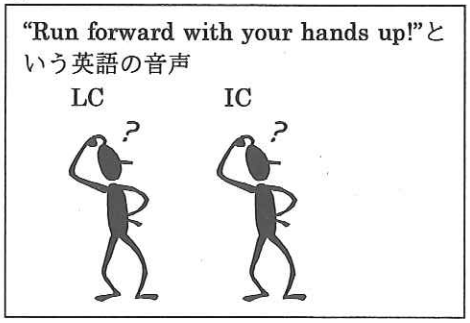
【フローチャートによる説明】

「外国語による脳の構造化(ネットワーク化)を可能にするゲームソフト」

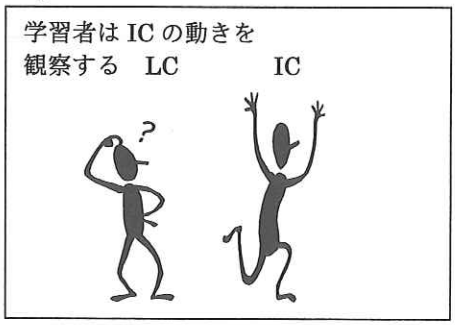
(各図は、ゲームソフトの企画概念を簡易図として表現し、LC は学習者操作キャラクター、IC はインストラクターキャラクターを表す。)

第１段階　01

-1

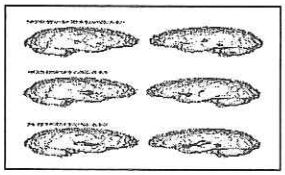


-2



-3





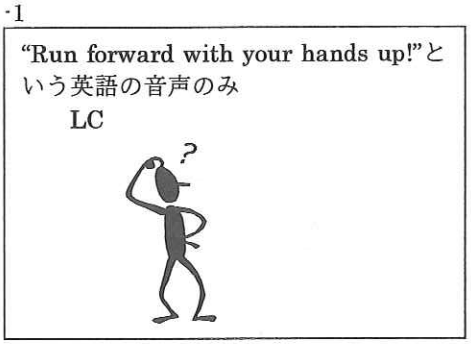
『高次機能のブレインイメージング』川島隆太 医学書院

[言語という認知システムを通常の科学的方法論に基づき解明してい

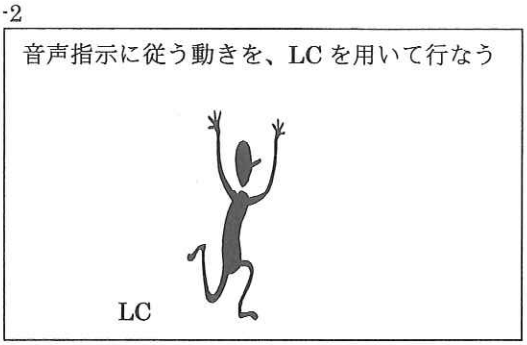
くこと ― Fauconnier 1997:36、 身体性(embodiment)と認知に関わる研究 ― Johnson 1987]、

第 2 段階　02

-1

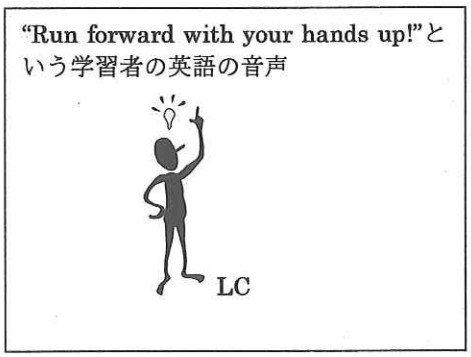


-2



第 3 段階　03

-1



-2



5. f-MRI ブレインイメージング画像を用いた実証実験デザイン

ここまで、言語「形式」と「概念」の対関係は身体活動を通して形成されるものであり、それは段階化された言語習得環境を学習者が経験することで、外国語習得にも応用可能であるという言語習得理論の概要と、特許に基づいたその応用方法を記した。この外国語習得理論とその応用である言語習得環境を用いた外国語学習指導においては、目的が学習者の母語と同様の外国語による言語情報が処理できる機構を、学習者の脳内に直接創出すること(目標言語による言語構造化→バイリンガル化すること)であることから、学習者が外国語による言語情報を処理する際には、音韻表象を処理するウェルニッ野の賦活領域の違いを除いては、脳内に母語による言語情報処理と同様の賦活領域が現れることが予測される。必然的にそれは、Direct Methods 以外の訳読式のような学習過程での目標言語情報の処理とは違う脳の賦活現象を、ブレインイメージング画像が示すことを予測させる。したがって、本研究の実証実験においては、段階化された言語習得環境を経験する学習者の脳の賦活状態を、時間軸に沿って画像データに採集し、それを母語による言語処理情報を処理する場合の賦活状態と比較すること、併せて言語運用能力テストの結果と比較分析することを、実証実験として計画するものである。

＊1　FLACQEN を製品化し、実証実験を行なうことができれば、認知言語学における次の領域の問題を解決できると考えられる。categorization ―Lakoff 1987; 辻 1991; Taylor 1995, prototype theory ― Elenor Rosch 1974; Taylor 1995, image schema, embodiment (身体性) ― Johnson 1987, experientialism(経験基盤主義) ― Lakoff 1987, ボトムアップ式ネットワークの形成 ― Dabrowska 1997; Tomasello 2000,

意味構築のメカニズムの解明 — Langacker 1987a:Ch.4; Fauconnier 1997:Ch.2
言語の実体に対する生成文法論の誤謬 — 山梨 2000:Ch.6

＊2 DUB model — ボトムアップ式のネットワーク型言語習得モデル — 言語習得は言語の使用、つまり実際の認知的な言語運用を通してボトムアップ式にスキーマ化されていく (Langacker 2000)。

＊3 言語習得とは、知識を創出する意味で学習がなされること (Dabrowska 1997; Barlow and Kemmer 2000; Tomasello 2002)。膨大なネットワークを地道に構築していく作業 (Dabrowska 1997; Tomasello 2000)。

＊4 connectionism — 脳の神経細胞を模した多数のユニットという単位からなるネットワークを設け、個々のユニットが局所的、並列分散的に興奮を伝達し合い、ネットワーク全体の興奮パターンとして情報を表現し、ネットワークの結合強度の変化によって情報処理がなされる (守 1996)。→ PDP model (parallel distributed processing model 並列分散処理モデル)と繋がっている。

＊5 conceptualization (概念化) — 人間が言語を用いて世界を分節するということは、言語の本質は世界を意味づけることにある(池上 1998; Langacker 1987a:12; Fauconeier 1999:96; Tomasello 1999:Ch.5)。

＊6 メンタル・スペース理論 — 言語の意味は、実際の運用の場において認知レベルで生成・復元される(Faucconier 1994)。

References

Asher, James J. 1965. The strategy of the Total Physical Response: An Application to Learning Russian. *International Review of Applied Linguistics Language Teaching*, Vol.3. Heidelberg: Julius Groos Verlag

Asher, James J. 1966. The Learning Strategy of the Total Physical Response: A Review. *The Modern Language Journal* 50: 79-84

Asher, James J. 1969a. "The Total Physical Response Approach to Second Language Learning." *The Modern Language Journal* 53:3-17

Asher, James J. 1972. Children's First Language as a Model for Second Language Learning. The Modern Language Journal 56:

Asher, James J. 1977. *Learning Another Language Through Actions — The Complete Teacher's Guidebook.* Los Gatos, CA: Sky Oak Production, Inc.

Chomsky, Noam. 2004. *The Generative Enterprise Revisited: Discussions With Riny Huybregts, Henk Van Riemsdijk, Naoki Fukui, and Mihoko Zushi.* Mouton de Gruyter.

Mandler, Jean M. 2004. *The Foundations of Mind: Origins of Conceptual Thought.* Oxford University Press.

Tomasello, Michael. (ed.). 1998. *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure.* Lawrence Erlbaum.

Tomasello, Michael. 2003. *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition.* Harvard University Press.

市川浩. 1992. 『精神としての身体』講談社.

小林春美・佐々木正人(編). 1997. 『子どもたちの言語獲得』 大修館書店.

丸山圭三郎 1984. 『文化のフェティシズム』 勁草書房

山梨正明 2000. 『認知言語学原理』くろしお出版

山梨正明 2001. 『言語科学の身体論的展開 — 認知言語学のパラダイム』 辻幸夫 (編) 18-44

FLACQEN C. G. S. Program
(Foreign Language Acquisition Environment Computer Game Software Program)
製作：Omnicreation Co. Limited (有限会社 オムニクリエーション 代表：染宮博)

英語アニメーション映画における日本語サブタイトル
—サブタイトルの表現性について—

永山友子
神奈川大学外国語学部非常勤講師

要旨

英語アニメーション映画の日本語サブタイトル版は，複数の表現モード（「見せる」，「読ませる」）を用いるマルチモード・ディスコースである。サブタイトルとして表示されたキャラクターのセリフを画像から取り出して分析しても，恐らく十分な結果は得られない。サブタイトルは，同時に映し出される画像とかかわり合って初めて意味をなす。サブタイトルは，画面上に他の言語表記（看板や表示など）が特に埋め込まれていなければ，画面下側に横書きされる。既に何らかの言語表記がある場合には，右側や左側に縦書きとなる。画面は，リアルな映像ではなくパターン化されている画像とテキストの組み合わせであると言えよう。画像が字数の少ないサブタイトルの理解を促す環境となり，サブタイトルも画像の表現内容を補足する。画像と同時に映し出されるため，サブタイトルが英語のセリフを詳細に訳し出す必要はない。複数のモードを使い分ける表現は，ひとつのモードを使い続ける表現と比べて，相乗的な表現性を獲得できると考えられる。

【キーワード】英語アニメーション映画，日本語サブタイトル，マルチモード・ディスコース，
サブタイトルの表現性，画像とテキストの組み合わせ

1. はじめに

本研究は，英語アニメーション映画における，日本語サブタイトル[1]の表現性を分析する。英語映画のサブタイトル版を見に行くと，観客は画像を見ながらサブタイトル（＝日本語表記）を読み，英語音声を耳にする。サブタイトルは，サブタイトルと同調して映し出される画像とかかわり合って初めて意味をなす。このような視点から，サブタイトルを，「画像と英語音声に対応してサブタイトルをつける」という言語行為が産出したテキストとして捉えると，画像とテキストのかかわり合いが見えてくる。

2. 問題の所在

2.1. 表現性

ある表現の「表現性」は，その表現が「何を，どのように，どの程度まで表しているか」である。わたしたちが何かを表現しようとするとき，「見せる」，「聞かせる」，「読ませる」などの方法が考えられる。外国語映画の日本語サブタイトル版は，ふたつ以上の表現モードを用いるマルチモード・ディスコース（multimodal discourse）の一種である。「モード」は，「ディスコースと複数のタイプの（相互）行為を同時に具現化できるような，記号となるリソース（筆者訳）(Kress and van Leeuwen, 2001: 21-22)」と定義される。

2.2. マルチモード・ディスコース（multimodal discourse）

現代コミュニケーションにおける画像やテキストの配置を社会記号論の観点から分析した Kress and van Leeuwen (2006) の分類に従うと，アニメーション映画の画面は，リアルで写実的な写真とは違ってパターン化されている画像とテキスト（ここでは，日本語のサブタイトル）の組み合わせであると言えよう。

本研究は，画像の構成やサブタイトルの配置という即時的で（immediate）即物的な（material）状況を「環境」と呼ぶ。「環境」は，「コンテキスト」の一種である。「コンテキスト」は，コミュニケーションの参加者が背景としてもっているとされる社会文化的な知識である。更に，「コンテキスト」は，「社会一般の営みの過程で生み出されているコンテキスト」とコミュニケーションの現場で「織りなされていくコンテキスト」の 2 つに分かれる。サブタイトルに関する画像のような，即時的で即物的な「環境」は，後者の一種として位置づけられる。

2.3. リサーチ・クエスチョン

サブタイトルとして表示されたテキストを，画像から取り出して分析しても，恐らく十分な結果は得られない。ふたつ以上のモードが機能するマルチモード・ディスコースにおいて，画像とテキストは，どのようにかかわり合っているのだろうか。モードとモードがかかわり合う過程において，マルチモード・ディスコースは，どのような表現性を得ているのだろうか。

3. データ

3.1. 『ティム・バートンのコープス・ブライド』（2005 年，アメリカ）

マイク・ジョンソンとティム・バートンが共同監督を務めた人形アニメーション映画であり（以下，『コープス・ブライド』），アメリカ公開は 2005 年 9 月 23 日，日本では 2005 年 10 月 22 日に公開された。原題は，*Tim Burton's Corpse Bride*（直訳は，「ティム・バートンの死体の花嫁」）。19 世紀のヨーロッパを舞台に，成金魚屋の息子ビクター・バン・ドート，没落貴族の娘ビクトリア・エバーグロット，結婚を約束した恋人に裏切られて死んだ死体の花嫁エミリーの間で起こるラブ・ロマンスを描く。MPAA（Motion Picture Association of America　米国映画協会）により PG（Parental Guidance　親同伴が望ましい）と指定され，第 78 回アカデミー賞®最優秀長編アニメーション作品賞にノミネートされた。

3.2. 『ウォレスとグルミット　野菜畑で大ピンチ！』（2005 年，イギリス＝アメリカ）

ニック・パークとスティーブ・ボックスが共同監督を務めたクレイアニメーション映画であり（以下，『ウォレスとグルミット』），アメリカでは 2005 年 10 月 8 日，イギリスでは 2005 年 10 月 14 日，日本では 2006 年 3 月 18 日に公開された。原題は，*Wallace & Gromit in The Curse of the Were-Rabbit*（直訳は，「ウォレスとグルミット，ウサギ男の呪い」）。野菜畑を荒らし回るウサギ男を捕獲しようと試みる，発明家のウォレスとパートナーのグルミット（犬）の活躍を描く。MPAA による指定は G（General　一般向き），『コープス・ブライド』と同時に第 78 回アカデミー賞® 最優秀長編アニメーション作品賞にノミネートされ，同賞受賞を果たした。

4. 分析

4.1. 『コープス・ブライド』[2]

日本語表記は縦書きと横書きが可能であるが，サブタイトルには，その両方が見られる。縦書きの場合には，画面左側に配置されたシーンと右側に配置されたシーンがある。図 1 は映画の冒頭でビクターとビクトリアの結婚式のリハーサルが告知されるシーン，図 2 はビクターの両親バン・ドート夫妻が家を出て馬車に乗り込むシーンである。図 1 のサブタイトル（「結婚式／リハーサルです！」）は左側に縦書き，図 2 のサブタイトル（「なかなかだ」）は，下部に横書きとなっている。



図 1　結婚式リハーサルの告知
©2006 Warner Bros. Entertainment Inc.

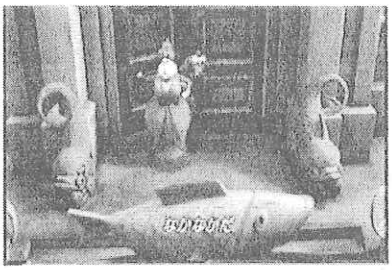


図 2　馬車に乗るバン・ドート夫妻
©2006 Warner Bros. Entertainment Inc.

バン・ドート一家の乗った馬車がエバーグロット卿邸（ビクトリアの家）に着いた後，結婚式のリハーサルが行われる。ところが，緊張したビクターが何度も間違えてなかなか進まない（図 3）。そこへ，バーキス卿が現れる。居間に入ってきた執事が，バーキス卿の名刺をエバーグロット卿（ビクトリアの父親）に見せる（図 4）。



図 3　結婚式のリハーサル
©2006 Warner Bros. Entertainment Inc.

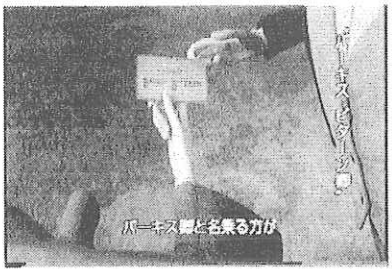


図 4　バーキス卿の名刺
©2006 Warner Bros. Entertainment Inc.

図 3 は，リハーサルの最中に ト書き（「3 時間後…」　"Three hours later …"）が言語表記として表示されているところ，図 4 では，画像に埋め込まれた言語表記（ "~ Lord ~ Barkis

Bittern"）が画面の中央に表示されている。図3では，中央に表示されたト書きに対応するサブタイトルが右側に縦書き，同調する牧師のセリフのサブタイトル（「ビクター・バン・ドート／最初から　もう一度」）が下部に横書きされている。図4では，図3と同じように，名刺に書かれた名前が中央に映し出される。執事のセリフのサブタイトル（「バーキス卿と名乗る方が」）は下部に横書き，名刺の表記に対応したサブタイトル（「バーキス・ビターン卿」）は，画面右側に縦書きされている。

結局，結婚式は延期となり，動揺したビクターは，その場をひとりで飛び出す。外に出たビクターは，暗い森の中で結婚式の誓いのことばを練習する。そのことばが地下の死者の世界に届き，ビクターは，死体の花嫁エミリーによって死者の世界に引き込まれる。困惑したビクターは，何とか逃げ出そうとする。逃げる途中で，ビクターは「セカンド・ハンド・ショップ」の店先を走り抜ける（図5）。

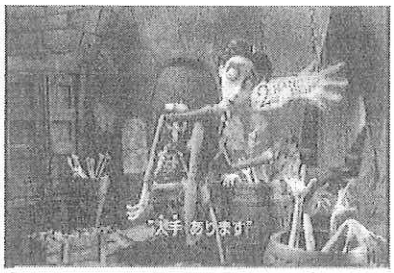


図 5　「セカンド・ハンド・ショップ」
©2006 Warner Bros. Entertainment Inc.



図 6　馬車の後ろの掲示
©2006 Warner Bros. Entertainment Inc.

図5のシーンにおけるビクターのセリフはなく，サブタイトルは，背後に見える店の看板の言語表記（"2nd Hand Shoppe"）に対応している。ここの"2nd Hand"は，「中古の」・「ふたつ目の手」というふたつの意味に読み取れるジョークである。"2nd Hand Shoppe"には，「中古品の店」・「ふたつ目の手の店」というふたつの意味がある。画面の右斜め下には，店で売っている「手」が見える。この面白さに観客の注意を惹くため，サブタイトルの「人手」の上には傍点がある。「助け」という意味の「人手」と文字通りの意味の「人の手」がかけられている。

一方，ビクターがいなくなってしまった後，エバーグロット卿邸では，次の日の夜明けまでバン・ドート夫妻がビクターを見つけるのを待つことになる。バン・ドート夫妻は，ビクターが花嫁と駆け落ちしたという知らせを気にしながら馬車で自宅へ戻る。その馬車の後ろに，ビクターを探す「尋ね人」の掲示（言語表記と似顔絵）がある。同調するバン・ドート夫人のセリフのサブタイトル（「もう夜が明ける／あの子は　どこ？」）は画面下部に横書き，掲示の内容に対応したサブタイトル（「尋ね人」）は右側に縦書きされている。掲示の内容（"HAVE YOU SEEN ME?／Victor Van Dort／Hair: Brown／Eyes: Brown／Clothes: Brown／CONTACT HIS MOTHER"　「わたしを見ましたか？／ビクター・バン・ドート／髪：茶色／目：茶色／洋服：茶色／母親まで連絡をください）の要約（「尋ね人」）がある。

現代日本語表記においては，横書きの表記を左から右へ読み，縦書きの表記を上から下へ読む。一行を左から右へ読みながら，上の行から下の行へ読んでいく。画像とテキストが組み合わされ

たマルチモード・ディスコースを見たり読んだりするときにも，同じ読字方向が当てはまる（図 7 参照）。画面を見る観客は，上部に示された画像を見てから下にあるサブタイトルを読むか，左側に示された画像を見てから右にあるサブタイトルを読むことになる。

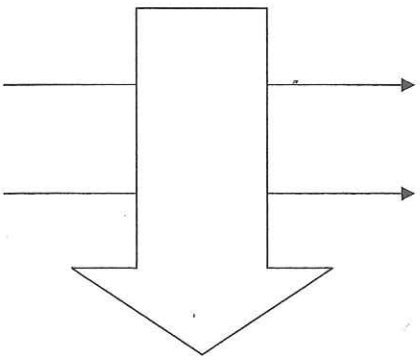


図 7　画面における読字方向

サブタイトルがなければ分からない画像の解釈を，サブタイトルが助ける。但し，図 1 においては，サブタイトルが画面左側に縦書きされていた。このシーンでは，先にサブタイトルを読んでから画像を見ることになる。画面右斜め下のオープニング・クレジットと表示が重ならないための工夫がなされたものと考えられる。

4.2.　『ウォレスとグルミット』[3]

『コープス・ブライド』で観察された画像とテキストを組み合わせる配置のパターンは，『ウォレスとグルミット』においても見受けられる。

主人公のウォレスとグルミットは，『アンチ・ペスト』として野菜畑を荒らす害獣を駆除する仕事をしている。ウォレスは，創造的な発明をくり返すが的を外すことが多くて，賢明なグルミットに大きく助けられる。犬のグルミットは，人間のことばを理解するが話さないキャラクターとして描かれる。グルミットが起きるときには，部屋にあるパネル（図 8）が点滅して音が鳴る（図 9）。それから，ベッドが立ち上がり，グルミットは滑り台のようなシュートを通り抜けて台所に行く。台所の壁には，ウォレスからグルミットへの指示を示すパネルがある（図 10）。このように，『ウォレスとグルミット』には，画像に多くの言語表記が埋め込まれている。

図 8 はグルミットの部屋の壁に掛けられているパネルが点滅しているシーン，図 9 はグルミットが起きるシーンである。「発射開始」のブザーが鳴ると，グルミットは目を覚ます。図 8・図 9 ともに，壁に掛けられたパネル上の表記（"ACTIVATE LAUNCH"　「発射開始」）に対応するサブタイトルは，画面下部にある。

図 10 は，台所に降りてきたグルミットが見ているパネルである。4 つのボタン（"Slippers, Breakfast, Newspaper, Walkies"）があり，"Breakfast"の部分が点滅している。ウォレスの部屋にも同じようなパネルがあり，ウォレスの押したボタンが台所のパネルで光る。図 10

では，"Breakfast"（「朝ごはん」）の指示が出されてそのボタンが光り，対応するサブタイトルが下部に横書きされている。グルミットのセリフはない。



図 8　グルミットの部屋のパネル
© 2006 Aardman Animations Ltd.
© 2006 DreamWorks Animation LLC.



図 9　グルミットの起床
© 2006 Aardman Animations Ltd.
© 2006 DreamWorks Animation LLC.

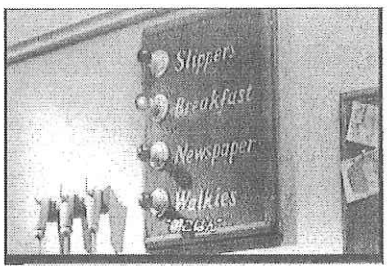


図 10　台所のパネル
© 2006 Aardman Animations Ltd.
© 2006 DreamWorks Animation LLC.

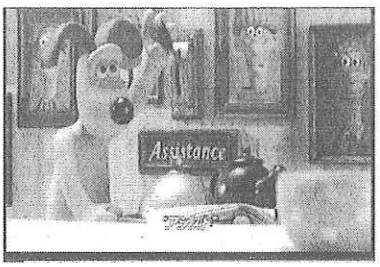


図 11　グルミットのアシスト
© 2006 Aardman Animations Ltd.
© 2006 DreamWorks Animation LLC

ウォレスもグルミットと同じように，機械仕掛けを通り抜け，天井に開く穴から自分の椅子に降りる。穴に引っかかって降りられないときには，グルミットが「アシスト」のスイッチを入れてウォレスを押し出す。"Assistance"と書かれたパネルの上にスイッチがある（図 11）。図 11 でも，パネルの表記にサブタイトル（「アシスト」）がつけられており，画面下部に横書きされている。

下の図 12 と図 13 においても，画像の中に言語表記がある。図 12 は，通報を受けてウサギを退治したウォレスとグルミットが帰るのを見送りながら，「今年も／巨大野菜コンテストが開ける」と住民が感謝して言うシーンである。セリフのサブタイトルは，画面下部に横書きされている。道路の上に掲げられたバナーの表記（"GIANT VEGETABLE COMPETITION / 4 DAYS TO GO!"）に対応するサブタイトル（「コンテストまで 4 日」）は，右側にある。図 13 では，グルミットがカレンダーを見ながら，野菜コンテストまでの日にちを数えている。このカレンダーにも言語表記（"GIANT VEGETABLE COMPETITION / AT TOTTINGTON HALL"）があり，サブタイトル（「巨大野菜コンテスト／会場：トッティントン邸」）も下部にある。



図 12　野菜コンテストのバナー

© 2006 Aardman Animations Ltd.
© 2006 DreamWorks Animation LLC.



図 13　カレンダーを見るグルミット

© 2006 Aardman Animations Ltd.
© 2006 DreamWorks Animation LLC.

ひとつの画面にふたつのサブタイトル（セリフと画像に埋め込まれた言語表記）をつける必要があるシーンにおいて，セリフのサブタイトルを画面下部，言語表記に対応するサブタイトルを画面右側に配置するパターンは，『コープス・ブライド』にも見られた（図 3・図 4・図 6）。サブタイトルがひとつあるシーンでは，そのサブタイトルは画面下部に現れる。図 12 と図 13 を比べると，配置パターンの違いがよく分かる。ふたつのシーンの違いは，キャラクターのセリフがあるかないかという点である。図 12 とは異なり，図 13 のシーンでは，ことばを話さないグルミットのセリフはない。従って，サブタイトルを必要とするのは，グルミットが見ているカレンダーの表記のみになる。通常であればセリフに対応するサブタイトルが配置されるスペースが空いており，画像に埋め込まれた言語表記に対応したサブタイトルが下部に来ている。

5. 考察

画像とサブタイトルの関係がとても面白く現れているのは，図 5「セカンド・ハンド・ショップ」であろう。このシーンでは，画像に埋め込まれた言語表記と画像そのものがサブタイトルの対象になっている。"2nd Hand Shoppe"の意味が分からなければ，画面の中に映し出されている「人の手」が見えても解釈のしかたが分からない。そこで，サブタイトルに傍点を付けて「人手」として，文字通り以外の意味を匂わせる。一方，「人手あります」としたサブタイトルを読むだけでは，わざわざつけられている傍点の機能が分からない。サブタイトルと同調して映し出される画像も考え合わせなければ，文字通りの「人の手」を売る店があるということも分からない。

『コープス・ブライド』と比較すると，『ウォレスとグルミット』には，画像そのものに言語表記を埋め込んで語らせるシーンが多い。犬であるグルミットは，設定上ことばを話さない。グルミットのセリフにサブタイトルをつけることはできない。その代わりに，グルミットが見ているモノ（図 13「カレンダー」），操作する機械のスイッチ（図 11），グルミットの周りにあって観客に見える言語表記（図 8・図 9「グルミットの部屋のパネル」，図 10「台所のパネル」，図 12「野菜コンテストのバナー」）にサブタイトルが対応している。グルミットが登場する画像上に多くの言語表記を埋め込み，グルミットの意思や行動を「見せる」必要があると考えられる。日本語サブタイトル版についても，同じことが言える。英語表記が読めない観客に対して表記の内容を訳

し出して「見せる」，つまり，日本語のサブタイトルを「読ませる」必要がある。

すると，画面のどこにサブタイトルを配置するかという問題が起きる。ほとんどの場合，サブタイトルは画面下部，画面右側にあった。上部に配置された画像が，「環境」として下部に示されたテキストの表現を補う。画像を見た後で読まれるサブタイトルが，それまで観客が見てきた画像の理解を遡る形で誘導する。縦書きも横書きもできる日本語表記の柔軟性がうまく活かされ，画像を見てからサブタイトルを読むというパターンが作られていた。

6. 結論

サブタイトルが使用可能な画面上のスペースは限られ，しかも英語音声と同調しなくてはならないという時間の制限が課される。一方，画像が字数の少ないサブタイトルの理解を促す環境となり，サブタイトルも画像の表現内容を補足する。画像と同時に映し出されるので，サブタイトルが英語のセリフを詳細に訳し出す必要はない。

英語が分からない観客にとって，サブタイトル版と日本語吹き替え版のどちらの方が分かりやすいか，という大きな問題もある。もちろん，両方ともにそれぞれの長所と短所がある。字が十分に読めない子ども向けの映画なら，吹き替え版の方が適切であると思える。一方で，日本語表記という視点からサブタイトル版を考えると，日本語音声にはない表現性に気づく。縦書きと横書きが可能であり，漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字という4種類の文字体系が使用できる。傍点などの文字装飾もできる。聞こえてくるオリジナルの英語音声も，決して無意味な雑音にはならない。セリフを聞き取れなくても，観客は英語を聞いているということは分かっている。吹き替え版では消されてしまう，キャラクターの前言語的な声質や発声上の特徴は，文化差があるものの，話し手の気持ちを伝えうるひとつの重要な表現モードである（定延，2005）。複数のモードを使い分ける表現は，ひとつのモードを使い続ける表現と比べて，互いを補う相乗的な表現性を獲得すると考えられる。

注

[1] ここで言う「サブタイトル」は，「字幕」を指している。
[2] 以下の画像は，DVD『ティム・バートンのコープス・ブライド』（発売元：ワーナー・ホーム・ビデオ）から引用した。
[3] 以下の画像は，DVD『ウォレスとグルミット　野菜畑で大ピンチ！』（発売元：角川エンタテインメント）から引用した。

参照文献

Kress, Gunther and van Leeuwen, Theo, *Multimodal Discourse: The Modes and Media of Contemporary Communication*, London: Edward Arnold, 2001.

Kress, Gunther and van Leeuwen, Theo, *Reading Images: The Grammar of Visual Design*, 2nd edition, London and New York: Routledge, 2006.

定延利之　(2005)　『ささやく恋人たち，りきむレポーター　—口の中の文化』岩波書店。

「あげる」と「くれる」の受益性について
- 話し手の利益と共益関係の観点から -

野澤元[1]・横森大輔[2]・白土保[1]
1. 情報通信研究機構・2. 京都大学大学院人間・環境学研究科

〈要旨〉
動詞「あげる」と「くれる」が表す意味を、具体的な授与行為ではなく、それによって実現される抽象的な与益行為として考えることで、これらの用法制約を、与益行為における話し手の意味役割によって規定することができる。また、話し手が直接参与しない、他者間の与益行為を表す場合の制約についても、話し手と他者の間の共益性によって説明することができる。
【キーワード】
あげる、くれる、授与行為、与益行為、共益性

1. はじめに

動詞「あげる」、「やる」、「くれる」の用法制約についてのこれまでの研究では、これらの動詞の意味は何らかの授与行為として考えられてきた。そして、それらの用法制約は、話し手自身が授与行為に参与する場合には、(a) 話し手がどのような意味役割を担うのか、また、他者間の授与行為では、(b) それぞれの参与者が話し手の部内者なのか、それとも、部外者なのか、もしくは、(c) 話し手がどの参与者と近い視点を持つのか、といった観点から検討されてきた。

これに対して、本稿では、これらの動詞の意味を、具体的な授与行為によって実現される、抽象的な与益行為として捉え、また、それらの用法制約を話し手の意味役割のみによって規定する。その上で、他者間の与益行為を表す場合の制約については、行動生態学的な観点から、血縁性や互恵性といった、対人関係における利益の構造に基づいて説明する。なお、本稿では、「やる」については、丁寧さの点で異なるが、「あげる」とほぼ同じ意味的性質を持つ動詞と考え、直接は検討の対象とはしない。

2. 授与行為としての「あげる」と「くれる」

2.1. 授与行為における話し手の意味役割

日本語には、「渡す」、「与える」、「授ける」、「贈る」、「やる」、「あげる」、「くれる」等、授与行為を表す様々な動詞があるが、これらの用法にはそれぞれ違いがある。大辞林の第二版の定義では、(1) に示すように、「渡す」が比較的広い文脈で用いられるのに対して、「与える」と「授ける」には授与・受領者間の社会的地位に関する制約があり、また、「贈る」には授与の目的の点での制約があるとしている。より口語的な「やる」については、「与える」と「授ける」と同様に、社会的地位に関する制約があり、「あげる」は丁寧さの異なる「与える」と「やる」の代替表現だとしている。

(1) a. 渡す : (3) 人・物を他に移す。(ア) 別の人の手に移す。(イ) 他の人の所有物とする。
b. 与える : (1) 自分の所有する物を目下の相手に渡しその者の物とする。やる。授ける。
c. 授ける : (1) 神仏や上位者が下位の者に与える。
d. 贈る : (1) 人に感謝・愛情・支援などの気持ちを表すために金品を与えたり，行動に表したりする。
e. やる : ❶ 他人に物を与える。(1) 同等またはそれ以下の人に物を与える。
f. あげる : (12)「与える」「やる」の丁寧な言い方。

g. くれる : (1) 他者が話し手または話し手側の人に物を与えることを受け手の側から言う。

これらに対して、「くれる」は、授与行為における話し手の意味役割という、少し異なる性質によって特徴付けがされている。しかし、実際には、このような話し手の意味役割に関する制約は、「くれる」だけではなく、「やる」と「あげる」にも存在する。

(2) a. 僕は直輝に本をあげた (やった)。
b. * 直輝は僕に本をあげた (やった)。
(3) a. 直輝は僕に本をくれた。
b. * 僕は直輝に本をくれた。

(2) を見る限りでは、「あげる (やる)」では、授与者が話し手で、受領者が他者であり、また、(3) を見る限りでは、「くれる」では、授与者が他者で、受領者が話し手でなければならないように思える。従って、「あげる (やる)」と「くれる」の用法には、(4) のような制約を仮定することができるだろう。(2b) は、他者から話し手への授与、(3b) は、話し手から他者への授与であり、これらの制約を満たしていないため容認されないことになる。

(4) あげる : 授与者 - 話し手・受領者 - 他者
くれる : 授与者 - 他者・受領者 - 話し手

2.2. 他者間の授与行為

しかし、実際には (4) の制約は、「あげる」と「くれる」の用法を正しく一般化していない。(5) が示すように、これらの動詞は、話し手が役割を担わない、他者間の授与行為を表すこともできる。

(5) a. 直輝は章裕に本をあげた。
b. 直輝は章裕に本をくれた。

これに対して、大江 (1975) が提案する (6) の制約は、(4) とほぼ同じであるが、他者間の授与行為の点では、より事実と整合している。この制約は、(4) の仮説よりも緩く、「やる (あげる)」の授与者は話し手以外であっても良いことになっており、(5a) が自然な文であることと整合する。

(6) 「ヤル」 与える人 : 話し手または話し手以外の人
受取る人 : 常に話し手以外の人
「クレル」 与える人 : 常に話し手以外の人
受取る人 : 常に話し手 (大江 1975: 31 改変)

ただ、(6) にも問題がある。先ず、「あげる」の受領者は、(7a) が示すように、どの様な他者でも良いわけではない。また、(7b) が示すように、「くれる」の受領者は、必ずしも話し手である必要はない。

(7) a. * 直輝は僕の弟に本をあげた。
b. 直輝は僕の弟に本をくれた。

つまり、「あげる」と「くれる」の用法には、直感的には、授与行為における話し手の、授与者や受領者としての意味役割に関する制約があるように思われるが、実際には、話し手が参与しない他者間の授与行為を表すことができ、また、その場合の他者の性質にも、何らかの制約が存在するのである。

2.3. 話し手の拡張と他者の限定

「あげる」と「くれる」によって、他者間の授与行為を表す場合の制約は、それらの他者と話し手の関係性によって規定できるかもしれない。大江は、話し手の定義について (8) のように述べている。

(8) a. 話し手と密接に関係する (と話し手が考える) 人 (大江 1975: 32)
b. 一番よい例は話し手の親族であるが、話し手の気持ちによってその範囲はかなり伸縮

する　　(大江 1975: 33)

つまり、大江にとって、「話し手」とは、話し手本人だけでなく、話し手の関係者にまで拡張されている。

牧野 (1996) も、似たような手法によって、「あげる」と「くれる」の用法制約を一般化している。彼は、話し手から見て「ウチ」の関係にある人物と、「ソト」の関係にある人物を (9) のように規定し、(10) のような制約を提案している。

(9) a.　ウチ人称 : 話し手か話し手が発話時に心理的に自分のウチの人だと認知している人
　　b.　ソト人称 : 話し手が発話時に心理的に自分のソトの人だと認知している人
(10)「あげる」の受け手はソト人称、「くれる」の受け手はウチ人称…　　(牧野 1996: 73)

また、寺村 (1982) においても、一人称、二人称、三人称に対応する形で、「話し手」、「話し相手」、「第三者」の区分を設けて、これらの動詞が表す授与行為における方向性について論じているが、「…いわゆる『一人称』は、話し手自身だけでなく、その授受関係において、話し手が自分の側にあるもの、" 内側 " のものと意識するものはすべて入る (ibid.: 134)」と述べている。

これらの提案を踏まえると、(4) の仮説は (11) のように修正すべきかもしれない。

(11) あげる : 授与者 - 話し手か、その部内者・受領者 - 話し手にとっての部外者
　　くれる : 授与者 - 話し手にとっての部外者・受領者 - 話し手か、その部内者

実は、(5) において、共に他者である直輝から章裕への授与が、「あげる」と「くれる」の両方で容認されたのは、このような制約と矛盾しない形で、参与者と話し手の関係性の解釈が変動するためだと思われる。実際、(12) のように、話し手との関係性が明示されると、容認されなくなる。

(12) a.　*(隣に住んでいる) 直輝は (僕の弟の) 章裕に本をあげた。
　　b.　*(僕の弟の) 直輝は (隣に住んでいる) 章裕に本をくれた。

しかし、(11) の規定も完全ではない。先ず、話し手から見た部内・部外者性には程度性がある。また、部内・部外者性は相対的なものであり、極端な場合には、(13) が示すように、全く同じ参与者による授与において、部内・部外者性が逆転することもある。従って、部内・部外者性に何らかの独立した指標がなければ、例文の容認度と部内・部外者性の関係をめぐって循環論に陥る可能性がある。

(13) a.　母は弟に誕生日プレゼントをあげた。
　　b.　弟は母に誕生日プレゼントをあげた。

2.4. 視点による説明

他者間の授与行為を表す場合の制約を、話し手の「視点」よって記述する試みもある。大江 (1975) は、話し手の定義を、話し手との関係性だけでなく、(14) に示すように、話し手の視点によっても、一定範囲の他者へ拡張している。

(14) a.　「話し手または話し手に近い人の位置」をさすだけでなく、「授受動詞が描写する授受のできごとを、その当事者として内部から主観的に眺める人の位置」を表す
　　b.　…これを『視点の軸』と呼ぶことにする　　(大江 1975: 33)

このような話し手の視点による一般化を、より明示的に試みたのが久野すすむ (1978) である。彼は、(15) のように、他者に対する話し手の共感度を、話し手の視点の配置によって規定し、また、(16) に示すように、話し手の視点によって、「やる (あげる)」と「くれる」の用法制約を記述した。

(15) 共感度 : 文中の名詞句の x 指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感 (Empathy) と呼び、その度合い、すなわち共感度を E(x) で表す。共感度は値 0(客観描写) から値 1(完全な同一視化) までの連続体である。　　(久野 1978: 134)
(16) 授与動詞の視点制約 :「クレル」は、話し手の視点が、主語 (与える人) よりも与格目的語 (受

け取る人）寄りのときのみに用いられる。「ヤル」は、話し手の視点が主語寄りか、中立の時のみに用いられる。（久野 1978: 141）

(16) の仮説によると、(2b) と (12a) は、話し手の視点が主語、つまり、授与者寄りでなければならないという制約に違反し、また、(3b) と (12b) は、話し手の視点が与格目的語、つまり、受領者寄りでなければならないという制約に違反しているため、容認されないことになる。また、(13a) と (13b) では、話し手が、前者では母寄りの視点、後者では弟寄りの視点を取っていたという説明が可能である。

しかし、視点による説明の最大の問題は、話し手との部内・部外者性にも増して、独立した指標がなく、循環論に陥りやすいことである。久野はこの点に関して、(17) のような、「対称詞の視点ハイアラーキー」という概念を提案し、特定の例では、話し手の視点が独立して定義できることを示そうとした。

(17) 対称詞の視点ハイアラーキー：対称詞 x（例えば John）と、x に依存する対称詞 f (x)（例えば、John's wife）がある場合、話し手の x と f (x) に対する共感度に、次の関係が成り立つ。
E (x) > E (f (x))（久野 1978: 135）

つまり、ある人物を「太郎の弟」として表現した時、話し手は、太郎の弟よりも太郎に対して高い共感度を持っているということである。この考えが正しければ、(18) の容認度によって、(16) の仮説を検証することができることになる。

(18) a.　太郎ガ（太郎ノ）弟ニオ金ヲヤッタ。
b.　*太郎ガ（太郎ノ）弟ニオ金ヲクレタ。（久野 1978: 143）

ただ、残念ながら、依存的な対称詞の使用と共感度の間には、必ずしも、久野が期待したような一般的な関係性は見られないように思われる。例えば、(19) のような文は自然であるが、この場合、話し手が太郎の弟よりも太郎に、より共感しているとは思えない。つまり、依存的な対称詞が表す視点と、共感度と関わるような視点は、必ずしも同じものだとは言えないということである。実際、(20) のように、文脈によって話し手の共感度を操作すると、(18b) もそれほど不自然ではなくなる。

(19) 僕は太郎のことは大嫌いだが、太郎の弟とは親友だ。
(20) 太郎と次郎ほど、性格が正反対な兄弟もいないだろう。子供の頃からそうだったが、大人になっても、太郎は地道にサラリーマンをする一方で、次郎はろくでもない事業に次々と手を出しては失敗していた。太郎はそんな弟のことを軽蔑さえしていたようだ。次郎は借金を作るたびに私のところへ来て助けを求めたが、いくら自分の子とはいえ、支援には限界がある。結局、次郎は破産して、無一文になってしまった。そんな次郎を救ったのは、意外なことに太郎だった。なんと、太郎が弟にお金をくれたのだ。

3. 授与行為から与益行為へ

3.1. 与益行為としての「あげる」と「くれる」

これまで検討した先行研究では、「あげる」と「くれる」を授与行為を表す動詞として扱い、授与における授与者と受領者が、話し手とどの様な関係にあるのかによって、それぞれの動詞の用法制約を記述しようと試みた。特に、他者間の授与行為では、話し手とそれらの参与者の間の部内・部外者性や、視点に基づく共感度に注目した考察が行われてきた。これに対して本稿では、これらの動詞の用法を制約するのは、具体物の授与の構造ではなく、むしろ、それによって実現される抽象的な利益の授与、つまり、与益行為の構造であると考え、(21) の用法制約を提案する。また、これらの動詞の意味を、与益行為として規定することによって、より整合性の高い一般化が可能であることを示す。

(21) あげる：与益者 - 話し手
くれる：受益者 - 話し手

3.2. 授与物の価値

「あげる」と「くれる」が、与益行為を表していると考えるべき一つの根拠は、授与物の価値によって、それぞれの動詞の容認度が変化するという事実である。

(22) a.　? 母は遊びに来た僕の友達に麦茶をあげた。
　　b.　母は遊びに来た僕の友達に麦茶をくれた。
(23) a.　母は遊びに来た僕の友達にお小遣いをあげた。
　　b.　* 母は遊びに来た僕の友達にお小遣いをくれた。

(22) と (23) が示すように、話し手の母親から話し手の友達への授与の場合、麦茶のような比較的価値の低いものであれば「くれる」が、お小遣いのような比較的価値の高いものであれば「あげる」が好まれる。このような事実は、具体物の授与行為という観点からは説明することができない。

3.3. 補助動詞の振舞

間接的な根拠であるが、助動詞の「あげる」と「くれる」の振舞も、これらの語が与益行為を表していることを示している。(24a) では、話し手は授与行為の受領者の意味役割を担うが、「あげる」が容認され、(24b) では、話し手は授与者の意味役割を担うが、「くれる」が容認される。

(24) a.　私は友達の子猫を一匹引き取ってあげた。
　　b.　友達は私の子猫を一匹引き取ってくれた。

これらの事例は、助動詞の「あげる」と「くれる」が、もはや授与性を表しておらず、与益性のみを表していることを示している。仮に、動詞から助動詞への文法化の過程が想定されるならば、意味の漂白化の結果として、中核的な意味のみが残ったと解釈することもできるだろう。

3.4. 他者の利益と共益性

「あげる」と「くれる」を与益行為を表す動詞と見なし、(21) のような制約を仮定した場合、(2a) と (3a) が容認されるのは、前者では話し手が与益者であり、後者では受益者であるためであり、(2b) と (3b) が容認されないのは、それぞれにおいて話し手の意味役割が逆であるからと説明することができる。しかし、(21) の制約には、他者間の与益行為を一般化するような記述は存在していない。では、(25) と (26) の容認度については、どの様に説明すれば良いのだろうか。

(25) a.　僕の弟は直輝に本をあげた。
　　b.　* 直輝は僕の弟に本をあげた。= (7a)
(26) a.　直輝は僕の弟に本をくれた。= (7b)
　　b.　* 僕の弟は直輝に本をくれた。

本稿では、このような他者間の与益行為の説明に、話し手の拡張や視点といった概念を用いる代わりに、利益そのものの性質によって一般化を試みる。また、利益という概念の定義には、行動生態学的な考え方を援用する。Trivers (1985) は、利益を (27) のように定義している。

(27) 利益　benefit　繁殖成功の増加 .　　(中嶋・他訳 1991: 521)

行動生態学では、ある出来事が特定の個体にとって「利益」的であるというのは、それによってその個体の繁殖が促進されたということである。また、ここで言う「繁殖」とは、子以外の血縁個体を含めた包括的なものをさす。

行動生態学的な利益の定義を採用する理由は、ある個体にとっての利益が、間接的に他個体の利益につながることを、行動生態学が理論化しているからである。Trivers は、(28) のように、生物の社会では大きく分けて二つの経路によって、ある個体の利益が他個体の利益につながると述べている。

(28) 血縁性 : 遺伝子を共有する他個体の利益は、血縁度に応じて自己の利益になる

互恵性：自己と他個体が、状況に応じて利益を与え合う

本稿では、個体間の血縁性と互恵性をまとめて、「共益性」と呼ぶことにする。もし、「あげる」と「くれる」の用法制約が、(21) で仮定しているように、話し手の与益性や受益性と関係するなら、与益行為が遂行されている他者と話し手の共益性は、用法の容認度に影響を与えるはずである。

3.5. 血縁性

話し手と血縁性のある他者の利益は、間接的に話し手の利益にもなることを考えると、(25) と (26) の容認度は容易に説明できる。(25a) では、話し手の弟が直輝に授与した利益は、間接的には話し手の利益でもあるため、話し手も間接的な与益者となる。また、(26a) では、話し手の弟が直輝から受領した利益は、間接的には話し手の利益でもあるため、話し手も間接的な受益者となる。そして、(25b) と (26b) では、話し手の間接的な意味役割が、(21) の制約に反しているので容認されないことになる。

「あげる」と「くれる」の用法は、単に血縁性の有無によって制約されるだけでなく、どの程度の血縁性があるのか、つまり、血縁度をも反映しているように見える。(29) と (30) が示すように、話し手の祖母から話し手の弟への与益は「くれる」が、話し手の従弟への与益は「あげる」が好まれる。

(29) a. 祖母は弟に入学祝いをくれた。
　　b. * 祖母は従弟に入学祝いをくれた。
(30) a. ? 祖母は弟に入学祝いをあげた。
　　b. 祖母は従弟に入学祝いをあげた。

このような事実は、次の様に説明することができる。ある個体から見て、その兄弟姉妹の血縁度は 0.5 であるが、いとこ (従兄、従弟、従姉、従妹) の血縁度は .0.125 である。従って、血縁度に基づいて計算すると、ある絶対量の利益、例えば、1 万円の入学祝いの場合、それが兄弟姉妹のものであれば、話し手にとって 5000 円に相当するが、いとこのものであるなら、1250 円にしかならない。話し手の祖父母の資源がその子孫に分配される場合、話し手自身へ分配が、話し手にとって最も効率が良いことを考えると、話し手以外の子孫への分配は、話し手にとっては、実は、間接的な受益という側面と、話し手に分配される可能性のある資源の減少という、間接的な与益という側面を持っている。そのため、弟への分配は比較的効率が良い間接的受益であるので、受益的側面に焦点が当たるが、従弟への分配は効率が悪いため、むしろ、与益的側面に焦点が当たるのだと考えられる。

3.6. 互恵性

共益性のもう一つの要素は、個体間が状況に応じて利益を与え合うという、互恵的関係である。このような関係が成立するのは、ある絶対量の資源が、それぞれの個体にとって、状況により相対的な価値を持つからである。例えば、二日間連続で食料を見つけた個体 A と、二日連続で食料を見つけられなかった個体 B にとって、ある特定の量の食料は異なる価値を持つ。個体 A は昨日も食事ができたのだから、今日の食料が半分になっても、それほど問題ではない。これに対して、個体 B は昨日も食べていないのだから、たとえ少ない食料であっても、それは貴重なものである。このような状況では、個体 A は相対的に少ない損失で、個体 B に食料を分け与え、命を救うことができる。そして、立場が逆の状況では、今度は個体 B が個体 A に、食料を分け与えるのである。このような互恵的関係にある個体間では、一方の受益は、他方の将来的な受益の可能性を高めることになる。

血縁性のない他者間の与益行為を表す場合、「あげる」と「くれる」の選択は、与益者と受益者のどちらが話し手と互恵的関係を持つか、もしくは、より強い互恵的関係を持つかによって制約される。

(31) a. 僕の友達は、隣のクラスの転校生に、野球のボールをあげた。
　　b. * 僕の友達は、隣のクラスの転校生に、野球のボールをくれた。
(32) a. * 隣のクラスの転校生は、僕の友達に、野球のボールをあげた。
　　b. 隣のクラスの転校生は、僕の友達に、野球のボールをくれた。

話し手の友達と、話し手の隣のクラスの転校生を比べると、前者の方が話し手と強い互恵的関係にある。そのため、前者から後者への与益行為では、話し手は間接的な与益者として認識され、逆に、後者から前者への与益行為では、話し手は間接的な受益者として認識される。その結果、(21) の制約に従い、(31) では「あげる」が、(32) では「くれる」が好まれると考えられる。

また、互恵性は血縁性と相互排他的ではないため、互恵性が血縁性よる制約に影響を与えることがある。(29b) が示すように、話し手の祖母から話し手の従弟への与益行為は、血縁性の点から見れば、話し手にとって受益的ではないが、互恵性によって全体的な共益性を高めることで、話し手にとっての受益的側面を際立たせることができる。

(33) 章裕は僕の従弟だが、家の事情で、小さい頃から僕の家族と一緒に暮らしている。今日は祖父母が家に来て、彼に入学祝いをくれた。

このように互恵性は、明らかに「あげる」と「くれる」の用法を制約するが、数値的な指標がまだ存在しないため、血縁性よりも扱いが難しい要因だと言える。例えば、クラスメイトとサッカークラブの仲間とでは、どちらの方が互恵性が高いのかといった問題には、今のところ答えが出せない。また、話し手が出場するサッカーの試合をクラスメイトが見に来てくれた場合と、話し手の教室にサッカークラブの仲間が訪ねてきた場合では、相対的な互恵性が変化するかもしれない。このような問題は、最終的には、「あげる」と「くれる」の容認度とは独立した形で、心理学的な実験に基づいて検討する必要があり、そうしなければ、部内・部外者性や視点と同様に、説明が循環論となる恐れがある。

3.7. 利益の出所

既に述べたように、他者間の与益行為における与益者と受益者の双方と、話し手が何らかの形で共益関係にある場合、話し手にとっては、その行為は与益的側面と受益的側面を持つ。そして、それらの側面のどちらがより際立っているかによって、その与益行為を、「あげる」と「くれる」のどちらによって表すべきなのかが決定される。これは、他者間の与益行為においては、直感的に話し手と受益者の共益関係が重要であることは理解できるが、それと同様に、話し手と与益者の共益関係が大きな制約となることを意味している。

例えば、(29b) が示すように、話し手の祖母から話し手の従弟への与益行為の場合は、「くれる」で表すことはできないが、(34) が示すように、隣のおばさんからの与益行為の場合は可能である。また、(29a) が示すように、話し手の祖母から話し手の弟への与益行為は、通常は「くれる」によって表されるが、(35) が示すように、話し手の母親からの与益行為は、「あげる」か好まれる。このように、利益の出所によって、これらの動詞の用法は直ちに制約される。

(34) a.　隣のおばさんは、従弟に入学祝いをくれた。
　　b.　*隣のおばさんは、従弟に入学祝いをあげた。
(35) a.　*母は弟に入学祝いをくれた。
　　b.　母は弟に入学祝いをあげた。

また、他者間の与益行為における与益者と受益者が、共に話し手と強い共益関係にある事例は、利益の出所がこれらの動詞の選択に強い影響力を持っていることを明らかにする。(13) のように、話し手の母親と話し手の弟の間の与益行為は、どちらの方向であっても「あげる」が好まれる。説明が循環論的になるが、もし、(21) の仮説が事実だとして、「あげる」の選択が、話し手の与益者としての認識に関係しているならば、(13) の事例は、人間の利益交換の認知においては、受益的側面よりも、与益的側面の方が際立ちやすいことを示唆しているのかもしれない。

4. 与益行為とポライトネス

4.1.「あげる」を避ける傾向

既に見たように、大辞林の第二版では、「やる」の定義を「同等またはそれ以下の人に物を与える」としているのに対して、「あげる」をその丁寧表現としている。また、広辞苑の第四版でも、(36) のように、「あげる」は丁寧表現とされている。

(36) ❺ 高位または有力なものの所に到達するようにする。
④ (本来は「与える」「やる」の相手を敬った言い方) 物を渡す場合の丁寧表現。

このように、「あげる」を単なる丁寧表現と考えると、与益行為における意味役割の制約を満たせば、「あげる」は比較的広く使用できそうであるが、実際には、さらに別の水準の制約が存在する。

話し手が与益者である場合、受益者が話し手よりも社会的により高位であれば、謙譲語の「差し上げる」を用いるのは問題がないはずである。しかし、実際には、(37) のように、別の丁寧語が好まれる場合がある。さらに、社会的に同等の受益者についても、(38) のように、同じような傾向が見られる。

(37) a. ？新しいおしぼりを差し上げますので。
b. 新しいおしぼりをお持ちしますので。
(38) a. ？じゃ、君にも会場の地図をあげておくね。
b. じゃ、君にも会場の地図を渡しておくね。

4.2. 与益的側面の明示化

(37) と (38) において、「あげる」や「差し上げる」が避けられる理由は、恐らく、これらの動詞が与益行為を表しており、話し手から聞き手への与益が際立つことによって、聞き手に恩義を発生させかねないからであろう。そのため、話し手は与益性については中立的であるような、他の動詞を選択するのだと考えられる。このような話し手による動詞の選択は、Leech (1983) が提唱する「謙遜の原則」や、Brown & Levinson (1987) が提唱する「消極的なフェイス」などによって説明されるかもしれない。

5. 今後の課題と展望

本稿の議論の中心であり、また、最も問題が残されているのは、他者間の与益行為における参与者と話し手の共益性の内実である。先ず、血縁性については、生物学的に明確な指標が存在するが、血縁性は共益性の単なる一要素と考えられ、本稿で例示したように、どの程度の制約として働くのかについては不明である。また、互恵性はより問題の多い概念であり、どの様な社会的経路によって互恵性が成立するのかについて、個々の分析がなければ、客観的な指標を作ることができない。幸い、何人かの心理学の研究者が、この点について興味を示してくれ、現在、実験に基づいた心理学的研究を遂行中である。また、別の機会にご報告ができればと思う。

参考文献

大江三郎 . (1975)『日英語の比較研究 - 主観性をめぐって -』, 南雲堂 .
Brown, P. & Levinson S. C. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
Fillmore, Charles J. (1977) Topics in Lexical Semantics, In Cole, R.W. (ed.) *Current Issues in Linguistic Theory*. Bloomington: Indiana University Press, pp. 76-138.
久野スズム . (1978)『談話の文法』, 大修館書店 .
Leech, Geoffrey N. (1983) *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
牧野成一 . (1996)『ウチとソトの言語文化学— 文法を文化で切る』, アルク
寺村秀夫 . (1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』, くろしお出版 .
Trivers, Robert. (1985). *Social Evolution*. Menlo Park, CA.: Benjamin/Cummings. (中嶋康裕・他 (訳),『生物の社会進化』, 産業図書 , 1991)
白土保・他 . (2006)「日本語発話文に含まれる敬語の誤用を自動的に指摘するシステム - ウチソトの考慮, 及び GUI の開発 -」,『自然言語処理第 12 回大会発表論文集』, pp. 312-315.

２～４歳児における不確定性を示す文末助詞「かな」の使用：幼児音声データベースを用いた機能の分析

橋本亜井・松井智子
{ahashimoto, matsui}@pri.kyoto-u.ac.jp
京都大学霊長類研究所

＜要旨＞
本研究では、不確定性を表現する文末助詞「かな」の、日本語話者幼児における自発的な使用を観察・分析した。文末助詞「かな」が幼児の発話において、いつから、どのような事柄をあらわすのに使われているのかを分析し、まだ心の理論の発達段階にいる幼児の不確定性の認識と早期のコミュニケーション能力について考察した。幼児の会話場面で、文末助詞「かな」を通した不確定性の理解が、コミュニケーションを成立させるための重要な手がかりとなることを強く示唆する結果が導かれた。
【キーワード】：第一言語獲得、心の理論発達、不確定性認識、コーパスデータ観察

1. 語用論と心の理論

Grice(1957)は、人間どうしのコミュニケーションは、相手の意図を推論して理解することなしには成立しないという考えを初めて提示した。Sperber and Wilson(2002)はこれを、より認知能力に着目したアプローチをする語用論の理論である関連性理論(Relevance Theory)へと発展させ、話し手の意図を聞き手が察知する行為が、会話場面でのコミュニケーションを成立させていることを説明している。この相手の意図を推論的に理解するという能力は、「心の理論（theory of mind)」を基盤として成り立つと考えられている。「心の理論」とは、心の状態（欲求、信念、意図、感情など）を自己または他者に帰属させることによって読みとる能力のことである。この能力は、人間に生得的にそなわるものであり、その発達過程は、健常児であれば普遍的であるという(Baron-Cohen, 1995)。つまり人間のコミュニケーション能力の発達は、「心の理論」の発達であるととらえることができる。

一般に、心の理論の発達は、６ヶ月齢頃での視線の理解、９ヶ月齢頃での共同注意の理解、１１ヶ月齢頃での指さしの理解などといった、いくつかの段階を踏んで発達すると考えられている。言語獲得以降、２歳で欲求の理解、３歳で知識の理解、４歳から 5 歳の間に誤信念の概念理解が可能になるが、並行してその概念に対応する言語表現が観察されるようになる。たとえば、Bartsch and Wellman (1995)の、英語におけるコーパスデータを用いた観察研究によると、幼児は、２歳になると、*want* を用いて欲求を表現するようになり(e.g. *"I want an apple." "Because I want to play with it."*)、３歳では、*know* や *think* を用いて知識の状態を表現するようになり(e.g. *"But I know he could rip it." "I think it's burned."*)、そして４歳では、誤った信念や思考といった、認知的に高度な心の状態を、言葉によって表現できるようになるという(e.g. *"It's a bus. I thought a taxi."*)。このように、幼児の日常会話からは、心の理論の発達と並行した、言語表現の発達を観察することができる。

ここまで述べてきたように、4歳未満の幼児は、心の理論も言語能力もまだ発展途上にある。それでは、4歳未満の幼児は、相手の意図をどのように理解して、会話コミュニケーション行なっているのだろうか。大人相手の会話コミュニケーションにも、3歳児は充分に参加できているように思える。ということは、話し手の意図を察知することを可能にする、何らかの能力が、4歳未満の幼児にも備わっているはずである。ここでは、早くから幼児にあらわれる能力のうち、「不確定性の認識」というものに着目して考えてみたい。

2. 不確定性の概念

不確定性(uncertainty)を認識する能力が、なぜ会話コミュニケーションにおいて重要になるのかという理由として、次の二点を挙げたい。ひとつは、推論を根拠に意志決定をする能力との関連である。論理的な思考、科学的な予測、推論による判断は、不確定性の概念があってこそ成立すると考えられる(O'Neill and Atance, 2000)。そして、もうひとつは、メタ認知と真偽判断の能力との関連である。話し手の知識の根拠が相対的に信用できるか、そうでないか、(例えば、本人の直接体験で得られた情報か、他人から聞いた情報か)を判断する能力は、不確定性の概念があってこそ成立すると考えられる(Moore et al., 1989; O'Neill and Atance, 2000; 益岡, 2002)。

この、幼児における不確定性を認識する能力について、言語使用を観察することを通して検証することを試みた先行研究がある。O'Neill and Atance(2000)は、幼児の不確定性への理解が、どのように発達してゆくのかを明らかにするために、英語の不確定性を示す表現のうち、幼児の日常会話に最も早くから出現する *maybe, probably, might* の使用を、2歳～4歳児のコーパスデータを用いて観察した。その結果、2歳0ヶ月～2歳5ヶ月齢の年齢群では *maybe, probably, might* の使用がほとんどみられなかったが、2歳6ヶ月～2歳11ヶ月齢の年齢群になると、*maybe, probably, might* の登場数は7倍に増加する（発話数は2倍に増加する一方で）ということがわかった。このことから、英語話者においては、3歳未満の幼児でも不確定性の表現を理解できる、という結果が示唆された。この研究では、英語話者幼児の自発的な発話を観察することによって、自然な状態における幼児の心の発達の様子を、不確定性の言語表現という枠組みから捉えることに成功している。

それでは、日本語話者の幼児の自発的な発話を観察した場合は、どのような結果が得られるのだろうか。日本語において、不確定性を示すモダリティ表現には、「かもしれない」「みたい」「だろう」「らしい」「ようだ」「と思う」「かな」などがある(益岡, 2002)。中でも文末助詞「かな」は、2歳になる以前から幼児による使用がみられ、他の文末助詞「ね」「よ」「て」「って」「もん」などと共に、幼児期の非常に早い段階から頻繁に母子会話の場面で使用されている(Shirai et al., 1999)。初出が2～3歳以降であり、会話でもほとんど登場しない「かもしれない」「みたい」「だろう」「らしい」「ようだ」「と思う」に対して、文末助詞「かな」の初出は1歳9ヶ月頃と早く、会話での使用も頻繁であることから、日本語話者の不確定性の概念の獲得においては、文末助詞「かな」が重要な役割を果たしていると考えられる。しかし、観察研究によって幼児の不確定性表現の使用について考察した研究は、日本語ではまだない。

そこで本研究では、日本語話者幼児の会話において、不確定性を表現する文末助詞「かな」が、いつからどのような事柄をあらわすのに使われているのかを分析し、まだ心の理論の発達段階にいる幼

児の不確定性の理解と早期コミュニケーション能力について検証する。

3. 観察による検証—幼児が自発的に使用する「かな」の観察

3.1. 検証の方法

日常会話を記録したNTT幼児音声データベースの中の４人の幼児ma, sa, mk, skのコーパスデータを使用した。対象幼児が２歳０ヶ月齢～４歳１１ヶ月齢時における、幼児の文末助詞「かな」を用いた３２７発話に対して用法の分類を行い、年齢群ごとの傾向をみた。年齢群は６ヶ月齢ごと６つに分けた（表１）。

表１　データの基本情報

年齢群	人数	「かな」発話数	総発話数
2;0–2;5	4	50	18654
2;6–2;11	4	59	16949
3;0–3;5	4	72	14157
3;6–3;11	4	51	14170
4;0–4;5	4	60	9214
4;6–4;11	3	35	5253

3.2. 分類の方法

分類のコーディングについて、幼児の自発的な発話からより自然な状態における幼児の心の発達の様子を捉えることができる、という点で有意義であると考えられるので、日本語の文末助詞「かな」の観察にあたっては、O'Neill and Atance (2000)の *maybe, probably, might* の観察研究と同じカテゴリーで分類を行なうことにする。具体的に、どのような分類を行なったのか、以下に例を示す。

過去／現在／未来

「かな」を用いた発話が記述している事象が、いつ生じたものなのかを分類した。出来事や状態が、発話時点で完了している場合は「過去」に、発話時点て起こっている場合は「現在」に、まだ達成されていない場合は「未来」に分類をした。

物理的世界／心的世界

「かな」を用いた発話が記述している事象が、物理的世界に所属するのか、心的世界に所属するのかを分類した。出来事や状態が、動作主によるコントロール下にないとき、非意図的なとき、または、動作主の意図したものでない結果になった行動などは「物理的世界」に分類した。それ以外の出来事や状態は全て「心的世界」に分類する。「心的世界」はさらに「意図的な行動」「欲求」「認識・判断」に分類した。

自己／他者／非動作主

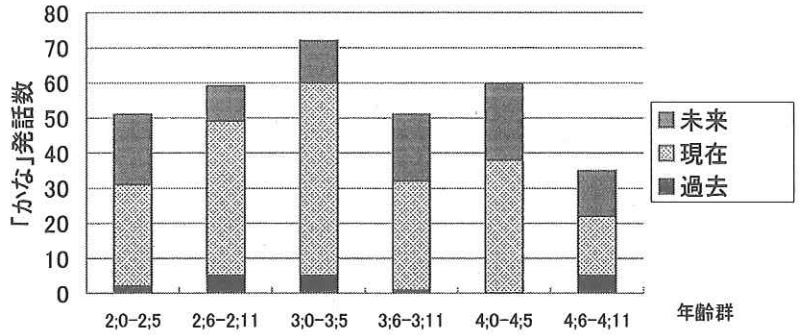
「かな」を用いた発話が記述している事象が、自己に帰属させるものなのか、他者に帰属させるものなかの、そのどちらでもないのかを分類した。出来事や状態を自己に帰属させるなら「自己」、他者に帰属させるなら「他者」、そのどちらでもなく帰属性のない場合には「非動作主」に分類した。

表２　分類の例

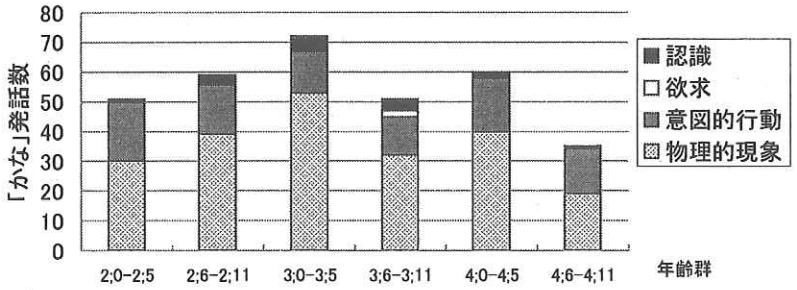
		過去	現在	未来
物理的現象	自己	お熱出たのかな	私だけかな	—
	他者	—	歌のお姉さんいるかな	元気に産まれてくるかな
	その他	ここにあったのかな	どんな色かな	当たるかな
意図的な行動	自己	これやったのかな	読んでないかな	何かしちゃおうかな
	他者	みいたんが書いたのかな	おじいちゃん買ってるかな	お母さん何しようかなあってして
欲求	自己	—	—	—
	他者	—	何が好きかな	お母さんも欲しいかな
認識・判断	自己	—	もういいかな	英語ちゃんとわかるかな
	他者	忘れちゃったのかな	ママ知ってるのかな	これでいいかなお父さん

3.3. 結果

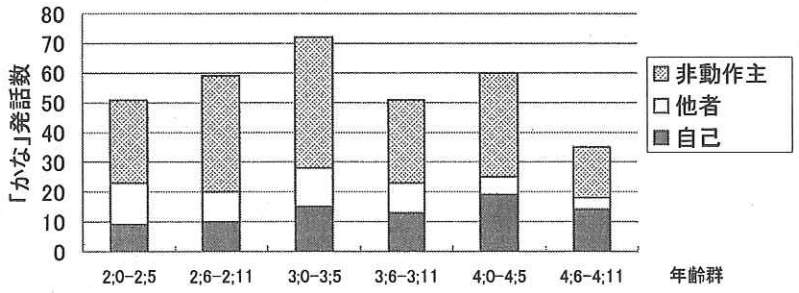
「現在」に関する用法が最も多くみられ、次に「未来」が多かった。「過去」に関する用法はほとんどみられなかった（グラフ１）。「物理的世界」に関する用法が最も多くみられ、次に「意図的な行動」に関する用法が多かった。「認識・判断」に関する用法は比較的少なく、「欲求」に関する用法はほとんどみられなかった（グラフ２）。「その他」に関する用法が最も多く、３歳０ヶ月～３歳５ヶ月齢の年齢群以前では、「他者」に関する用法の方が、「自己」に関する用法よりも比較的多くみられ、３歳６ヶ月～３歳１１ヶ月齢に年齢群以降では、「自己」に関する用法の方が、「他者」に関する用法よりも多くみられた（グラフ３）。不確定性表現の産出割合を日英比較すると、全体的に、日本語は助詞を用いた不確定性表現の算出の割合が、英語の副詞を用いた不確定性表現の産出の割合と比較して、多いといえる。また、初期の年齢群に着目してみると、２歳０ヶ月～２歳５ヶ月齢の年齢群において、英語の *maybe, probably, might* の産出がほとんどみられない一方、日本語の「かな」は比較的多く産出されている（グラフ４）。



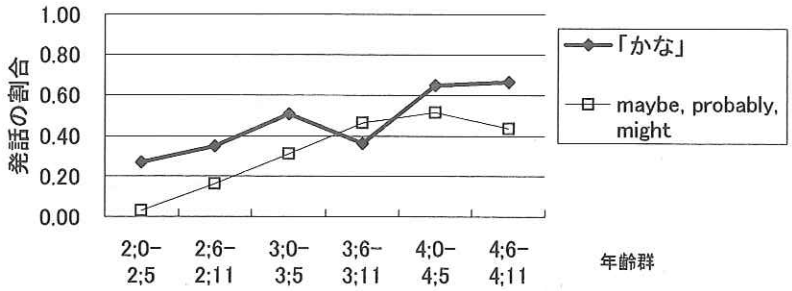
グラフ1　過去／現在／未来



グラフ2　物理的世界／心理的世界



グラフ3　自己／他者／非動作主



グラフ4　日本語と英語における発話割合の比較(%)

3.4. 考察

発話時点で完了しており確定的であることから、「過去」に関する用法は、そもそも会話の文脈に登場しにくいことが推測される。欲求の概念は原始的で理解しやすいため、不確定になりにくい要素なのかもしれない。特に「自己」の「欲求」を不確定なものと認識する場面は、実生活ではあまりみられないと思われる。2歳で「意図的な行動」や「認識・判断」の記述と同時に不確定性を表現できるということは、“自分の予測に間違いがある可能性”が認識できている、つまり“情報の信頼性を判断する能力”の基礎を保持していることを示唆している可能性がある。「自己」と「他者」について、従来の発達研究においても、どちらが優先的に獲得されるのかについては、一致した見解がまだないが、今回の「かな」の観察においても、「自己」と「他者」の割合に関して、はっきりとした発達的な推移はみられなかった。日本語における文末助詞による不確定性の表現が、英語の副詞の場合と比較して、早い時期から出現して使用頻度も高いという事実は、日本人の母子会話で文末助詞が非常に頻繁に用いられることとの関連を示唆していると考えられる。

4. 結論—文末助詞「かな」と早期のコミュニケーション能力

今回の観察研究からは、日本語話者幼児は、心の理論が発達するよりもずっと前から文末助詞「かな」を獲得し、不確定性の表現を自発的に使用できるということが示された。心的動詞「知る」と「思う」の区別は4歳になるまでできないが、文末助詞「よ」と「かな」の意味の違いは3歳児でも区別ができる、ということがすでに実験で示されている(Matsui et al., 2006)。文末助詞「かな」は、心の理論が発達する以前からすでに自発的な使用がみられ、不確定性を表現する心的動詞「と思う」に比べて、1年も早く獲得されるということになる。さらに、Matsui et al., (2006)は、心の理論発達のリトマス試験紙である誤信念理解と、心的動詞の理解には相関がある一方で、文末助詞の理解には誤信念理解との相関がみられないという実験結果から、文末助詞を用いて会話コミュニケーションを行なう能力は、誤信念に先立って獲得されるということを示唆しており、文末助詞「かな」が心の理論の発達の初期段階にいる幼児の、コミュニケーションにおける重要な手がかりとなっているのは間違いないといえよう。

若年齢の幼児にとり、文末助詞「かな」が会話相手の意図を推測するための重要な手がかりとなり得ている理由として、構造上、必ず従属節を伴うために高次の表象能力が必要となる「思う」などの心的動詞とは異なり、「かな」を含む発話はメタ表象(metarepresentation)を要さなくても産出が可能であり、それが「かな」の獲得の早さに繋がっている、という可能性が考えられる。つまり、心の理論がまだ発達段階にある幼児が、文末助詞「かな」を自発的に使用できるのは、早い時期の幼児の自発話にみられる「かな」が、メタ表象を要する心的世界ではなく、現実世界を対象とした不確定性を表すことが多いためではないだろうか。今回の検証において、全ての年齢群を通して、「現在」および「物理的世界」に関する用法が最も多くみられたことは、「かな」が主に“いまここ”の状況に関しての不確定性の表現に使用されることを示唆している。また、全ての年齢群を通して、「非動作主」および「物理的世界」に関する用法が最も多くみられたことは、「かな」が主に帰属性のない(no attributive)対象に関しての不確定性の表現に使用されることを示唆している。これらのことから、２～４歳児における「かな」の自発的な使用では、「かな」がマークする事象の多くは、“いまここ”かつ非帰属的であることがわかった。このことは、高次のメタ表象能力が備わっていない段階でも、幼児は現実世界を対象とした不確定性を理解することができることを示している。

今回の検証の結果は、幼児の早期コミュニケーションにおいて、文末助詞「かな」が、会話相手の意図を理解しコミュニケーションを成立させるための重要な手がかりとなっている事のみならず、幼児の不確定性の理解には、メタ表象能力の発達と関連したいくつかの段階があることを強く示唆するものである。今後は、なぜ文末助詞「かな」が心的動詞「思う」の理解に先立つのかという点について、母親からのインプットやイントネーションの影響についても考察していきたい。

謝辞

NTT コミュニケーション科学基礎研究所の天野成昭氏と近藤公久氏にデータを提供して頂きましたことを感謝します。この研究は京都大学２１世紀 COE プログラムの援助を受けて行いました。

参照文献

Bartch, K., and Wellman, H. M. 1995. *Children Talk about the Mind.* New York: Oxford University Press.

Baron-Cohen, S. 1995. *Mindblindness*: An essay on autism and theory of mind. Cambridge, MA: The MIT Press.

Grice, P. 1957. Meaning. *Philosophical Review* 66, 377-388.

益岡 隆志. 2002. 「判断のモダリティ—現実と非現実の対立」、『日本語学』21(2), 6-16.

Matsui, T., Yamamoto, T. and McCagg, P. 2006. On the Role of Language in Children's Early Understanding of Others as Epistemic Beings. *Cognitive Development* 21, 158-173.

O'Neill, D.K. and Atance, C.M. 2000. 'Maybe My Daddy Give Me a Big Piano': The Development of Children's Use of Modals to Express Uncertainty. *First Language* 20, 29-52.

Shirai, J., Shirai, H., Furuta, Y. 1999. Acquisition of Sentence-final Particles in Japanese. In M. Perkins & S. Howard(eds.), *New Direction in Language Development and Disorders*, 243-250. Plenum Press.

Sperber, D. & Wilson, D. 2002. Pragmatics, Modularity and Mind-reading, *Mind & Language* 17, 3-23.

談話管理から見た標識「まあ」について

水野吉徳
富山大学大学院

＜要旨＞
先行研究では、副詞・感動詞に分類される「まあ」は曖昧性の表示であるとされてきた。しかし、実際の使用例では詳細な談話の中にも出現し、曖昧性の表示であるとは思われない例も多く見受けられる。本発表では「まあ」は命題内容に関する情報を基に推論過程に進む一段階である標識であることを述べる。また、語用論的使用（意図的使用）にも触れる。

【キーワード】　曖昧性・非曖昧性　提題　活性化情報　推論プロセス

1　はじめに

話し言葉の特徴のひとつとして、以前は場つなぎの言葉と考えられた「あのう」「そのう」「ええと」「まあ」などの挿入が挙げられる。これらは談話を遂行する上で「情報データそのものに関わらないが、話し手が心内でおこなう、様々な情報データの処理操作に関わる（定延・田窪 1995：74）」標識であると考えられる。本発表では副詞や感動詞に分類される「まあ」を取り上げ、これもまた心的な操作に関わる標識であることを指摘し、間接的に「まあ」が心内で起こる情報データの処理状況を表していることを主張するものである。

2　先行研究

談話の標識として「まあ」を扱った研究には川上（1993,1994）、加藤（1999）、冨樫（2002）などが挙げられる。また、田窪・金水（1997）では応答詞・感動詞の類を入出力系と言い淀み系とに分け、「まあ」を後者に分類している。

川上（1993,1994）では談話中に現れる「まあ」を発話の冒頭に位置する「応答型用法」（1）と発話中の文頭・文中に現れる「展開型用法」（2）とに分類している。両用法の基本的意味は「いろいろな問題があるにしても、ここでは大まかにひきくくって述べようとする」という姿勢・態度に関わるものであるとし、後続内容をスムーズに誘導する機能を持つとしている。

1）応答型用法
A：文楽はよく見にいくんですか。B：まあ、時々ね。／まあね。　（川上、1993）

2）展開型用法
A：（北朝鮮の核実験）失敗した可能性もあるんですか。
C：あります。ただあの一実際にやったとこで、マ大体この爆発の威力は、先ほど＊＊さんおっしゃいましたように爆発の威力はどうもそれほどは大きくはないと、普通この種の核爆発装置をやって、爆発させるんだったら大体 10 キロトンぐらいの爆発、つまりデューティ火薬で 1 万トン、マー広島のサイズだけぐらいですね。ものがないと、あまりあの一軍事的には意味がない、ということから、マー失敗した可能性とも否定できない。　（（ク））

しかし、この説明には2つ問題がある。ひとつめの問題は、この説明によると（i）大まかに捉えて述べること、（ii）談話をモニターすること、（iii）聞き手に配慮することの3つの機能を「まあ」が一手に引き受けていることになるということである。川上（同上）自身も指摘しているように他の標識「あのう」「ええと」などとの整合性を考えなければならないだろう。ふたつめの問題は、冨樫（2002）が指摘しているように独り言に現れる「まあ」の説明がなされて

いないことである。

3）独り言　＜乗り損ねたバスを見送りながら＞　ま、いいか。　　（冨樫、2002）

加藤（1999）では川上（1993,1994）での知見を踏まえ、談話中に現れる「まあ」の機能を「とりあえずの反応」であるとしている。しかしながら、「とりあえずの反応」とは「えー」などの「場つなぎ言葉」と差異がないことになる。さらに、「とりあえずの反応」ということは情報の計算処理を十分にしない標識であると解されるが、これでは専門家などがあるトピックについて詳細に述べる際に現れる「まあ」の説明ができないのではないか。

一方、冨樫（2002）は概念的意味や手続き的意味として「まあ」を捉えるのではなく、心的な情報処理の観点から分析を試み、「まあ」は「（前提を含めた）計算処理が 100%確実に行われたものではない」ことを示すと述べている。つまり、情報計算処理の過程が曖昧であることを示す標識であるとしている。しかしながら、川上（1993,1994）で分類された「展開型用法」の「まあ」には、処理過程の曖昧性を標示しているとは考えられない談話も見られる。（4c）では「まあ」に補足情報節「～けれど」、理由節「～ので」が後接されているが、曖昧に処理を行った情報だとは考えられず、逆に「まあ」が詳細化を担っている節を導き出しているように見える。

4）A：（粉飾決算）株の持ち合い、などなかなかその監査の必要性がそこまで求められてなかったっていうこともあるんでしょうか。
C：そうですね。やはり日本の証券市場はマ最近は変わってきていますけども、マ古くは企業同士で株を持ち合っていましたので、あまりえーそう有価証券の報告書を見ながら、えー厳しく投資をするという環境になかったと、いうことが言えるわけです。
（（ク））

また、もし「まあ」の機能が処理過程の曖昧性であることを示すだけなら、肯否がわからない発話となるはずであるが、（5B′）が非文であることでもわかるように（5B）の発話は条件つきではあるが肯定であると考えられる。

5）（＝1）　A　：文楽はよく見にいくんですか。
B　：マーね　（限定つき肯定）　／　B′　：*マー、行かない[i]

さらに、日本語を母語としない話者の発話において ACTFL（American Council on the Teaching of Foreign Languages）の OPI（Oral Proficiency Interview）基準で、段落単位で話せる上級話者以上に「まあ」が現れることが報告されている（牧野 2002）。「まあ」が処理過程の曖昧性を示すだけならば中級話者の談話の中にも現れてもいいはずである[ii]。「まあ」が段落単位以上で話せる上級話者の談話に出現するということは、（日本語としての）情報の量が制限された（文単位発話の）中級話者には「まあ」の使用も制限されるということになる。談話状況に応じて活性化された情報の集合が導き出せる程度に日本語に習熟していないと「まあ」が出現しないのではないかと推測される。

3　「まあ」の機能

本節では「まあ」がどのような標識なのかを考察する。川上（1993,1994）、加藤（1999）、冨樫（2002）はいずれも情報や処理過程の曖昧性が「まあ」の機能と関係しているとしている。

例文（1）を見ると直感的に曖昧性を標示しているようにも見えるが、例文（6）のように従属節を付加させる文頭に「まあ」が置かれること、また（7）のように総括的に説明する文の文頭に「まあ」が出現していることから、曖昧性の標示であるとは考えられない。

6）（＝4ｃ）やはり日本の証券市場は＜マ最近は変わってきていますけども、マ古くは企業同士で株を持ち合っていましたので、＞あまりえーそう有価証券の報告書を見ながら、えー厳しく投資をするという環境になかったと、いうことが言えるわけです。〔詳細化〕

7）（＝2ｃ）ものがないと、あまりあの一軍事的には意味がない、ということから、マー失敗した可能性とも否定できない。〔概要〕

曖昧性があろうとなかろうと基となる情報はあるはずである。その情報を詳細に推論することや、曖昧に処理することは次の段階であると考える。あるコンテクストの中で命題Ｑが真となる情報があるかどうかを活性化情報の集合Ｐをもとに詳細に推論することもあるし、曖昧に処理する一連の過程もある。先行研究ではこのうち後者の過程だけが論じてこられたのではなかろうか。

あるコンテクストにおける命題Ｑを提題Ｑと呼ぶことにする。提題が真となるよう活性化情報の集合Ｐを基に推論プロセスに入る際に「まあ」が表示されると考えたい。

8）　提題Ｑ→活性化情報の集合Ｐ（Ｐ１～Ｐｎ）→「まあ」→推論→対人発話制御→発話

「まあ」によって推論プロセスに入ることが標示されるが、その推論プロセスには大きく分けて非曖昧化と曖昧化の２つの過程がある。さらに前者の過程には詳細化や概要などがあり、後者にはコスト軽減や情報不足が挙げられる。詳細化とは（6）で見られるようにそのトピックについて詳細に述べている節（従属節）の前に「まあ」が現れるもので、概要とは（7）〔北朝鮮の核爆弾について〕や下の（9）に見られる総括的に述べる発話の前に「まあ」が見られるものである。

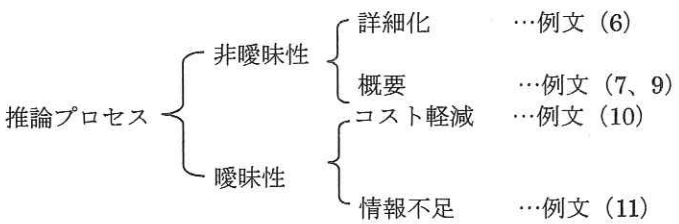
9）２：〔お歳暮は〕やっぱりしたい時にすればいいという（１：うんうんうん）非常に（１：うんうんうん）なりゆきまかせです。（１：うんうん）ええ。ですからーまああのーそれを一回やって続けなきゃいけないとかっていう気持ちもございませんし（１：うんうん）あのーやはりしたい時にはやっぱりあの、形を変えてしてると思います（１：うんうん）私も。
（１は会話参加者）　（（イ））

上の（9）では総括的な部分に「まあ」が出現している。後で述べるが、「まあ」の直後に「あの」があることから編集作業に移っていると思われる。このように比較的長い発話では「まあ」と「あの」が並列されて出現する場合が多く見られる。

いずれにしろ提題に沿うような活性化情報が呼び出されたのであるから、「まあ」が出現したということは肯定発言と解釈される。

推論プロセスにおける曖昧化の過程には処理コスト軽減（10）や活性化情報不足（11）が考えられる。

図１、推論プロセスの分類



下記（10）では暗算する処理コストを避け、近似の金額で済ませているのがわかる。活性化情

報不足とは（11）のような活性化情報が十分にない状態で推論される過程である。提題「明日は晴れるか？」に沿うような十分な活性化情報がないため「晴れるんじゃない」という発話になっている。当然、十分な情報があれば（西の空が晴れていれば明日は晴れる。そして今、西の空が晴れている）＜空を見上げて＞「まあ、晴れるよ」とも言える。その場合、曖昧な発話ではない。

10）1980円に消費税だから、まあ、2100円くらいかな。｛処理コスト軽減｝
（冨樫、2002）

11）A：明日、晴れるかなあ。
B：マー、晴れるんじゃない。｛活性化情報不足｝

推論される過程に入る引き金となる提題にはそれぞれ排他的ではないが、①会話参加者の発話②コンテクスト（話者のみの思考）　③トピックの３つが考えられる。話者の相手の発話が引き金となる提題が、①会話参加者の発話である。相手の直接的な質問形式の発話だけではなく疑問形式の発話も提題となりえる。例えば、（11A）は（11B）に質問したというよりも（10A）の内言的な発話であるが、（11B）は推論プロセスに入っている。②コンテクストは内言的発話が主で、聞き手がいなくてもよい。例えば例文（3）に戻るが、提題の「バスに乗れなくてもいい」が真になるような活性化情報を基に推論し、結果が「いい」である。③トピックが引き金になるのは、そのトピックについて話す場合である。長期記憶から話題項目が活性化情報として呼び出され、それを基に談話が続けられる。「まあ」が話題領域の指定にもつながっている。（12）を見られたい。

12）1：はい。（2：はい）ああそうで、何を勉強なさいました？
2：ええとー、自分の専攻分野はま、あの、一応国際コミュニケーションなんですけど、
（1：国際コミュニケーション）でもそれとは全く関係のないような、写真とか、
（1：うん）あと、／うーん、絵とか、（1：うん）あとドイツ語とか（1：うん）そういうのばっかり取ってて、実際、こっちの学校に移った単位っていうのも、あの、
3単位か4単位ぐらいで、（1：うーん）ええ少なかったんですけど。　（（イ））

例文（12）の2は専攻分野について話している。まず「ええとiii」で発話の演算領域を確保され、提題「専攻分野について」によって専攻分野に関する情報が引き出される。「まあ」は専攻分野に関する情報のリストを提出するだけで言語編集は「あの」が行っている。
以上を踏まえて「まあ」の機能は以下のように定義される。

13）**「まあ」の機能：提題が真となるよう活性化情報の集合を基に推論プロセスに入ることを示す標識である。**

本発表で主張したいことは「まあ」は（8）で示したように推論段階に入ることを示すのみで推論される段階は次の段階だということである。先行研究における「まあ」の機能といわれる曖昧性は「まあ」の一面を説明しているが、実際の使用を見るとそれ以外での使用も多く見られる。「まあ」は①②③による提題が引き金となり活性化された情報が導き出され、その情報の検討段階に入る標識である。活性化情報には提題の肯定要素のみならず否定情報も含まれている。しかしながらリストアップされた情報は「真となる情報」が情報ランクとしては高いことから否定情報は情報ランクとして下位の情報となるiv。

4　対人発話制御による「まあ」

3節までは非意図的な「まあ」の使用に関して考察した。しかしながら、意図的に「まあ」が使用された例も見受けられる。（14）の提題は「飲むことができる」などであろう。コンテクス

ト状況（お酒やグラスが運ばれてきた）から「飲むことができる」よって「一杯飲んでください」と相手が杯を持つ（酒を飲む）ことを勧めている。「まあ」に働きかける力があるのではなく、「まあ、落ち着きなさい」などのように相手にある行為を促す際に「まあ」が用いられると、判断の根拠を推論したことを相手に見せることになり間接的に働きかけていると聞き手に解釈させ、対人発話の制御をしているv。

14）＜居酒屋でお酒を注ぐ際＞　マー、一杯

15）A　：やればできるじゃん。
　　B　：まあね。　　（冨樫、2002）
　　B′：*マーよ。

16）ﾚﾎﾟｰﾀｰ：おふたりの関係は？結婚のご予定は？
　　芸能人：マー、いいじゃないですか。

（15B）は（15A）に対して自慢げな態度を表していると解釈される。「あいまい性を示すはずの「まあ」を用いることで、逆に（自慢げな態度を）強調させる効果を示している」と冨樫（2002：29）では説明されているが、話者はわざわざ自慢げな態度を示すために「まあね」と言ったとは思われない。それよりも「まあ」が「提題が真となるような活性化情報があること示している」ことが、条件付きながら肯定と解釈されることになり、謙遜として否定表現を用いるべき発話で肯定を使用した（自慢げな態度）と解されるのではなかろうか。同意の終助詞「ね」を付加することでより肯定の返答であることが強く解釈される。（15B′）で終助詞「よ」が付加できないのは、「まあ」が肯定の指向性を持っているため、相手の知識を書き換える「よ」とは矛盾するからであると考えられる。（16）ではレポーターのプライベートな質問に答えたくないという解釈ができる。「??いいじゃないですか。」のみだと何がいいのかわからないため、後続される発話が必要となるが、「まあ」があるとレポーターの質問を提題とした活性化情報を基に推論を行ったが、取るに足らない情報なので、あなたには関係がないという態度を示すことになる。

5　まとめ

本発表では、談話に見られる標識「まあ」のふるまいを情報の管理の面から見た。副詞、間投詞、感動詞などに分類される「まあ」は「提題が真となるよう活性化情報の集合を基に推論プロセスに入ることを示す標識」であるとし、推論プロセスには曖昧性を標示するもの、非曖昧性を標示するものがあることを指摘した。しかし、そのプロセスは「まあ」の機能とは直接的には関係がなく、「まあ」は推論するために情報のリストを推論過程に移行する標識であることを述べた。また「まあ」は、対人発話制御として意図的に使用されることもある。そのような場合には聞き手に対して推論プロセスを経たことを伝えることにより、働きかけや話者の心的状況を知らせる効果があると考えられる。本発表ではコンテクストから得た情報を活性化情報に書き加えていると考えられる「まあ、すごい！」のような驚きの「まあ」の説明はされていない。今後の課題としたい。

【注】

i　「まあ」の後、時間を置けば不自然ではなくなる。それは後述するが、否定情報は活性化情報の下位レベルに当たるからであると思われる。また、「行かないネ」というように終助詞ネをつけるとより自然となる。

ii　言語編集という話し手の心的操作状態を表す「あの（ー）」（定延・田窪 1995：79）は中級話者以上の発話に見られることが指摘されている（山内 2005）。

iii 「ええと」は検索や計算のために予備的な演算領域を確保する際に心的操作をおこなっている（定延・田窪 1995：78）標示である。

iv 否定情報開示には時間的ラグがあるように感じられるが、詳細な実験による検証が必要となろう。今後の課題としたい。

v 「まあ、一杯」という表現は既に慣用的表現としてお酒を勧める発話行為に移行しているとも考えられる。

＜参考文献＞

加藤　豊二．1999．「談話標識「まあ」についての一考察」『日本語学・日本語教育論集』6 号　名古屋学院大学留学生別科

川上　恭子．1993．「談話における『まあ』の用法と機能（1）－応答型用法の分類－」『園田国文』14 号　69 - 79

川上　恭子．1994．「談話における『まあ』の用法と機能（2）－展開型用法の分類－」『園田国文』15 号　69－79

坂原　茂．1985．『認知科学選書２　日常言語の推論』東京：東京大学出版会

定延　利之・田窪　行則．1995．「談話における心的操作モニター機構－心的操作標識「ええと」と「あの（一）」－」『言語研究』108　日本言語学会　74－93

田窪　行則・金水　敏．1997．「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』音声文法研究会編　257－279 東京：くろしお出版

田窪　行則・金水　敏．2000．「複数の心的領域による談話管理」坂原茂編『認知言語学の発展』251－280　東京：ひつじ書房

堤　良一．2006．「談話中に現れる間投詞、アノ（一）・ソノ（一）について」『日本言語学会第 132 回大会予稿集』日本言語学会　87－92

冨樫　純一．2002．「談話標識「まあ」について」『筑波日本語研究』7 号　筑波大学文芸・言語研究科　15－31

牧野　成一．2001．『ACTFL OPI 入門』東京：アルク

牧野　成一．2002．「「まあ」はどうして上級話者のマーカーの一つでありえるのか」第 44 回定例会講演レポート　日本ＯＰＩ研究会

山内　博之．2005．「話すための日本語教育文法」　野田尚史編　『コミュニケーションのための日本語教育文法』東京：くろしお出版

山根　智恵．2002．『日本語の談話におけるフィラー』東京：くろしお出版

＜談話資料＞

・（（ク））　クローズアップ現代（2006.10.10）ＮＨＫテレビ

・（（イ））　インタビュー形式による日本語会話データ（1996）北九州市立大学国際環境工学部情報メディア工学科上村研究室

Extended Reference in Blended Contexts*

Kazuya Yasuhara
(JSPS Research Fellow)

<Abstract>

This paper provides an opportunity to reconsider Halliday & Hasan's (1976) notion *extended reference* from the perspective of cognitive linguistics (or cognitive semantics). More specifically, with its focus on a conversation between two casting directors, the paper examines the interpretation process of anaphoric relations that appear in the conversation, and shows that the frameworks of Reference-Point Model and Mental Space Theory cannot always deal with all anaphoric relations in the conversation. In so doing, the paper suggests the following points: (i) To achieve a uniform account of all anaphoric relations in the conversation, Fauconnier & Turner's framework of Conceptual Blending should be evidently needed as a crucial principle of on-line meaning construction. (ii) Fauconnier & Turner's framework of Conceptual Blending can provide helpful clues for treating extended reference in blended contexts straightforwardly.

Keyword: *extended reference; meaning construction; reference-point model; mental space theory; conceptual blending*

1. Introduction

Halliday & Hasan (1976) comment on the notion *extended reference* as follows:

(1) "Related to the last, generalized type of demonstrative reference, but at the same time quite distinct from it, is the use of demonstratives to refer to extended text, …. This applies only to the singular forms *this* and *that* used without a following noun. For example:

[2:51] They broke a Chinese vase.

(i) That was valuable.

(ii) That was careless.

In (i) *that* refers to the object *vase*; we could have *that vase* instead. In (ii) *that* refers to the total event, 'their breaking of the vase'. If there had been more than one breakage we could have had *those were valuable* but not *those were careless*:

[2:52] They broke a Chinese vase and damaged two chandeliers.

(i) Those were all very valuable.

(ii) That was all very careless." (Halliday & Hasan 1976: 66)

(2) a. "extended reference differs from usual instances of reference only in extent – the referent is more than just a person or object, it is a process or sequence of processes (grammatically, a clause or strings of clauses, not just a single nominal)" (Halliday & Hasan 1976: 52)

b. "*it* has the property of EXTENDED REFERENCE of this kind: consider for example an eye-witness's description of an accident, concluding with the remark *It all happened so quickly.*" (*ibid.*: 52)

The purpose of this paper is to reconsider the notion *extended reference* from the perspective of cognitive linguistics (or cognitive semantics). More specifically, it is made with its special focus on the following anaphoric examples, where (3B) shows six patterns of responses to (3A)'s tag question:

(3) [The following is a conversation between two casting directors.]

A: Tom is a suitable person to play Hamlet, isn't he?

B: (i) No, *he* is not a suitable person. (ii) But his cheerful mood like *that* may spoil that play.

(iii) No, he can't play *him*. (iv) Oh, *that* is too difficult a tragedy for him!

(v) But *he* may forget his lines on the stage. (vi) No, *that* would be too risky!

Note here that all the examples in (3) need to be captured in terms of cognitive linguistics (or cognitive semantics). The point is that, as Lakoff's (1990) Cognitive Commitment clearly states, the investigation here needs to "make one's account of human language accord with what is generally known about the mind and the brain, from other disciplines as well as our own" (*ibid.*: 40). Hence, all the examples in (3) should be explained by the cognitive mechanism that is also applicable to other cognitive domains (e.g. literature, music, art, etc.). Another way of saying the same thing is that principles for language

alone should not be assumed in the course of the investigation here.[1]

2. Conceptual Reference in Meaning Construction

What do the italicized pronouns and demonstratives in (3B) refer to? Let us first consider the pronouns, which function as normal reference (or referring to a participant): i.e. *he* in (3B-i), *him* in (3B-iii), and *he* in (3B-v). In traditional linguistics, it has long been recognized that the comprehension of anaphoric relations can be achieved by a simplistic and static operation such as mere co-referential mappings between an anaphor and an antecedent (cf. Reinhart 1983, Quirk, *et al.* 1985; Huddleston & Pullum 2002; etc.). According to this principle, it is generally explainable that *he* in (3B-i) and *him* in (3B-iii) refer back to *Tom* and *Hamlet* in the preceding utterance, respectively. In the case of *he* in (3B-v), however, this standard view of anaphoric relations cannot be applied, because there is no explicit antecedent in the preceding utterance. That is, it would be obviously misleading to claim that the pronoun *he* refers back to *Tom* in the preceding utterance. The reason is that, on more careful inspection, it seems that the pronoun designates the hypothetical concept "Tom as Hamlet" or "Tom that is playing Hamlet (in the hypothetical context)" under the influence of the contextual information *may forget his lines on the stage*.

Let us then consider the demonstratives, which serve as extended reference: i.e. *that* in (3B-ii), *that* in (3B-iv), and *that* in (3B-vi). Generally speaking, the traditional interpretation process of anaphoric relations cannot also be supported in these examples of extended reference, because it is a truism that there is no explicit antecedent in the preceding utterance. In (3B-ii), *that* can be understood as referring to the property "Tom's cheerful mood", which is conceptually connected to the person *Tom*. In (3B-iv), *that* can be regarded as designating the play "Hamlet", which is conceptually related to the play's hero *Hamlet*. And in (3B-vi), *that* can be taken as referring to the hypothetical event "Tom's playing of Hamlet", which is conceptually linked to the hypothetical entity "Tom as Hamlet".

To summarize, what is common to the examples in (3B-ii), (3B-vi), (3B-v), and (3B-vi) is that, unlike the examples in (3B-i) and (3B-iii), the referents are perfectly implicit. Moreover, when it comes down to the examples in (3B-v) and (3B-vi), it is highly important to note that the referents are hybrid as well as implicit. Hence, the traditional approach (i.e. mere co-referential mappings between counterparts) fails to treat all the examples in (3B) from a uniform perspective. To overcome this problem (i.e. to achieve a uniform treatment of all the examples in (3B)), the notion "meaning construction" should be evidently needed, which implies that meaning is actually constructed within the given discourse context (cf. Fauconnier 1994, 1997, 1999, etc.). To understand this notion more specifically, it would be instructive to cite the following observations from Fauconnier (1997, 1999)[2]:

(4) a. "A language expression *E* does not have a meaning in itself; rather, it has a *meaning potential*, and it is only within a complete discourse and in context that meaning will actually be produced. The unfolding of discourse brings into play complex cognitive constructions. They include the setting up of internally structured domains linked to each other by connectors; this is effected on the basis of linguistic, contextual, and situational clues."

(Fauconnier 1997: 37-8)

b. "Echoing Erving Goffman, I have called this backstage cognition. Language is only the tip of a spectacular cognitive iceberg, and when we engage in any language activity, be it mundane or artistically creative, we draw unconsciously on vast cognitive resources, call up innumerable models and frames, set up multiple connections, coordinate large arrays of information, and engage in creative meanings, transfers, and elaborations. This is what language is about and what language is for." (Fauconnier 1999: 96)

In the research field of cognitive linguistics (or cognitive semantics), anaphoric phenomena have been steadily discussed from the experientialist perspective. Especially within Langacker's (1987, 1990, 2000, etc.) framework of Cognitive Grammar, the reference-point model (or ability)[3] has been widely proposed as a principle of invisible meaning construction that supports anaphoric phenomena. For example, van Hoek (1997, 2003) and Langacker (1996, 2000) deal with pronominal anaphora in terms of this reference-point model. Applying this model to other anaphoric phenomena, Takahashi (2001) and Yamanashi (2003, 2004) also discuss indirect anaphora and inferential anaphora, respectively.

To understand the reference-point approach to anaphoric phenomena, let us here consider the following example from Yamanashi (2003):

(5) *The phone* rang. Kugelmass lifted *it* to his ear mechanically. (W.Allen, *The Kugelmass Episode*, 26)

(Yamanashi 2003: 853)

In this case, what does the pronoun *it* in the second sentence refer to? In this respect, Yamanashi (2003) explains as follows: "Apparently, the antecedent in question seems to correspond directly to the preceding noun phrase *the phone*. This, however, is not the case. What the pronoun *it* means here is not the phone itself, but rather the receiver. … The anaphoric relation … is rather guaranteed by way of the patronymic relation which holds between the two noun phrases (i.e., <whole> (= [the phone]) - <part> (= [the receiver])) and the coreferential identification of the latter noun phrase (*ibid.*: 853-4)". Furthermore, Yamanashi (2003) goes on to claim that this kind of anaphoric phenomena "can be explicated in a principled way in terms of a cognitive model based on reference-point ability (*ibid.*: 854)". In the case of (5), the reference-point model offers the following explanation: "*the phone* serves as a reference point (i.e., R_1 …), through which we can have access to its target T_1 (*the receiver*) in the dominion (D_1) invoked by R_1 (*ibid.*: 854)" [see Figure 1: C = Conceptualizer]. At the hands of such an invisible meaning construction, we can identify *the receiver* as the referent of the pronoun *it* successfully.

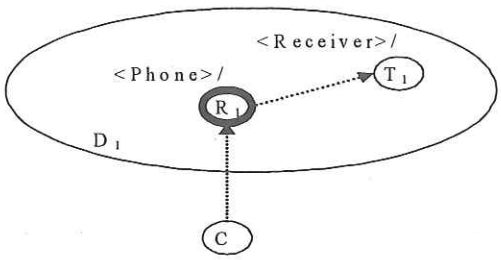


Figure 1: Reference-Point Model

When the reference-point model is applied to the examples in (3B), it can give an adequate explanation for capturing the examples in (3B-i), (3B-ii), (3B-iii), and (3B-iv): i.e. *he* in (3B-i) designates "Tom" serving as a reference point in the dominion of Tom, *that* in (3B-ii) "Tom's cheerful mood" functioning as a target in the dominion of Tom, *him* in (3B-iii) "Hamlet (as a role)" serving as a reference point in the dominion of Hamlet, and *that* in (3B-iv) "the play *Hamlet*" functioning as a target in the dominion of Hamlet. However, when the examples in (3B-v) and (3B-vi) are taken into consideration, even the reference-point model fails to account for these referents successfully. The reason is that the reference-point model can simply evoke the preexisting context (or the frame structure), but it cannot function as a cognitive model for constructing novel emergent contexts. Briefly put, within the framework of reference-point model, there exist no cognitive mechanism that allows entities (or referents) to accumulate properties and attributes selectively and to change states as the discourse unfolds.

Then, how about the traditional/standard Mental Space Theory (Fauconnier 1994, 1997)? This theory is commonly viewed as another framework for capturing reference and anaphora from the standpoint of cognitive linguistics. To analyze the examples in (3) in terms of Mental Space Theory, the following meaning construction would be generally assumed [see Figure 2]:

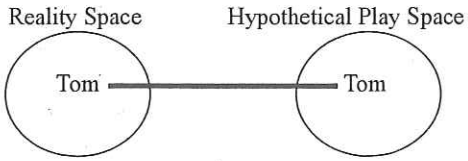


Figure 2: Mental Space Theory

In the case of (3B-i) and (3B-ii), the referential relations are easily treatable: i.e. *he* in (3B-i) = "Tom" in Reality Space and *that* in (3B-ii) = "Tom's cheerful mood" in Reality Space. However, Mental Space Theory fails to deal with other examples in (3) straightforwardly. First, in the case of (3B-v) and (3B-vi), it may be explainable that *he* in (3B-v) and *that* in (3B-vi) designate "Tom" and "Tom's Play" in Hypothetical Play Space, respectively. However, the glaring problem here is that Figure 2 represents only the results of on-line meaning construction processes. On closer inspection, Hypothetical Play Space can be viewed as constituting an emergent space, which is constructed by the conceptual integration of Reality Space and the story of

Hamlet. If so, Hamlet Space (which stores the story of Hamlet) also needs to be represented explicitly in the on-line meaning construction. Otherwise, the property *Hybridity* in the examples (3B-v) and (3B-vi) would remain unelaborated in the on-line meaning construction processes. Furthermore, if the representation such as Figure 2 is maintained, it would also be somewhat difficult for the examples (3B-iii) and (3B-iv) to establish their referential relations. To refer to "Hamlet (as a role)" and "the play *Hamlet*" straightforwardly, the evocation of Hamlet Space needs to be required in the on-line meaning construction.

It is undoubtedly undeniable that Mental Space Theory succeeds in realizing dynamic conceptualization of on-line meaning construction. However, as Figure 2 shows, it cannot also be overlooked that Mental Space Theory stays within the realm of weak dynamism. In that sense, more dynamic conceptualization processes of on-line meaning construction should be evidently needed to achieve a unified account of (3). In addition, Mental Space Theory fails to achieve a consistent mental space configuration, because different kinds of mental space configurations are needed in accordance with each linguistic phenomenon. However, if this line of stance is taken, the following problem arises: To satisfy Lakoff's (1990) Cognitive Commitment, it becomes quite difficult to collect abundant converging evidence from a variety of cognitive domains other than language. As a result, it becomes impossible to impose empirically adequate constraints on the construction of mental spaces.

In what follows, this paper will argue that Fauconnier & Turner's (1994, 1998, 2002) framework of Conceptual Blending should be evidently needed as a crucial principle of invisible meaning construction to overcome the problems mentioned in this section and achieve a unified account of all the referents in (3B).

3. Conceptual Blending Theory

In the research context of cognitive linguistics, the framework of Conceptual Blending has been proposed by two scholars, Gilles Fauconnier and Mark Turner. Conceptual Blending is a general cognitive operation for online meaning construction, and it is routinely employed in a variety of cognitive fields as a foundation for the creativity of human thought. The constitutive principles of Conceptual Blending are in principle so simple, and they are summarized as follows [see also Figure 3]:

(6) a. *Partial Cross-Space Mapping*: a partial mapping of counterparts between the Input Spaces I_1 and I_2.

b. *Generic Space*: some common, usually more abstract, structure and organization shared by the Inputs I_1 and I_2.

c. *Selective Projection to the Blend*: the partial projection of the Inputs I_1 and I_2 onto the Blended Space.

d. *Development of Emergent Structure* [see Figure 2: The box in the Blend represents emergent structure]: the Blended Space has emergent structure not provided by the Inputs, via three interrelated ways: *Composition* of projections from the Inputs, *Completion* based on independently recruited frames and scenarios, and *Elaboration* through "running the blend" imaginatively according to its own emergent logic.[4]

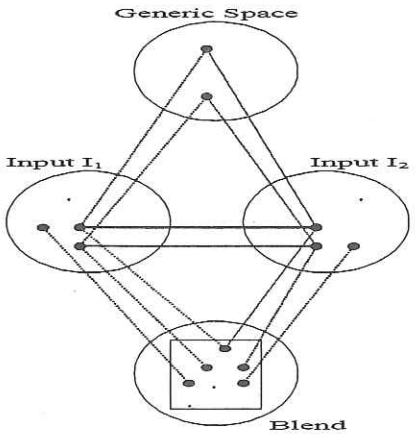


Figure 3: Basic Diagram (Fauconnier &Turner 2002: 46)

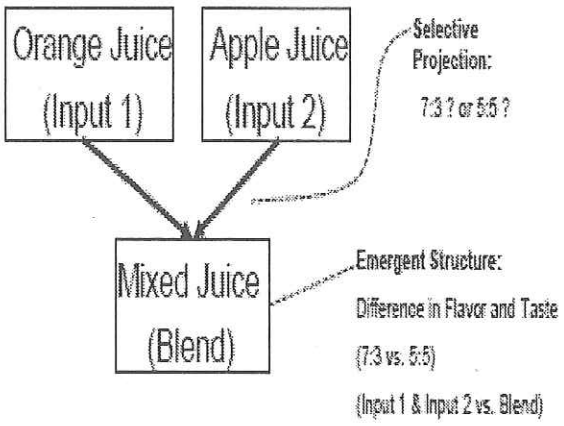


Figure 4: Mixed Juice

To arrive at a deeper understanding of this theory, let us here look at one simple example of blending, Mixed Juice [see Figure 4]: Let us here assume Apple Juice and Orange Juice as two Inputs. In this case, the way in which they are mixed (or more specifically, the proportion in which they are mixed) has repercussions on Mixed Juice's flavor and taste to be made in the Blend. For example, Mixed Juice in the proportion of seven to three is clearly different in its flavor and taste from Mixed Juice in the proportion of five to five. Moreover, it is a truism that Mixed Juice in the Blend is quite different in its flavor and taste from Apple Juice and Orange Juice in the Inputs. These aspects mirror the very nature of emergent structure provided by neither of the Inputs, which is a pivotal claim of Conceptual Blending Theory. [NB: In this case, Generic Space stores the following common properties: e.g. "ingredient", "juice", "liquid", etc.]

In the previous studies, as convergent evidence for the existence of Conceptual Blending, many researchers have revealed the working of this general cognitive process within a wide range of cognitive fields: [Language] Fauconnier & Turner (1996), Turner & Fauconnier (1995, 1998), Mandelblit (1997, 2000), Sweetster (1999), Grady, Oakley & Coulson (1999), Brandt & Brandt (2005), Hougaard (2005), [Literary Works] Turner (1996), Freeman (2003), Hiraga (1999, 2005), Dancygier (2005), [Mathematics] Lakoff & Núñez (2000), [Humor] Coulson (2001), [Music] Zbikowski (2001), [Gesture and Signed Language] Liddell (2003), Dudis (2004), [Social Science] Turner (2001), [Cinema] Rohrer (2005), [Game] Tea & Lee (2004), [Rituals] Sweetser (2000), [Cartoons] Turner (1999), Rohrer (2001), [Art] Oakley (2002), Brandt (2005), [Religion] Ramey (2002), [Artifacts] Hutchins (2005), Brandt (2005), [Symbolic Play] Sinha (2005), [Psychiatry] Kiang (2005), etc. (Because of limited space, the literature here is omitted in the References below. For more details, see the blending website *http://blending.stanford.edu/*.) Hence, such converging evidence shows that the framework of Conceptual Blending is not a principle for language alone: i.e. Lakoff's (1990) Cognitive Commitment is fully satisfied.

From the overview above, it turns out that Conceptual Blending Theory has the following advantages to achieve a unified account of all the examples in (3): (i) Conceptual Blending Theory is workable as a cognitive model for constructing novel emergent contexts, (ii) The property *Hybridity* can be eminently represented in the blending network, (iii) Conceptual Blending Theory can satisfy Lakoff's (1990) Cognitive Commitment sufficiently, and (iv) Conceptual Blending Theory can impose empirically adequate constraints on the construction of mental spaces, in that only three types of mental spaces are constructed (Input, Generic, and Blend).

4. Extended Reference and Conceptual Blending

This section will show that Fauconnier & Turner's (1994, 1998, 2002) framework of Conceptual Blending should be evidently needed to deal with all the referents in (3B) from a uniform perspective. In so doing, it will suggest that referents in the flow of discourse can be dynamically and flexibly constructed, not statically prescribed in the preceding context.

Let us first consider the example (3B-v), which is repeated as (7) below for convenience:

(7) A: Tom is a suitable person to play Hamlet, isn't he?　B: But *he* may forget his lines on the stage.

This can be understood as follows: To get the interpretation of the pronoun *he*, the occurrence of the first utterance needs to arrive at the construction of invisible meaning, i.e. "Tom as Hamlet" or "Tom that is playing Hamlet (in the hypothetical context)". What makes this possible seems to be the very cognitive operation of Conceptual Blending [see Figure 5]: (i) Input 1 is a knowledge space that includes Tom and his characteristics (e.g. tall, cheerful nature, inexperienced actor, etc.). Input 2, on the other hand, contains the *Hamlet* frame (or the story of *Hamlet*) that is written by William Shakespeare. (ii) "Tom" in Input 1 is linked to "Hamlet" in Input 2 by a role-value vital relation, and the shared property "Person (Male)" is projected to Generic Space. (iii) Through the cognitive process of Conceptual Blending, the hypothetical context of play is emergently constructed in the Blend as a whole. Under that process, "Tom" in Input 1 and "Hamlet" in Input 2 are conceptually compressed to become a single entity in the Blend [5], i.e. the hybrid notion "Tom as Hamlet" or "Tom that is playing Hamlet". Hence, it is possible to explain that the pronoun *he* in the second utterance designates the hybrid entity constructed in the Blend, i.e. "Tom as Hamlet" or "Tom that is playing Hamlet". This can also be supported from the fact that the pronoun *he* co-occurs with the hypothetical context *may forget his lines on the stage*.

Understood in this way, the italicized pronouns *he* and *him* in (3B-i) and (3B-iii) can be easily interpreted on the basis of the above-mentioned meaning construction (i.e. Figure 5):

(8) A: Tom is a suitable person to play Hamlet, isn't he?

B: (i) No, *he* is not a suitable person. [= (3B-i)] (ii) No, he can't play *him*. [= (3B-iii)]

In the former case [i.e. (8B-i)], it is possible to claim that the pronoun *he* designates the entity "Tom" in Input 1, while in the latter case [i.e. (8B-ii)], it is explainable that the pronoun *him* refers to the entity "Hamlet" in Input 2.

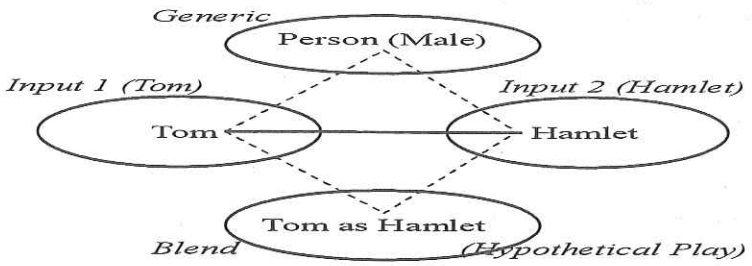


Figure 5: Conceptual Blending in (3)

In a similar vein, the examples of extended reference [i.e. (3B-ii), (3B-iv), and (3B-vi)] can be explained in accord with the invisible meaning construction in Figure 5:

(9) A: Tom is a suitable person to play Hamlet, isn't he?

B: (i) But his cheerful mood like *that* may spoil that play. [= (3B-ii)]

(ii) Oh, *that* is too difficult a tragedy for him! [= (3B-iv)] (iii) No, *that* would be too risky! [= (3B-vi)]

In the case of (9B-i), it is possible to say that the demonstrative *that* refers to the Input 1 as a whole (or more specifically, Tom's cheerful mood in the Input 1). In the case of (9B-ii), it is explainable that the demonstrative *that* designates the Input 2 as a whole (i.e. the story of *Hamlet*). Finally in the case of (9B-iii), it can be claimed that the demonstrative *that* refers to the Blend as a whole (i.e. the hypothetical context of play).

From what has been argued so far, it can be concluded that: (i) Fauconnier & Turner's (1994, 1998, 2002) framework of Conceptual Blending can provide an insightful way for treating all the referents in (3B) uniformly, and (ii) In the case of normal reference (i.e. referring to a participant), entities in mental spaces serve as referential candidates, while in the case of extended reference (i.e. referring to extended text), mental spaces themselves function as referential candidates.

5. Extended Reference in Blended Spaces

This section will offer further examples of extended reference in blended spaces to understand that this type of reference is not exceptional but pervasive in actual language use.

Let us first consider the examples in (10):

(10) a. A: That stone lion may be soft. B: Oh, *that*'s impossible!

b. A: In that movie, Tom played Hamlet perfectly. B: Certainly. I think *this* was his last chance.

c. A: Like a bird, Mary was flying high in the sky. B: Yes, *it* was a fantastic story.

According to the traditional interpretation process such as mere co-referential mappings between counterparts, these examples can be easily explained as follows: In (10a), the demonstrative *that* in the second utterance refers back to the first utterance: *That stone lion may be soft.* In (10b), the demonstrative *this* also designates the first utterance: *In that movie, Tom played Hamlet perfectly.* Likewise in (10c), the pronoun *it* refers back to the first utterance: *Like a bird, Mary was flying high in the sky.*

However, when these examples are reconsidered in conceptual terms, it becomes evident that all the three reference items in these examples (i.e. *that*, *this*, and *it*) can be understood as referring to blended spaces constructed in the flow of discourse. As one example, let us here consider the example (10a) to make clear the referent of the demonstrative *that*. Its invisible meaning construction can be summarized as follows [see Figure 6]: (i) Input 1 includes the notion "stone lion" that means "the lion made of stone (which functions as an ornament)", whereas Input 2 contains the image of soft things such as cushions and pillows. (ii) "Stone lion" in Input 1 is linked to "soft things" in Input 2, and Generic Space stores their common properties (e.g. object, etc.). (iii) Through the cognitive operation of Conceptual Blending, the hypothetical context (i.e. the concept "soft

stone lion") is constructed in the Blend. More specifically, it emerges by conceptually integrating the notion "stone lion" projected from Input 1 and the property "soft" inherited from Input 2, while at the same time, by discarding the property "hard" in the notion "stone lion". It is therefore explainable that the demonstrative *that* refers to the Blend as a whole, i.e. the hypothetical context "soft stone lion".

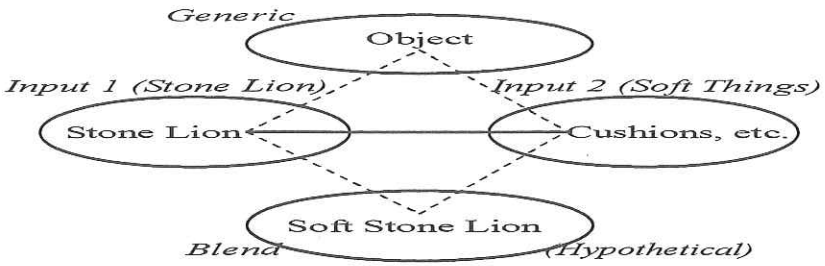


Figure 6: The Example (10a)

Similarly, the examples (10b) and (10c) can be explained as in the following:

(11) a. (10b): Input 1 [a knowledge space that includes Tom and his characteristics], Input 2 [the *Hamlet* frame], Blend [Movie Context: Perfect Tom-as-Hamlet] → The demonstrative *this* in the second utterance refers to the Blend as a whole.

b. (10c): Input 1 [Fictive Context: Mary was flying high in the sky], Input 2 [Bird Frame], Blend [Metaphorical Context: Mary-as-a-bird was flying high in the sky] → The pronoun *it* in the second utterance designates the Blend as a whole.

Let us then consider the examples in (12), where the reference item "the + N" is used:

(12) a. That pistol may be a fake. But we couldn't clear up *the doubt*.

b. John disappeared like a shooting star. So, we cannot forget *the scene* definitely.

c. Mary is the mother of John. Don't forget *the fact*, please!

Under the traditional approach (i.e. mere co-referential mappings between counterparts), the italicized reference items are interpretable as follows: In (12a), *the doubt* in the second sentence refers back to the first sentence: *That pistol may be a fake*. In (12b), *the scene* also designates the first sentence: *John disappeared like a shooting star*. Similarly in (12c), *the fact* refers to the first sentence: *Mary is the mother of John*.

However, on more careful inspection, it becomes apparent that these examples can also be recaptured by "extended reference in blended spaces". Due to the space limitation, the meaning construction processes in (12) are schematically shown in (13):

(13) a. (12a): Input 1 [Real Pistol], Input 2 [the image of fakes], Blend [Hypothetical Context: Fake Pistol] → *The doubt* refers to the Blend as a whole.

b. (12b): Input 1 [Event: John disappeared], Input 2 [the image of a shooting star], Blend [Metaphorical Context: John disappeared like a shooting star] → *The scene* in the second sentence designates the Blend as a whole.

c. (12c): Input 1 [the unframed space that includes Mary and John], Input 2 [the kinship frame *mother-son*], Blend [Hybrid Context: the space that includes two hybrid entities "Mary as Mother" and "John as Son"] → *The fact* in the second sentence refers to the Blend as a whole.

From the discussion above, it can be concluded that extended reference in blended spaces is not necessarily an exceptional linguistic phenomenon. That is, it would be more reasonable to argue that this type of reference can be conceived of as a rather prevailing case of actual language use.

6. Conclusion

This paper has reconsidered the notion *extended reference* from the perspective of cognitive linguistics (or cognitive semantics). In conclusion, the following four points can be suggested: (i) The manifest difference between normal reference and extended reference can be attributed to what kinds of mental constructs are singled out as referential candidates: i.e. in

normal reference, entities in mental spaces can be profiled as referential candidates, whereas in extended reference, mental spaces themselves can be focused upon as referential candidates. (ii) Within the context of cognitive linguistics (or cognitive semantics), Fauconnier & Turner's (1994, 1998, 2002) framework of Conceptual Blending can provide helpful clues for treating extended reference in blended contexts straightforwardly. (iii) To treat all the examples in (3B) from a unified perspective, Fauconnier & Turner's (1994, 1998, 2002) framework of Conceptual Blending should be evidently needed as a crucial principle of invisible meaning construction. (iv) Referents in the flow of discourse are dynamically and flexibly constructed (or conceptualized/construed), not statically prescribed in the preceding context. Hence, it seems highly important to construct the theory of anaphora and reference that allows entities (or referents) to accumulate properties and attributes selectively and to change states as the discourse unfolds.

Notes

* This research was supported by a grant from the Japan Society for the Promotion of Science (Grant No. 18・2941).
<Author's e-mail address> yasuhara@t02.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

[1] In that sense, formal and objectivist approaches such as Discourse Representation Theory (Kamp & Reyle 1993) explore principles for language alone, and thereby run counter to Lakoff's (1990) Cognitive Commitment. Hence, this line of approaches are removed from consideration.

[2] With respect to the notion "meaning construction", Langacker (2000: Ch.2) also states that: (a) "the various dimensions of construal tend to be "invisible" to the conceptualizer, crucial though they are to linguistic semantics." (*ibid.*: 46), (b) "a prime example of "invisible" semantic constructs is mental space organization" (*ibid.*: 47), and (c) "meaning is largely a matter of construal, and construal is largely invisible." (*ibid.*: 71).

[3] See Langacker (1993, 1997, 2000) for detailed discussion of the reference-point model (or ability).

[4] Plainly speaking, the process *elaboration* is understandable as mental simulation (or mental imaging).

[5] In the context of Conceptual Blending, this kind of operation is known as *compression*.

References

Fauconnier, Gilles. (1994) *Mental Spaces (2nd Edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.

Fauconnier, Gilles. (1997) *Mappings in Thought and Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Fauconnier, Gilles. (1999) "Methods and Generalizations." In: Theo Janssen and Gisela Redeker (eds.), *Cognitive Linguistics: Foundations, Scope, and Methodology*, pp. 94-127. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Fauconnier, Gilles, and Mark Turner. (1994) "Conceptual Projection and Middle Spaces." Technical Report no.9401, Department of Cognitive Science, University of California, San Diego.

Fauconnier, Gilles, and Mark Turner. (1998) "Conceptual Integration Networks." *Cognitive Science* 22 (2): 133-187.

Fauconnier, Gilles, and Mark Turner. (2002) *The Way We Think: Conceptual Blending and The Mind's Hidden Complexities*. New York: Basic Books.

Halliday, M. A. K. and Ruqaiya Hasan. (1976) *Cohesion in English*. London: Longman.

Huddleston, Rodney, and Geoffrey K. Pullum (eds.) (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kamp, Hans, and Uwe Reyle. (1993) *From Discourse to Logic*. Dordrecht: Kluwer.

Lakoff, George. (1990) "The Invariance Hypothesis: Is Abstract Reason Based on Image-Schemas?" *Cognitive Linguistics* 1 (1): 39-74.

Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin/ New York: Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. (1993) "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4 (1): 1-38.

Langacker, Ronald W. (1996) "Conceptual Grouping and Pronominal Anaphora." In: Barbara Fox (ed.), *Studies in Anaphora*, pp. 333-378. Amsterdam: John Benjamins.

Langacker, Ronald W. (1997) "A Dynamic Account of Grammatical Function." In: Joan Bybee, John Haiman, and Sandra A. Thompson (eds.), *Essays on Language Function and Language Type: Dedicated to T. Givón*, pp. 249-273. Amsterdam: John Benjamins.

Langacker, Ronald W. (2000) *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Reinhart, Tanya. (1983) *Anaphora and Semantic Interpretation*. London: Croom Helm.

Takahashi, Hidemitsu. (2001) "Eigo no Kansetsu-Shoo: Ninchi-Bunpoo no Kanten Kara [Indirect Anaphors in English: A Cognitive Grammar Analysis]." In: Yamanashi Masa-aki, *et al.* (eds.), *Ninchi-Gengogaku Ronko [Studies in Cognitive Linguistics]* No.1, pp. 111-141. Tokyo: Hituzi Shobo.

van Hoek, Karen. (1997) *Anaphora and Conceptual Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.

van Hoek, Karen. (2003) "Pronouns and Point of View: Cognitive Principles of Coreference." In: Michael Tomasello (ed.), *The New Psychology of Language (Volume 2)*, pp. 169-194. Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.

Yamanashi, Masa-aki. (2003) "Anaphora and Reference-Point Ability." In: Shuji Chiba, *et al.* (eds.), *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, pp. 846-857. Tokyo: Kaitakusha.

Yamanashi, Masa-aki. (2004) "Sanshoten Moderu kara mita Shoo no Mekanizumu [The Mechanism of Anaphora: A Perspective from Reference-Point Model]." In: Teruhiro Ishiguro and Nobuyuki Yama-uchi (eds.), *Gengo Kenkyu no Setten: Riron to Kijutsu [A Point of Language Study: Theory and Description]*, pp. 47-65. Tokyo: Eihosha.

否定疑問文の語用論的機能に関する考察[i]

山嵜章裕（京都大学大学院人間・環境学研究科）
横森大輔（京都大学大学院人間・環境学研究科）

＜要旨＞
本研究は日本語の表現形式の一つである否定疑問文を対象に、以下のことを主張する：
(i) 従来の分類でいう分析的・非分析的疑問文の境界事例が示す曖昧さは、現象に言語表現の理解のレベルと行為の理解のレベルが関わっていることが原因である。(ii) 否定疑問形式が、多様な機能を持つ発話内で現れることは、その形式の使用が持つ含意と発話者の行為のプランとの関係が動機づけている。(iii) 上記の動機付けに対して、言語理解と行為の複層モデルが説明力を持つ。

＜キーワード＞　否定疑問文、発話行為

1. はじめに

本研究は、日本語の表現形式の一つである否定疑問と、特定の語用論的機能との関係を考察する。本研究では、否定疑問形式の中の「[動詞]＋ないか」（もしくはその文体的変異形である「[動詞]＋ませんか」、以下「～ないか」又は「～ませんか」と表記）という形式に着目し、分析を行う。

「～ないか」という形式は、以下のように様々な機能を持つ発話で用いられる。

(1)　絶対誰にも話さないか？　　＜確認＞
(2)　あの絵傾いてないか？　　＜推定＞
(3)　これ食べてみないか？　　＜勧め＞
(4)　そろそろ行かないか？　　＜誘い＞
(5)　ちょっと手伝ってくれないか？　　＜依頼＞　　((1)～(5) 田野村 1988)
(6)　それだけは勘弁してくれないか？　　＜懇願＞　　（作例、以下明記せず）

このように否定疑問文に多様な用途があることは、これまで数々の研究で指摘がなされている（田野村 1988・1991、安達 1999、森田 2002 等）。「～ないか」という形式自体は、下降音調で納得を表現する際に用いられるなど（例：「そうか、君は一緒に行かないか。」）疑いや問いかけ以外の用法もあるが、本論ではそのような用法には触れず、上昇音調を常に伴い一般に疑問文と解釈されるタイプの用法のみを扱うことにする。本論では、「～ないか」が用いられる文の性質について、まず田野村（1988, 1991）の分類における記述的問題点を指摘し、発話理解と行為の区別に基づく複層モデルによる現象記述を提案する。これにより、田野村（*ibid.*）で十分に為されていなかった、否定疑問形式と特定の語用論的機能との関係の動機付けに対する説明がなされると考える。

2. 「分析的／非分析的否定疑問文」について（田野村 1988）

田野村論文のうち本論に関連のある考察について概観する。

2.1 非分析的否定疑問文

田野村（1988）は(7)〜(10)のような否定疑問文を「話し手は否定辞に前接する表現の内容を否定してはおらず、むしろ、それを認める方に傾いている（田野村 1988）」と特徴づけている。

(7) あの絵傾いてないか？ ＜推定＞
(8) これ食べてみないか？ ＜勧め＞
(9) そろそろ行かないか？ ＜誘い＞
(10) ちょっと手伝ってくれないか？ ＜依頼＞ ((7)〜(10) 田野村 1988)

例えば(7)の発話では、絵が傾いていることへの話し手の確信が高いとされる。(8)〜(10)はそれぞれ「食べてみる」「行く」「手伝ってくれる」という、指示的（directive）な発話として機能する。「〜ないか」の機能が構成要素ナイとカに還元できないということから、これらの用法を田野村は「非分析的な否定疑問文」であると述べている[ii]。

2.2 分析的否定疑問文

一方(11)(12)のような否定疑問文は、否定命題に対する肯否を聞き手に問いかける表現と特徴づけられる。ナイとカの構成性が(7)〜(10)に比べ明確であることから、田野村は「分析的な否定疑問文」と呼んでいる。

(11) 本当にあの絵傾いてないか？
(12) 絶対誰にも話さないか？ ((11)(12): 田野村 1988)

3. 田野村（1988）の問題点

否定疑問形式を用いた文の機能が、分析的・非分析的という名称はどうあれ、特徴の上で下位集合を成すことは観察的事実として同意するが、その分類は表層的な分布以上を説明しないものである。このことは、以下の点に具体的な問題として現れる。

3.1 境界事例の扱い

田野村論文では分析的・非分析的否定疑問文の連続性についての示唆こそあれ、その連続性の内実については扱われていない。

(13) a.（分析的疑問文と非分析的疑問文の）相違は小さく、結局、両者は連続するものであろうと思われる。（田野村 1988:17）
b.（分析的疑問文の性質について）「形-ないか$_2$」「動-ないか$_2$」（引用者注：非分析的疑問文のスキーマ表示）との連続性が再び問題となるが、この点は問わないことにする。（*ibid.*:26）

両者の相違を特徴付けるものの一つとして、否定疑問文に対しどのような応答が無標か、ということがある（田野村 1988・1991、井上 1990・1992）。次のように話し手の問いかけに対する同意的態度の表明が(14)では肯定命題に、(15)では否定命題になっている。

(14) 一度は行きたくないか？（非分析的否定疑問文）→「はい、行きたいです」

(15)　一度も行きたくないか？（分析的否定疑問文）→「はい、行きたくありません」
((14)(15) 田野村 1988)

しかし、応答の仕方は文レベルでは必ずしも自明ではなく、文脈や発話状況によって変わることもある[iii]。

(16) a.（聞き手が今日は風邪で休むことがわかっている状況で）「今日は飲みに行かないか？」
「はい、行きません」
b.（聞き手の手を引っ張りながら）「今日は飲みに行かないか？」
「はい、行きます」

(16a)(16b)の返答（＝言語的応答）はともに先行発話に対する同意的態度の表明であるが、(16a)は質問に対する応答を、(16b)は話し手の誘いに対する応答を行っており、両者に対する応答はそれぞれ異なるレベルの応答である。つまり、分析的否定疑問文は質問という発語内行為を行い、非分析的否定疑問文は質問という“方法”を用いることで指示的（directive）な行為を行っているといえる。言い換えれば、両者は同レベルの事象を区別した分類ではないことになる。

田野村の分類では表層の形式のみを変数としたものであり、発話行為のレベルで現象をとらえたときに生じるこのような複雑性を捉えきれていない。このことは4.1で詳述する。

3.2 否定疑問形式の特定の機能に関して

否定疑問形式「～ないか」が、勧誘はじめ様々な語用論的機能を持つ発話で用いられるという記述こそあれ、なぜそうなのかという説明はない。つまり、否定疑問文が特定の語用論的機能を持つことに対する動機付けが明確に示されていない点が不十分である。

4. 言語表現と行為の複層モデルの導入

上記のような先行研究の問題点を踏まえ、本論では代案として言語表現と行為の複層モデルによる現象記述を提案する。

4.1 言語表現と行為の関係

我々は言語を用いて何らかの行為を実現する（Austin 1962、Searle 1969）。ある発話によって何かを遂行することは、巨視的に見ると目標指向的（goal-oriented）な行為であるといえる（Levinson 1979）。従って、会話における個々の発話の価値は、会話参与者各々の目的に対して相対的に決められるものである。つまり、言語の具体的な使用においては、言語表現の理解と平行して（ある目的へ向かう）行為の理解も同時になされているといえる。

このことは、日常の言語使用においてしばしば顕在化する。例えば(17a)のような発話に対し、(17b)のような応答をしたとする。

(17) a. 明日、暇？
b. ごめん、暇じゃないんだ。

このとき(17b)は(17a)の質問に対する言語的応答をしながら、行為のやりとりのレベルでは「誘いに対する断り」として機能している（一言目に謝罪の表現が表れるのは拒否の常套手段の一つ

(Levinson 1983))。これは、聞き手が(17a)の発話を「話し手は、質問することで何か別の行為を行おうとしている」と解釈したことを示す。このような状況はごく頻繁に起こることであり、我々の言語使用において言語表現の理解と行為の理解とは不可分であることがわかる。

4.2 否定疑問形式の使用と話し手の見込み

否定疑問形式の使用には一般に、(それに相当する肯定疑問形式と比較して)特定の認識的傾向があるとされる(Kageyama and Tamori 1975-76、田野村 1991)。田野村(1991)はこのような認識的傾向を「話し手の見込み」と呼び、肯定疑問文および否定疑問文の使用条件を、命題に対する話し手の見込みという観点から説明しようとしている。しかし、同じ枠組みで否定疑問文の複雑性を説明しようとすると破綻が生ずる。

(18) 話し手が見込んでいる命題のほうが用いられやすい。(田野村 1991: 9)
「絶対誰にも話さないか?」: 見込みは“絶対誰にも話さない”
(19) 何らかの目的で、実際の見込みとは逆の形で表現することがある。(*ibid.*: 10)
「そろそろ行かないか?」: 見込みは“そろそろ行く”

田野村によれば(18)の条件により用いられるのが分析的な否定疑問文、(19)の条件で「見せかけの見込み」(田野村 1991: 10)により用いられるのが非分析的な否定疑問文ということになるが、条件の設定がアドホックであることから説明力に欠けると言わざるを得ない。(16a)(16b)の発話が、前景化している機能こそ異なれど、言語表現としては同じ否定疑問形式を用いた質問であるという事実を包括的に説明する必要がある。つまり、「否定疑問形式を使用した質問が何を含意するのか」ということと、結果として生じる(16a)(16b)の差異を、分けて考える必要があると考えられる。

4.3 話し手と聞き手の非対称性

否定疑問形式使用の含意を考えるときに、話し手と聞き手の非対称性は無視できない。例えば、(20)のように話し手が聞き手に働きかける意志的行為について聞き手の意向を尋ねる提案型の発話の場合、否定疑問形式の使用は適切でない(田野村 1991:12)。これはおそらく、話し手のみによる行為の意志決定自体は話し手の認知状態次第でなされるものであるからと考えられる。一方、話し手が聞き手に懇願を行う場合は、(21)のように否定疑問形式がごく自然である。従って、否定疑問形式使用の動機付けには、聞き手からどのように同意的な応答を引き出すかという話し手のストラテジーが大きく関与していると考えられる。

(20) a. 「食後にそば湯お持ちしますか?」　「じゃあ、お願いします。」
b. 「*食後にそば湯お持ちしませんか?」
(21) a. 「???お願いだから助けてくれますか?」
b. 「お願いだから助けてくれませんか?」

4.4 否定疑問形式使用と行為

4.2 および 4.3 の考察をもとに、否定疑問形式の使用における言語表現のレベルの特徴と、行為のレベルの特徴との関係を考える。

まず、否定疑問形式「~ないか?」使用の含意は、田野村(1991)の「話し手が見込んでいる命題のほうが用いられやすい」というものを踏襲する。但し、「見込み」という概念が曖昧であるので

以下のように再定義する。

(22)　否定疑問形式「～ないか？」(「～ませんか？」による質問は、否定命題「～ない」(「～ません」) を用いた言語表現による応答を優先的 (preferentially) に引き出す。

この定義だと(16a)が自然に説明できる一方、(16b)のようなやりとりが矛盾しているようにみえる。しかしそれは、質問に対する言語的応答と指示的行為に対する応答を同レベルで捉えることによる誤謬であり、以下のようなモデルにより解決される。

(23)　(i) 言語表現を理解するレベルで行われることと、行為を理解するレベルで行われることは同時並行的である。
(ii) 人間の相互行為において個々の行為は多くの場合複層的な構造を成している。
(iii) (i)(ii)に従うと、質問型の否定疑問文と行為指示型の否定疑問文は、あるレベルでは同じことが行われているが、前景化している行為のレベルが異なっているといえる。これは応答を命題的に表現する際に反映する。

以上を図示すると図１のようになる。

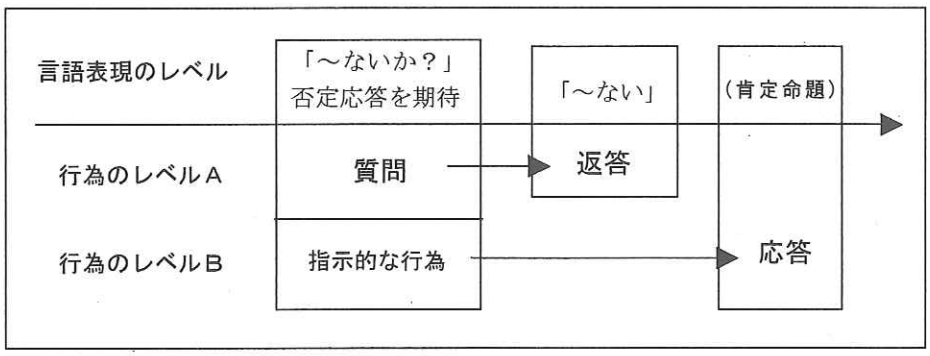


図１：質問型の「～ないか？」と行為指示型の「～ないか？」

従来、分析的／非分析的否定疑問文と呼ばれていたものの違いは、聞き手が、話し手の当面の目的を質問あるいはそれを介した何か別の指示的な行為のどちらと理解したかによる。話し手の目的が質問である (と聞き手が理解した) 場合、それに対し同意的ならば「(はい、) ～ない／～ません」と否定命題で返答することになる。

一方、聞き手が何らかのきっかけで、話し手の目的は質問ではないと理解することがある。4.1 で述べた目標指向的な観点からみるならば、この場合質問は何らかの行為の準備として機能していることを意味する。その際、同意的態度を敢えて命題的に表すならば(16b)のように肯定命題になるだろう。

そもそも質問は一般に (i) 不確定性 (話し手に何らかの情報が欠けていて判断が成立していない) (ii) 問いかけ性 (話し手は聞き手に問いかけることで不確定性を埋めようとする) という二つの側面で特徴づけられる (南 1985、宮崎 他 2002)。当該の質問が「不確定な情報を埋めるための発話ではない」と聞き手が理解したならば(i)の性質は背景化し、(ii)の特徴が抽象化した「聞

き手に応答を求める」という性質が前景化することになる[iv]。

4.5 語用論的機能の動機づけ

更に、ではなぜ否定疑問という形式が、数ある行為の中でも特に「誘い・勧め・依頼」などの指示的な行為と結びつくのかという点がある。これは Kageyama and Tamori (1975-76) が指摘するように、使用に際しての話し手のストラテジーが動機づけていると考えられる。

> ...the use of negative helps the speaker avoid the imposition of his volition on the addressee. The avoidance of being imposing naturally leads to the increase in politeness, since assent or refusal is now at the addressee's free option.
>
> (Kageyama and Tamori 1975-76: 25)

否定疑問形式が結びつきやすい指示的な行為は、いずれも何らかの形で発話参与者の利益に貢献する（誘い＝共益的、勧め＝聞き手の利益、依頼／懇願＝話し手の利益）ものである。(21)の懇願の例のように、話し手の利益を得るために聞き手の骨折りを要求する目的では否定疑問形式の使用が至って自然であることから、否定疑問形式によって聞き手に不同意的な応答（＝否定命題で表される）をする余地を残すことが、逆に、聞き手からの同意的な態度を引き出す準備として効果的に機能するものと考えられる。

5. 言語理解と行為の複層モデルによる事例分析

4節の議論を踏まえ、具体的な事例を言語理解と行為の複層モデルを用いて分析する。このモデルにより、聞き手の応答がどのレベルにおける応答なのかが明確になり、現象をより包括的かつ現実的にとらえられる。

5.1 質問としての「～ないか？」が同意的応答を得る例[v]

(24) 「本当はね、私、内緒でいま考えていることがあるのよ」
「なあに」
「絶対に他言しない？」
「しないわ」
吟子は少しおでこの額を荻江のにぶつかるばかりに近づけて言った。
「人骨が欲しいのよ」 (渡辺淳一『花埋み』)

この例では、話し手が約束を取り付けようとする文脈で否定疑問形式が用いられている。約束の発話行為は、約束する内容を具体的に言明することがその行為の中心的要件となる[vi]。従って、「絶対に他言しない？」という質問はまさにその否定命題をエコーさせる（「しないわ」によって具現化される）のが目的であり、言語表現のやりとりが行為と直接結びついていることがわかる。

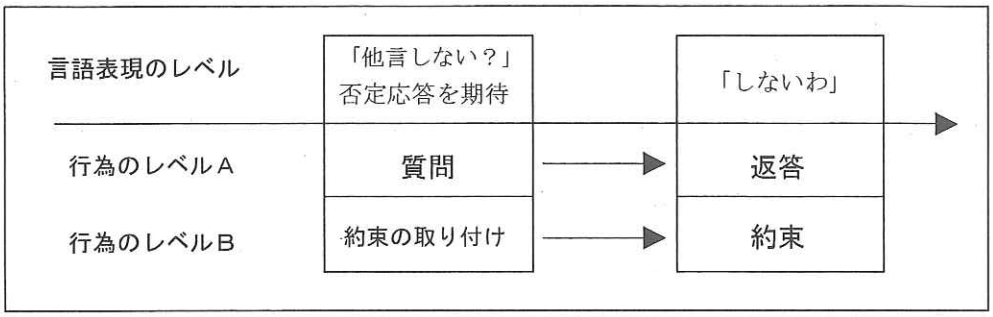


図２：質問とそれに対する同意的応答

5.2 誘い（∈指示的行為）としての「～ないか？」が同意的応答を得る例

(25)　「近くだから寄っていかないか」
加藤は宮村健を誘った。宮村ははじめのうちは躊躇していたが、加藤が、すすめると、それではといって加藤のあとに従って来た。　（新田次郎『孤高の人』）

(25)では、「近くだから」という修飾表現と共に用いられており、聞き手は容易に話し手の目的が誘いであることを理解することが可能である。また、聞き手の「はじめのうちは躊躇していたが」という様態描写にあるように、否定疑問形式による誘いの行為は過度に強制的ではなく、聞き手に否認的な反応（「いかない」という命題で表わされる行為＝断り）を示す余地を残すという含意の効果が読み取れる。

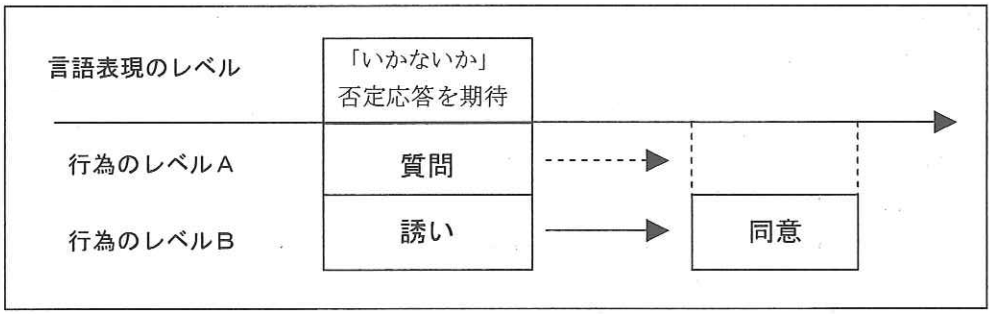


図３：誘いとそれに対する同意的応答

図２と図３を比較すると、これまでその内実が曖昧であった、否定疑問形式の使用とそれによる語用論的機能の関係が明らかになる。すなわち、話し手は言語表現を用いて何らかの目的指向的な行為を行っており、一見複雑に見える言語表現の振る舞いは、言語表現および行為を複層的にみることで明らかになる。そして聞き手は、目下の談話展開で前景化している行為が何であるかを文脈から理解し、それに適した応答を行っているのである。

6. まとめ

本論では以下のことを主張した。

(i) 従来の分類でいう分析的・非分析的疑問文の境界事例が示す曖昧さは、現象に言語表現の理解のレベルと行為の理解のレベルが関わっていることが原因である。(ii) 否定疑問形式が、多様な機能を持つ発話内で現れることは、その形式の使用が持つ含意と発話者の行為のプランとの関係が動機づけている。(iii) 上記の動機付けに対して、言語理解と行為の複層モデルが説明力を持つ。

また以下のことを本研究は理論的に含意する。

言語表現のレベルで一見複雑にみえる現象は、言語表現の体系のみで説明することが難しく、その体系の外の視座から考えないと説明できないことがある。

---

[i] 本稿は、日本語用論学会第9回大会（2006年12月9日、於桃山学院大学）における研究発表を大幅に加筆修正したものである。研究をすすめる中で黒田航氏、野澤元氏はじめ多くの方々からご指導ご叱責頂いた。記してここに感謝の意を表したい。

[ii] 田野村（1988）の「分析的」の定義は以下の通り。
“表現が分析的であるとは、表現を小部分に分解した場合、その各小部分の意味を規則的に複合することで全体の意味が得られることを言う。「分析的」ということは、逆方向から見れば、「複合的」「構成的」ということに等しい。”（田野村 1988: 17）

[iii] 相互行為の観点からみるならば、発話の意味は究極的には事後的にしか決まらないということを示す（石崎・伝 2001）。本研究は会話の社会的性質ではなく特定の言語形式の使用と話し手・聞き手の認知との関係を考察の軸とするので、この点については立ち入らない。

[iv] 言い換えれば、「不確定性」は言語表現のレベルに関わる側面、「問いかけ性」は行為のレベルに関わる側面ということである。

[v] この例文では文末のカが無いが、分析の粒度を考慮し、いわゆる女性の話しことばという変異形として扱う。

[vi] Austin（1962）はこのような約束の性質を「我々の口で言った約束は証文と同じ（our word is our bond）」という格言が非常によく言い表していると述べている。

＜参考文献＞

安達太郎. 1999. 『日本語疑問文における判断の諸相』東京：くろしお出版.

Austin, J. L. 1962. *How to Do Things with Words*. Oxford: Clarendon Press.

井上優. 1990. 「『ダロウネ』否定疑問文について」、『日本語学』、9: 12、28-35.

井上優. 1992. 「否定疑問文に対する『有標の応答』」、『日本語学』、11: 4、125-131.

石崎雅人・伝康晴. 2001. 『談話と対話』東京：東京大学出版会.

Kageyama, T. and I. Tamori. 1975-76. “Japanese Whimperatives.” *Papers in Japanese Linguistics* 4: 13-54.

Levinson, S. C. 1979. “Activity Types and Language.” *Linguistics* 17: 5/6, 356-99.

Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

南不二男. 1985. 「質問文の構造」、『朝倉日本語新講座4 文法と意味II』、39-74.

宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃. 2002. 『新日本語文法選書4 モダリティ』東京：くろしお出版.

森田良行. 2002. 『日本語文法の発想』東京：ひつじ書房.

田野村忠温. 1988. 「否定疑問文小考」、『国語学』、152、16-31.

田野村忠温. 1991. 「疑問文における肯定と否定」、『国語学』、164、1-14.

Searle, J. R. 1969. *Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.

＜第一著者（山寄）のメイルアドレス＞ a-key-hero@nifty.com

数詞を伴うトートロジー*

山本　尚子
奈良女子大学大学院

本論文では、数詞を伴うトートロジーの表意形成が、自由拡充の結果得られることを明らかにする。
従来、関連性理論の枠組みでは、名詞句トートロジーA is A.(「A は A だ。」)は、コード化された語彙概念を文脈に応じて調整するアドホック概念形成によって、その発話を解釈していると主張されてきた(東森・吉村(2003)、西川(2003))。だが、数詞を伴うトートロジー(「398 円は 398 円やな。」、5:06 is 5:06.)は、二つ目の A に関する何らかの具体的な属性ではなく、その文脈において話題となっているものの価値を A という数詞名詞によって示すことができるのかできないのかという判断に基づいた解釈を聞き手に伝達していると考えられる。ゆえに、数詞を伴うトートロジーは、数詞名詞 A の語彙概念を文脈に応じて調整するアドホック概念形成ではなく、話題となっているものの価値を明らかにする要素を文脈から自由に補う自由拡充によって、解釈されているということができる。また、最初の A は、総称的に解釈されているのではなく、発話時に話題となっているものと関連づけられ、限定的に解釈されている。

キーワード：トートロジー、アドホック概念形成、自由拡充

1. はじめに

当たり前の言い回しであるにもかかわらず、なぜか心に残る表現方法として、トートロジーという表現方法が挙げられる。私たちは、違和感を覚えることなく、同じ語を繰り返すだけで、一見すれば意味を成さない表現形式の伝達内容を理解することができる。この不思議な表現形式についてさまざまな観点から議論が続けられているが、その表現方法の単純さとは裏腹に、その解釈過程は複雑であり、多様な言語現象が関わっていると思われる。

発話解釈を体系的に論じる関連性理論では、東森・吉村(2003)や西川(2003)が、名詞句トートロジーA is A.(「A は A だ。」)[1] は、A という名詞の語彙概念を強めたり、緩めたりすることで、その場限りの意味を作り出すアドホック概念形成によって説明することができると主張している。

(1)　(購入後すぐに使い物にならなくなったまな板を見て、)「398 円は、398 円やな。」

だが、購入後すぐに使い物にならなくなったまな板を見ながら、(1)を発した場合、「398 円」に関する何らかの具体的な属性ではなく、話し手が買ったまな板の値打ちを「398 円」という数詞名詞によって表すことができるのかできないのかに焦点が当てられているように思える。ゆえに、少なくとも上記のような数詞を伴うトートロジーでは、数詞名詞の語彙概念を操作するのではなく、まな板の値打ちを明らかにする要素を文脈から自由に補う自由拡充によって、その意味を解釈していると仮定することができる。

本稿では、関連性理論の枠組みにおいて、数詞を伴うトートロジーの表意形成が、純粋な語用論的推論である自由拡充によって得られることを主張する。

2. 先行研究

トートロジーの意味は会話の含意であると述べる Grice (1975)や、その解釈は慣用的な意味論によって普遍性のある説明をすることができるという Wierzbicka (1987)など、多くの先行研究が存在する。[2] そもそも、表現を構成する単文に割り当てられる真理値にかかわらず、計算された真理値として常に真となる複合文をトートロジーと呼ぶ(Allwood 1977)。これでは、トートロジーという表現形式は、意味論的には何も意味を成さない。だが、適切な文脈を与えれば、それは意味あるものとして解釈可能である。そのた

め、トートロジーを分析する際には、語用論的な側面に着目する必要がある。本節では、特に、認知語用論的な視点に立つ関連性理論の枠組みにおいて議論されているものを中心に概観する。

Higashimori and Wilson (1996: 120)は、トートロジーは"reminders, implicating that an obvious truth has been overlooked"だと考えている。また、西川(2003: 53)は、名詞句トートロジーの解釈過程 A is A. は、アドホック概念構築によって解釈可能であり、最初の A は総称的に解釈され、二つ目の A は、「A に語彙的にコード化された概念と文脈情報から ad hoc に導出された属性を表す述部(predicate)と解釈される」と主張する。また、その解釈過程を(2)のように示している。

(2) a. Utterance: *A is A.*
b. Explicature: *A is A**.
c. Higher-level explicature: The speaker intends the hearer to know that *A is A**.
d. Implicature: They depend on the contexts. (西川 2003: 53)

西川(2003: 53)の分析によると、例えば、A father is a father.は、アドホック概念形成によって、A father is a father*.という表意を形成し、文脈に応じて、「父親というのは(どんな父親でも、)途中でやめることはできない」や「父親というのは(どんな父親でも、)物足りなくて退屈だ」と解釈される。

確かに、関連性理論に基づく説明には、西川(2003: 55-56)が指摘するように、次に挙げるような5つの利点がある。第一に、トートロジー表現を解釈する際の語用論的メカニズムを説明することができる。第二に、文脈によって多様な情報を伝達することを明らかにすることができる。第三に、辻本(1996)[3] が主張する、A is A によって、なぜ X is A.を伝達することができるのかを示すことができる。第四に、辻本(1996)が主張するように、なぜ X is not A.の not によって否定されるものが、通常否定の作用域に含まれない要素であるかを説明することができる。最後に、Wierzbicka (1987)[4] が主張するような名詞句トートロジーに多様な統語形式が存在することを明らかにすることができる。だが、冒頭で述べたように、上記(1)のような数詞を伴うトートロジーの場合は、「398 円」という数詞名詞の語彙概念に関する何らかの具体的な属性ではなく、話し手が買ったまな板の値打ちを「398 円」によって示すことができるのかできないのかという判断に基づいた解釈を聞き手に促していると考えられる。そのため、二つ目の A の語彙概念を調整するアドホック概念形成の貢献を主張する西川(2003)の分析を適用することができず、アドホック概念形成の結果得られるものとは異なる解釈過程を考慮する必要性が生じてくる。そこで、新たな解釈過程として、自由拡充の貢献を認める解釈過程を提案したい(4 節参照)。

3. アドホック概念形成と自由拡充

関連性理論では、発話によって伝達される想定は、発話の明示的な意味に相当する表意(explicature)と、発話の非明示的な意味に相当する推意(implicature)の 2 つに分けられる。また、表意を形成するプロセスとして、一義化(disambiguation)、飽和(saturation)、アドホック概念形成(*ad hoc* concept constriction)、自由拡充(free enrichment)の 4 つのプロセスがある。本節では、本分析において鍵となるアドホック概念形成と自由拡充について詳しくみていきたい。

まず、アドホック概念形成とは、コード化された語彙概念を強めたり、緩めたりすることによって、文脈に応じた概念を作り出す操作のことをさす。

(3) a. [レストランで出されたステーキにナイフを入れて] This meat is <u>raw</u>.
b. [クラシック音楽を専門に流す Classic FM 局のアナウンサーが]
You get <u>continuous</u> classics on FM. (東森・吉村 2003: 39)

例えば、(3a)の raw は、単語の意味としてコード化されている「生の」という厳密な意味が緩められて、「十分に調理されていない」というその場限りの意味を伝達していると考えられる。また、(3b)の continuous も、実際には「絶えず」という厳密な意味を緩めて、「コマーシャルなどで分断されるかもし

れないが、音楽が流れる時には必ずクラシック音楽が流れる」という意味で解釈している。

次に、自由拡充とは、特定の言語的な要求ではなく、純粋な語用論的な要求によって、論理形式上に、自由に何らかの要素を補う操作をさす。また、括弧内の要素がなくとも、他の表意形成プロセスによって、真偽判定可能な命題の形式を復元することができる。

(4)　a. I'll give you £10 if [and only if] you mow the lawn.
　　b. John has [exactly] four children.　(*ibid*: 37)

例えば、(4a)や(4b)は、括弧内の要素がなかったとしても、命題として成立するが、話し手の伝達内容をより明確に聞き手が理解するためには、括弧内の要素を補って理解していると考えられる。

以上に述べたように、一見すると、アドホック概念形成と自由拡充の違いははっきりしているように思えるが、この 2 つの操作を曖昧にとらえている場合もある。例えば、Carston は、(5)を自由拡充の典型的な例として挙げているが、西山・峯島(2006: 27-28)は、take time という述語部分が伝達したい内容は、take time という性質の程度を調整した内容であり、take time とその概念を強めた[CONSIDERABLE TIME]には語彙的なつながりがあるため、アドホック概念形成の一例であると指摘する。このように、両者の違いは不明確である場合が多い。

(5)　It's going to take time for these wounds to heal. [CONSIDERABLE TIME]
　　(西山・峯島 2006: 27)

だが、西山・峯島(2006: 45)は、次のように述べている。表意を形成する一義化、飽和、アドホック概念形成は、「特定の種類の言語表現や語彙概念が引き金となって、言語的制約のもとで引き起こされる語用論的プロセス」であり、アドホック概念形成によって引き出された概念と、元の語彙には、何らかの語彙的な緊張関係が成立している。一方、自由拡充は、聞き手によって、論理形式上に対象志向性という機能を持つ概念を見つけ出し、必要に応じて、そこに新たな概念をつけ加えていくプロセスであり、その際につけ加えられる概念は、言語形式が引き金となって得られるものではない。したがって、アドホック概念形成と自由拡充は、言語的制約の有無によって区別することが可能であると彼らは主張している。混同されがちな両者の違いを明確に区別する彼らの見解は、トートロジーを分析する上でも有益であると思われる。本稿では、表意形成プロセスに関する彼らの見解を採用し、議論を進める。

4. 分析

まず、冒頭に挙げた(1)(= (6))は、掘り出し物だと喜んで買ったまな板が、数日後には使い物にならず、実際には損をしたというコンテクストで発せられているが、どのように解釈されるのだろうか。

(6)　(購入後すぐに使い物にならなくなったまな板を見て、)「398 円は、398 円やな。」=(1)

西川(2003)によれば、表意形成過程において、二つ目の「398 円」は、アドホック概念形成によって「398 円*」と解釈される。例えば、「398 円*」は、「役に立たない」という具体的な語彙概念と置き換えることができるかもしれない。だが、この置き換えられた概念は、元の語彙と語彙的なつながりがあるとは言い切れず、むしろ、推意の段階で得られるもののように思える。文脈から判断すると、(6)は「398 円」に関する何らかの属性に関する解釈ではなく、数日前に掘り出し物だと買ってきたまな板の値打ちを「398 円」によって示すことができるのかどうかという判断に基づいた解釈を聞き手に促している。また、話し手の目の前にあるまな板の値打ちは、「たった 398 円しかない」と、「398 円」という数詞によって示されるまな板の値打ちを低くとらえている。このような解釈は、語彙的な制約なしに適切な要素を補うことによって得られるため、自由拡充の貢献を認める解釈過程をたどると考えられる。

次に、最初の「398 円」に関してであるが、(6)を発した際、特定の指示対象を持たない「398 円」につ

いて突如発せられているのではなく、話し手が買ったまな板につけられた値打ちとして現実世界に存在する「398円」に関して発せられていると考えられるので、「398円」一般のことを述べる総称的な解釈がなされているとはいえない。三上(1960)が指摘するように、日本語の「は」は、題目を示す役割を果たし、様々な格を「は」で取り立てることができる。したがって、解釈時には、最初の「398円」は、その文脈で話題となっているまな板の値打ちと関連づけ、「話し手が買った398円のまな板の値打ち」と限定的に解釈されているといえる。

以上の分析から、(7)のような解釈過程が考えられる。

(7) a. Explicature: 話し手が買った398円のまな板の値打ちは、たった398円しかない。
b. Higher-level explicature: 話し手は、話し手が買った398円のまな板の値打ちは、たった398円しかないと主張している。[5]
c. Implicated premise: (i) まな板の相場では、398円は安い。
(ii) 安物は、すぐに壊れる。
(iii) 安物買いの銭失い。
d. Implicated conclusion: (x) 買わないほうがよかった。
(y) もっといいものを買えばよかった。

二つ目の「398円」を解釈する際、自由拡充の結果「398円」の価値を低く評価していることを示す要素が補われ、(7a)のような表意が形成される。また、この発話において話題の中心である「まな板」や、商品の値段を低く見積もることから連想されうる「安物」に関する百科事典的知識や過去の経験から引き出された(7c)のような前提推意をもとに、(7d)のような帰結推意が得られると考えられる。

このような分析方法を採用すると、文脈に応じて、同一の表現が異なる内容を伝達することをもうまく説明することができる。

(8) X: そのチョコレート、1つ398円もしたの？
Y: (チョコレートを食べながら、) 398円は、398円やな。

(8)では、チョコレート1つ398円という値段は高すぎるというXの考えをYは否定している。また、Yはその味に満足し、1つ398円のチョコレートを高く評価していると思われる。そのため、Yが食べているチョコレートの値打ちは「398円もある」と、その値打ちが一定の基準を超えていることを伝達していると考えられる。この発話の表意は、元の語彙を調整するのではなく、語彙的な制約なしに適切な要素を補うことによって形成される。つまり、自由拡充の貢献を認めることによって、その表意を形成することができるのである。したがって、(8)は、(6)と同一表現であるにもかかわらず、(7)とは異なる表意を形成し、例えば、(9)のような解釈過程をたどることで聞き手は関連性を達成することができるだろう。

(9) a. Explicature: 話し手が食べている1つ398円のチョコレートの値打ちは、398円もある。
b. Higher-level explicature: 話し手は、話し手が食べている1つ398円のチョコレートの値打ちは、398円もあると主張している。
c. Implicated premise: (i) チョコレート1つの相場としては、398円は高い。
(ii) 高価な食べ物は、おいしい。
(iii) 値段に見合ったおいしさがある。
d. Implicated conclusion: (x) おいしい。
(y) 高かったけど、買ってよかった。

このような数詞を伴うトートロジーの表意形成に対する自由拡充の貢献は、次に挙げる(10)、(12)、(14)にも該当し、一般化することが可能である。

まず、(10)から見ていきたい。(10)では、アメリカ海軍の体育の最終試験で、5 分という制限時間内に完走することができなかった同級生を何とか合格させてほしいと、主人公は上官に申し出るが、上官はその申し出を受け入れようとはしない。

(10)　(制限時間内にゴールできなかった予備兵に対して、) A senior: 5:06 is 5:06.
(David Collard, *Annapolis*)

(10)も、(6)や(8)と同様に、二つ目の 5:06 という数詞がどんな属性を示しているのかではなく、同級生が出した記録が 5 分 6 秒であるかどうかを明らかにしたいのである。また、話し手である上官は、「5 分 6 秒」という記録が示す価値を低くとらえている。したがって、聞き手である主人公は、数詞名詞の語彙概念を強めたり、緩めたりするよりも、同級生が出した記録の価値を明らかにする要素を文脈から自由に補うことによって、その意味を解釈していると考えられる。このような解釈は、自由拡充の一例であると考えられるため、例えば、(11)のような解釈過程を示すことができる。

(11)　a. Explicature: No matter what happens, the value of 5:06 of a reservist's record is no more than 5:06.
b. Higher-level explicature: The senior insists that no matter what happens, the value of 5:06 of a reservist's record is no more than 5:06.
c. Implicated premise: (i) The time limit has been fixed in advance.
(ii) The time limit is not modified.
d. Implicated conclusion: (x) Those who can not run within the time limit do not pass the examination for graduation.
(y) The result can not change.

自由拡充の結果、(11a)のような「5 分 6 秒」という数詞を低く評価していることを伝達する表意が形成され、高次表意(11b)を伝達する。また、「卒業試験」や「制限時間」などに関する百科事典的知識や聞き手の経験から引き出された(11c)の前提推意から、(11d)のような帰結推意が引き出される。

続いて、(12)では、ひ弱な少年ポールは、105 ポンドのベンチプレスを持ち上げることができる体力を身につけるまでになったが、そのことをスペンサーに褒められ、ポールは謙遜している。

(12)　I picked Paul up at the Harbour Health Club.
"He benched one-oh-five today on the Universal," Henry said.
"Not bad," I said.
Paul nodded, "The Universal is easier," he said.
"One-oh-five is one-oh-five," I said.　(Robert B. Parker, *Early Autumn* 辻本 1996 より引用)

文脈から判断すると、話し手であるスペンサーは、ポールが持ち上げた、105 ポンドのベンチプレスの重量を高く評価し、その重さが称賛に価する重さであるとみなしている。そのため、解釈時には、ポールが持ち上げたベンチプレスの重さが、称賛に価する重さである 105 ポンドであったかどうかという点に焦点が当てられている。[6] そのため、二つ目の one-oh-five を解釈する時には、「105 ポンド」という重さが持つ価値を高く評価していることを示す語を加える必要がある。だが、このような解釈を行った場合に形成される表意は、元の語彙 one-oh-five と引き出される表意との間に語彙的なつながりが成立するような語彙概念ではないので、その場限りの語彙概念を構築するアドホック概念によって得られたとはいえない。むしろ、そのような解釈は、表意形成過程において自由拡充の貢献を認めることによって得ることができると考えられるため、(13)のような解釈過程をたどるであろう。

(13) a Explicature: The value of one-oh-five pound of the bench press's weight which Paul lifted up is no less than one-oh-five pound.
b. Higher-level explicature: Spencer insists that the value of one-oh-five pound of the bench press's weight which Paul lifted up is no less than one-oh-five pound.
c. Implicated premise: Paul's strength is a great improvement on the pass.
d. Implicated conclusion: (x) Good job!
(y) Don't be modest!

(13a)が示すように、one-oh-five というベンチプレスの重さが示す価値を高くとらえていることを明らかにする要素である no less than が補われる。また、ポールの体力に関する現在と過去の比較から引き出された(13c)のような前提推意をもとに、(13d)のような帰結推意が得られ、関連性が生じる。

最後に、(14)は、今までの4つの用例とは異なり、助数詞を含まない例である。この用例は、お日さまや鳥など具体的な事例から、「3」という数がどのような抽象的な概念に集約するのかを論じているが、以上で論じてきたような、言語的な制約なしに明示的な伝達内容を理解する傾向はより顕著であるといえる。

(14) 数でいいますと、夜が明けてお日さまが出る、また夜が明けてお日さまが出る、また夜が明けてお日さまが出る、これで三日たった。これは3という数です。そこに鳥が三羽飛んでいる。これも3です。三日の3と鳥が三羽の3が同じ3と考えるようになるにはどれだけ長い年月がかかったか・・・[・・・]

しかし、お日さまのほうは同じお日さまが三回顔を出すのですが、鳥のほうは違う鳥が三羽飛んでいる。さらに鳥とお日さまとは違うに決まっています。違うものであるにもかかわらず、違っていることを承知のうえで「同じだな」と思う癖が人間にはあると思います。

その場合に、鳥であろうがお日さまであろうが、3は3だ。3という世界が別個にあって処理できる対象だというウエートのほうが強い人と、なんとなく、これは鳥から出てきた3だというのを引きずるタイプとあると思います。

(森毅『NHK人間大学　数学・文化・人生』坂原2002より引用)

この文脈では、「3」という数詞にコード化された語彙概念を強めたり、緩めたりすることで得られる、その場限りの具体的な語彙概念に焦点が当てられているわけではない。そのため、二つ目の「3」が、「3」という数詞名詞に関する何らかの具体的な語彙概念に置き換え可能であるとみなすこともできない。だが、この文脈においても、様々なものに対して用いられている3が「3」という数詞で表すことができるのかできないのかという判断に基づいた解釈を読み手に促していると解釈することによって、読み手は関連性を達成することができる。つまり、3が示す値は、「3以下でもなければ、3以上でもなく、ちょうど3である」と、解釈しているのである。このような解釈は、自由拡充の結果得ることができ、(15)のような解釈過程が考えられる。

(15) a. Explicature: 3をどの指示対象に用いたとしても、各々の対象を示すために用いられた3が示す値は、3以下でもなければ、3以上でもなく、ちょうど3だ。
b. Higher-level explicature: 書き手は、3をどの指示対象に用いたとしても、各々の対象を示すために用いられた3が示す値は、3以下でもなければ、3以上でもなく、ちょうど3だと主張している。
c. Implicated premise: 数字が示す概念は、常に一定だ。
d. Implicated conclusion: (x) 指示する対象によって、3という概念は変わらない。
(y) 3という数で表せるものは、何でも同じだ。

(14)の用例は、自由拡充の結果、表意(15a)が形成され、(15b)のような高次表意が伝達される。また、(15c)

に示すような「数」に関する前提推意をもとに、帰結推意(15d)が引き出される。

5. 結論

本論文では、次に示す二点について論じてきた。

第一に、数詞を伴うトートロジーの場合、二つ目の数詞名詞 A の語彙概念に関する何らかの属性に関する解釈ではなく、その文脈で話題となっているものの価値を、A という数詞によって示すことができるかどうかという解釈に焦点が当てられている。このような話題となっているものの価値を明らかにする解釈は、純粋な語用論的推論である自由拡充によって得ることができると考えられるため、数詞を伴うトートロジーの表意形成過程として、自由拡充の貢献を認める解釈過程を考慮に入れる余地がある。

第二に、最初の数詞名詞は、すべての A について述べる総称的な解釈ではなく、発話時に話題となっているものと関連づけて解釈されている。そのため、最初の A は、限定的に解釈されていると考えられ、最初の A は常に総称的な解釈がなされるという西川(2003)の主張は一般性を欠いている。

本論文では、数詞を伴うトートロジーのみを分析対象としたが、山本(2006)が主張するように、本論文における主張は、今まで研究の対象外であった when A, A.(「A の時は、A だ。」)や、if A (then) A.(「もし A ならば、A だ。」)などにも該当するため、多様なトートロジー表現に該当する普遍的な分析方法となる可能性があると思われる。

注

* 本論文は日本語用論学会第 9 回大会(2006 年 12 月 9 日於桃山学院大学)における研究発表を加筆修正したものである。構想の段階から、内田聖二先生、吉村あき子先生、須賀あゆみ先生には様々なご指導をいただいた。また、発表会場においても、司会の西山佑司先生をはじめ、多くの方々に貴重なご意見を頂いた。記して心から御礼を申し上げたい。

1 便宜上、繰り返される名詞を A と略す。

2 列挙した先行研究以外に、Grice (1975)による分析に従うものとして、Levinson (1983)、Gazder (1979)があり、Grice による語用論的側面をさらに重視した分析法として、Fraser (1988)、Ward and Hirschberg (1991)、辻本(1996)がある。また、認知語用論的な観点では、カテゴリー化の枠組みから議論を進める Mizuta (1996)、坂原(2002, 2006)がある。さらに、言語心理学の観点から論じた Gibbs and McCarrell (1990)による実験結果は、認知語用論的な視点に立つ関連性理論を裏づけるものであり、とても興味深い。

3 辻本(1996)は、Ward and Hirschberg (1991)が主張する A is B.の代わりに、X (その時点で話題となっている事物、事象) is not A.を考え、A is A.によって X を否定していると解釈することができると主張している。

4 意味論的側面を重視した分析法であるが、説明に普遍性がなく、同一表現が、異なる文脈で異なる内容を伝達することができない。Wierzbicka (1987)参照。

5 高次表意にも伝達される程度に差があると考えられるため、西川(2003)が提案するような、intend the hearer to know that ～という高次表意も伝達されている可能性もあるだろう。だが、話し手は、トートロジーによって、先行する何らかの想定を伝達しようとしているので、聞き手に明示的な伝達内容を知ってほしいという相手ありきの命題態度よりも、先行する何らかの想定とは異なる想定が存在することをまず前面に押し出す強い命題態度が伝達されると考えられる。ゆえに、insist that ～「～を強く言い張る」を高次表意とした。

6 辻本(1996: 135)は、この用例の問題は、「ポールが持ち上げた重量を 105 ポンドと呼んでよいかどうかであって、105 ポンドという重さの属性ではない。」と述べている。この点は、筆者の主張と一致するが、辻本(1996)には問題点もある。山本(2006)参照。

参考文献

Allwood, J., L. Andersson and Ö. Dahl. 1977. *Logic in Linguistics*. [公平珠躬・野家啓一(訳) 1979.『日常言語の論理学』東京：産業図書.]

荒木一雄・安井稔(編) 1992.『現代英文法辞典』東京：三省堂.
Carston, R. 1995. "Quantity Maxims and Generalized Implicature." *Lingua* 96: 213-244.
----------. 1998. "Informativeness, Relevance and Scalar Implicature." In: Carston, R. and S. Uchida. (eds.) *Relevance Theory: Application and Implications.* 179-236. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
----------. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication.* Oxford: Blackwell.
Fraser, B. 1988. "Motor Oil is Motor Oil: An Account of English Nominal Tautologies." *Journal of Pragmatics* 12: 215-220.
Gazdar, G. 1979. *Pragmatics: Implicature, Presupposition and Logical Form.* New York: Academic Press.
Grice, H. P. 1975. "Logic and Conversation." In: Cole, P. and J. L. Morgan. (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts.* 41-58. New York: Academic Press.
Gibbs, Jr., R. W. and N. S. McCarrell. 1990. "Why Boys will be Boys and Girls will be Girls: Understanding Colloquial Tautologies." *Journal of Psycholinguistics Research* 19: 125-145.
Higashimori, I. and D. Wilson. 1996. "Question on Relevance." *UCL Working Papers in Linguistics* 8: 111-124. University College London.
東森勲・吉村あき子. 2003.『関連性理論の新展開－認知とコミュニケーション』(英語学モノグラフシリーズ21) 東京：研究社.
平井昭憲. 2005.「名詞的トートロジーの構造」大津隆広・西岡宣明・松瀬憲二(編)『ことばの標－平井昭憲君追悼論文集』1-24. 九州大学出版会.
Levinson, S. 1983. *Pragmatics.* Cambridge: Cambridge University Press.
Mizuta, Y. 1996. "Nominal-Predicate Sentence of Rhetorical Nature."『大阪大学言語文化学』第5号: 75-90.
中村芳久. 2000.「「勝ちは勝ち」「負けは負け」－トートロジーに潜む認知的否定」『言語』第29巻 11号: 71-76.
西川眞由美. 2003.「トートロジーの考察－アドホック概念の観点から」『語用論研究』第5号: 45-58. 日本語用論学会.
西山佑司・峯島宏次. 2006.「叙述名詞句と語用論的解釈－自由拡充プロセスにたいする意味論的制約をめぐって－」『西洋精神史における言語と言語観－継承と創造』21-50. 慶應義塾大学言語文化研究所.
三上章. 1960.『象の鼻は長い』東京：くろしお出版.
坂原茂. 2002.「トートロジとカテゴリ化のダイナミズム」大堀壽夫(編)『カテゴリー化』(シリーズ言語科学3 認知言語学II) 105-134. 東京大学出版会.
Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995². *Relevance: Communication and Cognition.* London: Blackwell. [内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子(訳) 1993/1999².『関連性理論―認知と伝達』東京：研究社.]
辻本智子. 1996. "Tautology in Discourse."『尾崎寄春・大沼雅彦両教授退官記念論文集』127-136. 京都：あぽろん社.
Ward, G. and J. Hirschberg. 1991. "A Pragmatic Analysis of Tautological Utterances." *Journal of Pragmatics* 15: 507-520.
Wierzbicka, A. 1987. "Boys will be Boys: 'Radical Semantics' vs. 'Radical Pragmatics'." *Language* 63: 95-114.
山本尚子. 2006(印刷中).「トートロジーの発話解釈をめぐって」『人間文化研究科年報』第22号: 145-157. 奈良女子大学.

用例出典

Collard, David. 2006. *Annapolis.* America.

ワークショップ

Workshop Sessions

英語（擬似）法助動詞構文と動機づけ

長友　俊一郎
関西外国語大学短期大学部非常勤講師

＜要旨＞
本稿では、まず、英語（擬似）法助動詞構文が表出する力の強さ・質と動機づけとして述べられる状況のタイプとの相関性を論証する。強い力を表す（擬似）法助動詞構文は、聞き手にとって好ましい動機づけの状況と好ましくない動機づけの状況の両者と共起し得る。一方、（擬似）法助動詞構文の表す力が強く脅迫的な場合、動機づけの状況は、好ましくないものに限られ、（擬似）法助動詞構文の表す力が弱い場合、動機づけの状況は、好ましいものに限られる。この議論をもとに、(i)must/can 構文は、好ましい動機づけの状況／好ましくない動機づけの状況と共起する、(ii)had better 構文は、通例、好ましくない動機づけの状況と共起する、(iii)（弱い力を表す）can/may 構文は、通例、好ましい動機づけの状況と共起する、といった相関性を論証する。

【キーワード】
1. 束縛的モダリティ、2. 動機づけ、3. 英語（擬似）法助動詞、4. 力のダイナミクス、5. 言語行為

1. はじめに

「義務」や「許可」といった「束縛的モダリティ」(deontic modality)を表す英語法助動詞の意味構造には、義務づけや許可といった行為の、主体と客体が関与する (R. Lakoff 1972; Tregidgo 1982, etc.)。Tregidgo (1982: 78)は、must の意味構造を次のように提示した。

(1) a *must* b = X DEMAND Y – Y CAUSE – ab

ここでの X と Y は、それぞれ、義務づけの行為の主体と客体を表している。DEMAND は、要請（義務づけ）を表している。すなわち、must の意味構造とは、「X が Y に対して[a が b する]という命題内容を引き起こすように要請する」とされる。たとえば、(2)は、

(2) You *must* apologize at once! (Tregidgo 1982: 79)

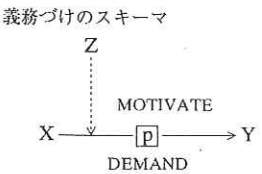
「話し手（＝X）が聞き手（＝Y）に対してすぐに謝ることを要請する」と分析されている。
さらに、次の例を見られたい（斜体・下線筆者）。

(3) Miss Kenton looked rather upset. "Your father has become very ill, Mr. Stevens," she said. "Mr. Stevens, he really is in a poor state. You had better come and see him."
"I only have a moment. …"
"… But you *must* come now, Mr. Stevens, or else you may deeply regret it later." [BNC]

(3)の例では、Kenton（＝X）が Stevens（＝Y）に対して、直ぐに病院へ行くように促している。ここで重要なことは、すぐさま病院に向かわなければならないという義務は、下線部の「さもないと、後々深く後悔することになるかもしれませんよ」という言明によって動機づけられていることである。

澤田 (1999: 61; 2006: 312)は、義務づけのスキーマを次のように表示している。

(4)



ここでの X は義務づけの主体であり、Y は義務づけの客体である。p は義務の内容である。Z は義務づけのための動機づけを表している。すなわち、概念化主体が束縛的モダリティを表明する場合、その表明の引き金となる動機づけが関与するということである。

本稿の目的は、(i)（擬似）法助動詞構文が表出する「力」(force)の強さ・質と動機づけとして述べられる状況のタイプとには関連性があることを主張し、(ii)主観的な（＝話し手の関与のある）束縛的モダリティを表す must/had better/can/may 構文は、それぞれ、どのようなタイプの動機づけの状況と呼応し得るかを検証することである。

（擬似）法助動詞構文は、(5)のように、

(5) You {**must/*had better/can/may*} do as he says, but you won't. (cf. Palmer 1990²: 123, etc.)

話し手が事象の実現を含意するかどうかという観点から、must 構文や had better 構文のような「強い」力を表出するものと、can 構文や may 構文のような「弱い」力しか表出しないものとに大別することができる。以下、強い力を表出する（擬似）法助動詞構文と共起し得る動機づけの状況に関しての議論からはじめてみたい。

2. must 構文と動機づけ

まず、次の例を考えてみよう（斜体・下線筆者）。

(6) Sophie stopped, unwilling to betray the sudden fear that was clutching at her heart.
…
"Suddenly I've lost my nerve. …"
…
"It's a natural reaction, but I'm not going to offer to do the operation for you. "You *must* do it yourself or

you'll never regain your confidence. I'll act as your nurse. …" [BNC]

(7) Tyler's love was only a passing thing, or he would be here now, loving her, helping to raise their son, and making her lonely life complete.
"Put it behind you, Beth, once and for all!" she told herself firmly. "You *must* let the past go or you'll drive yourself out of your mind." [BNC]

(6)では、「自分の力で手術をしなければなりません。さもないと2度と自信を回復できません」と述べられている。すなわち、自分の力で手術をしなければならない動機づけとして、自信を回復できないことが挙げられている。(7)では、動機づけとして、「さもないと正気を失ってしまいます」と述べられている。

ここで重要なことは、動機づけとして、聞き手にとって好ましくない状況が、強い力を表す must 構文と呼応していることである。典型的に「さもないと」を意味する、「非対称的用法」の or (cf. R. Lakoff 1971: 127; Sweetser 1990: 99)や otherwise で導入される、好ましくない動機づけの状況は、本質的に、聞き手に対する「脅し」を含意することになる。これは、X or/otherwise Y により、話し手が X か Y かの二者択一を迫ることによって、強く X を強要していることと関連があると言えよう。脅しのニュアンスを出す中で、強く聞き手に事象の実現を促すのは自然である。すなわち、次の一般化が可能となる。

(8) 強い力を表出する（擬似）法助動詞構文と好ましくない動機づけの状況は共起し得る。

次の例からも分かるように、must 構文は、聞き手にとって好ましい動機づけの状況とも共起することが可能である（斜体・下線筆者）。

(9) "I really do feel quite poorly, Joan."
"Naturally you do. You *must* lie quiet and stop overtaxing your strength—then you will be better in no time." [BNC]

(10) "If you're prepared to take her place, I'll have this Kattina woman pulled in."
"How can you do that? She's an Egyptian citizen."
"I have special relations with the chief of police."
"Taking her place is a tall order."
"You *must* persuade her that it would be best for both of you. I'm sure she'd rather share the spoils than lose them altogether." [BNC]

(9)では、「すぐに良くなります」という動機づけが述べられており、(10)では、「それはあなた達にとって最善のことでしょう」という動機づけが述べられている。

では、なぜ好ましい動機づけの状況も must 構文と共起するのであろうか。ここでは、「丁寧さ」(politeness)の観点から次のように考えておきたい。典型的に非対称的用法の and で導入される好ましい動機づけの状況は、本質的に、聞き手に対する「気遣い」を含意する。X and Y により、話し手は X と Y を並列することによって、Y がとても良いことのため、X をすると Y という良いことがプラスされると述べている。気遣いを表明しつつ、強く聞き手に事象の実現を促すのは、聞き手の利益を考慮する丁寧な発話においては自然である (cf. R. Lakoff 1972; Leech 1983, etc.)。つまり、(11)のような関連性が考えられる。

(11) 強い力を表出する（擬似）法助動詞構文と好ましい動機づけの状況は共起し得る。

最後に、次のように must 構文と共起する動機づけの状況のタイプを捉えておきたい。

(12) must 構文は、好ましい動機づけの状況／好ましくない動機づけの状況と共起する。

3. had better 構文と動機づけ

次の例を考えてみよう（斜体・下線筆者）。

(13) "There," said Lili after a final rub.
"There may be a mark, but it won't show too badly. You'*d better* find a plaster for that thumb or it might start bleeding again." [BNC]

(14) Her hair had grown and lay around her face and shoulders in wet ringlets. The towel had slipped until it barely covered her nipples. He hooked a finger between her breasts and jerked the towel up to her chin.
"You *better* take a hot bath, or you'll catch a cold." [Wordbanks]

(13)と(14)では、それぞれ、「さもないとまた出血をはじめてしまうかもしれません」と「さもないと風邪を引いてしまいます」という、好ましくない動機づけの状況が述べられている。

(13)と(14)の下線部の好ましくない動機づけの状況は、好ましい状況には置き換えることができない。次のように、had better 構文に and 節は後続できない。

(15) *You'*d better* find a plaster for that thumb, and it will heal up.

(16) *You *better* take a hot bath, and you won't catch a cold.

したがって、had better 構文と動機づけとには次の共起パターンが見られることになる。

(17) had better 構文は、通例、好ましくない動機づけの状況と共起する。

この共起パターンは、had better が本質的に「脅迫」(threat)を表す (cf. Perkins 1983: 64)ことと関連があると

思われる。良いことを勧める時の「ぜひとも～しなさい」（＝ must）のような用法は、had better には観察されない。

(18) Oh, you {*must*/**had better*} come round and see it.（勧誘）　(cf. Palmer 1990[2]: 73)

脅迫の力を表す had better 構文に、相手の利益を考慮し脅しのニュアンスの看取されない、好ましい状況は呼応し難いと考えることができる。この議論をもとに、次の一般化を提出しておきたい。

(19) 強い脅迫の力を表出する（擬似）法助動詞構文と好ましい動機づけの状況は共起しない傾向にある。

4. 強い力を表出する can 構文と動機づけ

上で見たように、can/may 構文は、事象の実現が含意されないという観点に立った場合、弱い力を表出するものとして特徴づけることができる。しかしながら、can 構文は、相対的に強い力を表す場合もあると見なすことができる。このタイプの can 構文は、聞き手が当該の事象の実現に対して、否定的な態度（たとえば、嫌悪感など）を表明しているコンテクストにおいて用いられる。つまり、話し手の要請する事象の実現に対して否定的な態度をとる聞き手を説得するためには、強い力の行使が必要とされるのである。次の例における can 構文を考えてみよう（斜体筆者）。

(20) "I want the little girl who comes here with Betty. Her name's Corrie Palmer. …"
"Impossible," he said, his small eyes hardening.
…
"But you *can* try. Please say you'll try." [BNC]

(20)では、最初の話し手が、「Corrie Palmer という少女に会いたいです」と述べる。それに対し、次の話し手が、「それは不可能です」と否定的な態度を表明する。それを受けて最初の話し手が、「それを取り計らってくれませんか」と述べている。

(20)の can 構文が相応の力を表すことは、ここでの can を must に置き換えても基本的な伝達意図に違いを生じさせるものではないことからも分かる。

(21) But you *must* try.（コンテクスト＝ (20)）

前出の(8)と(11)の関連性を想定すれば、このタイプの can 構文も、好ましい状況と好ましくない状況の両者と共起し得ると予測されるが、下の例（斜体・下線筆者）に示されるように事実はその通りである。

(22) "Give me what you owe me up until today."
Mrs. Mantini glowered, her eyes roasting.
"I certainly won't. You *can* come in on Saturday and I'll give it you then."
"No," said Rachaela. "I'd like it now." [BNC]

(23) "I thought you were supposed to be going out?"
"No, I cancelled it earlier today."
"What a mistake, but maybe you *can* put it right, otherwise you'll have to eat alone," she finished sweetly. [BNC]

(22)では、Rachaela が、貸していたものを返してほしいと言う。それに対して、Mantini が、「日曜日に来てください。そうすれば、それを返します」と述べている。ここでの下線部の動機づけの状況は聞き手にとって好ましいものである。(23)では、約束をキャンセルした人物に対して、「考え直してください。さもないと一人で食事をとることになってしまいますよ」と伝えられている。ここでの動機づけの状況は、聞き手にとって好ましくないものとなっている。

以上の議論から、(24)を提出しておきたい。

(24) 強い力を表出する can 構文は、好ましい動機づけの状況／好ましくない動機づけの状況と共起する。

5. can/may 構文と動機づけ

次の例における can 構文を考えてみよう（斜体筆者）。

(25) "But er you'll be in a far safer position if you actually produce your licence on the twenty fifth of October."
"May we go sir?"
"Yes, you *can* leave the court now."
"Thank you."
"Back to case thirty one." [BNC]

(25)の can 構文は、「退席していいですか」と訪ねた聞き手に対して、それを話し手が「容認」する際に用いられている。ここで重要なことは、聞き手が事象の実現に対して否定的態度を示す人物ではなく、事象の実現に対して積極的な人物であることである。このようなコンテクストでは、聞き手を説得するための強い力の行使は必要とされないと考えられる。よって、(25)の can 構文は、弱い力しか表していないと考えられるが、事実、ここでの can は、強い力を表す must には置き換えることができない。

(26) *Yes, you *must* leave the court now.（コンテクスト＝ (25)）

may 構文の表す力に関しても同様の線で説明可能である。may 構文は、通例、(25)のタイプの can 構文と同じ環境で用いられる。よって、may 構文の表す力は弱いものであると見なすことができる。前出の(20)の can は may に置き換えることはできないが、(25)の can は may に置き換えることができる。

(27) *But you *may* try.（コンテクスト＝ (20)）
(28) Yes, you *may* leave the court now.（コンテクスト＝ (25)）

弱い力で聞き手に事象の実現を促すと同時に、脅しのニュアンスの伴う好ましくない動機づけの状況を提示するのは不自然である。したがって、次の（擬似）法助動詞構文と動機づけとの関連性が考えられる。

(29) 弱い力を表出する（擬似）法助動詞構文と好ましくない動機づけの状況は共起しない傾向にある。
(30) 弱い力を表出する can 構文と may 構文は、通例、好ましい動機づけの状況と共起する。

次の例を見られたい（斜体・下線筆者）。

(31) It seemed to Leaphorn a hard case to prove.
"Any chance of talking to Reynolds? Will he be back?"
"He's coming in this evening," Isaacs said. "Come on down to the camper. You *can* wait for him there, and I'll show you what we're finding." [Wordbanks]
(32) "I'm bored," Anna said.
"Can't we play a game?"
"It's far too hot to run about," Ruth told her.
"You *may* pick daisies and I'll show you how to make a daisy chain." [BNC]

(31)の may 構文は、Reynolds と話したいと思っている Leaphorn に対して、キャンピングカーで待つことを促すために用いられている。ここでは、「我々が見つけていることを教えてあげます」という好ましい動機づけが述べられている。(32)の may 構文は、退屈している Anna に対して、Ruth がヒナギクを摘むことを促すために用いられている。ここでも、「そうすれば、花輪の作り方を教えてあげる」という好ましい動機づけが述べられている。

(29)と(30)から、(31)と(32)の動機づけの状況は、好ましくない状況には書き換えることができないことが予測されるが、この予測は(33)と(34)の不適切さによって裏づけられる。

(33) *You *can* wait for him there, or I won't show you what we're finding.
(34) *You *may* pick daisies, or I won't show you how to make a daisy chain.

6. おわりに

本稿では、各（擬似）法助動詞構文は、異なるタイプの動機づけの状況と共起し、その共起パターンを説明するためには、力の強さと質に関する考察が有効であることを論じた。上で論じた（擬似）法助動詞構文と動機づけとの関係は次の表にまとめられる（当該タイプの動機づけが想起され得る場合は YES、されない場合は NO）。

(35)

	好ましい状況	好ましくない状況
must 構文	YES	YES
had better 構文	NO	YES
(強い力を表す) can 構文	YES	YES
(弱い力を表す) can/may 構文	YES	NO

よく知られるように、モダリティは、主観的モダリティと客観的モダリティに分類することができる (Halliday 1970; Lyons 1977; Verstraete 2002, etc.)。本稿で考察の対象とした主観的な束縛的モダリティを表す(擬似)法助動詞構文は、多くの場合、明示的に述べられる動機づけの状況と共起する。一方、客観的な（＝話し手の関与の看取されない）束縛的モダリティを表す（擬似）法助動詞構文においては、明示的な形で動機づけは述べられない傾向にあるようである。たとえば、BNC コーパスにおいて、客観的な束縛的モダリティを表す典型的な形式の 1 つである One can～ と明示的な動機づけが呼応する事例は 1 例も見つからなかった。このような、表出されるモダリティのタイプと動機づけとの関連性については、稿を改めて論じることとしたい。

参照文献

Halliday, M. A. K. 1970. "Functional Diversity in Language as Seen from a Consideration of Modality and Mood in English." *Foundations of Language* 6, 322-361.

Lakoff, R. 1971. "If's, And's, and But's about Conjunction." In C. J. Fillmore and D. T. Langendoen (eds.) *Studies in Linguistic Semantics*, 114-149. New York: Holt, Rinehart, and Winston.

Lakoff, R. 1972. "Language in Context." *Language* 48, 907-927.

Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.

Lyons, J. 1977. *Semantics 2*. Cambridge: Cambridge University Press.

Palmer, R. F. 1990². *Modality and the English Modals*. London: Longman.

Perkins, M. R. 1983. *Modal Expressions in English*. London: Frances Pinter.

澤田治美. 1999.「語用論と心的態度の接点」、『月刊言語』、28: 6、58-63.

澤田治美. 2006.『モダリティ』東京：開拓社.

Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: University of Cambridge Press.

Tregidgo, P. S. 1982. "MUST and MAY: Demand and Permission." *Lingua* 56, 5-92.

Verstraete, J. C. 2001. "Subjective and Objective Modality" *Journal of Pragmatics* 33, 1505-1528.

意志は WILL の外から来る：意志・動作主・主体性

片岡宏仁
関西外国語大学大学院
(i904021@kansaigaidai.ac.jp)

*キーワード：意志の帰属条件，自制可能性，主体性／客体性

1 導入

本稿は，英語法助動詞 WILL を含む節に〈意志〉解釈が成立する条件を論じる．主要な論点は以下の 3 点である：

(i) 〈意志〉解釈は，**意識的な主体がいて**，かつ，**事態が自制可能であるとき**に成立する．

(ii) **話し手の主体的な意志**は，話し手=動作主が動詞句の外部に認定されるときにも成立するが，二・三人称の意志はそうでない．

(iii) **三人称動作主の客体的な意志**は，予測（確言型発語内行為の一種）と両立する．他方，主体的な意志は予測と両立しない．

2 〈意志〉の帰属条件——自制可能性と意識主体

以下のような発話は〈意志〉解釈を例示しているとされる．

(01) a. Can someone help me? – I will.
b. I really will stop smoking.
(Swan [2005: 629])

他方，同じく未来時の事態を表している WILL 節でも，以下のようなものには〈意志〉解釈がなされない．

(02) a. Bullets haven't subdued the insurgents in Iraq, but the administration hopes that [bullet points will subdue the critics at home]. [Kr]
b. I have *no idea* whether [Patrick Fitzgerald, the special prosecutor, will bring more indictments in the Plame affair]. [Kr]

一般に，WILL 節が表す事態の参与者に〈意志〉が帰属されるかどうかは，次の条件に従う：

- 動詞句の事態に関わる**意識的な主体が存在**すること．
- 動詞句の事態が**自制可能**であること．
- その事態の実現をその主体が意思することに**不合理な点がない**こと．

以下，このことを論じる．

2.1 自制可能性

よく知られているように，動詞句が自制可能な事態 ('self-controllable'; Kuno [1970: 352; fn9]) を表しているときに WILL 節は意志を表していると解釈され．そうでない場合には予測と解釈される傾向にある：

(03) a. I will help you. ［自制可能；〈意志〉］
b. One day I/you/he will die. ［自制不可能；〈予測〉］

ここでいう「自制可能性」は，以下のように定義される．

【定義 2-1.】自制可能 (self-controllable) とは，動詞句の参与者（とくに主語項）によって事態の実現が左右されうることを言う．自制可能でない動詞句は適切な命令文にならない．
(cf. Kuno [1970: 352; fn9])

同趣旨の指摘は，近年の文献では Klinge (2005: 179]) にもみられる：「動作主の制御」(agent control)．

2.2 意識的な主体

当然ながら，**〈意志〉をもちうる参与者がいなければ**，〈意志〉解釈は生じない．自制可能性を問題にするためには，そもそも意識的な主体が動詞句の事態に含まれていなければならない：

(04) a. *I* will explain the reason.

b. *This factor* will explain the reason.

この例では，単に主語だけではなく，述語 EXPLAIN の表す事態も異なっている(例 a は言葉を発するなどの伝達行為が EXPLAIN に含まれるが，例 b はそうでない)．

2.3 〈意志〉は WILL だけの問題ではない：過去時制の場合

過去時制においても，その事態が意志的に引き起こされたものであったかどうかの判断は，自制可能性の有無に左右される：

(05) a. I/He/She helped you.
b. He died.

一般に，事態が自制可能でその参与者が意識的な主体（動作主）であるとき，その事態は意図的になされた／なされている／なされるとみなされる（e.g. Mary {kicked/is kicking/will kick} John）．すなわち，①自制可能，②意識的動作主の 2 条件のもとで WILL 節の意志解釈は生じる（ただし，その意志が焦点化されるかどうかは別の条件に従う）．

2.4 傍証：小規模コーパスでの分析

上述のように意識的な主体＋自制可能性という条件で〈意志〉解釈がなされることを，小規模なコーパスの分析で検証しよう．*Monty Python's Flying Circus* (episode 1～13) に含まれる WILL の用例 156 件について，自制可能性と〈意志〉解釈をそれぞれ調べた．自制可能な例としては，以下のようなものが挙げられる：

(06) a. I will fetch him at once.
b. Do you think Jarrow will adopt a more defensive posture for the first leg of the next tie in Turkey?
c. You'll shoot me.

他方，自制不可能なものとしては，以下のようなものがある：

(07) a. Weather for tomorrow will be cloudy with occasional outbreaks of rain.
b. Every figure he gives you will be ten times too high.
c. Er, once he's in orbit he'll be able to run straight to Mercury.

こうした自制可能性（100 例）と意志解釈（79 例）の相関は 約 0.65 で有意である．

本動詞句の事態は自制可能だが，意志解釈と見なせないケースは，大きく 2 とおりに分けられる：ひとつは (08) や (09) のような進行／完了アスペクトの例，もうひとつは (10) のように予定されたことを述べていると談話文脈から分かっている例である．

(08) a. Well Picasso will be starting, David, at Chichester here, ...
b. And what routes will you both be taking?
c. Well we'll be leaving on January 22nd and taking the following routes.
(09) This man is Ernest Scribbler... writer of jokes. In a few moments, he will have written the funniest joke in the world...
(10) a. (TV 番組のナレーション) And now Marcel will mime a man being struck about the head by a sixteen-ton weight.
b. (自転車レースの実況) ... he'll then cycle on the A29 to Fontwell,

前者について言えば，本動詞句の自制可能性は，完了／進行アスペクトにより打ち消される．このことは，同じ動詞句を適切な命令文にできないことでうらづけられる：

(11) a. #Be starting at Chichester here! (0/3)
b. Start at Chichester here! (3/3)
c. #Have written the funniest joke in the world! (0/3)
d. Write the funniest joke in the world! (2/3)

また，予定された事態は，その事態の参与者当人の意図するところではないのだから，〈意志〉解釈とならないのも理解できる．こうした要因がなければ，意識主体＋自制可能性は〈意志〉解釈を成立させると考えられる．

2.5 〈意志〉していると解釈するのが不合理な場合

さらに，Klinge (2005) は次のような例を提示している：

(12) a. I will win a stunning victory if I ever fight him again. [+VOLITION]
b. I will suffer a crushing defeat if I ever fight him again. [−VOLITION]
(Klinge [2005: 177]；下線・[ ] 内=片岡)

これらはいずれも自制可能な事態である．しかし，(b) は話し手にとって**のぞましくない事態**であり，したがってそれを意図するということが考えにくい（ただし，Klinge の言うように，例えば八百長について述べている場合なら〈意志〉解釈が成り立つ）．

3 主体的な意志と客体的な意志の非対称

前節でみたように，意識をもつ参与者と自制可能性が〈意志〉解釈の成立の必要条件をなしている．さらに事例を検討すると，その参与者の人称によって，〈意志〉解釈の成立条件に相違があることがわかる．その相違とは，次の 2 点である：①主体的意思の場合には，自制可能性の判定に外在的事態も考慮される；②客体的意思は確言の対象となる（予言・予測と両立する）が，主体的意思はそうでない，

3.1 主体的／客体的意志

まず，本稿がいう「主体的／客体的な意志」について，必要最小限の定義を示しておこう．

【定義 3-1.】 主体的な意思とは一人称単数の参与者＝話し手の意志であり，客体的な意思とは三人称の参与者の意志である．

より正確に言えば，主体的な意思とは，(a) ある節を発話している参与者の意志または (b) 思考動詞や発言動詞の主語の意志を言う．これに対して，客体的な意志とは，この主体にとって第三者的な参与者の意志を言う．（ここで定義した「主体性／客体性」は，Langacker のいう "subjectivity／objectivity" と別物である．）また，この定義では二人称参与者が主客いずれとも位置づけられていない．

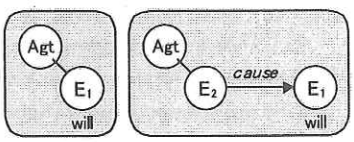
3.2 外在的事態が自制可能であるときにも主体的な〈意志〉は成立する

主体的意志の場合，自制可能性が問題にされる範囲が本動詞の事態の外部にまで拡大されうる：

(13) a. And because I'm so evil you'll all die the slow way...under the drill.
（cf. 'Because the executioner is so evil you'll all die the slow way.'）
b. If there's one thing I can't stand, it's a yes-man! Get out! I'll see you never work again.
（単に「二度とお前が働くところを見ることはない」というのではなく，「自分がお前を働かせないように手を回す」と宣告している．）
c. Stay where you are. You'll never leave this bookshop alive.
（単に「あなたは生きてここから出て行かない」というのではなく，「生きてここからは出て行かせない=殺す」と宣告している．）

上記の例 (13a) は脅しの発話であり，聞き手たちを殺す話し手の意志が表明されている．しかし，その動詞句は *die the slow way* という（それ自体としては）自制不可能な事態である (cf. 03b)．意志が関わっているのは，この動詞句の事態 E_1 ではなく，それを引き起こす言外の先行事態 E_2 である（図-1）．

図-1



【動作主内在】　【動作主外在】

例 (13a) と同じ事態でも，主語を一人称単数（話し手）ではなく第三者 ("the executioner") にすると，むしろ予測としての側面が強くなる．同じことが例 (b-c) にも当てはまる．

3.3 「予測・予言」の言語行為と客体的意思は排他的でない

Coates (1983) によれば，WILL の〈意志〉と〈予言〉の境界は「ファジー」である．しかし，両者の境界があやふやなのは，客体的意志を断定している場合 (i.e.〈意志〉+〈予言〉) があるためである．他方，主体

的な意志は予言と相容れない．ここでいう予言または予測言明とは，未来の事態を確言する言語行為である（Cf. "If you *predict* an event, you say that it will happen." [Cobuild]）．

IF 条件文の主節=後件で非対称性を観察してみると，一人称単数主語の場合には〈意志〉の表明として解釈されるが，三人称主語の場合には〈予言〉の言語行為となっている．

(14) a. Now if anybody else pinches my phrase, I'll throw them under a camel. [MPFC]
(cf. 'If anybody else pinches his phrase, *John* will throw them under a camel.')
b. So if you'll just step through here I'll slit you up a treat.
(cf. 'If you'll just step through here *he*'ll slit you up a treat.')
c. All right then, if he's restin', I'll wake him up! 〔※言語行為条件文〕
(cf. 'If he's resting', *she*'ll wake him up!')

また，〈意図〉と〈予言〉が並立するかどうかを調べると，主体的な意志の場合には並立せず，客体的な意志の場合には並立するのがわかる：

(15) a. Now if anybody else pinches my phrase, I'll throw them under a camel.
— "That's what I intend to do." [3/3]
— #"That's what I predict." [1/3]
b. If anybody else pinches his phrase, John will throw them under a camel.
— "That's what John intends to do." [3/3]
— "That's what I predict." [3/3]

(16) a. So if you'll just step through here, I'll slit you up a treat.
— "That's what I intend to do." [3/3]
— #"That's what I predict." [1/3]
b. If you'll just step through here, he'll slit you up a treat.
— "That's what he intends to do." [3/3]
— "That's what I predict." [2/3]

このように，〈意志〉と〈予言〉とが並立している（「ファジー」である）のは，客体的な意志の場合である（図-2）．

図-2

	一人称 単数I	三人称 +意識	三人称 −意識
意志	○	○	×
予測	×	○	○

4 結語

本稿の議論を要約しておこう．まず，〈意志〉解釈が成立するのは，①話し手が制御可能な事態において；または ②話し手には制御できないが参与者には制御可能な事態において，のいずれかである．このうち，②の場合には，同時に予測言明の行為も成立する．したがって，〈意志〉＋〈予測〉という解釈となる．言い換えれば，予測言明が成立するのは，話し手には制御できない事態について，それが未来において起こると確言したときである．

参照文献

[Kr] – Paul Krugman が *New York Times* に掲載したコラム（2005 年 7 月～2006 年 10 月までを使用）．

[MPFC] – Monty Python's Flying Circus（episode 1～12 までを使用）．

安藤貞雄 2006.『現代英文法講義』．東京：開拓社．

Coates, Jennifer 1983=1992. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. Croom Helm.（邦訳：『英語法助動詞の意味論』［澤田治美=訳］．東京：研究社出版．）

Klinge, Alex 2005. "Where there is a *will*, there is a modal," in A. Klinge & H. H. Müller (eds.), *Modality: Studies in Form and Function*, pp.169-186. London/Oakville: Equinox.

Kuno, Susumu 1970. "Some properties of non-referential noun phrases," in R. Jacobson & Sh. Kawamoto (eds.), *Studies in General and Oriental Linguistics: Presented to Shirô Hattori on the Occasion of His Sixtieth Birthday*, pp.348-373. Tokyo: TEC Company.

Leech, Geoffrey 2004[3]. *Meaning and The English Verbs* (3rd ed.). Longman.

Swan, Michael 2005[3]. *Practical English Usage* (3rd ed.). Oxford UP.

文副詞 Reportedly と法助動詞ー「主観性・客観性」と「視点」の観点からー

岡本　芳和
関西外国語大学非常勤

＜要旨＞
文副詞 reportedly によって修飾される命題内容に法助動詞が使用されると、どのように解釈されるのかを「主観性・客観性」や「視点」の観点から分析を試みた。本稿では、文副詞 reportedly に 2 つの意味を想定した。「伝えられるところによると」の意味では、その命題内容の中に現れる法助動詞は客観的意味として解釈される。一方、「うわさによると」の意味では、主観的に解釈される。主観的に解釈される場合は、話し手の視点から、その法助動詞が使用されていることになり、命題内容に対して話し手も発話時においてその態度を表していることになる。
【キーワード】法助動詞、モダリティ、主観性・客観性、視点

1. はじめに

本稿では、文副詞 reportedly と法助動詞の関係を、「主観性・客観性」や「視点」という意味論的・認知言語学的観点から分析を試みてみたい。次の例における reportedly について考えてみよう[1]。

(1) Might they have a chance to boo the man himself Thursday? Hasek practiced Wednesday and *reportedly* might play in Game 4. Will it matter? Probably not.

(1)の reportedly によって修飾される命題内容に法助動詞が使用されると、その意味が主観的に解釈されるのか、あるいは、客観的に解釈されるのかが問題になる。また、誰の視点でその法助動詞が使用されたのかも問題になる。そこで、以下のような仮説を立てて、(1)のような例について考察してみい。

(仮説)(ⅰ)reportedly の後に法助動詞が現れる場合は以下のような 2 つの捉え方が可能である(M=モダリティ　P=命題内容)。
① Reportedly, [　P(M)　]
② Reportedly, M[　P　]
(ii) 客観的な法助動詞が現れる場合は①の捉え方になり、reportedly は、「伝えられるところによると」の意味になる。
一方、主観的な法助動詞が現れる場合は②の捉え方になり、reportedly は「うわさによると」の意味になる。

2. モダリティにおける主観性・客観性と視点

モダリティの主観性・客観性の問題は、話し手が使用するモダリティが、主観的な意味をもっているのか、あるいは、客観的な意味をもっているのかという問題に関係している[2]。一般に、主観的なモダリティとは、命題内容に対して、発話時における話し手の関与が含まれていることを表し、客観的モダリティとは、発話時における話し手の関与が含まれていないことを表している(澤田 1993: 161, 2006: 43, 岡本 2006:21-24)。また、筆者は、法助動詞は、多義的で、束縛的モダリティ、認識的モダリティと will の単純未来の用法があり、主観的な意味と客観的な意味があることを想定する。また、話し手の関与が含まれているか否かには、視点の問題も関係する[3]。次の例を考えてみよう。

(2) Alfred may be unmarried.
(Lyons 1977: 798)

(2)の may は、主観的意味(「〜かもしれない」)と客観的意味(「〜する可能性がある」)を持っている。同じく、(3)の must について考えてみると、

(3) a. This is a terrible party.　We really must go home.
(Swan 2005[3]: 336)

b. But to reach orbit an object must accelerate to a speed of about 17,500 miles per hour in a horizontal direction.
(Verstraete 2001: 1508)

(3a)は、主観的意味(「～しなければならない」)を持ち、(3b)は客観的意味(「～する必要がある」)を持っている。(2)や(3)の例は、法助動詞 may や must には、主観的な意味と客観的な意味があることを示している。

3. 副詞 reportedly の 2 つの意味

副詞 reportedly は厳密には 2 つの意味があり、それらは使い分けされることを想定して、分析を行う。1 つの意味は「伝えられるところによると」で、もう 1 つの意味は「うわさによると」である。以降、前者を reportedly$_1$、後者を reportedly$_2$ と表記する。

3.1. reportedly$_1$ の意味

この意味では、共に使用される法助動詞の意味は客観的モダリティになる。当該の文の話し手は、発話時ではなく、発話時以前にある既存命題を単にそのまま報告しているのである。そのモダリティは、話し手の視点から報告されたものでなはい。

(4) a. *伝えられるところによると、明日は嵐になるかも。
b. 伝えられるところによると、明日は嵐になる可能性がある。
(5) a. *伝えられるところによると、ジョンは週 2 回残業しなきゃ。
b. 伝えられるところによると、ジョンは週 2 回残業する必要がある。
c. 伝えられるところによると、ジョンは週 2 回残業する必要があった。
(6) Reportedly, John must work overtime twice a week. (主観的=*、客観的=OK)

(4)や(5)の日本語の例においては、主観的な意味がいずれも不適格になり、客観的な意味であると適格になる。(6)の英語の例においては、主観的な意味では解釈することができない。

3.2. 概念構造

文副詞 reportedly が「伝えられるところによると」の意味になる場合の概念構造を次のように提案する。

(7) Reportedly, [P(M)]

この概念構造が意味していることは、命題内容の中に法助動詞によって表されるモダリティが含まれているということである。従って、話し手が命題内容に対して、発話時に判断したモダリティではないということである。次のように表すことができる。

(8) Reportedly, [he must work overtime twice a week]

また、このタイプは、it is reported that～の形式で書き換え可能である。上の例で考えると、「～しなければならないことが報告される」は容認可能ではないが、「～する必要があることが報告される」は容認可能である。

(9) It is reported that he must work overtime twice a week.

3.3. reportedly$_2$ の意味

このケースでは、reportedly と共に使用される法助動詞の意味は主観的なモダリティになる。この文の話し手は、発話時に、「うわさ」として既存する命題内容をうまく利用して、自分の主観的な態度を表しているのである。その点で、「伝えられるところによると」とは、機能が異なる。

(10) a. うわさによると、北朝鮮は核実験を再開するかもしれない。
b. *?うわさによると、北朝鮮は核実験を再開する可能性がある。
(11) Might they have a chance to boo the man himself Thursday? Hasek practiced Wednesday and *reportedly* might play in Game 4. Will it matter? Probably not.(=(1))

(10)の例では、「～する可能性がある」の客観的な意味では解釈が不自然になる。(11)の例の might は主観的なモダリティ（「～かもしれない」）として解釈される。「Hasek は水曜日に練習したし、うわさによれば第 4 試合に出るかもしれないね」となる。一般的に法助動詞 might は主観的なモダリティであると言われている。(11)の場合、命題内容に対して話し手が判断をし、その可能性をほのめかしていることが考えられる。また、話し手が自分の気持ちを表明するために、reportedly を用いているのである。

3.4. 概念構造

文副詞 reportedly が「うわさによると」の意味になる場合の概念構造を次のように提案する。

(12) Reportedly, M[　P　]

重要なことは、(7)の概念構造と違って、M が命題内容の外にあるということである。この概念構造が意味していることは、命題内容に対して、話し手が発話時にその態度を表しているということである。このモダリティは、発話時に話し手によって表されたものである。また、このタイプは、it is reported that ～の形式では、書き換えられない。

(13) *It is reported that Hasek might play in Game 4.

この文において、「試合にでるかもしれないことを報告する」は、不自然に響く。

4. 分析

ここでは、実際の例文を用いて、文副詞 reportedly と法助動詞の意味についてさらに分析を試みたい。

4.1. reportedly[1] の意味と法助動詞

以下の例における下線部の法助動詞はすべて客観的モダリティとして解釈される。

(14) Chocoholic germs can *reportedly* provide hydrogen, the clean-burning energy of the future. (散在性：「～することがある」)

(15) Researchers have developed new internet security tools that *reportedly* can determine a person's gender, level of education, and whether two pieces of writing originated from the same person--all from a typing sample of a few hundred words. (能力：「～できる」)

(16) Holography takes on the hard disk: optical-storage system.(holographic optical storage systems *reportedly* can store over 12 times as much information as the magnetic hard disks, with more rapid input.(能力：「～できる」)

(17) SAN FRANCISCO (MarketWatch) -- Intel Corp. *reportedly* will unveil plans to cut as many as 20,000 jobs as early as next week as part of a previously-announced restructuring plan aimed at reviving the world's biggest maker of computer chips.(単純未来)

(18) Intel *reportedly* may announce job cuts of up to 20,000.(可能性：「～可能性がある」)

(19) Apple *reportedly* may offer support in iTunes for its uncompressed file format. (可能性：「～可能性がある」)

(20) ...Two possibilities might explain this result. One is that LDH activity in the islets was too low to generate ample NADH and pyruvate from lactate in the cytosol. Indeed, LDH activity *reportedly* must be quite low to ensure aerobic glucose metabolism in β cells. (必要性：「～することが必要である」)

4.2. reportedly-2 の意味

以下の例における下線部の法助動詞は主観的モダリティとして解釈される。

(21) According to the news, the Celebrity actor Brad Pitt *reportedly* might show up in a big screen version of the hit British TV crime drama 'State Of Play.' If everything will work out as reported Brad Pitt will star as the investigative journalist, a role which was played by John Simm in the TV. (可能性：「～かもしれない」)

(22) Winding Road is reporting that Brock Yates, the godfather of automotive journalism in the U.S., may be returning to the

pages of Car & Driver. Many of you might remember that Yates was allegedly forced to abandon his column in C&D because of a shakeup taking place at the most popular automotive buff book. Whatever went down, which was arguably never made clear to the public or the magazine's readers, appears to have been reconciled, and Yates *reportedly* should be back spouting his special brand of vitriol and insight soon. (推量：「～はずだ」)

(23) More confirmed details should be available soon, tickets *reportedly* should be on sale around September 7th but there's still some confusion over whether special tickets can be bought in advance or whether they will be available on a first come, first serve basis and included with regular admission to the Museum. (推量：「～はずだ」)

4. まとめ

本稿では、文副詞 reportedly によって修飾される命題内容の中に現れる法助動詞の意味を「主観性・客観性」や「視点」といった観点から分析した。文副詞 reportedly に２つの意味を想定し、それぞれの話し手の捉え方を(7)や(12)の概念構造のように提示した。「伝えられるところによると」の意味では、その命題内容の中に現れる法助動詞は客観的意味として解釈される。一方、「うわさによると」の意味では、主観的に解釈される。主観的に解釈される場合は、話し手の視点から、その法助動詞が使用されていることになり、命題内容に対して話し手も発話時においてその態度を表していることになる。

---

1 本稿で使用する reportedly に関する英語の例文のほとんどが、インターネットのホームページより引用した文である。

2 主観性・客観性に関するその他の文献としては、Lyons (1977), Coates (1983), Hengeveld (1989), Palmer (1990[2]), 中野 (1993), Hoye (1996), Nuyts (2000), Verstraete (2001) などが挙げられる。

3 視点に関するその他の文献としては、久野(1973), Kuno and Kaburaki (1977), 毛利 (1980), Kuno (1987), 神尾(1990), 澤田 (1993), 高見(2001)などが挙げられる。

参考文献

Coates, J. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm.

Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha

Hengeveld, K. 1989. "Layers and operators in Funcional Grammar." *Journal of Linguistics* 25, 127-157.

Hoye, L. 1996. *Adverb and Modality in English*. London and New York: Longman.

Jenkins, L. 1972. *Modality in English Syntax*. Ph. D. Dissertation, MIT. Reproduced by the Indiana Linguistic Club.

神尾 昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論－言語の機能的分析』. 東京: 大修館書店.

久野 暲. 1973. 『日本文法研究』. 東京: 大修館書店.

Kuno, S. 1987. *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*. Chicago: The University of Chicago Press.

Kuno, S. and E. Kaburaki. 1977. "Empathy and Syntax." *Linguistic Inquiry* 8, 627-672.

Leech, G.N. 1971, 1987[2]. *Meaning and English Verb*. London: Longman.

Lyons, J. 1977. *Semantics* (2 volumes). Cambridge: Cambridge University Press.

毛利 可信. 1980. 『英語の語用論』. 東京: 大修館.

中野 弘三. 1993. 『英語法助動詞の意味論』. 東京: 英潮社.

Nuyts, J. 2000. *Epistemic Modality, language and conceptualization: A cognitive-pragmatic perspective*. Amsterdeam: Benjamins.

岡本 芳和. 2005. 「話法とモダリティ－報告者の捉え方を中心に－」. 東京: リーベル出版.

Palmer, F. R. 1979, 1990[2]. *Modality and the English modals*. London: Longman.

Papafragou, A. 2000. *Modality: Issues in the Semantics-Pragmatics Interface*. Amsterdam: Elsevier.

Perkins, M. 1983. *Modal expressions in English*. London: Pinter.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

澤田 治美. 1993. 『視点と主観性』. 東京: ひつじ書房.

_____. 2006. 『モダリティ』. 東京: 開拓社.

高見 健一. 2001. 『日英語の機能的構文分析』. 東京: 鳳書房.

Thomson, A, J. and A. V. Martinet. 1986[4]. *A Practical English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Verstraete, Jean-christophe. 2001. "Subjective and Objective modality: Interpersonal and ideational in the English modal auxiliary system." *Journal of Pragmatics* 33, 1505-1528.

Westony, P. 1995. *Modals and Periphrastics in English*. Tübingen: Max NiemeyerVerlag.

視点の共有と reference point

岩田真紀
京都府立洛北高等学校
maki-iwata@nifty.com

＜要旨＞
本稿は、英語の現在完了、単純過去形の談話レベルでの観察に基づき、Reichenbach (1947)が時制理論に導入した reference time は動詞形に備わっているものではなく、談話参与者が過去時を共有することで談話内に発現するものであることを示す。また、共有された過去時という視点を導入することで、現在完了と定表現の共起にかかわる制約について、統一的説明が可能であることを論じる。さらに、談話内で過去のイベントを表す現在完了・単純過去のふるまいは、不定冠詞・定冠詞のふるまいと平行的で、それぞれ不定の過去時・定の過去時と考えることが可能であること、言い換えれば、定形節と名詞句に共通の認知プロセスが見られることを指摘する。
【キーワード】: SRE 理論、reference point、視点の共有、定・不定、時制と冠詞の平行性

1. はじめに

本稿は、現在完了を3分類する立場をとり、その名称を Michaelis (1994, 1998)に倣う。また、議論の対象を、過去のイベントを表す existential と resultative に限る。

(1) a. Continuative/ *That store's been there for years.*
b. Existential/ *Harry has visited twice this week.*
c. Resultative/ *The police have arrested the men responsible.* (Michaelis 1998: 115)

英語において、過去のイベントは現在完了と単純過去で表すことができる。Reichenbach (1947)は両者の違いを reference time (以下 R) の違いとして、それぞれをスキーマ的に示したが、Klein (1992)、樋口 (2006)らが指摘するように、R は明確に定義されていない。

(2) a. 現在完了　E－R, S
b. 単純過去　E, R－S
(E: event time, R: reference time, S: speech time, －: 継時的関係, ,: 同時的関係)
(Reichenbach 1947)

本稿は、談話参与者間で共有された時点が定の時点として R となることを示し、現在完了は不定の過去時、単純過去は定位された過去時を表すことを論じる。

2. 定表現との共起

現在完了と定表現の共起に関して、Swan (2005: 422)は「現在の状況に関わる人、もの、状況が特定できる場合は、通常過去時制を用いる」と述べ、Michaelis (1998: 247)は(3)について、「結果の現在完了は語用論的に前提とされる出来事を詳述するために用いることはできない」と指摘する。また、Elsness (1997: 24)は(4)の容認度の低さを、「定形のため、前置詞句 *in the car-crash* が特定の (過去) 時を想起させることによる」と説明する。樋口 (2005: 38)は(5)が容認される理由を、「過去分詞が現在の状況に特徴づけをして修飾機能を果たしているため」であると述べる。

(3) a. Look! Myron's painted a little picture. (Michaelis 1998: 248)
b. #Myron's painted the little picture. (Michaelis 1998: 248)
(4) # She has broken her leg in the car-crash. (Elsness 1997: 24)
(5) He has gone back to visit his mother two months ago, last weekend, and just yesterday.
(樋口 2005: 37)

しかし、上記の説明では、(6a),(6b)や(7a),(7b)の容認度の違いや、(8)に現在の状況の修飾機能がない理由を説明できない。Michaelis (1994, 1998)では、説明的観点からの議論は十分にされていない。

(6) a. My old bicycle now looks brand new. George has painted it. (Elsness 1997: 226)
b. That's a nice picture. #Who has painted it? (Elsness 1997: 225)
c. That's a nice picture. Who painted it? (Elsness 1997: 225)
(7) a. Have you bet on the horse?
b. #Have you bought the lottery ticket?
(8) *He has gone back to visit his mother yesterday.

3. 談話の中での現在完了

談話 (discourse) は、「話し手と聞き手の相互行為 (interaction) を通じて、時系列に沿って、局所的に構築される、累積的な (incremental) 心的表示 (mental representation) である」(東郷 1999: 35)と定義される。談話のグラウンドは、発話時現在である。過去のイベントは談話に現在完了で導入され、導入された過去のイベントはそれ以降単純過去で言及される。新情報である過去のイベントが単純過去で導入され、その後現在完了で言及されると、容認度が下がる。

(9) a. HARRY: He's in trouble. Up at school, there've been attacks. They think it's Hagrid. They think he *'s opened* the Chamber of Secrets. Like before.
ARAGOG: That's a lie! Hagrid never *opened* the Chamber of Secrets!
(IMSDb, *Harry Potter and the Chamber of Secret*)
#b. HARRY: He's in trouble. Up at school, there've been attacks. They think it's Hagrid. They think he *opened* the Chamber of Secrets. Like before.
ARAGOG: That's a lie! Hagrid *has* never *opened* the Chamber of Secrets!

イベントには時間が付随する。現在完了で談話に導入されるイベントの生起時は過去である。談話のグラウンドでは、デフォルトとして談話参与者は発話時現在を共有する。談話に現在完了で過去のイベントが導入されると、イベントに付随した過去時が共に導入される。導入された過去時は、談話参与者間で共有され、共有された過去時は単純過去形で表される。(9b)のように参与者の視点が現在にあり、参与者が共有する過去時が存在しないときに、単純過去形でイベントを談話に導入することはできない。また、すでに共有された過去時に、現在完了で言及することはできない。イベントの現在完了による導入から単純過去形への移行は、名詞句を導入する際の不定冠詞から定冠詞への移行と、平行的であることがわかる。

4. 過去時の導入と共有

4.1 談話のグラウンドと reference point の移行

談話は、話し手、聞き手が存在する発話時現在をグラウンドとして開始される。談話開始時は談話参与者間で共有されており、過去時を明示する時間副詞がない場合、話し手は共有の発話時を reference point として、談話に過去のイベントを導入する。イベントとともに、イベントに付随する

過去時（event time）が談話に導入される。過去時を示す副詞句を伴わずに導入された過去時は、過去の一時点に定位されない。談話参与者は、共有する発話時現在から、イベントに付随する不定の過去時を共有する。不定の過去時は、談話参与者間で共有されることで、定の過去時となる。reference point は定の過去時に移動し、時制は過去へと移行する((10))。

一時点を表す時間副詞句は定の過去時を示し、reference point となる((11))。

(10) DORY: Hey, what are you doing?
MARLIN: It's gone.　I'*ve lost* the mask.
DORY: *Did* you *drop* it?　(IMSDb, *Finding Nemo*)

(11) **One day** the Princess *decided* that she *didn't like* staying at home all day, so she *told* her father that she *wanted* to get a job . . . .　(Swan 1995: 417)

(3b),(4),(6b)の容認度の低さは、談話参与者間で共有された過去の事態に、現在完了で言及していることによる。(3b)は、定名詞句 the picture に、存在前提となる事態 [someone-paint-a-little-picture] がある。(4)の car-crash はモノではなくコトを表す名詞句であるため、定名詞句 the car-crash には過去時がすでに付随している。(6b)の paint は創造動詞であり、(6b)は存在前提となる事態について現在完了で尋ねる疑問文である。一方、(6a)の paint は創造動詞として機能しているのではないため、[paint-it]というイベント自体は新たな情報である。(3b),(4),(6b)にはそれぞれ前提となる過去の事態が存在し、事態に付随する過去時が共有されるため、定の過去時が存在し、現在完了が容認されない。

4.2　事態の唯一的共有と reference point の移行

(7a)、(7b)の名詞句 horse, lottery ticket はモノを表し、定名詞句 the horse, the lottery ticket に時間は付随しない。定冠詞がそれぞれの名詞句を唯一的に特定する場合、イベント [bet-on-the-horse] の唯一性は保証されないが、イベント [buy-the-lottery-ticket] は唯一的に特定される。そして、(7a) は existential と解釈可能であるが、(7b)は existential と解釈することができない。

イベントの過去時が唯一的に共有される場合、reference point の移行は義務的であるが、過去時が唯一的に共有されるのではない場合、移行は義務的ではない。(12)は *at five o'clock* を特定の時を表す副詞句と解釈すれば容認されないが、繰り返し可能な時を表す副詞句と解釈すれば existential として容認可能である。同様に、(5)の副詞句はイベントの生起時を特定するのではなく、生起状況に付随した副詞句と考えられ、全体として頻度を表すと解釈される。(13)は単純過去と共起し、それぞれの副詞句がイベントの生起時を特定する。(5)と(13)では、副詞句の役割が異なると考えられる。(14)のように、共有される定位点がないとき、reference point は移行できず、単純過去は容認されない。

(12) I have got up at five o'clock.
(13) He *went* back to visit his mother **two months ago, last weekend**, and just **yesterday**.
(14) a. He has left by now.
　　b. *He left by now.

4.3　reference point 移行のメカニズム

Langacker (2001)が「談話の流れのある一時点のコミュニケーションの基礎として、話し手と聞き手に共有されていると解釈される要素や関係を含むメンタルスペース」と位置づける Current Discourse Space（以下 CDS）を援用すると、談話の中での現在完了から単純過去への移行は、以下のように表せる。全体は認知ドメイン、下段は discourse frame、Ⓢは話し手、Ⓗは聞き手、Ⓔはイベント、太線は focus frame を示し、実線は mental contact、破線は同一であることを示す。

(15) (a) HAVE + -en

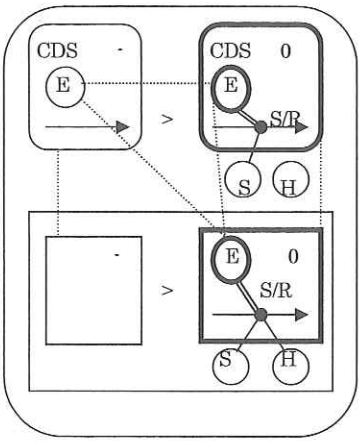


Figure 1

(b) SIMPLE PAST

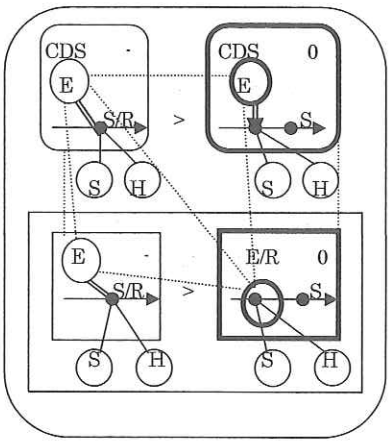


Figure 2

未共有の過去の事態は、話し手の視点から(Figure 1 CDS 0)、現在完了で談話に導入される (Figure 1 下段)。聞き手は、共有する発話時現在を R として、過去の事態との mental contact を成立させる。談話参与者が、発話のグラウンドである現在時を介して、過去の事態と事態に付随する過去時を共有したとき、共有された過去時は過去の一時点に定位され(Figure 2 CDS 0)、定の過去時となる。R は共有された過去のイベント時へと移行し、時制は単純過去に移行する (Figure 2 下段)。

5. おわりに

本稿では、談話の中での現在完了と単純過去のふるまいを観察し、(1)SRE 理論の reference time は談話参与者が一時点を共有することによって現れるものであること、(2)現在完了は談話に不定の過去時を導入し、イベントにおける現在完了から単純過去への移行は、名詞句における不定冠詞から定冠詞への移行と平行性があること、(3)現在完了と定表現の共起は、談話参与者が過去時を唯一的に共有することを前提として定表現が存在する場合には、容認されないこと、の 3 点を明らかにした。

参照文献

Elsness, J. 1997. *The Perfect and the Preterite in Contemporary and Earlier English*. Berlin: Mouton de Gruyter.

樋口真理子. 2005.「英語の時制と現在完了」、『九州工業大学情報工学部紀要 (人間科学篇) 』、第 18 号、17-66.

----. 2006.「英語の現在完了形の時制の意味機能」、『日本認知言語学会第 7 回大会予稿集』、平成 18 年 9 月、251-254.

Klein, W. 1992. "The Present Perfect Puzzle." *Language* 68, 525-552.

Langacker, R. W. 2001. "Discourse in Cognitive Grammar." *Cognitive Linguistics* 12-2, 143-188.

Michaelis, L. A. 1994. "The Ambiguity of the English Present Perfect." *Journal of Linguistics* 30, 111-157.

---- 1998. *Aspectual Grammar and Past-Time Reference*. London: Routledge.

Reichenbach, H. 1947. *Elements of Symbolic Logic*. New York: The Macmillan Company.

Swan, M. 2005. *Practical English Usage*, third edition. Oxford: Oxford University Press.

東郷雄二. 1999.「談話モデルと指示 — 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」、『京都大学総合人間学部紀要』、第 6 巻、35-46.

コーパス

The Internet Movie Script Database (IMSDb). http://www.imsdb.com/

エコー標識としての「やはり・やっぱり」

千田　愛
大阪樟蔭女子大学非常勤講師
aisakaki@hcn.zaq.ne.jp

＜要旨＞
本稿では、「やはり・やっぱり」は、聞き手に発話全体のエコー解釈を促す「エコー標識」である、と考える。それは、「やはり・やっぱり」が、①語用論的に復元可能な対象をエコーする、②発話内容に対する話し手の心的態度を付加する、というエコー発話としての性質を示す事に拠る。「エコー標識」として捉える事で、実際の談話では頻繁に使われているにも関わらず、これまであまり具体的な考察がなされていなかった、間投詞のような「やはり・やっぱり」についても適切な説明が与えられる。
【キーワード】：１、エコー標識　２、エコー発話　３、心的態度

１．はじめに

広辞苑（第五版）によると、日本語副詞の「やはり・やっぱり」は、「①もとのまま。前と、または他と同様に。(動かさないで) そのまま。②思ったとおりに。案の定。いろいろ。考えてみても結局は。」と定義されている。しかし、話し言葉で使われる「やっぱり」に関しては、上記の辞書的定義は当てはまらない。

(1)　(震災が話題になっている)

新潟（中越地震を指している）もそうですけど、他人事とはほんと思えないんですよね。やっぱり実際体験してますけど。でも、 まあ、私はほんとにその、なんでしょう、 その、 おうちとかそんなに被害はなかったんですけど、やっぱり全壊されたおうちとか、 やはり、 お亡くなりになった方とか、やっぱりそういう方にとって、 やはりこの震災ということって忘れてはやっぱりいけないなっていう思いと、やはりその時に感じたのが、やっぱりこう普段お水とか平気で使ってたんですけど、 いざ出なくなってしまうと、 なんかその水の大切さとか、 そういう事もすごく感じましたね。　(『徹子の部屋』)

(1) で見られる「やはり・やっぱり」は、辞書的定義に基いた観点からの「やはり・やっぱり」[i] についての先行研究の指摘が当てはまらない。本稿では、「やっぱり」が「発話をエコー発話として解釈するように聞き手を導く」エコー標識である事を示し、(1) のような「やっぱり」についても適切な説明を与える[ii]。

２．先行研究

これまでの研究では、「「やはり」の辞書的定義に基いて、「やはり」は多義的、多機能的に用いられるが、その基本機能は前提命題と当該命題の適合の再認識、確認という働きによって捉えられる」と指摘されてきた(板坂(1971), 西原(1988), 森本(1994), 蓮沼(1998))。蓮沼(1998) は「やはり」の働きを (2) のように図式化する。

(2)　$p \rightarrow (p_1\ p_2\ \cdot\cdot\cdot\ p_n) \rightarrow$　やはり p

(蓮沼(1998 :135))

(2)の図で、左端の p は前提命題を、右端の p は「やはり」が用いられる当該の命題を表す。→は時間の推

移、あるいは知識の検索や推論の過程を表す。「前提命題」とは、言語的文脈に明示されている情報ばかりでなく、話者の既有知識や予想、常識・社会通念のような、必ずしも文脈に明示されていない暗黙の前提を含む。蓮沼（1998）は、「前提とする知識や情報には様々なものがあるが、こうした前提と当該命題（話者の結論）の適合の検証・確認という操作は、どのような意味や機能においても一貫して認められる。」と指摘する。しかし、先ほどの（1）のように、現実の談話において使用される「やはり」は、文脈や前提知識の検証を実際には話し手は行っておらず、先行研究による指摘は、この間投詞のように使われる「やはり」について、当てはまらない。

3．発話のエコー使用

ここで、「発話のエコー使用」について、Blakemore(1994)、Noh(2000) に従って、その特徴を挙げる。まず、「発話でエコーされる対象」としての第一条件は「語用論的に復元可能なものすべて」である。従って、直前の発話、などといった実際の発話は勿論、言語的にコード化されていない思考、推意、文脈なども、語用論的に適切に復元されればエコーの対象となる。さらに、発話をエコー使用することによって、話し手自身のエコーしている対象（特に、誰かに帰属させる事が出来る発話や情報）への態度を付加する事が出来る。「エコーする対象は語用論的に復元可能なものすべて」、そして「発話内容に対して話し手の心的態度を付加する」という二つの「エコー発話」が持つ性質が、（1）の話し言葉で見られたような「やっぱり」の使用にも見られる。その事を、具体的な例文を見ながら、次節で示していきたい。

4．話し言葉で見られる「やっぱり」

本節では、実際のインタビュー番組での発話で使われた「やはり」を基に、具体的な分析を進める。

（3）（話し手は、オリンピックの金メダル選手であり、その事は、多くの視聴者も知っている）
今回やっぱり、でもやっぱり、まあその年齢も重ねてやっぱり体力とかも落ちてきてるから・・・。（『徹子の部屋』）

（3）の発話から受ける印象として、「話し手は言葉を選んで慎重に発話している」「発話内容は話し手にとって言いにくい事である」等が挙げられる。それは、何故か？「やっぱり」にその原因があるように思われる。その事は、（3）から「やっぱり」を取り去った（3）’と比較すると、より明らかである。

（3）’今回、でも、まあその年齢も重ねて体力とかも落ちてきてるから・・・。

この発話では、オリンピックが話題となっており、話し手は、オリンピックの時の事を重ね合わせながら現在の自分の心境も述べている。そうしたコンテクストの下で、言葉には出されていないオリンピックの時の状況、話し手自身の気持ちや考え、現在の自分が持っている気持ちや考えが、「やっぱり」によってエコーされる。その結果、聞き手は発話をエコー発話として解釈するように促される。また、エコー発話が持つ性質から、発話内容に対する話し手自身の心的態度も伝えられるので、当該発話のコンテクストでは、発話内容に対する「ためらい・言いよどみ」といった心的態度も同時に伝達される。こうした特徴から、「やっぱり」は、語用論的に復元可能な対象をエコーし、発話がエコー発話として解釈されるように導く「エコー標識」である、と分かる。次の例も同じ話者の発話である。

（4）やっぱりそれまでっていうのは、やっぱりオリンピックの二連覇した男っていうやっぱり変なプライドとか一杯あったけど、やっぱりその時に負けて、やっぱりその、皆のその世間の評価とかも落としたし。（『徹子の部屋』）

五つの「やっぱり」を取り去った(4)' でも「オリンピックの二連覇した男、というプライドが一杯あったけれど、その時に負けて、世間の評価を落とした」という命題内容自体には変わりはないが、(4)で表現されていた微妙なニュアンスが伝わってこず、非常にぞんざいな感じがする。

(4)' それまでっていうのは、オリンピックの二連覇した男っていう変なプライドとか一杯あったけど、その時に負けて、その、皆のその世間の評価とかも落としたし。

このように、「やっぱり」が話者の心の葛藤、悔しさ、など複雑に込み入った心情を表す役割をしている事から、「やっぱり」が、発話をエコー発話にしている事が分かる。それは、当該コンテクストにおいて語用論的に復元可能な、「話し手自身の過去から現在に至る気持ちや考えの変化」が「やっぱり」によってエコーされているからである。その結果、聞き手は、エコー標識である「やっぱり」によって発話全体をエコー発話として解釈するように促され、同時にエコー発話の特徴として、話し手の発話内容に対する心的態度が、発話内容に付加される。もう一つ例を考えてみたい。

(5) (話し手は、ある五十代の脚本家で、休業して大学院に三年間在籍していた。)
例えば、若い女の子だとブランド品を一杯着てチャラチャラしながら殆ど勉強しないっていうようなイメージを**やっぱり**ありましたし、持ってましたね。で、男の子も頼りなくっていうようなイメージを持ってたんですけど（院に）入ってみたら、**やっぱり**全然違いましたね。
(『徹子の部屋』)

一つ目の「やっぱり」は、辞書的な意味に近い「やっぱり」の使い方である。つまり、「自分が女子大生に持っていたイメージは世間一般と一致するものだった」という事が、「やっぱり」によって意味される。この辞書的な意味で使われる「やっぱり」もエコー標識である。大学院に入学した事の回想、という当該のコンテクストにおいて、話し手が、大学院入学前に、自分が持っていた女子大生のイメージと、世間一般の女子大生へのイメージを語用論的に復元可能な範囲で「やっぱり」によってエコーし、自分の考えと世間一般の常識が一致していた事を再確認している。エコー標識である「やっぱり」により、聞き手は発話をエコー発話として解釈する事を促され、その結果、発話命題に対する「強調」という心的態度も付加される。次に、二つ目の「やっぱり」は、「持っていたイメージ」と正反対の事が起きた、という発話内容に対して使われており、最初の「やっぱり」とは異なって、「前提」との矛盾関係を表す為に使われている。このような「やっぱり」は、辞書的な定義とはまったく逆の使用例であり、極めて話し言葉に特有の用法である。先行研究の指摘では、こうした使用については説明が出来ないが、本稿では「エコー標識」という観点から説明を試みる。当該コンテクストの下では、話し手が過去に持っていた大学生に対するイメージや考えばかりでなく、そういうイメージや考えとはかけ離れた、自分が大学院で出会った学生達の現実の姿、の両方が、語用論的に復元され、エコーされうる対象となる。エコー標識である「やっぱり」によって、聞き手は、エコー発話として解釈する事を促される。その結果、「イメージを持っていたんだけれど、全然違った」という対比を持つ発話内容に対する話し手自身の驚きの強調、関心の気持ちも付加される。このように、「やっぱり」が「エコー標識」である事によって発話がエコー発話として解釈され、発話内容に対する話し手の心情も付加される、と考えれば、(5) の例での二つの「やっぱり」が話し手の発話命題に対する複雑な心的態度を伝達する事実を適切に説明出来る。

これまで、発話で使われる「やっぱり」の例を挙げてきたが、広告キャッチコピーでも「やっぱり」が多用されている。

(6) 「やっぱり DHC だね。」　(化粧品会社の宣伝)
(7) 「やっぱりガスはお得。」　(ガス会社の宣伝)

これらも、明らかに消費者にとっては「前提」なしで「やっぱり」が使われる例である。森本 (1994) は「聞き手が実際には前提を受け入れていないと「やはり」をつけた文は、聞き手に押し付けるような印象を与えたり、快く響かなかったりする」と述べる。しかし、「物を売る」ことを第一に大切にする広告が、消費者に不快感を与えたり、購買意欲を落としたりしかねない危険を敢えて冒すはずはない。とすれば「やっぱり」広告には何か特有の大きな効果があるのだと考える事は妥当であろう。この問題に対しても、「やっぱり」はエコー標識である、とする事で適切に説明出来る。不特定多数の消費者に向けられた宣伝効果を狙う広告、というコンテクストにおいて、「やっぱり」によって語用論的に復元されるエコー対象は、消費者自身の商品に対する知識や経験や感情、希望・・・といった、不特定多数のものなのである。売り手は、エコー標識の「やっぱり」によってキャッチコピーをエコー発話として解釈する事を読み手(聞き手)である消費者に促すだけで、エコー対象の語用論的復元は消費者に完全に委ねている。消費者自身が「やっぱり」に誘導され、キャッチコピーの解釈に、より自発的に関わることにより、商品に対して親近感を感じさせ、より注目や関心を惹きつけさせたり、記憶に残りやすくさせたり出来る、といった効果がもくろまれている。そのように考えれば、広告キャッチコピーで敢えて「やっぱり」を使う意義も説明出来る。つまり、前述した、前提が無い事による危険性もあるが、それよりもエコー発話として解釈を誘導される効果の方がずっと大きく、冒される危険性を充分に相殺する、と考えれば「やっぱり」広告の氾濫も納得がいく。

5．結論

本稿での「やっぱりはエコー標識である」という結論は、これまでの先行研究では解決出来なかった様々な問題、例えば間投詞のように使われる (3) から (5) に見られた前提のない「やっぱり」の、そして「やっぱり」広告の効果、についても適切に説明出来る。また、それらの「やっぱり」が話し手の心的態度を伝達できるのは、エコー標識の「やっぱり」によって発話がエコー発話として解釈され、「エコーしている対象への態度を表す」というエコー発話の特徴が見られるからだと考えられる。実際の発話例を基に考察を行った、本稿の「「やっぱり」はエコー標識である」、という結論は、辞書的定義から間投詞用法に至るまで、多機能、多義的な「やっぱり」について適切な説明を与えられる。

---

i 以下、「やっぱり」と表記するが、「やはり」もこの中に含むとする。理由は注２も参照。

ii「やっぱり」は「やはり」の話し言葉であり、両者の間に意味的な区別はないとする見解が多いので、本稿でもこの見解に従い、「やはり・やっぱり」のどちらにも考察の結果は当てはまる、と考える。

参照文献

Blakemore, D. 1994. "Echo Questions: A Pragmatic Account." *Lingua* 94, 197-211. Amsterdam: Elsevier.

蓮沼　昭子. 1998.「副詞「やはり・やっぱり」をめぐって」、吉田　金彦 (編)『ことばから人間を』、133-148.　京都：昭和堂.

板坂　元. 1971.「やはり・さすが」『国文学　解釈と鑑賞』、36:1、 216-221.

森本　順子. 1994.『話し手の主観を表す副詞について』、東京：くろしお出版.

西原　鈴子. 1988.『話者の前提：やはり(やっぱり)の場合』『日本語学』(3 月号)、 89-99.

新村　出 (編). 1998.『広辞苑 (第五版)』、 東京：岩波書店.

Noh, E. J. 2000. *Metarepresentation: a Relevance-Theory Approach*. Amsterdam: John Benjamins.

・　例文は朝日放送『徹子の部屋』(2004 年, 2005 年, 2006 年放送)より抜粋した。

力関係(power)の均衡を維持する言語的ストラテジー

町田佳世子
北海道東海大学

＜要旨＞
本研究では、コミュニケーションの参加者がどのような場合に力関係の次元での自分の相対的位置が脅かされたと解釈するか、また脅かされた均衡を取り戻すためにどのような言語的ストラテジーを用いるかを、アンケートと録音された会話データを基に分析、考察した。アンケートからは聞き手を否定したり行為を押し付けるなどフェイスの侵害となる発話だけでなく、経験を語るような何気ない発話も力関係の次元における聞き手の位置を低めることがあること、また会話データからは、経験を語る発話が相対的位置の維持や低められた場合の回復のために用いられることが明らかになった。また聞き手の位置が低くなりすぎた場合は、聞き手だけでなく、話し手も聞き手の経験の優位性を認める発話をすることにより均衡を回復しようとすることもわかった。
【キーワード】力関係の均衡、相対的位置、言語的ストラテジー

1. はじめに

コミュニケーションの参加者は、その時のコミュニケーションの状況の中でどちらが力関係の次元で上か、または対等かを計り、その相対的な位置に応じて何をどう言うかを決めている。力関係は、話し手と聞き手の地位や年齢、役割だけでなく、恩恵や利害の有無(Spencer-Oatey 2000, 佐々木 1998)、そして知識、経験、能力の程度によっても決められる（町田 2006)。ひとたび想定された力関係も、会話が展開する中で、敬語の使い方や呼びかけ方を変えたり、ある発話行為を行ったり(Spencer-Oatey and Xing 1998, Tannen 1986,1990)、発話順番の操作や割り込みを行うことにより(山田 1999, 好井 1991)、意識的、無意識的に変えていくこともできる。

しかし話し手と聞き手の良好な関係の維持というコミュニケーションの主要な目的に鑑みれば、力関係の不当な強調や変化は無制限に許されるものではない。そのためコミュニケーションの参加者達は、力関係の次元での自分の位置に注意を払いながら、自分が上に立ちすぎた場合は自ら調整し、相手が上に出すぎた場合は牽制しながら、会話の展開の中で互いの力関係の均衡を保とうとしているはずである(Watts 2003) 。

本研究ではこのような前提に立ち、 (1)どのような場合にコミュニケーションの参加者が力関係の次元での自分の相対的位置が脅かされたと解釈するか、(2) 均衡を取り戻すためにどのような言語的ストラテジーを用いるかを研究課題とした。(1)については、自由記述でのアンケートで得られた約57事例の分析を基に、また(2)については録音した実際の会話を用いて考察した。

2. 力関係における相対的位置の脅かし

会話の進行の中でコミュニケーションの参加者がどのようなときに相手に対する自分の位置が

脅かされたと感じるかを調べるために「相手の言葉を聞いて、自分を下に見ている、上からものを言っていると思った経験を書き、なぜそう思ったのかを書いてください」という問でアンケートを実施し57名から回答を得た。聞き手としての自分の位置が低められたと思う場合として、「そんなこともできないんだ」「そんなのは私のに比べたらたいした悩みではない」のように聞き手の能力を否定されたり、問題の大きさを過小評価された時、及びアドバイス等により行為や考えを押しつけられた時が挙げられた。これらは聞き手のフェイス（Brown and Levinson 1987）を侵害する発話であり、侵害により結果的に話し手と聞き手の力関係をも変化させることが示された。

しかしそれ以外にも、一見何気ない発話である「私がフランスにいたときには～」や有名人との交友の話をすることにより話し手自身を偉く見せているという回答や、「私はみんなと違うから」という発話を自らの独自性を強調することにより聞き手を見下しているとした回答があり、経験の差や独自性の度合いも場合によっては話し手、聞き手の力関係を決定する要因の1つになりうることがわかった。これらの発話が力関係を変える機能を持つとすれば、力関係の維持や崩された均衡の回復のためにもそのような発話が用いられているのではないだろうか。

3. 力関係の均衡の維持

そこで、良好な関係の維持を目指すコミュニケーションにおいては、力関係の均衡の維持や回復のために用いられるのは、聞き手の能力の否定や行為の押し付けのようにフェイスを侵害する手段ではなく、むしろ自らの経験を述べるなどの何気ない手段ではないかとの仮説のもと、複数の録音された会話を分析した。本研究で特に取り上げるのは、通訳、日本文化の講師などのボランティアをする70代の男性A（ボランティア暦10年）と60代の男性B（同5年）に対して行ったボランティア活動に関するインタビューの録音である。

年齢とボランティア暦の点で、力関係の最初の位置はAが上でBが下である。両者の言葉遣いからAもBもそう認識していることがわかる。その均衡が崩れたのは「ボランティアを始めた動機」という質問に対する答えの発話順番をインタビュアがBに先に与えたときである。指名されたBは3秒の間を置いた後、「じゃ、ま、Aさんよろしいでしょうかね」とAの許可を得て答える。この発話から、発話順番の優先権は力関係の上にいるAが持っていることがわかる。その優先権を奪われることはAのBに対する位置が相対的に低められることにつながる。このようにして崩れた力関係の均衡をAそしてBはどのように回復するだろうか。

発話順番が廻ってきたAは、動機となった過去における開発途上国での仕事や過酷な経験を7分55秒にわたって語り続ける。Aは発話順番の独占という手段とともに、Bが持ち得ないような経験を強調することによってAのBに対する優位性を回復しようとするのである。一方でBもAの約8分に及ぶ発話順番の後に、「特にAさんのケースはかなりこうシビアな状況だから」とAの経験の厳しさを認めたり、「Aさんみたいに専門のあれ持ってる人、私は全く知らんでそこ入っちゃったもんで、そういうのは先輩に、あるいは講師に聞いて答えなきゃならんことあるんでね」と述べ、講師で先輩であるAと自分を比べることにより、Aの位置を回復することに協力している。発話順番の独占、経験の優位性を強調する発話内容、その経験を評価する発話、比較等の一連の手段を用いて、崩された力関係の均衡を徐々に取り戻していくのである。

その後も、名前ではなく「こちら」という呼び方をしたり、同意をしない、割り込みで奪われそうになった発話順番を譲らないなどの方法で不均衡が作られたり回復されたりしながら会話は進んでいくが、特に両者の経験の質や量の違いが力関係の位置の維持や回復に利用されている様子が次の複数の抜粋から読み取ることができる。

A1：うん　ぼくは市内のツアーはやっていないから　まあ　ツアーやっていたら｜そちら｜聞いて
B2：　　ええ
A3：みてください
B4：　　そう
A5：　　イン｜フォメーションデスクと書道を通じて(.)インフォメーションデスクもおもしろかったですよねえ

インタビュアが市内ツアーの経験を話題にした場面であり、市内ツアーを担当したBが答えるはずのところだが、Aが発話順番をとり、Bだけが持つ市内ツアーという経験が話題になることによって、本来上に位置するAの位置が下がることのないよう自分の経験であるインフォメーションデスクと書道教室のことに話題を移していく。一方でAに発話順番を奪われ、話題をコントロールされたBは、

A6: さっきも冗談言ってましたけれど　だんだん
B7:　　ははは私の場合はイベントいろいろありますけれど参加した中では市街ツアーっていうんですかね
A8：　　うん
B9：ほぼ一日接触するんですが　やっぱり接触時間が長いと他のイベントと違ってもうラポールの段階終わって個人的にいろんな話題で　もう深くはいっていくことになるんですね
他のインフォメーションデスクとか教室っていうのは時間が限られていますからね、それに主題が限られていてそれにフォーカスしてやってますからね　ま　あんまり個人的にはこう(0.2)うち解けていけないというか（17語省略）だから市内、市街ツアーなんかでいくと、まあ接触時間に長さに比例して　相互にインタラクションすることがあるような気がします

とAの発話に割り込んで発話順番を獲得し、インフォメーションデスクや（書道）教室に対する市内ツアーの優位性をはっきりと述べ、B自身の経験の質と深さを示すことにより、低められたBの位置を回復しようとするのである。これに対して、AはBの体験が1–2名の限定されたものであるのに対し、「ぼくはあちこち歩いて感じたんだけど」と、自分の過去の経験の豊かさを主張したり、Bの市内ツアーの経験は、市内ツアー独特の体験ではないことを強調する場面もある。

A12：　　そ　りゃわかりますでしょ　あのインフォメーションデスクでも
B13：　　ええ

A14：ぼくはわかるよ　サウジの人間とインドネシアの人間は全然違うし それはもうすぐわかる

4. おわりに

コミュニケーションの参加者は、どのようなとき力関係の次元での相手に対する自分の位置が脅かされたのかと感じるか、また会話が進む中でその位置を維持したり、なんらかの方法で変化させられたときには元の均衡を取り戻すためにどのような手段を用いるのかを見てきた。データの中で最も多く使われたのは、自分が下に置かれたと解釈した場合は、自分の経験や知識、能力を強調する発話をする、発話順番を独占し割り込みを許さない、同じ話題を相手より長く話すなどの手段であった。自分が想定する相手との位置関係より、自分が必要以上に上に立ちすぎたと思う場合、または上に立たないようにする場合は、相手の経験や知識の豊かさを話題にして相手を高めたり、相槌を利用して話を聞いているという姿勢を見せるという積極的な手段と同時に、紙面の都合で抜粋を掲載することはできなかったが、相手が話しているときに割り込みをしないでおく、意見を言わないでおくといった消極的な手段の二種類があることもわかった。今回の会話データであるインタビューは終始なごやかな雰囲気の中で進められ、A、B どちらもが相手より上に立とうとか相手を下に見ようという意図はなかったと思われる。それにも拘わらず何気ない話題の中で意識的、無意識的に様々なストラテジーを用いて互いの位置の均衡を維持しようとしていたことから、力関係の次元での位置が話し手・聞き手双方にとって満足のいくものであることは、良好なコミュニケーションの重要な要素であることを示唆していると考える。

参考文献

Brown, P. and S. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

町田佳世子. 2006.「対人コミュニケーションにおける社会的関係の尊重という欲求―アドバイスという発話行為の分析をもとに―」『北海道東海大学紀要・人文社会科学系』19, 1-14.

佐々木瑞枝. 1998.「日本社会における『権威』と『仲間意識』」濱口恵俊（編著）『日本社会とは何か　＜複雑系＞の視点から』189-205. NHK ブックス.

Spencer-Oatey, H. 2000. "Rapport Management: A Framework for Analysis" In Spencer-Oatey, H. ed. *Culturally Speaking*, 11-46. New York: The Continuum Publishing Company.

Spencer-Oatey, H. and J. Xing. 1998. "Relational Management in Chinese-British Business Meetings." *British Studies in Applied Linguistics*. 13, 31-46.

Tannen, D. 1986. *That's not What I Meant!* New York: Ballantine Publishing Group.

Tannen, D. 1990. *You just don't understand*. London: Virago.

山田富秋. 1999.「会話分析を始めよう」好井裕明、山田富秋、西阪仰（編）『会話分析への招待』1-35. 世界思想社.

好井裕明. 1991.「男が女を遮るとき－日常会話の権力装置」山田富秋、好井裕明（著）『排除と差別のエスノメソドロジー』213-249. 新曜社.

Watts. R. J. 2003. *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.

否定の認知構造における沈黙の解釈

ダフィー美佐
奈良女子大学大学院

[要旨]返答の期待のもとにみられる無発話状態は解釈者にとっては必ずしも無意味といえない。返答の期待がある限り、無発話状態は解釈者に否定の認知構造をもたらすからである。否定の認知構造は発話解釈におけるコードのような役割を果たし、解釈者に推意、含意をもたらす。本稿では関連性理論の視点より、否定の認知構造発話解釈における無発話状態の解釈について考察を試み、無発話状態に意味が付される要因とメカニズムについて論じる。
[キーワード]関連性理論、沈黙、否定の認知構造、心的状況のメタ表示

1. はじめに

一般的にある問いかけに対する無発話の反応は否定的解釈をされがちである。

(1)　A: Does this hair cut suit me?
　　B: No, it doesn't.

(2)　C: Does this hair cut suit me?
　　D: …….

(1)でBはAの問いかけに対し、髪型が似合わない、と明示的に否定している。一方(2)のDの無発話状態は明示的な否定も肯定も行っていないが、Bに似た解釈を与えることがある。"not"などの明示的な否定辞を持たない、無の状態がどのようにこのような否定的解釈を与えるに至るのか、本稿では主に関連性理論[1]の枠組みにおいて、①無発話状態と否定の認知構造の関係、②無発話状態の解釈を中心に考察する。

2. 先行研究

Sacks & Shegloff(1974)はTurn-taking ruleに基づき、無発話状態を会話の構造からlapse、gap、pauseの3種類に分類し、会話の参与者に帰属可能な pause のみを意味ある無発話状態とし、Levinson(1983)は、沈黙は解釈者にとってdispreferredな結果を代弁するものであるとする。

(3)　C: So I was wondering would you be in your office on Monday (.) by any chance?
　　(2.0)
　　C: Probably not.
　　R: Hmm yes=
　　C: = You would?
　　R: Ya
　　C: So if we came by could you give us ten minutes of your time?　(Levinson, 1983:320)

Levinsonによると(3)において、Rがオフィスに来てくれるかどうかを尋ねるCにとって好ましい返答は、Rが「オフィスに来る」であるが、そのかわりに呈された無発話状態は C に強い否定的推論を促すことになる、としている。これら2つの先行研究の問題点として、無発話状態のある個人への帰属の基準、また帰属されたことで生まれる否定的解釈との関係が明らかでないことが挙げられる。

3. 明示的な否定の返答と無発話状態が喚起する否定の認知構造

本節では、否定的返答と無発話状態がそれぞれ何を否定するのかについて考察する。

(1)　A: Does this hair cut suit me?　　B: No, it doesn't.

(1)においてAは、This hair cut suits A という命題が真か偽かを問うており、Bは真であることを否定する。即ち明示的な否定の返答は、真か偽かを問われる命題に対し、真である方の可能性を削除することで関連性を達成するといえるだろう。

(2)　C: Does this hair cut suit me?　　D: …….

一方(2)のDは、無発話状態であり、直接的には何も否定しない。しかし(3)においてCの発話の高次表意[2]C'に対し、Dの無発話状態をD'のように捉えることが可能である。

(3) C': C asks D whether C's hair cut suits C
D': D does not answer

(2)のDの無発話状態が、(3)のD'のように捉えられるとき、Cの認知環境に否定の認知構造をもたらす。否定の認知構造とは「図と地の心的構造が、文脈に既に存在する想定を取り消すことになる矛盾によって関連性を達成するもの、として特徴づけられる心的構造 $(\phi, \{\cdots \phi \cdots\}) \rangle$ ただし $(\neg(\phi \cap \phi))$」(吉村, 1999: 182)である。

吉村(1999)の分析によると、but は否定の認知構造のマーカーとして解釈することが可能であり、ある2つの命題がbut で違和感なく連結できれば、それらは互いにある矛盾を生じているといえる[3]。また先行節から引き出される命題のうち、but の後続節と矛盾するものは削除される。(東森 & 吉村, 2002)つまり、(4)に示すようにC' but D' が成立すれば、Cが、自らが伝達する高次表意に基づいてDの無発話状態を処理するとき、Cの中央系に否定の認知構造を生じ、C asks… が前提とする返答の期待が削除されるといえる。

(4) C' but D': C asks D whether C's hair cut suits her but D does not answer.

この際、C' but D'の「but」は、発話中にあらわれるのではなく、明文化されていないので、Cが質問をする、という行為とDが答えない、という状態はbut で連結できる、というより、but という概念で連結することができると考えたほうがよいかもしれない。つまり2つの矛盾する状態を連結させる概念といえよう。そして筆者は依然これを否定の認知構造であると考える。

(5) Y社長: XX以外の株価が今日一日でどうなったのかご存知の方いらっしゃいますか?
レポーター: ……
*Y社長: いらっしゃいますか?①
レポーター: ……
*Y社長: ほら、いないじゃないですか。② (フジテレビ, 2005)

(6) Johnny: Do you wanna be me?
Mateo: ….
*Johnny: Do you wanna be in my place?
Mateo: I wish. (Sheridan, 2003)

(7) B: ..an that's not an awful lotta fruitcake
A: ….
*B: Course it is. A little piece goes a long way.
A: Well that's right. (Nofsinger, 1991)

(5)〜(7)はインタビューや映画から抜粋した無発話状態の例である。それぞれの無発話状態に続く*印の発話には上の否定の認知構造が生じた為、(5)①、(6)においては返答の催促、(5)②、(7)においては無発話状態が否定的返答の代弁であると解釈していることがみてとれる。これらの含意は自分の発話に対する反応の期待を削除されたことに基づき、解釈者が派生させているものである。

2節の先行研究では、無発話状態が有意かどうかの基準は、現話者の次の話者の選択の有無に委ねられていたが、本稿ではこれを一歩進め、現話者の認知環境においての否定の認知構造の在/不在を基準としたい。また本稿において以降、沈黙とは解釈者に否定の認知構造を生じさせる無発話状態を指すこととする。

4. 沈黙の関連性

沈黙の分析に当たり、その意図の有無の確定が困難であるという問題がある。Wilson & Sperber (2003, 以下W&Sとする)は意図的に伝達される無発話状態は推意を伝達し、非意図的なものは関連性理論の分析対象外であるとする。しかし情報要請文について「通常の情報要請文は、話し手がその答えを自分にとって関連性があるとみなし、さらに、聞き手はそれを提供する立場にあると信じている疑問文として分析可能」(Sperber & Wilson, 1995[2]253, 以下S&Wとす

る)であるとすることから情報要請文 Q は以下の高次表意を伝達していると考えられる。

(8) 情報要請文 Q＝情報 X を求めるという高次表意の伝達　(X は話者が関連性があるとみなす情報)
聞き手が X を持つと信じるという高次表意の伝達

これに相対する無発話状態は返答の期待を削除する。即ち以下のような解釈を先行発話の話者に与える。

(9) Q に対する沈黙 S＝聞き手(沈黙者)に X を与えないという意図がある
聞き手(沈黙者)は X を持たない

つまりSは、Xが得られない理由として先行話者に対し関連性を持つのである。また(9)のような解釈が起こるとき、Sを解釈する先行話者の認知環境において否定の認知構造が生じているといえる。

5. 沈黙の含意、推意

沈黙として認識された無発話状態が、推意、含意などを更に派生させることは(9)が解釈者に与える関連性に起因する。即ち(9)のような解釈が起こるとき、沈黙の解釈者はその目的の理由としてどのような想定を選択すれば解釈者にとって最も関連性が高いかを判断するのである。例えば(9)の一つ目の解釈、Xを与えないという意図があるのはなぜかと考える場合、その直接的理由としては a,b が妥当であろう。

(10)　Q に対する沈黙 S＝聞き手〔沈黙者〕に X を与えないという意図がある。
→a. X が存在するが、与えたくない。
b. X が存在するが、与えられない。

例えば(5)において、Z 社長の発話、X,を以下のように定め、また沈黙の理由としてメタ表示されるレポーターの心的状況を Y とするとき、それらの関係は(11)のように表される。

(5)　Z 社長:　XX 以外の株価が今日一日でどうなったのかご存知の方いらっしゃいますか？
レポーター: ……　ⓐ
*Z 社長:　いらっしゃいますか？ ①
レポーター: ……　ⓑ
*Z 社長:　ほら、いないじゃないですか。 ②　(フジテレビ, 2005)

Q=Z 社長の発話:情報要請文
S=沈黙ⓐ
X=Z 社長が求める情報:今日一日で株価の様子を知るレポーターはいるかどうか
Y=沈黙ⓐの理由:レポーターの心的状況

(11) Q but S because Y.　Q requires X.　S does not give X.　　QとSは高次表意レベルで矛盾

(5)において X は当然レポーターたちが持つものであり、ⓐの沈黙の解釈として、「沈黙者は X を持たない」ことは選択されない。残る(10)a,bの「X を持つが与えたくないか与えられない」という解釈が得られ、その理由 Y として、レポーターの心的状況がメタ表示されるのである。

メタ表示能力とは信念、欲求、意図などを含む心的状況を他者に、また自己の表示を自己に帰属させることを可能にする能力であり、他者の意図の予測を可能にするのはこの能力であるといわれている(Soerber,2000)。(5)の場合、Z 社長が無発話という状態をレポーターに帰属させることにより、その心的状況の表示が可能になっていると考えられる。例えばレポーターたちは「詳しい値の動きは知らないので答えられない」または、「その日の株の動きは全く知らないので黙っているほうが得策だ」などである。この Y が沈黙の含意と呼ぶべきものである。また含意を得るまでの解釈は上の説明のように順を追うのではなく、Z 社長にとって最も認知効果が大きく、小さい処理労力で得られる含意をもたらすものが瞬時に行われるであろう。

このように沈黙の理由である Y が否定の認知構造を生む Q but S によって導入されることが、沈黙に否定的解釈が与えられやすいことの一因といえるかもしれない。[4] また得られた含意に沈黙者の意図が裏付けられればそれらは推意と呼んでよいが、沈黙に関し、含意と推意を決定的に区別する要素があるのかどうかは確定的ではない。

(6)や(7)においてはbecause Y が(6)では「(あなたになりかわりたいので、そしてそれを明示するのは失礼なことなので)言えない」と先行話者に解釈され、(7)においては「(ケーキの量が多いと思っているので)同意できないので黙っている」と解釈されていると推測できる。いずれもQ but S によって導入される。

6. おわりに

ある命題が真か偽を問う疑問文に対し、明示的な否定の返答は、否定を表すコードに基づき、真である可能性を削除する。無発話状態が、先行話者の返答の期待のもとにおいて処理されるときには、先行話者の認知環境に否定の認知構造が現れる。この否定の認知構造がもたらす沈黙の理由が沈黙者の心的状況として解釈者にメタ表示される。また沈黙が往々にして否定的に解釈されるのは、このように、沈黙の意味として捉えられる心的状況が否定の認知構造に根ざすものであるからであると考えられる。しかしその心的状態から得られる含意が解釈者にとって最も関連性の大きいものであれば、沈黙者、解釈者にとって否定的でも肯定的でもあり得るのである。

Levinson(1983)を含め、沈黙についての先行研究は全て「黙ること」即ち「不都合」とし、その間の認知的メカニズムを明らかにしていない。本稿では「黙ること」が不都合なのではなく、「黙ること」がもたらす認知構造について明らかにし、その認知構造が否定的解釈の引き金となる可能性について論じた。

*本稿は、日本語用論学会第9回大会(2006年12月8日、於:桃山学院大学)の口頭発表に加筆、修正を加えたものである。発表の際貴重なご意見を下さった諸先生方には感謝します。また準備段階から有益なコメントを頂いた内田聖二先生、吉村あき子先生、須賀あゆみ先生、そして本稿執筆時にアドバイスを下さった黒川尚彦さん(大阪大学大学院)に心よりお礼申しあげます。

---

[1] 関連性理論については Sperber and Wilson (1986, 1995[2])を参照のこと。関連性とは認知効果と処理労力の相関性において決定され、認知効果とはある想定の獲得、既存想定の強化、削除、矛盾などによって決定される。

[2] 高次表意については、Sperber and Wilson(1995[2])を参照のこと。

[3] ΦとΨによって明示的に表現される命題内容が矛盾する場合にはbutが持つ概念的意味と一致しないので、両者をbut を用いて連結することができない。(吉村, 1999: 193)

[4] もちろんYはXを明示するにあたり話者にとって必ずしも都合の悪い理由でなくともよいことがわかる。例えば子供にプレゼントをもらって感極まって話せない母の沈黙は以下のように表すことが可能である。 A boy asks his mother whether she likes his present but she does not respond to him because she is too happy to speak.

参考文献

Carston, R. 2004. "Relevance Theory and the Saying/Implicating Distinction." In G Ward and L. Horn, (eds.) *The Handbook of Pragmatics*, 633-656. Oxford: Blackwell.

Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances - The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.

東森勲・吉村あき子. 2002.『関連性理論の新展開-認知とコミュニケーション』(英語学モノグラフシリーズ21)東京:研究社.

Jaworski, A. 1993. *Power of Silence*, Sage Publications.

子安増生. 2000.『心の理論』東京:岩波書店.

Levinson, S. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

太田朗. 1980.『否定の意味』東京:大修館書店.

Sacks, H., Schegloff, E., and Jefferson, G 1974. "A Simplest Systematics for the organization of turn-taking in conversation" *Language* 50: 696-735.

Sperber, D. and Wilson, D. 1986/1995[2]. *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell. [内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子(訳) 1993/1999[2].『関連性理論ー伝達と認知』東京:研究社.]

Sperber, D. 2000. "Metarepresentations in an evolutionary perspective," In Sperber D. (ed.) *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*, 117-37. Oxford: Oxford University Press.

Sperber, D. and Wilson, D. 2002. "Pragmatics, Modularity and Mind-reading," *Mind and Language* 17: 3-23.

Wilson, D. and Sperber, D. 2003. "Relevance theory" *Handbook of Pragmatics*, Oxford: Blackwell, 607-632.

Wilson, D. 2000. "Metarepresentation in Linguistic Communication," In Sperber D. (ed.) *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*, 411-441. Oxford: Oxford University Press.

吉村あき子. 1999.『否定極性現象』東京:英宝社.

例文出典

フジテレビジョンネットワーク. 2005.『EZ! TV』

Sheridan, J. 2003. *In America*. Newmarket Pr.

Nofsinger, R.E. 1991. *Everyday Conversation*. Waveland Press.

サイコセラピーにおける心理文と不安喚起の連関とその緩和表現

加藤　澄 katoh@aomoricgu.ac.jp
青森中央学院大学

＜要旨＞
不安喚起はサイコセラピーの主要概念の一つで、セラピーを進めていく上で一つの柱となる構成概念である。サイコセラピーにおける語彙-文法資源として、Halliday の選択体系機能理論より、2 人称主語を持つ心理過程、もしくは神尾の心理文は、言語相互作用の次元における不安喚起の要因となるものと考えられる。本研究では面接トランスクリプションから得られた計量データをもとに、不安喚起の語彙-文法資源について論じる。一方で、過ぎた不安はセラピー過程の疎外要因となりうるものである。そこで不安緩和の語彙-文法資源が必要となるが、本研究では、Halliday の選択体系機能理論をもとに、緩和表現として、主観的明示的モダリティー表現について論じる。
【キーワード】SFL　SFT　選択体系機能理論　サイコセラピー、対人相互作用

1. 序

Halliday (1994) は、人間の経験世界を処理、解釈構築するのに物質、心理、関係、発言、存在、行動過程という 6 つの過程型(Process type)を設定した。その中の心理過程を 2，3 人称主語を用いて表現したものが、神尾(1997)のいう心理文にあたる。この心理文はサイコセラピーにおける不安喚起において、語彙-文法的資源として重要な役割を果たすと考えられる。本研究では、Sullivan(註)による統合失調症患者との面接記録 7 セッションをもとに、この不安喚起の役割について論じるとともに、不安を緩和する手段としての語彙-文法的資源として、主観的明示的モダリティー表現について論じる。

2. 資料

Sullivan による統合失調症者の面接記録 7 セッション。これは Sullivan が 1920 年代に速記者にとらせた歴史的資料であり、生前の Sullivan を知る精神科医より加藤(2007)が譲り受けたものである。

患者は 23 歳、高卒、独身男性。重症で、妄想と幻聴を有する。病院収容後、11 ヶ月後には、これらの症状が消え、病院での様々なプログラムにおいて社会生活への適応性を取り戻したと判断され、退院に至る。

3. 方法

2 の面接逐語記録から、Halliday によるモダリティー表現の分類基準に従って各セッションにおけるセラピストのターンの中で使用されるモダリティー表現の累積度数を計量し、合わせて心理文に該当するものの中で、2 人称主語を持ちしかも投射節を有するものを抽出しそれを計量化した。Halliday(1994) はモダリティーを蓋然性、通常性、義務性、志向性の 4 つに分けて捉えているが、心理過程文はそのうちの蓋然性を表す主観的明示的表現に該当する。計量結果として、この 2 人称主語を持つ心理文、または心理過程が、投射節を持つ 1 人称主語心理過程文と並んで高頻度で現れるということがわかった。本研究では、この顕著に現われた語彙-文法資源が、面接の中でどのような働きをするのかを考察する。

図 1 はモダリティー表現を計量化した結果を表すグラフであるが、この中で色づけされていない棒グラフが 2 人称主語心理文にあたる。2 人称主語心理文はモダリティー表現ではないが、視覚的比較の必

要上、モダリティー表現のグラフに含めた。

4. 分析

4.1 不安喚起としての2人称主語を持つ心理文

神尾(1997)は、英語では話し手はその情報が聞き手の縄張りに属するか否かを考慮することなく、与えられた情報が自己の縄張りに属するか否かだけによって文型を決定することが出来るが、2、3 人称主語を持つ心理文の許容度に関しては条件がいるとする。英語の2、3 人称主語の心理文の許容可能性を決定するのは、その文の表している情報が話し手の縄張りに属する場合に限られ、そのために必要な条件は、心理文全体の表す情報が話し手にとって近情報であること、あるいは心理文の主語の指す人物が話し手にとって近い人間関係にあること、また職業的専門領域に属する場合は、情報が話し手の縄張りに属しているとされ許容される。それ以外については、2、3 人称主語の心理文は聞き手に侵入感を与える非礼な文となってしまうとしている。図1より、Sullivan は2人称主語を持つ心理文を多用していることがわかる。以下のような例である。

[349.2] you are very afraid of me
[349.3] and you really rather like me.
[349.4] I hope you get to like me more.
[349.5] And you are thoroughly afraid of me, ...

この2人称主語を持つ心理文は、セラピーにおいてどのような働きをすると考えられるのだろうか。

精神療法における主要概念の一つに不安喚起がある。この概念は Sullivan が提唱したものではないが、理論的に発展させ、精神療法の支柱としたのは Sullivan である。つまり Sullivan は精神療法とは不安喚起を実現する過程であるとしたのである。不安が精神療法の最中にしばしば生じることによって患者の問題の所在がわかり、どの領域を精査していけばいいかがセラピストに示される。不安を喚起することによって患者の不安の原因所在を突き止め、人格が普通に機能するような状態に、あるいは不安に苦しめられている自己を統合できるように援助することである。これを実現するためには、不安喚起を有効に利用することが重要であるとする。

不安は実際に面接における言語相互作用の過程の中から生じるが、このことは、不安を語彙-文法レベルで捉えることもある程度まで可能だということである。そこで本研究では不安喚起の語彙-文法資源の一つが、2 人称主語の心理文、あるいは心理過程であると考える。神尾(1994)はポライトネス理論は縄張りを尊重した理論であると論じているが、心理文のように縄張りを侵す発話は FTAs (Face Threatening Acts)と捉えられる。セラピストが使用する FTAs としての心理文は不安を喚起する原因の一つとなりうるものであると考えられる。上述、神尾の心理文除外項目より、精神疾患においても、セラピストと患者という職業的専門領域に属する関係が十分成立するかと思われるが、認知レベルでは侵入的であることに変わりはない。統合失調症など病態によっては、患者の側に医師に対する職業認識が欠如していると思われるケースも少なくない。特に統合失調症者の場合、相手の心的立ち入りを脅威として捉える傾向が強いので、心理文が患者にとって内界を侵犯されるようなものとして受け取られる可能性は高い。

そこで心理文は不安喚起を促す重要な語彙-文法資源と考えられる。セラピストはこの語彙-文法資源を適切に活用し、不安喚起を促す一方で、もしその不安が極度に大きく、セラピーの流れを阻害するような事態になった場合、セラピストは即座に不安緩和をはからなければならない。

4.2 不安緩和機能としてのモダリティー表現

神尾の縄張り理論は、発話は聞き手の縄張りを守って発話しなければ、聞き手に侵入感を与える非礼な発話となってしまうという主張である。相手の縄張り情報について発話を行う場合は、間接表現を用いなければならないが、神尾の言う間接表現にあたるものが、SFL では 1 人称主語を持つ心理過程であり、特に投射節を持つモダリティー表現である。このモダリティー表現は、縄張りを尊重した表現であり、侵入的にならないために断定性を弱めるという働きをすることから、緩和(mitigation)の働きをもつものと考えられる。

Halliday (1994) はモダリティーを 4 つのタイプ(蓋然性、通常性、義務性、志向性)に分け、さらにそれを 4 つの指向との組み合わせで捉えた。表 1 はその組み合わせの例である。

表1　モダリティーのタイプと指向の組み合わせの例 *Halliday 1994:358*

	主観的:明示的	主観的:暗示的	客観的:暗示的	客観的:明示的
モーダライゼーション:蓋然性	I think [in my opinion] Mary knows	Mary'll know	Mary probably knows [in all probability]	it's likely that Mary knows [Mary is likely to]
モーダライゼーション:通常性		Fred'll sit quite quiet	Fred usually sits quite quiet	it's usual for Fred to sit quite quiet
モデュレーション:義務性	I want John to go	John should go	John's supposed to go	it's expected that John goes
モデュレーション:志向性		Jane'll help	Jane's keen to help	

神尾の言う間接表現にあたるものが、蓋然性を表す主観的明示的モダリティー表現である。本ケースでは、このモダリティー表現が高頻度で観察されているが、セラピーの中で、緩和表現としての働きを持つものと考えられる。例えば 4.1 の例より、You are thoroughly afraid of me という心理文は、I think you are thoroughly afraid of me という主観的明示的モダリティー表現を用いると侵入感がやわらぐ。しかも主観的明示的モダリティー表現は、患者とセラピストの間に必要なセラピーの別の重要概念である共感関係を打ち立てるために必要な直接性(immediacy)を供するものであるという別の働きも兼ね備えている。通常、患者は他者と健全で望ましい対人関係を築いた体験を持てなかったケースが多い。むしろ悲痛な対人関係に引きずられて、現在の問題を形成しているのである。従って、こうした患者にアプローチをはかるには、共感的な言語使用、ここでは直接性を維持する語彙-文法資源を使うことが望ましい。主観的暗示的、または客観的明／暗示的モダリティー表現は、対人的距離感を持たせる語彙-文法資源である。よってセラピストは、主観的明示的表現を選択的に用いているのである (加藤　2007)。

5. 結論

不安喚起は、セラピーにおける重要な治療概念の一つである。不安がセラピーの最中にしばしば生じることによって患者の問題の所在がわかり、どの領域を精査していけばいいかがセラピストに示される。これを実現する語彙-文法的資源が、2 人称主語を持つ心理文、もしくは心理過程である。この語彙-文法資源を多用しながら不安喚起を促すわけであるが、極度の不安は、患者の抵抗、防衛などを引き起こし、精神療法の流れにとって阻害要因となるため、一方で緩和表現である主観的明示的モダリティー表現が、不安コントロールを目的とした安全弁として用いられると考えられる。

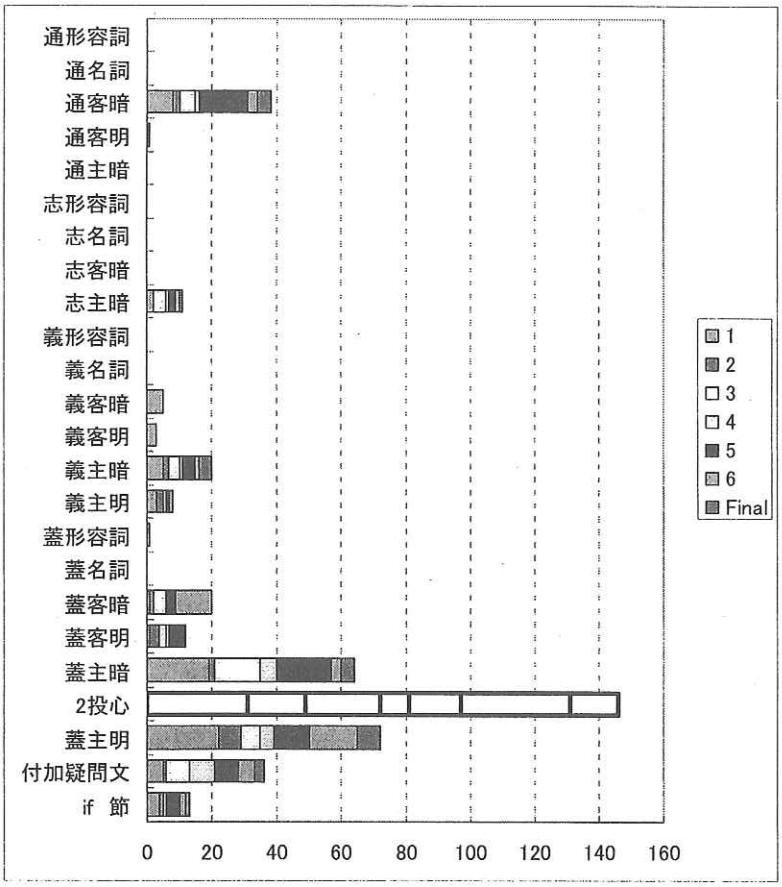


図1　Sullivan のターンにおけるモダリティー表現累積度数

if 節		蓋形容詞	蓋然性/形容詞	志客暗	志向性/客観的暗示的
付加疑問文		義主明	義務性/主観的明示的	志名詞	志向性/名詞
蓋主明	蓋然性/主観的明示的	義主暗	義務性/主観的暗示的	志形容詞	志向性/形容詞
2投心	2人称主語投射節を持つ心理過程	義客明	義務性/客観的明示的	通主暗	通常性/主観的暗示的
蓋主暗	蓋然性/主観的暗示的	義客暗	義務性/客観的暗示的	通客明	通常性/客観的明示的
蓋客明	蓋然性/客観的明示的	義名詞	義務性/名詞	通客暗	通常性/客観的暗示的
蓋客暗	蓋然性/客観的暗示的	義形容詞	義務性/形容詞	通名詞	通常性/名詞
蓋名詞	蓋然性/名詞	志主暗	志向性/主観的暗示的	通形容詞	通常性/形容詞

註：Harry Stack Sullivan (1892～1949)。米国の精神科医。ネオ・フロイト派に分類される。精神療法に対人相互作用の視点を初めて持ち込み、「精神医学は対人関係の学である」とする理論を発展させたことで、精神医学への貢献ははかりしれない。

参照文献：

Brown, P. and Levinson, S. 1978. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.

Halliday, M. A. K. 1994. *An introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold.

神尾昭雄. 1990.『情報のなわ張り理論』東京：大修館書店.

加藤 澄. 2007. *A Study of Meaning between a Psychiatrist and his Patients: based on the transcribed Psychiatric Sessions by Harry Stack Sullivan.* 東北大学大学院博士論文.

Inquiring or Requesting?
It and *That* in Questions

中島千春
西南学院大学文学部

＜要旨＞
疑問文には、いわゆる答えを予期するもの(Information Seeking Question)のほかに、同じ疑問文の形を取りながら、実質的には平叙文に等しい修辞疑問文(Rhetorical Question)となるものや、依頼の解釈になる場合がある。本稿ではまず、動詞 do が指示表現の it または that を目的語として出来事を表し、疑問文に現れる場合に、その疑問文における指示表現の選択が、疑問文の解釈を左右するということを指摘する。その上で、it と that の使用の別に関する本稿での仮説を立て、この仮説から、指示表現の選択と疑問文の発話の意図との関係が説明できることを明らかにする。
＜キーワード＞：指示詞、修辞疑問文、発話行為、依頼

1. はじめに

本稿では指示表現 it と that が命題や出来事を指示する場合を取り上げ、特に二つの表現が疑問文に現れる場合の二つの使い分けについて考察する。本来、it は人称代名詞、that は指示詞と分類されるが、実際には(1)のように、同一の指示対象を it によって指示することも、that によって指示することも可能であり、しかもこの場合、どちらで指示したとしても目立った意味の違いは感じられない。

(1) Tom knew that Joanne wanted to sell the car, and *it* / *that* bothered him.
(Kamio & Thomas 1999: 290)

しかし一方で、同一の命題や出来事を指示しながら、指示表現の選択によっては違いが生じる場合がある。まず、(2)の疑問文 "can you do...?"は、業者への依頼であるが、that で指示する場合には控えめな依頼、it の場合には、例えば差し迫った状況下での強い要求に響く。また、(3)の wh 疑問文"who does...?" では、it で指示する場合には「誰がお金の管理をするか？」と、答えを求める Information Seeking Question（以下 ISQ）であるが、that の場合には「いったい誰がそんな面倒なことをするものか」と強い否定を表す Rhetorical Question（以下 RheQ）の解釈となる (Nakashima 2006)。

(2) I need my items overnight.　Can you do *that/it*?
(3) Once the moving-in is over, the magic has begun, the mundane cries for attention.　It all begins with managing money.　Who does *it/ that?*　(Nakashima 2006)

このように、同じ疑問文の形を取り、かつ指示対象を同じくしながら、指示表現の選択によって、僅かではあるが、明らかに語用論的な差異が生じる例がある。本稿では、動詞 do が it/that を目的語として出来事を表し、(2)や(3)のような疑問文に現れる場合に焦点を絞り、それら疑問文の発話の意図の違いが、it と that それぞれの意味特性に起因することを明らかにしたい。１節では先行文献を概観し、問題点を指摘する。２節では本稿での仮説を提案し、それに基づき、３節では RheQ と ISQ、続いて 4 節では控えめな依頼と強い要求、各々の解釈の違いが it/that の選択によってなぜ生じるのかについて説明を試みる。

2. 先行文献と問題点

2.1 Gundel *et al.* (1993)

Gundel *et al.*は、指示対象の認知的地位という観点からitとthatの使用の別を説明する。即ち、指示対象が聞き手の知覚において活性化された段階(activated)ではthatが選択されるが、聞き手の注意の中心(in focus)に至ると、itによる指示が可能になると考える。従って、(4)aではbull mastiffは聞き手の聴覚、或いは視覚において活性化されただけであるからitの使用が許されないが、(4)bでは、bull mastiffは主語の位置にあり、談話における焦点であるからitとthatの両方の使用が可能となる。

(4) a. Sears delivered new siding to my neighbors with the bull mastiff. #*It's* /*That's* the same dog that bit Mary Ben last summer.
b. My neighbor's bull mastiff bit a girl on a bike. *It's* /*That's* the same dog that bit Mary Ben last summer. (Gundel *et al.* 1993: 280)

本稿で問題にする例文(2)(3)では、確かに先行する命題は聞き手の注意の中心となっており、このことは(2)(3)において it/that どちらによる指示も可能であることの根拠とはなりうる。しかしながら、前節の(2)(3)において、itによる指示の場合とthatによる指示の場合とで発話の意図、或いは、疑問文そのものの解釈が異なるが、これについてGundel *et al.*の理論は説明を与えないであろう。

2.2 Kamio & Thomas (1999)

Kamio&Thomasでは、指示対象の命題が話し手の記憶の何処に位置するかによってitとthatの使用が決まるとする。つまり、話し手にとって既知であればit、未だ処理中の情報であればthatが選ばれると考える。従って、(5)ではブルックリンの交通規則についてよく知っている話し手であればitを用い、一方、交通規則について初めて耳にするのであればthatを使用すると説明する。

(5) A: Overnight parking on the street is prohibited in Brooklyn.
B1: *That's* absurd!
B2: *It's* absurd! (Kamio & Thomas 1999: 291)

しかしながら、先の例文(2)(3)の疑問文における it/that の使用の別を、話し手にとって既知であるかどうかという観点から説明することは不可能であろう。確かにGundel *et al.*やKamio&Thomasの理論は(4)(5)のように多くの用例を説明する。しかし他方で(2)や(3)のように説明不可能な例もまた多く存在する。より説明力のある仮説が求められる。

3. 仮説

本稿では次のように仮説を立てる。it で指示する場合とは「指示対象を聞き手と共有するものとして提示する場合」である。指示対象が命題や出来事である場合に限れば、指示対象の命題を、話し手と聞き手とが共通に持つアイデアとして提示する場合にitが選ばれると言うことができる。一方、thatで指示する場合とは、「指示対象を聞き手の意識の中にあるメンタルエンティティとして提示する場合」である。即ち、指示対象が聞き手の意識に投影され、それが視覚的、聴覚的イメージとして留まったもの（メンタルエンティティ）を指示する場合である。これには二つの場合が考えられる。つまり、話し手はアイデアを持っているが、聞き手も共に持っているかどうか不明なものとして提示する場合と、もう一つは、指示対象のアイデアを互いに持たないものとして提示する場合である。

4. Rhetorical Question（修辞疑問文） と Information Seeking Question（質問）

形としては同じwh疑問文であっても、次の(6)のようにISQの解釈とRheQの解釈とが可能であり、itで前者の読み、thatで後者の読みとなる。このことを本稿の仮説から説明を試みる。

(6) Once the moving-in is over, the magic has begun, the mundane cries for attention. It all begins with managing money. Who does *it/ that?* (=(3))

(6)の “who does...?” において it で指示する場合とは、仮説より「指示対象の命題を、話し手と聞き手とが共通に持つアイデアとして提示する場合」であった。つまり、話し手と聞き手の間で、「お金の管理を（誰かが）する」という出来事が前提として共有されていることになる。この前提を基に、更に「誰が？」を聞くのであるから、ここでの “who does...?” は ISQ の解釈となるのである。一方、that で提示する場合には、仮説から、「指示対象のアイデアを互いに持たないものとして提示する場合」と、「アイデアを共に持っているかどうか不明なものとして提示する場合」がある。例(6)の場合、お金の管理は概して面倒なものだと言う世間値と相まって、「指示対象のアイデアを互いに持たないものとして」、つまり、お金の管理というアイデアを誰も持たないという解釈となる。よって(6)において、that で指示した場合には RheQ の解釈になると考えられる。

次は、ISQ の解釈のみ可能なコンテクストでは it が、RheQ の解釈のみ可能な場合には that が、それぞれ選択される例である。このような例は、本稿の仮説の妥当性を裏付けるものと考える。(7)a では 7 ガロンの水を蛇口から汲む方法を問う ISQ であるが、この場合には it による指示のみが可能となる。一方、(7)b の “why did you...?” は「結婚式の途中に抜け出すなんてとんでもない」と聞き手に対する非難と解釈され、これは強い否定を表す RheQ である。そしてここでは it の使用は不自然である。

(7) a. You have a jug that holds five gallons, and a jug that holds three gallons. ...You need to obtain exactly seven gallons of water from a faucet. How can you do *it*/??*that*?
b. Lucy: George, please don't tell me you called me out of a wedding to help you pick out a suit. Please!
George: You were at a wedding? You ran out of a wedding? Why did you do *that*/??*it*? That's horrible. (*Two Weeks Notice*)

このように、wh 疑問文において、it で指示する場合に ISQ、that の場合に RheQ となることが本稿での仮説から説明できることがわかった。

5. 控えめな依頼か、強い要求か？

“can you...?” は本来聞き手の能力や可能性を問う疑問文であるが、次のような条件下で依頼という発話行為を行なう(Searle 1975)。即ち、話し手は「聞き手に命題を実行する能力がある」と信じており（準備条件）、話し手は「聞き手に命題を行ってほしい」と思っている（誠実条件）場合である。

本稿ではこの二つの条件を満たす場合、つまり、“can you...?” が依頼の意味になる場合に議論を絞る。その上で、that で出来事を指示する場合には控えめな依頼、他方 it で指示する場合には強い要求の意味になることを、本稿の仮説から説明を試みる。

(8) I need my item overnight. Can you do *that*/*it*? (=(2))

ここでは話し手は、品物を明朝までに届けてもらいたいと思っており（誠実条件）、しかも相手は業者であるから、話し手は聞き手の能力を信じている（準備条件）と考えられ、よってここでの “can you do...?” は依頼と考えられる。仮説に従えば、it で指示することは指示対象の命題を、聞き手と共有するアイデアとして提示すると言うことであった。従って、ここでもし it で指示をすると、あたかも聞き手が既に「品物を明朝までに届ける」と言うアイデアを受け取ったものとして表すことになり、命題を聞き手に押し付けている印象を与えるだろう。緊急の事態などで、相手に自分の依頼をどうしても引き受けてもらう必要のある話し手であれば、it を選択するであろうが、通常は、控えめに頼みたい話し手であれば、相手が自分の提案するアイデアをまだ受け取ったかどうかわからないものとして、即ち、that によって指示すると考えられよう。

上と同様の理由から、次の(9)a では控えめな依頼とするために、it ではなく that のほうが選ばれ、一方、(9)b では、味方チームの選手にプレッシャーを与えるような強い要求にするために、that ではなく it が選ばれると考えられる。

(9) a. I would be very happy if you made a small mention of my site in the hardcopy version of your magazine. Could you do *that/??it* for me please?
b. Quarterback: You've gotta get a hole in that damn line. Can you do *it/??that*?
Jermaine: I have to!

更に、次の(10)は控えめな依頼であるが、この場合には that ではなく it の方が選ばれる。これは一見本稿の仮説に対する反例のように見えるが、実はここでの指示表現の選択も仮説から説明が可能である。ここでは、聞き手メルヴィンは "Absolutely"と既にノラの頼みを引き受けている。つまり、アイデアは既に聞き手との間で共有されているのであるから、話し手は that ではなく、it によって指示すると考えられる。(インフォーマントによれば、ここで仮に that で指示をすると、非常に物分りの悪い相手、例えば小さな子供に対して依頼の確認をしているように響くとのことである。これは that で指示することにより、既に共有しているはずの出来事を、「聞き手が受け取っていないかもしれないもの」として提示することから生じると考えられよう。)

(10) Nora: Could there be any way for you to be willing to walk his dog for him?
Melvin: Absolutely.
Nora: Not just today... Uh, could you do *it/??that* ... until he gets back on his feet?
(*As Good As It Gets*)

このように、聞き手の能力や可能性を問う疑問文が依頼となる場合、that では控えめな依頼となり、it では強い要求になることを、本稿の仮説から説明できることを見た。

6. まとめ

疑問文には、聞き手に答えを求める質問の他に、強い否定を表す修辞疑問文や控えめな依頼、強い要求など様々な解釈が可能である。これら疑問文の異なる解釈について、本稿ではまず二つの点に注目した。一点目は、wh 疑問文において it で指示する場合には ISQ の解釈、that で指示する場合には RheQ の解釈となること。二点目は、聞き手の能力や可能性を問う疑問文 "can you do...?"が依頼の意味となる場合に、that では控え目な依頼、it では強い要求となること。その上で、この二点に関して、本稿での仮説「it で指示する場合とは指示対象を聞き手と共有するものとして提示する場合、that で指示する場合とは、指示対象を聞き手の意識の中にあるメンタルエンティティとして提示する場合である」から説明できることを見た。

参考文献

Ariel, M. 1990. *Accessing Noun-Phrase Antecedents.* London: Routledge

Gundel, J.K., N. Hedberg, and R. Zacharski. 1993. "Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse," *Language*, 69, 2:274-307.

Kamio, A. and M. Thomas. 1999. "Some Referential Property of English It and That," *Function and Structure*: In Honor of Susumu Kuno, ed. by Akio Kamio and Kenichi Takami, 289-315. Amsterdam: John Benjamin.

Kawase, Y. 1986. "Japanese Demonstratives," *The Penn Review of Linguistics* 10: 81-94.

Lambrecht, K. 1994. *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus and the Mental Representations of Discourse Referents.* Cambridge University Press.

Langacker, R. W. 1991. *Concept, Image, and Symbol.* Berlin: Mouton de Gruyter,.

Nakashima, C. 2005. "*It* or *That*: Speaker's Choice," Kyushu Eibungaku Kenkyu, 22: 15-29.

Nakashima, C. 2006. "*That*'s Not What *It* Is: Anaphoric Pronouns in Questions," Seinan Gakuin Daigaku Eigoeibunngaku Ronshu, 46: 73-98.

Searle, R. 1975. "Indirect Speech Acts," *Syntax and Semantics, Vol. 3*, ed. by Peter Cole and Jerry L. Morgan, 59-82. New York: Academic Press.

高橋英光. 2004.「指示語の理解：英語の it と that」『認知コミュニケーション論』大堀壽（編）. 25-53. 大修館書店.

受身文の動作主マーカーに関する考察
―韓国語との対照を中心として―

千英子
神戸大学大学院

〈要旨〉
本稿では、日本語の文学作品を対象とし、日本語の受身文が韓国語に訳される際、実例の分析を通じて、主語と動作主の性質が動作主マーカーと如何なる対応関係を見せており、韓国語の被動文の形態とはどんな対応関係を示しているのか、ということについて考察を行なった。考察の結果、日本語は受身文の主語と動作主の性質によって、動作主マーカーは固定されているのに対して、韓国語は多数のマーカーと対応しており、その対応様相は複雑であることが分かった。従って、両言語の受身文における動作主マーカーの対応関係について、韓国語の場合は動作主マーカーよりそれに代わる被動文の形態の特徴に注目して把握する必要があると思われる。さらに実例の分析を通じて、「接尾辞被動文は」は、動作・作用の過程に意味の中心がある動作性の受動を表わし、「に」動作主の受身文と対応する頻度が高く、主語と動作主が共に有情物の場合多く使われる傾向がある。一方、「助動詞被動文は」は、結果の状態に意味の中心がある状態性の受動を表わし、「によって」動作主の受身文と対応する頻度が高く、主語と動作主が共に非情物の場合多く使われることが分かった。
【キーワード】対応関係、動作主マーカー、被動文、　動作性、状態性

1. はじめに

動作主マーカーとは、動作の主体を表わすのに使われる「に」「によって」「から」「で」「のために」などを指すが、これらは主語と動作主、また動詞の性質によって使い分けられる。そのため、能動文の主格であった動作主が受身文ではどんなマーカーで示されるかは重要な意味をもつと考える。そこで本稿では、日本語の文学作品を対象とし、日本語の受身文が韓国語に訳される際、動作主マーカーはどのように対応しており、また韓国語の被動[1]形態とはどんな対応関係を示しているのか、ということについて考察を行うことにする。この試みは、両言語における受身文の特徴をより明らかに把握し、日本語の学習に役立つものと期待される。

日本語における受身文の中で、動作主マーカーは動作の主体を示すのに使われ、主語、動作主、動詞の性質によって使い分けられる。本稿では、主語が有情物であるか、ないしは非情物であるか、また動作主は有情物であるか、ないしは非情物であるかを調査し、さらにその時の動作主マーカーは何が使われるかに注目しながら考察を行う。調査にあたり、主語と動作主が省略されている文は除いて、文中に表されている受身文のみを対象とする。但し、前後の文脈によって、主語或いは動作主の存在が明確に分かる場合は、調査対象とする。

2．文学作品の翻訳における対応状況

まず、日本語の受身文は 568 文だが、そのうち韓国語の被動文に訳された文は 52.6％の 299 文にすぎない。さらに、299 文のうち、主語と動作主が文中にはっきり示されているか、ないしは文脈によってその存在が明確に分かる文数は 236 文である。

また日本語の受身文における主語と動作主の組み合わせを見ると、「有情物―有情物」文は 71 文で全体の約 30%、「有情物―非情物」文は 36 文で全体の約 15%、「非情物―有情物」文は 23 文で全体の約 10%、「非情物―非情物」

文は 106 文で全体の約 45%を占めている。このように、日本語における受身文が韓国語の被動文と対応する場合、主語と動作主がともに有情物である場合と主語と動作主がともに非情物である組み合わせ文が、最も多く使われる傾向が見られる。また動作主のマーカーの使用分布を調べてみると、「に」動作主マーカー受身文が 133 文で、全体の約 56%を占めており、使用頻度が一番高い傾向を示している。一方、「によって」動作主マーカーの受身文は 69 文で全体の 29%を占めており、動作主「に」に続いて高い割合を見せている。

3. 分析と結果

本節では作品の実例に基づいて、動作主マーカーとして最も使用頻度が高い「に」と「によって」を取り上げて、これらの動作主マーカーが韓国語に訳される際、どういう対応関係を見せているかを調べ、また韓国語の被動文の性質との対応関係を調べることによって、日本語の受身文における特徴をより明確にすることを目的とする。韓国語における被動文は日本語と比べて、多様な形態で表されるのが特徴である。本調査に当たって、一般的に認められる次の三つの形態を取り上げ、それぞれ「接尾辞被動文」「助動詞被動文」「語彙被動文」と呼ぶことにする。[2)]

①接尾辞被動文—被動の接尾辞「이 (i)　히 (hi)　리 (ri) 기 (ki)」の接続による被動文

② 助動詞被動文——被動の助動詞「 아／어지다 (a／eo　jida)」の接続による被動文

③語彙被動文—被動の意味を表す動詞 「되다 (doeda) 、 받다 (badda) 、당하다(danghada)」の接続による被動文

3.1.「に」動作主

本節では「に」動作主マーカーを取り上げて、両語の受身文がどのように対応するかについて調べてみる。

① 島村はこの女にも引かれるのだった。　「雪国」
　시마무라는 이 여자에게도 끌리는 것이었다. (接尾辞被動文)　「설국」
　「끌리는 것이었다」は動詞「끌다／引く」による「引かれるのだった」の意味を表す。

② 僕は寮長室に呼ばれて注意を受けた。「ノルウェイの森」
　나는 사감실에 불려가 주의를 받았다. (接尾辞被動文)　「상실의　시대」
　「불려」は「부르다／呼ぶ」による「呼ばれて」の意味を表す

③それから永沢さんに誘われて知らない女の子たちと次々と寝ることになった事情も話した。「ノルウェイの森」
　그리고 나가사와에게 이끌려 나도 모르는 사이에 이 여자 저 여자와 자게 된 사정도 이야기했다. (接尾辞被動文)　「상실의　시대」
　「이끌려」は「이끌다／誘う」による「呼ばれて」の意味に当たる。

④ 私は、田淵さんに連れられて、父親の大原弘政にも会いました。「妻よ、安らかに」
　나는 다부치 씨에게 이끌려 부친인 오하라 히로마사도 만났습니다. (接尾辞被動文)「아내여 편안히」
　「이끌려」は「이끌다／連れる」による「連れられて」の意味に当たる。

⑤「(雄一は) えり子さんに教育されたからな」　「キッチン」
　[(유이치는)에리코 씨한테 그렇게 교육받았거든] (語彙被動文)　「키친」
　「교육받았거든」は「교육하다／教育する」による「教育されたからな」の意味を表す。

上の例から分かるように、日本語の「に」に対して韓国語は「에게 (ege)、(e)에、한테(hante)」で対応するが、使い分けとして動作主が特定されている場合は「에게」、動作主が特定されず、不特定多数の動作主の場合は「에」を用いて対応し、話し言葉では「한테」が用いられているが、「에게」が最も多く使われている。このように日本語の「に」に対して韓国語は文脈の性質によって使い分けられている傾向が見られる。

さらに、「に」に対応する韓国語の被動文に注目すると、ほとんどが「接尾辞被動文」で対応する傾向が見られる。一方、「助動詞被動文」は1例も見られなかった。言い換えると、韓国語の被動文の中で「接尾辞被動文」は、日本語の受身文が「に」動作主を用いる時、対応関係が成り立つ確率が非常に高いということを示している。さらに、前述のように、「に」動作主マーカーの受身文が最も多く使われていることから、韓国語において、「接尾辞被動文」が最も一般的な被動形であることも本調査によって明らかになったと言えるが、このような結果はどんな対応関係を示唆しているのか。

細川（1986）は動作主マーカーの使い分けを、動作の意味における「結果性」の度合に注目し動作・作用の過程に意味の中心がある動作受身では、「に」「から」が好まれると述べている。例文①～⑤は、主語も動作主も有情物であって動作主の動作が直接的で、その動作によって被動作主の状態に変化を起こしたり、被害感情を伴うことになり、細川（1986）が指摘しているように、動作・作用の過程を重要視する「動作受身」であると言える。このように「動作受身」の場合、韓国語は「接尾辞被動文」が最も多く対応する傾向が見られる。言い換えれば、韓国語において「接尾辞被動文」と「語彙被動文」は、動作･作用の過程に意味の中心が置かれている表現であると言える。

以上のことから、日本語は受身文の主語と動作主の性質によって、動作主マーカーが固定されているのに対し、韓国語は多数のマーカーで対応しており、その対応様相は複雑である。そのために、両語の受身文における動作主マーカーの対応関係について、韓国語の場合は動作主マーカーより、それに代わる被動形の特徴に注目して把握する必要があると思われる。

3.2.「によって」動作主

本節では、「によって」動作主マーカーを取り上げて、両語の受身文がどのように対応するかについて調べることにする。

⑥自分の出奔が衝動によって行われたと考える方を好む。「金閣寺」
　자신의 출분이 충동에 의해서 행해진 것으로 만들고 싶었다.（助動詞被動文）「금각사」
「행해진」は動詞「행하다／行う」による「行われた」の意味を表す。
⑦事実は夕刊によって知らされた。「妻よ、安らかに」
　사실은 석간에 의해서 알려지었다.（助動詞被動文）「아내여 편안히」
　「알려지었다」は「知らされた」の意味を表す。
⑧寮は正体不明の財団法人によって運営されている。「ノルウェイの森」
　기숙사는 정체 불명의 재단 법인에 의해 운영되고 있다.（語彙被動文）「상실의 시대」
　「운영되고 있다」は「運営されている」の意味に当たる。

例文⑥～⑧のように、日本語の「によって」に対して韓国語では「助動詞被動文」が最も多く対応しており、その次が「語彙形被動形」である。また、主語が非情物である「非情受身文」の場合多く用いられている傾向が見られており、受身文の述語動詞を見ると「行う」「知らす」「運営する」のように、動作の結果によって作られた結果物が主語になるか、ないしは動作主の直接な影響を感じられないような動詞で構成されている。一方、受身文の主語は動作主の影響を被る「動作の過程」よりは「結果状態」を表わしていると考えられる。前述の「接尾辞被動文」は動作性表現に焦点が置いてある反面、「助動詞被動文」は状態性表現に焦点が置いてある。つまり、韓国語において被動文の形態は被動文の意味と深い関連があり、「形態」と「意味」との重要性を持っている韓国語の被動文の特徴を証明している。

4. まとめ

以上の考察結果から、まず日本語は受身文の主語と動作主の性質によって、動作主マーカーは固定されているのに対して、韓国語は多数のマーカーで対応しており、その対応様相は複雑であることが分かった。従って、両言語の受身文における動作主マーカーの対応関係について、韓国語の場合は、動作主マーカーよりそれに代わる被動文の形態の特徴に注目して把握する必要があると思われる。さらに、実例の分析を通じて、「接尾辞被動文」は、動作・作用の過程に意味の中心がある動作性の受動を表わし、「に」格動作主の受身文と対応する頻度が高く、特に主語も動作主も有情物の組み合わせ文に多く用いられているが、その場合、受身文の主語はほとんど文中に現れず、動作主の動作・作用を直接に受ける傾向が見られた。一方、「助動詞被動文」は、結果の状態に意味の中心がある状態性の受動を表わし、「によって」格動作主の受身文と対応する頻度が高く、特に主語も動作主も非情物の組み合わせ文に多く使われていることが分かった。

注

1)「被動」は韓国語の受動の意味を表すもので、「被動文」という用語は、韓国語における受身文を指すものである。本発表では、日本語と韓国語の受身文をともに指す場合は、「両語の受身文」と呼ぶことにする。

2) 韓国語の被動文において、三つの形態を共に被動文として認める学者と、接尾辞による被動文の形態のみを認める学者に分けている。本稿では三つの形態を共に認めて考察の対象とする。

参考文献

寺村秀夫. 1982.『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』東京：くろしお出版.

仁田義雄. 1991.『日本語のヴォイスと他動性』東京：くろしお出版.

細川由起子. 1986.「日本語の受身文における動作主のマーカーについて」『国語学』144, 1－12.

裴禧任. 1988.『国語被動研究』韓国：成東文化社.

任洪彬. 1978.『国語被動化意味』韓国：震檀学報.

例文出典

①「雪国」川端康成（作）　新潮文庫　（1947／7出版）
「설국」 서기원（訳）　문예출판사（1977／12出版）

②「キッチン」吉本ばなな(作)　角川文庫　（1998／6出版）
「키친 」 김난주（訳）　민음사　（1999／出版）

③「ノルウェイの森」村上春樹(作)　講談社文庫（1991／出版）
「상실의시대」　유유정（訳）　문학사상사（1989/6出版）

④「妻よ、安らかに」高木杉光（作）『日本推理小説選』多楽園出版部（2002／6出版）
「아내여 편안히」多楽園出版部（訳）多楽園出版部（2002／6出版）

⑤「金閣寺」三島由紀夫（作）　新潮文庫（1960／9出版）
「금각사」 서기원（訳）　청림출판（1991／10出版）

Small Clauses Revisited

Noriko Matsumoto (noriko-mtmt@pop02.odn.ne.jp)
Doshisha Women's College of Liberal Arts

<Abstract>
This paper offers a very brief examination of small clauses and tries to resolve two moot questions. First, *find*, *believe*, and *consider* take the NP+V+NP+ADJ construction, but only *believe* produces a unique pragmatic effect that *find* and *consider* never produce. How do such a pragmatic effect originate? Second, only *find* takes various semantic types of the NP+V+NP+ADJ construction, and each type conveys a different meaning with a different pragmatic effect. How does such a difference originate?

[key words]: small clauses, pragmatic effects, metonymy

1. Introduction

Linguistic semantics and grammatical structures reflect our ability to construe conceived situations in alternate ways, and the speaker's role in construing the situations in particular ways is almost always motivated by discoverable aspects of particular usages of grammatical structures. This paper emphasizes that only when linguistic phenomena, human cognition, and the environment in which the speaker(s) and the hearer(s) are present are plausibly connected can such phenomena explicated.

2. Two Moot Questions about Small Clauses

2.1. The Same Complement Patterns with Different Pragmatic Effects

Within the functional and the cognitive paradigms, it is generally accepted that if one verb can be followed by more than one type of complement, there must be semantic differences among the sentences with different pragmatic effects. Most studies have attempted to derive each semantic characterization from the different type of complement associated with the verb. Borkin (1984), for example, provides examples of such contrasts, as in (1).

(1) a. I find that this chair is uncomfortable.
    b. I find this chair to be uncomfortable.
    c. I find this chair uncomfortable. (Borkin 1984:79)

Each sentence in (1) has the same propositions that the chair is uncomfortable; however, the differences among them are closely linked to "whether or not a complement represents a fact based on experience or, rather, describes the experience itself (Borkin 1984:79)." The complement in (1a) represents a proposition viewed as based on evidence, whereas the one in (1c) represents the report of an experience. (1a) might be used for judgment based on indirect evidence through asking people or learning the results of consumer reaction tests, but (1c) implies that *I* myself actually sit on the chair and directly experience the discomfort. (1b) might be used in either circumstance. Langacker (1991) and Verspoor (2000), agreeing with Borkin, modify her explanation. Langacker treats (1) as representing distinct constructions, each with its own conceptual import. Verspoor further claims that (1) represents a finiteness scale that strongly interacts with a binding hierarchy of event integration, following Givón's claim (1990:527) that iconic principles related to conceptual distance are involved in the use of

complements. Moreover, to explicate the distinctions among (1), she uses the concept of level of consciousness, which Edelman (1989) demonstrates, as summarized in Table 1.

(Verpoor) level	level 1	level 2	level 3
(Edelman) level of consciousness	perceptual categorization	primary consciousness	higher order consciousness
interaction between conceptualizer and object	direct	relational / indirect	symbolical
time / space of object	here / now	not here / not now	not here / not now
complement	bare infinitive *-ing* complement predicate adjunct	*to*-infinitive	*that*-complement

Table 1. The concept of level of consciousness

The previous three accounts are fundamentally the same. The semantic differences among the three different sentences in (1) are instances of gradient phenomena which signify a shift from a relatively objective to a more subjective construal. (2) and (3) show the same parallel hierarchical clines as (1).

(2) a. I believe that he is honest.
b. I believe him to be honest.
c. ?I believe him honest.
(3) a. I consider that she is beautiful.
b. I consider her to be beautiful.
c. I consider her beautiful.

Believe and *consider* represent this hierarchical cline in the semantic area of THINK or FEEL, and *find* does in the semantic area of EXPERIENCE. It should be noted here that (2c) produces another unique pragmatic effect that (1c) and (3c) never produce. (2c) is perfectly grammatical. However, (2c) seems to have a low, and perhaps decreasing frequency of use as many speakers think it gives the impressions of an affected way of talking. The utterance itself seems to have a smug look. As a result, in the semantic area of THINK or FEEL, the NP+*consider*+NP+ADJ construction is quite natural, as in (3c) and (4). As shown in Table 2, the NP+*believe*+NP+ADJ construction does not occur in actual linguistic phenomena.

(4) *Most Americans no longer consider President Bush honest and trustworthy or strong and decisive*. The public is not even sure the president is competent at his job. (*CNN Live Today*)

	CNN Larry King Live (2006.1.1.-6.31.)	*CNN Live Today* (2006.1.1.-6.31.)
find + NP + ADJ	36	50
find + NP + *to be* + ADJ	5	3
believe + NP + ADJ	0	0
believe + NP + *to be* + ADJ	2	1
consider + NP + ADJ	6	6
consider + NP + *to be* + ADJ	2	0

Table 2. Frequencies of complement patterns of the verb *find*, *believe*, and *consider* in the *CNN Larry King Live* Corpus, the *CNN Live Today* Corpus

This significant outcome in data-driven analysis could reinforce some convincing explanations throughout this paper. On the basis of the three previous accounts, this paper goes a step further and thus emphasizes that only when linguistic phenomena, human cognition, and the environment in which the speaker(s) and the hearer(s) are present are plausibly connected can such phenomena explicated.

2.2. One Lexical Item with Different Meanings and Different Pragmatic Effects

Borkin (1984), Langaker (1991), and Verspoor (2000) yield one further question about the relation between the NP+V+NP+ADJ construction and the lexical item *find*. As mentioned above, the NP+*believe/consider*+NP+ADJ construction occurs only in the semantic area of THINK or FEEL. In contrast, as in (5)-(10), the NP+*find*+NP+ADJ construction, in fact, occurs in six semantic areas which are based on four metonymically related senses, the subject's intentional state and simultaneous act resulting in an event, the speaker's reaction towards an event, an assessment or judgment act, and a mode of perception involving perceived or conceived images. These four metonymically related senses represent the conceptual contiguity, that is, the conceptual continuum.

(5) IN A COURT OF LAW

JUDGE: Ladies and Gentlemen of the Jury, have you reached a verdict?
FOREMAN: Yes we have, your honor... *We find the defendant not guilty of all charges.*
(from the movie *Serial Mom*)

(6) GET BY SEARCHING

Bad information got out, although the mining company never, in deference to them, never made an official announcement that *they had, in fact, found all 12 miners safe and sound.*
(*CNN Live Today*)

(7) DISCOVER STATE OF SOMETHING or SOMEONE

… Residents of a Fresno apartment complex say someone stole gas right out of their tanks. *About a dozen people found their tanks open and empty.* (*CNN Live Today*)

(8) COMMUNICATIVE FUNCTION

a. King: Eva Marie, you made the famous "North By Northwest." We're going to be seeing a clip from that later. What was he like to work for?
Marie: *I found it very interesting* because I had made "Waterfront" with Kazan and had worked with Actors Studio people, studied there, and he was completely different …

b. King: Is it difficult to direct yourself?
Costner: *I don't find that difficult.* I traditionally have given myself few takes, but I know going in. (*CNN Larry Ling Live*)

(9) EXPERIENCE

But the thing about "Come By Me" is that I tried to have enough rhythm in it so that it would be interesting to the people. You know, *they would find the lyrics interesting*, the melody, but also the rhythm, because it's very certain type of piano style.
(from an interview with Harry Connick Jr.)

(10) THINK or FEEL

Meantime, her colleague and her attorney did visit Mary Winkler in jail over the weekend. They said *they found a woman very upset about what has happened.* (*CNN Live Today*)

Moreover, each *find* in (5)-(10) could involve all the four metonymically related senses mentioned above, but it could be used metonymically in the sense that it focuses mostly on one sense more than another. First, in (5)-(7), the subject's intentional state and simultaneous act resulting in an event is foregounded, and other three senses are backgrounded. Especially, (5) shows that causation-direction strengthening can go a step further to an extreme. This is a typical example in which to say is to perform. The speaker *we* alters the external status or condition of an object *the defendant* only by making the utterance because the person performing the speech act has to have the authority to do so. In (5) there is an important constraint on the use of *find*, where only a certain person, a judge or a jury member, is

qualified to use this utterance. The difference among (5), (6), and (7) turns out to be a gradient distinction, essentially having to do with causation. The difference among them is thus a matter of degree. Second, as (8) is a case where the speaker's reaction towards an event is foregrounded, an inference is required to be interpreted correctly. In (8a), the word *it* has no definite antecedent in the preceding speech, yet we understand her meaning through inference. However, in (8b) the antecedent of the word *that* is more definite (cf. Gundel et al. 1993). The difference between (8a) and (8b) is also a matter of degree, essentially having to do with inference. Third, in (1c) and (9), an assessment or judgment act is foregrounded. Last, in (10), a mode of perception involving perceived or conceived images is foregrounded. (11) is an example of the conceptual shift. In (11), the meanings that the NP+*find*+NP+ADJ construction conveys represent a shift from the subject's intentional state and simultaneous act resulting in an event to a mode of perception involving perceived or conceived images.

(11) Come this year in particular. *You will find our majestic country-side open ... our championship golf course open*, though not that easy, and *you will find the hearts of our people open.*
(from an interview with Sean Connery)

This paper therefore shows that six semantic types of the NP+*find*+NP+ADJ construction, as in (5)-(10), are based on the four metonymically related senses and are related to each other, and that each sentence meaning depends on what sense in the four metonymically related senses is focused on mostly.

3. Concluding Remarks

This paper focuses on the experiential aspects underlying language rather than the logical view. Obviously, meanings are relative to the environment in which the speaker(s) and the hearer(s) are present. There is no question that a large amount of information is contributed by individual lexical items, and that a particular lexical item is not precisely the same in all the environments. Linguistic phenomena can be represented only in linear order; however, linguistic meaning is equated with multifaceted, multilayered conceptualization on the basis of the environment where the speaker(s) and the hearer(s) are present. Consequently, diverse semantic representations converge on the same complement pattern. This paper thus emphasizes repeatedly that only when linguistic phenomena, human cognition, and the environment in which the speaker(s) and the hearer(s) are present are plausibly connected can such phenomena explicated.

References

Borkin, A. 1984. *Problems in Form and Function.* Norwood, NJ: Ablex Publishing.
Edelman, G. M. 1989. *The Remembered Present: A Biological Theory of Consciousness.* New York: Basic Books. Inc.
Givón, T. 1990. *Syntax: A Functional-Typological Introduction, Vol.II.* Amsterdam: John Benjamins.
Gundel, J.K., N. Hedberg, and R. Zacharski. 1993. "Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse." *Language* 69:2, 274-307.
Langacker, R.W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.II: Descriptive Application.* Stanford: Stanford University Press.
Verspoor, M. 2000. "Iconicity in English Complement Constructions: Conceptual Distance and Cognitive Processing Levels." In K. Horie, ed. *Complementation: Cognitive and Functional Perspectives*, 199-225. Amsterdam: John Benjamins.

Corpora

CNN scripts are cited on http://transcript.cnn.com/TRANSCRIPT/
A quoted movie script is cited on http://www.weeklyscript.com/
Interviews are cited on *The Japan Times Shukan-ST*

様態副詞 slowly と動詞の語義

氏名　出水 孝典
所属　立命館大学言語教育センター
E-mail: demmy_t@dsk.zaq.ne.jp

<Abstract>
This paper explains modifiability by the manner adverb "slowly" in terms of the event structure templates introduced by Rappaport Hovav and Levin (1998). In particular, I show that the semantic structure of "slowly" is fused with a manner element that modifies an ACT predicate in the event structure templates, and semantic compatibility between "slowly" and the manner determines the acceptability of the whole sentence. Furthermore, I demonstrate that by assuming that the manner may be lexically specified or pragmatically inferred from context, we can avoid ad hoc operations on the event structure templates.
【キーワード】: 1. 事象構造鋳型　2. 融合　3. 抽象的 Accomplishment　4. 指示表現

1. はじめに

本稿の目的は、副詞 slowly によって動詞が修飾できるか否かを、事象構造鋳型(Event Structure Template)を用いて説明することである。かつて、Pinker (1989: 182)は、動詞 roll の意味構造を論じた際に、その移動様態(manner of motion)の情報が、文法にとっては内部構造の分からないブラックボックスのようなもので、その動詞の項構造とは無関係であるとした。それに対して、Goldberg (1995: 29)は、様態が項構造には関係しないものの、slowly のような副詞の分布を論じる際には必須となることを述べ、移動様態動詞である walk と careen からなる(1)の例を挙げている。

(1)　Joe {walked/??careened} into the room slowly. (Goldberg 1995: 29)

careened … slowly が奇異に響くのは、Goldberg によると careen の様態が含意する「コントロールされていない速い動き」が、slowly の表す意味と矛盾するからだという。しかしながら、すべての動詞にこのような説明が適用可能だというわけではない。例えば、break の場合、その対象が何であるかによって、slowly を付けた場合の容認度が変化する。

(2)　Joe broke {Bill's arm/??the glass} slowly.

また、そもそも様態などもたない状態動詞(State)が、いずれも slowly と共起しないことは、これまでにも指摘されてきた。

(3)　a.　*John is slowly tall. (Thomason and Stalnaker 1973: 218)
　　b.　#Robin loved Pat slowly./ *Jo owned the house slowly. (Borer 2005: 234)

ところが、同じように様態をもたないとされる、Vendler(1957)のいう Achievement の間には、slowly と共起した場合の容認度の差が看取される。これらをどう説明すべきなのか疑問が残る。

(4)　John {came/*arrived} slowly.[1]

本稿の目的は、Levin と Rappaport Hovav(以下ではそれぞれ L, RH と略記する)によって提唱されてきた事象構造鋳型(Event Structure Template)に基づいて、slowly の解釈メカニズムを提示することである。具体的には、動詞の事象構造に含まれる ACT 述語を修飾する形で様態は存在し、その様態との意味的適合性によって、副詞 slowly はその動詞を修飾できるか否かが決まるということである。さらに、様態が、語彙的に指定される場合と文脈から読み込まれる場合の、両方が存在すると仮定することで、

動詞の事象構造を必要以上に複雑化させることなく、言語事実の説明が可能になることを示す。

2. 移動様態動詞と副詞 slowly

副詞の解釈がその生起位置の違いによって異なることは Travis (1988)、Ernst (2002)などによって論じられてきたが、本稿では、(1)-(3)のように、副詞 slowly が動詞の後に生起した場合のみを扱うことにする。このような場合、slowly はその動詞の表す事象の過程を修飾する。以下では、事象構造鋳型を導入し、slowly の過程を修飾するというはたらきがそれによってどのように定式化でき、どのように(1)の違いが説明できるのかを見てゆく。

本稿で用いる事象構造鋳型は、RH&L(1998)で導入されて以来、一連の論文で少しずつ整理と修正が加えられているものである。本稿では以下の鋳型を採用する。

(5) Simple event structure templates:
  a. [x ACT<*MANNER*>] (activity)
  b. [x <*STATE*>] (state)
  c. [BECOME [x <*STATE*>]] (achievement) (Levin 1999: 229)

(6) Complex event structure template:
  [[x ACT<*MANNER*>] CAUSE [BECOME [y <*STATE*>]]] (causative) (Levin 1999: 230)

そして、RH&L (1998: 109)で提示されている、 [x ACT<*MANNER*>]を用いて移動様態動詞を作り出す規則に従うと、walk と careen はそれぞれ次のような事象鋳型を構成することになる(なお、鋳型のうち<*WALK*>、<*CAREEN*>の部分が各動詞固有の移動様態を表している)。

(7) a. walk: [x ACT<*WALK*>] (activity) b. careen: [x ACT<*CAREEN*>] (activity)

事象構造において過程を表すのは ACT 述語であるので、様態副詞 slowly は事象鋳型内の ACT 述語に対する修飾語として付加され、それによって動詞と副詞 slowly が意味的に合成されると考えられる。しかし、ここで問題となるのは、移動様態動詞の場合、ACT 述語には各動詞固有の移動様態が修飾語としてすでに付加されていることである。つまり、移動様態と副詞 slowly の意味が同じ位置を占めることになる。このような場合、意味的な融合(fusion)の操作が行われると考えられる。

融合とは、一定の制約の下で２つの意味要素の合成的解釈を導き出す操作として、Jackendoff (1990: 53-54)や Goldberg (1995: 50)で提案されているものである。本稿では、これを副詞 slowly に応用し、副詞 slowly と動詞の事象構造の合成、およびそれに課される制約を次のように定義する。

(8) <u>副詞 **slowly** と事象構造の合成</u>:
  a. 副詞 slowly の意味要素は、ACT 述語を修飾する<*MANNER*>と融合し、ACT 述語の様態という１つの意味要素として解釈される。
  b. 融合が行われるためには、<*MANNER*>と slowly の意味要素が意味的に適合しなければならない。意味的に適合するとは、２つの意味要素が互いに矛盾せず両立可能であるということである。<*MANNER*>に関して言えば、slowly と両立不可能な quickly, instantaneously のような意味要素を含んでいないということである。

これを(1)の例に即して述べてゆこう。動詞 walk の移動様態には quickly のような slowly と対立する意味要素は含まれていない。そのため、<*WALK*>と slowly は意味的に適合し、融合して ACT 述語に対する１つの修飾語となる。一方、動詞 careen は、*LDCE*[4] の to move forwards quickly without control ...という定義からも明らかなように、slowly と両立不可能な quickly をその移動様態に含んでいる。そのため、意味的適合性の制約に違反し、その結果、融合は行われない。融合が成立しなければ、そもそも解釈ができないので、結局、融合不可能イコール生起不可能ということになる。

3. State/Achievement と副詞 slowly

(3)で示されるように状態動詞が副詞 slowly と共起しないことは、これまでにも文献で度々指摘されてきたことだが、本発表の融合による分析では、状態動詞の鋳型(5b)が融合先となるはずの ACT 述語を修飾する<MANNER>を含んでいないために融合不可能となるのだと、簡潔に説明できる。

しかしながら、(4)のような Achievement に見られる容認度の差は、(5c)の鋳型だけでは説明できない。(5c)にも<MANNER>が含まれていない以上、Achievement はすべて副詞 slowly と共起しないという予測が成り立つが、実際には Achievement である come が slowly と共起しているからである。さらには、他の Achievement とされる動詞と副詞 slowly の共起した例が小説やコーパスに散見される。

(9) a. She turned and *went slowly* away without looking back. (I. Murdoch, *A Word Child*)
b. I *entered slowly*. (I. Murdoch, *The Italian Girl*)
c. The old lady *died slowly* of cancer. (*BNC*)
d. Hal *got slowly* to his feet. (J. Barwick, *The Kremlin Contract*)

そこで本稿では、Rothstein (2004: 48-49)の提唱する Achievement がその予備段階を取り込んで抽象的 Accomplishment を派生するという仕組みを、事象構造鋳型の転換に基づく形で導入する(なお、ここで言う予備段階とは、Smith (1997: 31)の言うようなもので、Achievement と概念上は切り離されるが、Achievement の成立には必要な段階のことを指す)。Rothstein はこのような操作を DO 述語(本稿の事象鋳型では ACT 述語に相当)の導入として規定しているが、この述語が、それ自体の項構造をもつ equi タイプではなく、それ自体が項構造をもたず下にある項を引き上げる raising タイプの演算子であるとしている。これに従うと、以下に示すような形で、(5c)から(6)と似てはいるが一部異なる(10c)の鋳型が派生される。これが抽象的 Accomplishment の鋳型である。

(10) a. [BECOME [x <*STATE*>]] (achievement)
→b. [[ACT<*MANNER*>] CAUSE [BECOME [x <*STATE*>]]] (ACT 述語と CAUSE 述語の付加)
→c. [[x_i ACT<*MANNER*>] CAUSE [BECOME [t_i<*STATE*>]]] (x が痕跡 t を残して上昇)

さて、(10c)のうち、元の動詞によって語彙的に指定されているのは、下線を引いた部分のみである。そのため、それ以外の部分(これには ACT<*MANNER*>も含まれる)は、Rothstein (2004: 49)の言うように、文脈から語用論的に読み込まれることになる。このように鋳型の中に語彙的に未指定の部分がある場合、その未指定の部分が指示表現(R-expression)として文脈から自由に内容を求めると本稿では仮定する。

(11) [[x_i ACT<*MANNER*=R-expression>] CAUSE [BECOME [t_i<*STATE*>]]]

そして、内容として取り込めるのはその段階における事象の解釈と語用論的に適合するもののみであると本稿では考える。[2] このように考えることで、slowly が arrive と共起しないのに、同じ Achievement である come, go, enter や die と共起するという言語事実は、取り込める予備段階の長さの違いによるものとして説明することができる。つまり、arrive に想定される予備段階は、come などの予備段階よりも時間的に短く、その短さから自動的に、様態としての quickly という解釈が出てしまい、これが副詞 slowly と事象構造の融合に際して意味的適合性を満たさず、融合が不可能となるというわけである。

4. Accomplishment と副詞 slowly

最後に、動詞 break の場合、なぜ(2)で示されたように、その対象によって副詞 slowly との共起可能性が変化するのかを、事象構造に基づく形で説明する。RH&L (1998: 101)が述べているように、break を含む状態変化動詞というのは、どのような行為によってその変化が生じたのかという様態については、語彙的に未指定である。前節で導入した、鋳型中の語彙的に未指定な部分が指示表現として機能するという仮定に従うと、break の鋳型は RH&L (1998: 116)の挙げているものとは少し異なる次のようなものとなる。

(12) [[x ACT<*MANNER*=R-expression>] CAUSE [BECOME [y <*BROKEN*>]]]

(2)に即して、解釈の行われる仕組みを具体的に説明する。目的語が the glass の場合、「ガラスは一瞬で割れるもの」という百科事典的知識によって、それと語用論的に適合する、一瞬という非常に短い時間からなる過程が、<MANNER>の内容として取り込まれる。当然、それは instantaneously のような slowly と両立不可能な意味要素を含むため、副詞 slowly との融合が不可能となり、副詞 slowly は容認されない。次に、目的語が Bill's arm の場合を考えてみよう。一般に「人の腕は一瞬で折れることもあれば、ゆっくりと圧力がかかることによって少しずつ折れてゆくこともありうる」という認識がある。そのため、それと語用論的適合性をもつ過程は、そのアスペクト様態が未指定であり、それが<MANNER>の内容として取り込まれる。この場合、slowly と両立できない意味要素は含まれないので、融合が行われ、副詞 slowly は容認されるわけである。

5. おわりに

本稿では、RH&L (1998)によって提唱されてきた事象構造鋳型に基づいて、slowly の解釈メカニズムを提示した。本稿のように<MANNER>の内容が文脈から取り込まれると仮定することで、同じ Achievement や、あるいは同じ break という動詞でも、slowly と共起できる場合とできない場合があるという言語事実を、動詞の事象構造とそれに対する操作を、必要以上に複雑化することなく説明できる。仮に slowly と共起できる場合のみ Accomplishment の事象構造をもつとすれば、<MANNER>の内容によってその適用の可否が決定される複雑な[[x ACT<MANNER>] CAUSE ...]の付加や取り外しの規則を仮定しなければならない。しかしながら、語彙意味論では一般に、事象構造の転換規則は<MANNER>の内容によって左右されないと考えられているので、それに反するそのような規則を立てることは非常に問題である。そのような問題のない本稿の仕組みの方が、slowly との共起可能性を定式化するものとしては、より妥当であると言えよう。

注

*当日の発表で司会をして下さった久保進先生、および様々な形でこれまでコメントを下さった方々、とりわけ、児玉徳美先生、佐野まさき先生、西田光一先生、吉田幸治先生に感謝いたします。なお、紙幅の都合上、発表内容の一部しか論じられなかったことをご了承ください。

1. Borer (2005: 234)は Kim arrived slowly.という文を容認可能な例として挙げているが、筆者の複数のインフォーマントはこれを不可とした。
2. ここでいきなり、語用論的な適合性に言及するのは奇異に思われるかもしれないが、これは、統語的な指示表現の代名詞が、共起している動詞の意味と語用論的に合うものだけを指示対象とし、語用論的に合わなければ、人称・数・性が一致していても指示対象にできないのと同じである。

参照文献

Borer, H. 2005. *The Normal Course of Events (Structuring Sense Volume II)*. Oxford: Oxford University Press.

Ernst, T. 2002. *The Syntax of Adjuncts*. Cambridge: Cambridge University Press.

Goldberg, A. E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure.* , Chicago: The University of Chicago Press.

Levin, B. 1999. "Objecthood: An Event Structure Perspective." *CLS 35: The Main Session*, 223-247.

Pinker, S. 1989. *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure.* Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.

Rappaport Hovav, M. and B. Levin. 1998. "Building Verb Meanings." In M. Butt and W. Geuder, eds. *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, 97-134. Stanford, CA: CSLI Publications.

Rothstein, S. 2004. *Structuring Events.* Oxford: Blackwell Publishing.

Smith, C. S. 1997. *The Parameter of Aspect (Second Editioin)*. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.

Thomason, R. H. and R. C. Stalnaker 1973. "A Semantic Theory of Adverbs." *Linguistic Inquiry* 4, 195-220.

Travis, L. 1988. "The Syntax of Adverbs." *McGill Working Papers in Linguistics: Special Issue on Comparative Germanic Syntax*, 280-310.

Vendler, Z. 1957. "Verbs and Times." *Philosophical Review* 56, 143-60.

授与関係を示す補助動詞の語用論的考察
－「－てやる」「－てくれる」「－てもらう」－

松尾 貴哲（神奈川大学大学院）

＜要旨＞

本稿は、授与関係を示す補助動詞「－てやる／－てくれる／－てもらう」を関連性理論の枠組みで考察するものである。本稿は以下の2点を主張する。①「－てやる」は「アタエル」、「－てくれる／－てもらう」は「ウケトル」という概念を記号化し、発話の明示的側面つまり表出命題に貢献する語である。②「－てくれる」は行為者に、一方の「－てもらう」は受益者に話し手の注目が向けられていることを聞き手に指令する手続き的意味を記号化している語である。

【キーワード】

授与関係　補助動詞　視点　関連性理論　概念的／手続き的記号化

1. はじめに

大江(1975)によると、(1)ー(3)にみられる補助動詞「－てやる／－てくれる／－てもらう」は「動詞＋接続助詞て(で)＋動詞」とし、独立動詞と同等に二人の人物を項としてとると述べており、補助動詞と独立動詞の使用可能性に基本的な食い違いはないとする。

(1)　(母親と子供のやりとりについて)
　　絵を書くこと自体を褒めて、よくできたねとにっこり笑ってやった。
(2)　(図書館の文献複写サービスについて、友人にアドバイスをしているコンテクスト)
　　お願いすれば、すぐに取り寄せてくれるよ。
(3)　(先生が学生に対して)
　　来週の木曜までに、プロポーザルを提出してもらいます。

(1)では、母親の「笑う」という行為それ自体が授与対象と見なされ、受益者である子供の元へ与えられたと解釈される。(2)(3)も(1)と同様、いずれも授与対象が「モノ」ではなく「行為」であり、そして当該のコンテクストで与え手と受け手を同定させ、[X]が[Y]に[Z]を「やる／くれる／もらう」という授与関係を構築する共通点を持っている。この見解に異論はない。しかし、大江は3者の違いを「主観的感情の程度」の点にあると主張する一方で、視点や主観性というのは将来的には語用論の枠組みで考察すべきとの見解を示すに留まり、文法論と語用論の境界線を曖昧にしている分析がしばしば見られる。

久野(1978)は機能文法の枠組みで、「共感度」および「視点」という観点から両者の違いを説明している。たとえば(1)「にっこり笑ってやった」では主語、つまり行為者である母親に話し手の視点が置かれ、(2)「取

り寄せてくれる」では非主語、つまり非行為者である友人に話し手の視点が置かれる。この分析から久野は(4)が視点の論理的矛盾を引き起こし、ゆえに容認性が低いと主張する。

(4)　？？太郎が花子にクリスマスプレゼントを買ってやったのに、花子は彼に何も買ってやらなかった。
(久野 1978: 153)

しかし(4)はコンテクスト次第で容認可能であり、久野の分析が語用論的な説明に弱いことを意味する。結局のところ、主観性や視点というのは、ある事象つまり命題を「どのように解釈するか」であるから、純粋に語用論のフィールドで扱うことが、統一的な説明への最良の手段であると本稿は考える。

2. 関連性理論によるアプローチ

本稿は「ーてやる／ーてくれる／ーてもらう」の分析にあたり、関連性理論(Relevance Theory)の枠組みを用いる。発話解釈を人間の認知システムに立脚して考える関連性理論は、発話の明示的意味つまり What is said を、言語の記号化された意味を解読する言語モジュールと、他者の意図を推論する心の理論モジュールとの相互作用により同定されるものと考える。言い換えれば、話し手の意図した明示的な側面に到達するのに、聞き手には数々の意味拡充(enrichment)という語用論的解釈作業が課せられる。

語というのは独立動詞も含め、大概は概念を記号化している。1節で述べたように、補助動詞「ーてやる」「ーてくれる」「ーてもらう」が授与関係を構築する機能を有するという事実は、それらが概念的意味(conceptual meaning)を記号化し、発話の明示的側面に貢献することを示唆する。(5)はその証拠である。

(5)　　頼むから、妹を嫁にもらってやってくれ。

(5)は独立動詞「もらう」に加え、「ーてやる」「ーてくれる」が付与された3種の複雑な授与関係を表しているが、(1)ー(3)と同様の説明が可能である。末尾の補助動詞「ーてくれる」から、聞き手は2種の授与関係を内包した行為「妹を嫁にもらってやる」が、話し手に授与されることを期待しているのだと解釈するからである。このように授与関係を示す補助動詞は、授与関係を意味的に内包する独立動詞と干渉せず、さらなる授与関係を聞き手に構築させる機能を有している。すなわち概念を記号化していると言える。

しかし3者の「授与の認知的方向性」は一定ではない。「ーてやる」の場合は、与え手である話し手から授与が発信され、「ーてくれる」「ーてもらう」の場合は受け手である話し手に授与が接近する直感がある。本稿はこの直感を(6) にみるように、「ーてやる」が「アタエル」、「ーてくれる／ーてもらう」が「ウケトル」という概念を記号化していると分析し、(1)ー(3)は(7)のように意味拡充によって与え手、受け手、そして授与

対象を同定する語であると主張する。

(6)

ーてやる：アタエル	ーてくれる／ーてもらう：ウケトル

(7) a. [母親は][子供に]よくできたとにっこり笑い、[そして][母親は][子供に][にっこり笑うを]アタエル。

b. [図書館サービス課は][聞き手に][文献を]取り寄せ、[そして][聞き手は][図書館サービス課に][文献を取り寄せる]をウケトル。

c. [学生は][先生に]プロポーザルを提出し、[そして][先生は][学生に][プロポーザルを提出する]をウケトル。

3.「ーてくれる」「ーてもらう」の手続き的意味

(6)で示したように、「ーてくれる」「ーてもらう」が「ウケトル」という概念を共有することは、両者は同等の表出命題を復元することを意味する。事実、(8)などに見るように「ーてくれる」と「ーてもらう」は多くの場合で交換が可能である。しかし(9)は両者の決定的な違いを示している。

(8)　(鈴木がお金を貸していた友人の佐藤に会い、佐藤が鈴木にお金を返したコンテクストで)

山田：どうだった？

鈴木：うん、ちゃんと返してくれたよ／てもらったよ。

(9)　(交際を諦めた男性に対して)

諦めてくれたんじゃなくて、諦めてもらったのよ。

先行節も後続節も同等の命題を持つ(9)「ーてくれる」「ーてもらう」の違いを、本稿は手続き的意味(procedural meaning)に求める。Blakemore(1987)が初めて指摘したように、表出命題の同定には貢献せず、各命題がどのような関係にあるのかという推論的道筋を指示する意味を記号化している語がある。これを「手続きを記号化している」と呼ぶ。関連性理論によると、発話解釈は「我々の認知体系は関連性を最大にするように稼動している」という関連性の認知原理と、「発話はそれ自体最適関連性の見込みを伝達する」という関連性の伝達原理に制御されて行われる。関連性を有する情報というのは、最小の労力で適切な効果を生み出す情報のことを指し、言い換えれば、情報の処理に伴う労力が高いほど関連性は低くなり、また効果が高いほど関連性は高まるとされる。手続きを記号化している言語表現は、意図された認知効果を生み出す方向に聞き手を導き、全体として必要とされる労力を少なくすることよって、関連性に貢献していると考えられる。

(9)の先行節「ーてくれる」の場合、「男性自ら判断し、諦めたのだ」と解釈されるが、これは「ーてくれ

る」が、交際を諦める「行為者である男性に注目を寄せるように」聞き手に促していると考えられる。一方で後続節「ーてもらう」では「交際は無理であることを話し手自ら論したのだ」、言い換えれば授与関係の「受益者に注目するよう」指令することで関連性が達成される。すなわち、(9)の話し手は「ーてくれる」節の命題それ自体を否定しているのではなく、その命題に対する推論的道筋をメタ言語的に否定し、「ーてくれる」が記号化する手続きとは異なる扱いで解釈することを、後続節の「ーてもらう」発話で明示的にしているのである。これは、「ーてくれる」「ーてもらう」が、命題の形成には関与しない「推論的手続き」を記号化している一つの証拠となる。上記の見解から、本稿は2者の手続き的意味として(10)を規定する。

(10)

「ーてくれる」:行為者に注目せよ	「ーてもらう」:受益者に注目せよ

この手続き的意味に従うと、(8)の鈴木の発話が「ーてくれる」の場合、金を返す行為者である友人の佐藤に話し手の注目が置かれ、「ーてもらう」の場合、受益者である鈴木本人に注目を向けることをポイントしていると説明される。

以上の分析から、本稿は(11)を結論とする。

(11)

	ーてやる	ーてくれる	ーてもらう
Conceptual	アタエル	ウケトル	ウケトル
Procedural		行為者に注目	受益者に注目

4. おわりに

本稿は関連性理論の概念的／手続き的記号化の枠組みを用い、3者はまず概念的記号化のレベルで二極化され、そして手続き的記号化のレベルでさらに二極化されるという説明を試みた。しかし「ーてくれる」「ーてもらう」を比較考察すると、主格と対格のヴォイス的な特徴に気づく。これは統語論の観点からも考察すべきことを教えている。さらに格助詞「は／が」それ自体にハイライトの機能が存在するという議論にも対応しなければならない。問題は山積しているが、今後も慎重に議論を重ねていきたい。

Selected References

Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning: The Pragmatics and Semantics of Discourse Markers.* Cambridge: CUP.
Carston, R. 2002. *Thought and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication.* Oxford: Blackwell.
久野 暲. 1978. 『談話の文法』東京:大修館書店.
大江 三郎. 1975. 『日英語の比較研究　主観性をめぐって』 東京:南雲堂.
Sperber, D. and D. Wilson. 1986/95. *Relevance: Communication and Cognition.* Oxford: Blackwell.
山田 敏弘. 2004. 『日本語のベネファクティブ　—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』東京:明治書院.

複合格助詞「にとって」の生起条件について*

神戸百合香 (筑波大学大学院　jazzyyurika@hotmail.com)

＜要旨＞
複合格助詞「にとって」は、従来、統語的には付加詞、意味的には判断主を示すと分析されてきたが、興味深いことに、当該要素が生起する文の容認度に関しては母語話者間で揺れが生じる事実が観察されている。この事実に関し、本稿では、Goldberg & Ackerman (2001)によって提案された、「付加詞は新情報を担い、新情報を担わなければ生起できない」という語用論的な観点に立つことで、「にとって」の生起条件が説明されることを主張する。

【キーワード】複合格助詞「にとって」、付加詞、情報の有益性、属性記述文

1. はじめに

本研究は、日本語における複合格助詞「にとって」を考察対象とする。当該要素は先行研究において、統語的には、付加詞とも項とも分析される (Shibatani(1986)、眞野(2004)、杉本(2005)など)。その一つの判断基準としては、「に」格との交替可能性が挙げられ、付加詞タイプの「にとって」としては(1a)の例が相当し、項タイプの「にとって」としては(1b)が例として挙げられる。

(1)　a.　米ソにとって/* に中心的な課題は安全の問題である。　(塚本 (1991:82))
　　b.　健にとってはこの服は大きい(こと)。　(眞野 (2004:80))
　　(cf.　健にこの服は大きい。(ibid.))

また、「にとって」の意味的特性に関しては以下のように分析されてきた。まず、当該要素は判断主を表す (寺村(1982)、杉本(2003))、あるいは判断基準となる判断主体・話し手を表す要素である(眞野(2004)、杉本 (2003))と考えられている。まら、「にとって」自体が可能的対比を表すとの指摘もある(杉本 (2003))[1]。さらに、野村 (1984)では、「にとって」があらわれる文は、何らかの形での判断文、つまり、主語についてのトータルな規定を述部とする文であると指摘されている。しかしながら、先行研究では当該要素の生起条件に関しては、詳細な検討はされていない。そこで、本稿では、付加詞タイプの「にとって」に焦点をあて、その生起は、Goldberg and Ackerman (2001)が提案した「情報の有益性」という概念に基づいて決まることを立証する。

2. 先行研究とその問題点

2.1 杉本 (2003)

杉本 (2003:88)は、「にとって」は可能的対比を表すと分析し、対比を表す「は」がない場合であっても、「にとって」には何らかの対比的な意味が含まれている感じがあると主張する。杉本のいう、可能的対比とは、以下のように定義される。

可能的対比とは、「a にとって P」という際に、a について P が成り立ち、かつ a 以外に P が成り立たないものが存在する場合がある。必ずしも対比されるものの存在が前提とされる必要はないから「可能的」であるという定義である。

この事実を、以下の文を例として確認する。

(2)　他の人はいざ知らず、それは太郎にとって思いもよらぬ出来事だったのである。　(杉本 (2003:88))

(2)は問題なく容認され、思いもよらぬ出来事だったという命題が、太郎にあてはまることを表している。

かつ、ここでは太郎以外の他の人に関しては、思いもよらぬ出来事だったという命題が成り立たないことがあらわされている。したがって、(2)における「にとって」は可能的対比をあらわし問題なく容認されるのである。

さらに三井 (2001)は、「にとって」の対比の解釈が当該要素の認可の際に重要なファクターであることを指摘している。

(3) a. *太郎にとって、彼女は魅力的だ。
b. 太郎にとって、彼女は魅力的ではない。
c. 自分と趣味を同じくする女性が好きな太郎にとって、彼女は魅力的だ。

(三井 (2001:24))

容認されない(3a)は、(3b)のように否定要素を加えたり、(3c)のように文脈が変わると容認される。(3b)では、「彼女は魅力的である」こと自体を否定しているのではなく、彼女は魅力的であると感じるのが「太郎」ではないという意味で容認される。その結果として、対比される「彼女は魅力的である」と感じる「第三者」が想起され、「にとって」は対比をあらわし問題なく認可されるのである。つまり、否定が対比の解釈を助けているのである。(3c)の場合は、修飾句の登場によって、「自分と趣味を同じくする女性が好き」ではない「第三者」を対比される対象として捉えやすくなっていると考えられるため、(3b)と同様に「にとって」は認可される[2]。

杉本および三井の分析を踏まえると、「にとって」は（可能的）対比をあらわせば認可されうると考えられるが、実際には以下にあげる問題点が存在する。

2.2 問題点

2.2.1 「可能的対比」の問題点

まず、「可能的対比」という概念そのものに問題があることを示す例が存在する。杉本 (2003:90)は、Pが成り立たないものが存在しないことが意味されても自然な文もあると指摘し、例として、「全ての人にとってこの問題は難しい」という文を挙げている。さらに、(4)の文が容認されることも杉本 (2003)では説明できない例であると思われる。

(4) 全ての人にとってこの問題は難しいが、あの問題は簡単である。

ここでは、「にとって」句内に「すべて」という要素があることから、対比されるものの存在は前提とされない。さらに、主語である「この問題」と「あの問題」の対比という主語間の対比 (=判断対象の対比)があらわされていると感じられる。

2.2.2 文脈がととのうと容認される例の説明に関して

杉本の主張によると、文脈によって可能的対比が保障されれば「にとって」は容認されるという論理になるのであるが、可能的対比という概念に問題があるとすると、以下にみる文脈による容認度の揺れをどのように説明するのかが新たな課題となると思われる。

(5) a. * 太郎にとって(は)、このカーテンは赤い。 (杉本 (2003:92))
b. 視覚障害のある太郎にとって(は)、このカーテンは赤い。

(5)のような事実に対して、本研究では、Goldberg and Ackerman (2001)によって提唱された付加詞に対する生起条件にもとづいて、「にとって」の生起条件を提案する。次節で、まず、Goldberg and Ackerman (2001)の分析を概観する。

3. 「にとって」の生起条件

Goldberg and Ackerman (2001:798-799)は、「付加詞は新情報を担う焦点であって、談話内で有益な情報を与える。有益な情報をもつ付加詞は、統語的には付加詞であっても、談話上は義務的要素である。そして、付加詞的要素は談話内で有益な情報を与える場合のみ、生起可能である。」と主張する。この分析に素直に従うと、「にとって」の生起条件として(6)の仮説が立てられる。

(6)　「にとって」は、談話内で有益な情報を与える場合のみ生起可能である。

そして本稿では、談話上「有益な情報」とは、「にとって」が生起する構文、つまり属性記述文の機能を考慮すると、主語の特性を際立たせるような情報であると主張する。

次節では、仮説(6)を用いて実例を検証する。

4. 検証

まず、(7)の文を検証する。

(7)　全ての人にとってこの問題は難しいが、あの問題は簡単である。　(=(4))

この文は可能的対比の解釈がキャンセルされるのにもかかわらず、容認される例であった。(7)については、対比の焦点が「全ての人」から「この問題」と「あの問題」にシフトしていると思われる。つまり、可能的対比がキャンセルされると思われる場合、話者は判断主体ではなく、主語である"判断対象"を対比することで「にとって」文を認可するということである。これを言い換えれば、(7)においては、この問題が難しいという特性と、あの問題が簡単であるという特性が並列的に述べられており、それに加えて、この特性がすべての人が感じていることも同時に意味されている。したがって、(7)においてはただ単に「この問題が難しいが、あの問題は簡単である」というよりも、それぞれの問題の特性が際立っていると考えられる。結果として、「にとって」があらわれることで主語の特性が際立つことになり、当該要素は(6)に反することなく容認されるのである。また、「にとって」が生起する文において判断対象である主語が対比の対象となることがあるという主張は、「にとって」が生起する文がもつ構文としての機能、つまり、主語についてのトータルな記述をするという構文の機能によって保証される[3]。

次に、(8)の例を検討する。

(8)　a. *　太郎にとって(は)、このカーテンは赤い。
　　b.　　視覚障害のある太郎にとって(は)、このカーテンは赤い。

(=(5))

(8)の容認度の差に関して、本稿では以下のように考える。「このカーテンは赤い」という場合、赤さという特性は、客観的な事実であり判断主を引き合いに出すことで、赤さが増減するものではない。したがって、そもそも判断主および、判断の基準を引き合いに出すこと自体が、カーテンは赤いというような、あるモノが持ち備えている客観的な属性を述べる場合には無意味であると考えられる。したがって、(8a)のように「にとって」を引き合いに出すこと自体が冗長的であり、当該要素が主語の特性を際立たせるような情報を担っているとは考えられない。よって、(6)の条件に違反し「にとって」句は生起できないのである。一方、(8b)の場合は、「にとって」内には視覚障害のある人物があらわれている。したがって、(8b)における太郎は、普通の人が赤と判断するものに対しても、自身の障害ゆえに普通の人とは異なった色彩判断をすると考えられる。そして、誰が判断するかによってカーテンの色が変わるという場合は、判断主を取り立ててカーテンの赤さという特性をのべる価値があるといえる。したがって、(8b)の「にとって」句は主語の特性を際立たせる有益な情報をもつため、(6)の条件を満たし問題なく生起できるのである。

本節の議論から、「にとって」は、談話内で有益な情報を与える場合のみ生起可能であることが明らか

になった。さらに、「にとって」がもつ新情報により、判断対象である主語の対比があらわされる場合もあり、当該要素が主語の特性を対比させるのに際立たせるような情報を担う場合においても、談話において「にとって」はなくてはならない存在、つまり義務的な要素であるということが考察された。

5. まとめ

以上の議論を踏まえ、本稿では、「にとって」は談話内で有益な情報を与える場合のみ生起可能であり、当該要素がもつ有益な情報とは、主語の属性を際立たせるような情報であり、その情報を「にとって」が担うことによって、判断対象である主語の対比があらわされる場合がある事実を指摘した。

今後は、「にとって」と「でさえ」といった取りたて詞との関連性、および、一般に「大主語構文」といわれる類の構文と「にとって」との関連性を課題として研究していきたい。

注

* 本稿は、第9回日本語用論学会 (於：桃山学院大学)におけるロ頭発表の一部を改定したものである。発表時、そして本稿の準備に際し、多くの方から貴重なコメントを頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。なお、本文中の誤りは、すべて筆者の責任である。

[1] 杉本 (2003)の基本的な立場は、「にとって」は意味的に可能的対比を表すという立場であるが、語用論的に含意されうる可能性も示唆している。しかしながら、その時点で、可能的対比が意味的なのか語用論的なのかは積極的な議論をせず、関連する根拠も示していない。そのため、本稿では、「にとって」は対比の意味をもつという指摘が山岡 (2000)にあることも踏まえ、対比の意味は意味的に存在するという立場をとることにする。

[2] 杉本 (2003)は、「にとって」が名詞文に認可される例も扱っているが、本稿では紙面の都合上、割愛する。詳細は、杉本 (2003)を参照のこと。

[3] 焦点のシフトが起こることに関しては、(7)に限ったことではなく、否定文においても起こりうる現象であることが指摘されている (原田 (1982)、杉本 (2003))。通常、「行かない」というと、否定辞は直前の要素を否定するものであり、この場合は、動詞「行く」が否定される。一方、「雨はざあざあとは降っていない」では否定辞は直前の要素である「降っている」ことを否定しているのではなく、降り方が「ざあざあと」とではないことが意味される。結果的に、「降っていること」と「降っていないこと」との対比ではなく、「ざあざあと」という降り方とそれと対比される「ざあざあと」以外の降り方が想起されているのである。このように、否定辞の焦点が直前の要素から「ざあざあと」にシフトすることは、「にとって」が生起する文における焦点のシフトと共通する現象であると思われる。

参考文献

Goldberg, A. and F. Ackerman/ (2001) "The Pragmatics of Obligatory Adjuncts," *Language* 77. 798-814.

Shibatani, M. (1986) "On the Transitivity of the Stative Predicate Constructions." *Working Papers from the First SDF workshop in Japanese Syntax*, 68-147. Dept. of Linguistics, University of California.

原田登美 (1982) 「否定との関係による副詞の四分類ー情態副詞・程度副詞の種々相ー」, 『国語学』 122-138.

眞野美穂 (2004)「与格主語構文の構造についてー「ニトッテ」との交替現象からの一考察ー」, *KLS* 24. 78-88.

三井正考 (2001) 「ニトッテ格の共起条件」, 『新潟大学国語国文学会誌』 43. 12-38. 新潟大学.

野村剛史 (1984) 「〜にとって/〜において/〜によって」, 『日本語学』 3:10. 60-66.

杉本武 (2003)「複合格助詞「にとって」について」, 『文芸言語研究』 44. 79-100. 筑波大学.

杉本武(2005)「「にとって」句の主語性について」, 『日本語複合格助詞の体系化に向けた記述的研究』, 151-158. 筑波大学.

塚本秀樹 (1991)「日本語における複合格助詞について」, 『日本語学』 10. 78-95.

寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味　I』くろしお出版.

山岡政紀 (2000)『日本語の述語と文機能』くろしお出版.

日本語の「直示的アスペクト」について

澤田　淳
京都大学大学院／日本学術振興会特別研究員

〈要旨〉

本稿では、「てくる」と「ていく」のタ形が表す時間認識の非対称性について考察を行い、次の結論を得た。「てきた」は、過去のある時点に視点を置いた過去の時間認識のみならず、「今／ここ」の現場に視点を置いた現在の時間認識を表すことができるのに対し、「ていった」は過去のある時点に視点を置いた過去の時間認識しか表すことができない。この時間認識の非対称性は、迎える側に視点を置く「てくる」と、見送る側に視点を置く「ていく」の直示性の違いから原理的に説明される。

【キーワード】：直示、「てくる／ていく」、変化アスペクト、時間認識の非対称性

1．はじめに

一般に、「てくる／ていく」のアスペクト用法には、大きく、「継続アスペクト」の用法と、「変化アスペクト」の用法がある点が知られている（坂原（1995: 128）、益岡（1997: 185）、澤田（2006: 129）等）。

本稿では、益岡（1997: 185）の次の規定を踏まえ、「変化アスペクト」の「てくる／ていく」のタ形が表す時間性について考察する[1]。

(1) テイクは基準となる時点以後の展開を、またテクルは基準となる時点までの展開を、それぞれ問題にする。（益岡 1997: 185）

2．「てきた」と「ていった」の「た」

（主節の）「た」には、次のような否定形式との対応関係から、「過去」と「現在完了」（ないしは「現在パーフェクト」）の意味があるとされる（寺村 1984: 322）。

(2) A：もう昼飯をたべたか。　B：いや、{まだ食べていない／*食べなかった}。
(3) A：きのう昼飯をたべたか。　B：いや、{*まだ食べていない／食べなかった}。

本稿では、「ていった」の「た」と異なり、「てきた」の「た」が「過去」のみならず、「現在完了」を表すとする次の仮説を論証する。

(4)「てきた」と「ていった」の時間認識の非対称性：
「てきた」は、過去のある時点に視点を置いた過去の時間認識のみならず、「今／ここ」の現場に視点を置いた現在の時間認識を表すことができるのに対し、「ていった」は過去のある時点に視点を置いた過去の時間認識しか表すことができない。

次の (5)、(6) は、それぞれ、「現在完了」、「過去」として用いられた「てきた」の例である。

(5)「暗くなってきたよ。車に気をつけてね。」(「現在完了」)　(『讀賣新聞』2001年2月20日)
(6)「でも、そのころから、感動するような写真が渡良瀬では徐々に撮れなくなってきた」と振り返る。(「過去」)　(『讀賣新聞』1999年8月27日)

一方、次の (7) は、「過去」として用いられた「ていった」の例である。

(7)「時には、新規の患者が十人以上もやってくる日があった。あのころ、空が日に日に暗くなっていったのを覚えている。何か変だと思った」。(「過去」)　(『讀賣新聞』2000年3月12日)

(5) の「てきた」(=「現在完了」) は、次のように、「ていった」に置き換えることができない。

(8) 暗くなっ {てきた／*ていった} よ。車に気をつけてね。」(=5)

一方、(6) の「てきた」(=「過去」)、(7) の「ていった」(=「過去」) は、それぞれ、「ていった」、「てきた」に置き換えることができる (ただし両者のニュアンスは異なる。この点については3節で論じる)。

(9)「でも、そのころから、感動するような写真が渡良瀬では徐々に撮れなくなっ {てきた／ていった」と振り返る。(=6)
(10) あのころ、空が日に日に暗くなっ{ていった／てきた}のを覚えている。(=7)

3.「てきた」と「ていった」の時間認識の非対称性

「ていった」と異なり、「てきた」が「現在完了」の場合でも用いることができる点は、「ていった」と異なり、「てきた」が、副詞「もう」と共起するという事実から確かめることができる。

(11) もう薄暗くなっ {てきた／*ていった} のに、小学二年生の長男が、そろばん教室から帰ってこない。家を出てもうすぐ二時間。遅過ぎる。　(『讀賣新聞』2000年1月25日)

(4) の一般化によれば、「てきた」と「ていった」の以下の文法性の違いも説明できる。
第1に、「てきた」と異なり、「ていった」は、「今／ここ」を表す表現と共起できない事実が説明できる[1]。

(12) この車もだいぶ汚れて {きた／*いった} なあ。
(13) 今ごろになって薬が効い {てきた／*ていった} よ。
(14) 養蚕や牛馬市で栄えていたころを覚えているので、だんだんさびれ {てきた／*ていった} 今の木之本を残念に思います。　(『朝日新聞』2005年5月16日)

第2に、「てきた」と異なり、「ていった」は、認知主体の現在の感覚・感情を表す述語と共起できない。

(15)「そろそろ、おなかがすい｛てきた／*ていった｝な」。　(『讀賣新聞』2004 年 5 月 17 日)
(16) 部活の弓道部も最近楽しくなっ｛てきた／*ていった｝ので、書道と両方頑張って行きたい。
(『讀賣新聞』2000 年 2 月 25 日)
(17)「年内はいるけれど、来年は分かりません。寂しくなっ｛てきた／*ていった｝ので。そろそろ日本で就職活動をしようかとも考えています」　(『讀賣新聞』2003 年 2 月 14 日)

以下の例のように、認知主体の過去の感覚・感情であれば「ていった」でもよい（本文は「ていった」である)。これは、「ていった」が過去の時間認識を表すとした（4）の一般化から予測可能である。

(18) 特に強い思い入れもなく就いた教職。しかし、次第に子どもが好きになり、その成長を見るのが楽しくなっ｛ていった／てきた｝。　(『讀賣新聞』2001 年 2 月 26 日)
(19) 酒が入って気が大きくなったのか、彼のうそがエスカレートしていった。そして、寂しくなっ｛ていった／てきた｝。　(『讀賣新聞』1992 年 12 月 27 日)

このように、「過去」で用いられる場合の「てきた」と「ていった」は、基本的に置き換えが可能である（(9)、(10) も参照)。しかし、そのニュアンスは異なる。「てきた」の場合、事象の成り行きが「主観的」に、「ていった」の場合、それが「客観的」に描かれているように感じられる（それゆえ、「てきた」のほうが当事者性、体験性が強い)。このニュアンスの違いは、事象を迎える側から捉える「てくる」と、それを見送る側から捉える「ていく」の直示性の違いから生じる。すなわち、事象を受け止める側に視点を置く「てくる」の方が認知主体と事象との関わりが強いのである。

4．「てきた」、「ていった」の時間認識の非対称性と直示性

以上見てきた「てきた」と「ていった」の時間認識の非対称性は、次のように図示される（C＝認知主体、D＝認知領域、t＝時間の流れ)。図 1 では、左から順に、「過去」の「てきた」、「過去」の「ていった」、「現在完了」の「てきた」となっている[2]。

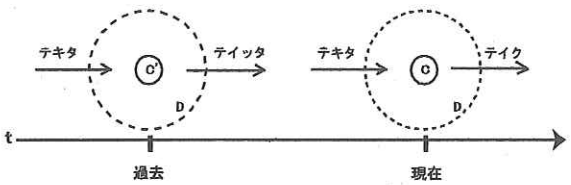


図 1　「てきた」と「ていった」の時間認識の非対称性

では、なぜ、「てきた」の「た」は「現在完了」の意味を表せるのに対し、「ていった」の「た」は表せないのであろうか。この理由は、図 1 から明白であろう。「現在完了」は、過去の不定時に生じた事象が、発話時とかかわりがあるという話し手（もしくは、認知主体）の認識を示し、事象を現在の視座から眺めるものである。迎える側に視点を置き、そこから事象の変化・推移を捉える「てくる」の直示性は、この現在完了の特性と整合するが、見送る側に視点を置き、そこから事象の変化・推移を捉える「ていく」の直示性は、この現在完了の特性とは整合しないのである。

5．おわりに

本稿では考察の対象とはしなかったが、「継続アスペクト」の「てきた」、「ていった」においても、「てきた」と異なり、「ていった」は、「今／ここ」に視点を置いた現在の時間認識を表すことができない。

(20) これまで色々なアルバイトをし｛てきた／*ていった｝。(現在完了)

しかし、興味深いことに、「変化アスペクト」の場合と異なり、「継続アスペクト」の「てきた」は、過去のある時点に視点を置いた過去の時間認識を表しにくい[3]。

(21) a. ??一昨年の春まで色々なアルバイトをしてきた。(「過去」)
b. 一昨年の春から色々なアルバイトをしていった。(「過去」)

なぜ、「変化アスペクト」の「てきた」と「継続アスペクト」の「てきた」とでは、時間認識に差が出てくるのだろうか。この問題については今後多角的な観点から考察してみたい。

注

1. 次の例は、「今／ここ」の表現が存在しないが、現在の状態を二十年前の状態と比較している文脈となっている。それゆえ、「ていった」は不自然となる。
(i)「二十年前と比べると、都会人の顔つきが、暗くなっ｛てきた／*ていった｝気がする。出会いを大切に、彼らの心の糧となり続けたい」 (『讀賣新聞』1997年8月26日)
2. 現在から未来への事象の変化は、図1に示すように、ル形の「ていく」で表されることになる。
(i) まさに、「早起きは三文の得」。今も早起きはつらいし、これから寒くなっていくが、この習慣は持続したいと思っている。 (『讀賣新聞』1999年11月5日)
興味深いことに、(i) は、次の (ii) のように、「てくる」で表すこともできる。
(ii) これから寒くなってくるが、この習慣は持続したいと思っている。
「ていく」の場合、基準時は現在に置かれ、そこから事象を見送るというニュアンスがある。一方、「てくる」の場合、基準時は未来のある時点に置かれ、そこで事象を受け止めるというニュアンスがある。
このようなニュアンスの違いがゆえに、どちらか一方が不自然となる場合がある。たとえば、次のように、事象が不定疑問によって表された場合、「てくる」は不自然となる。不確かな方向への事象の進行は迎える側に視点を置く「てくる」と相容れないからである。
(iii) 我々の生活はこれからどうなっ｛ていく／??てくる｝のだろうか。
3. また、未来のある時点にも視点を置きにくい (「??来年の春まで色々なアルバイトをしてくるだろう」)。

引用文献

益岡隆志 (1997)『複文』東京: くろしお出版.
澤田淳 (2006)「「てくる」における起動アスペクトについて—認知言語学的アプローチ—」『日本言語学会第133回大会予稿集』pp. 129-134.
坂原茂 (1995)「複合動詞「V て来る」」『言語・情報・テクスト』2: 109-143. 東京大学.
寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味II』東京: くろしお出版.

「ものだから」の考察
－日本語らしさとの関わり

松田　瑞江
早稲田大学大学院
kono87sakuya@suou.waseda.jp

＜要旨＞
本稿では、理由説明表現である「ものだから」が、話者の心理面において異なる二つの場面で、一つは一般知識として共有することを前提として強く働くのに対し、もう一つは状況的因子を活用し操作的に働くと分析した。文法的に問題のない類似する複数表現のなかから、ある表現が選ばれるプロセスにおいて、その言語に特有の傾向があるとすれば、その傾向を分析することでその言語らしさが捉えられるのではなかろうか。日本語らしさとの関わりにおいては、「ものだから」が選ばれるプロセスから、「状況中心」的な表現志向が見出された。また、情報内容・量が、話者選択に委ねられている点において、「日本語らしさ」そのものもある幅をもって考察されるべきであると指摘する。
【キーワード】：日本語らしさ、意図性因子、状況的因子、操作的用法、情報量

1.　はじめに

本研究では、日本語の「ものだから」という表現の用法を分析し、更に「日本語らしさ」との関わりについて考察した。

まず先行研究を見ると、三尾（1942、1958 改訂）は「から」が純粋にはっきりと理由・原因を示すのと比べ、はっきりと理由・原因を示さない程度は「ので」とほとんど同じであるとし、また「ものだから」は「から」とは別に、独立した接続助詞と考えるべきであるとしている。

永野（1952、1953）は、客観的描写の形の「ものだ」は、「ので」の意味と非常に近いが、「から」を含むため「ので」よりは主観性が強く、「もの」を含むため「から」よりやわらかく感じられるニュアンスをもつとし、また「もの・だ・から」の三語からなっているが、この「もの」は実質的意義をほとんど失い、形式化しており「ものだから」は、全体で一つの辞としての特有の表現価値を持っているので、複合助詞[1]と扱う方がよいとしている。

分析資料として、小津安二郎監督映画の 25 作品に「ものだから」が表出しており、その総数 60 個のうち、「もの」が「（という）状況」に置き換え可能な数が 54 個あり、また、話者に負荷がかかる場面での使用が 29 個、負荷がかかりそうにない場面での使用が 25 個であった。

2.　「ものだから」の分析

形態的に「ものだから」は「もの・だ・から」に分けられるが、全体で一個の独立した接続助詞（複合助詞）と考えるべきであると、上記、先行研究で主張されていた。本稿においても、同様に一個の「複合助詞」として扱う。その理由として、注 1 にあるような、「独特の表現価値を分担」するだけでなく、従来分析されてきた文末モダリティ「ものだ＋から」の分節では、動詞接続制限によって意味役割[2]が異なってくることを重視したためである。

また、同じような形態の「のだから」に比べ、「ものだから」についての研究は、上記、先行研究以降あまり進んでいない。「ものだから」を「ので」の代用（三尾）であるとか、「よりやわらかく感じられるニュアンスをもつ」（永野）という、やや曖昧に感じられる説明の具体化を目指し、発話者の心理・意図などに考慮しつつ、より精密な分析を試みた。

2.1. 分析方法と仮説

この複合助詞は、何らかの理由説明の場で使用されている。その発話者の心的状況を考慮すると、大きく異なる二つの場面に分けられた。すなわち、(1) 話者に負荷のかかることが明らかな場面と、(2) 話者に負荷のかかりそうにない場面である。また、話者の心的負荷如何に関わらず、「ものだから」に先行する文が「（という）状況」を説明する連体修飾関係であること、「もの」≒「（という）状況」に置き換えることが可能であった。上記の点を確かめたうえ、分析を行い以下の仮説を立てた。

「ものだから」を用いることで、個人的（個別的）意図性因子から一般的あるいは状況的因子に置き変えることが可能となる。因果関係を個人に帰することを避け、より一般性の高い理由づけが求められる場面で有効に働き、そこに「日本語らしさ」のあるやりとりが生まれるのではないか。

2.2. 異なる二つの場面（具体例）

(1) 話者に負荷有り（言い訳等）、(2) 話者に負荷無し（挨拶等）。（下線は筆者。以下同様）

(1) 周吉：いやァ　ゆうべは久しぶりに友達に会ったもんだから…　（東京物語[3]：d-4）
(1)'　　いやァ　ゆうべは久しぶりに友達に会った状況だから…

この場面での理由づけは「そのような状況では仕方なく」つまり、「自分の意思でやったことではない」という言い訳となっている。(1)のような場面では、個人的（自己中心的）理由づけは文法的には正しくても発話場面では、避けられる傾向にあるのではなかろうか。

(2) アヤ：ちょいとそこまで来たもんだから…　（麦秋[4]：90）
(2)'　　ちょいとそこまで来た状況だから…

(2) の例は、ほとんど新たな情報が加えられていない「慣習的な用法」である。挨拶的に用いられ、答えたくなければ答えなくても良いが、何も言わないでは失礼になるような場面で使用されることが多い。他の例として、「どこ行くの？」という問いかけに対して「あんまりお天気がいいもんですから」（麦秋：25-26）があった。

2.3. 二つの場面（用法）の分析

(1) が理由づけとして働き、且つ「日本語らしい」理由と感じられるのは何故か。それは、認知言語学でも言及されている出来事を「状況中心」[5]に捉え表現する言語の志向性とも関連すると思われる。(1) の場面のように、「久しぶりに友達に会った」ことが、多少羽目を外すくらい飲みすぎてしまうことの理由づけになり得るのは、一般論として「久しぶりに友達に会ったら飲むことになる」という多

くの人に同意が得られるであろう知識（世界知識）を、聞き手とも共有していることを話し手が前提にしているからではなかろうか。「ものだから」に個人的（個別的）意図因子性ではなく、一般に了解されたものとして提示する働きがあるとする仮説に準ずるならば、(1) の場面（用法）は話者の行為を受け入れさせる「ものだから」の持つ強い機能を利用したといえる。また、そのことに聞き手は必ずしも同意しなくても良い。重要なのは、(1) の場面で会話として成立し伝達されているものが、理由として言われた内容云々ではなく、「一般的知識として聞き手とも共有していることを話し手が前提」としている点であると考えられることである。

それに対して、(2) のように挨拶的に用いられる「ものだから」は、「ものだから」が強い因果性を感じさせない効果[6]を利用した「操作的」用法であると考えられる。つまり、「から」等を使うことによって「ちょっとそこまで来た」ことと、「実際にやって来た」ことの事実の相関をハッキリ言い切ると具合が悪くなるときの回避に用いられるのである。例えば、用例で使われているような場面で、「大した用事ではない」あるいは「あまり理由を言いたくない」という言外の意図を伝えたいときに有効に働くのである。要するに、(2) のように話者に負荷がかかると見えないような場面での使用では、「弱い因果関係」を示す標識として機能していると考えられる。

3.　情報量について

(3)　紀子：何かご用？小母さん
　　たみ：いいえね、さっきあんまり混んでいたもんだから、上野の停車場...
　　紀子：なァに？
　　たみ：まわりに人がウヨウヨいるでしょう？まさかねえ、そんなとこで聞けもしないし、今もデパート歩きながら考えたのよ
　　紀子：なんのお話？　（麦秋：107）

(3)'　上野の停車場あんまり混んでいた状況だから、そんなとこで聞けもしない

紀子には、たみが何の用事で来たのか分からない。質問がもう1度繰り返えされ、ようやく「上野の停車場あんまり混んでいたもんだから」の言及先が分かる。しかし、まだ腑に落ちない紀子は更に、「何のお話？」と訊く。たみが逡巡している思い（言いづらい内容）などが紀子には分からない。「もの」が表す「状況」とは、そもそもこのように曖昧な性質をもつと言える。それゆえ、「もの」を修飾する文に盛り込まれる内容・量によって、限定あるいは特定される必要がでてくるのである。(3) の例では、話者の説明する「状況」の内容・量の加減が、聞き手にとって十分でなかったため、コミュニケーションがうまく行われなかったことを示している。但し、たみの心情が観客に伝わるのは別の問題である。

4.　まとめ

以上の結果から、「p[7]＋ものだから」の用法とは、話し手が聞き手の推論力を前提に、それまでの人間関係やつきあいの経験などを考えながら、p に盛りこむ情報内容・量を加減する作業性の高い言語運用であると考えられる。（実際、大人が主な使い手である）。仮説の「個人的（個別的）意図性因子から一般的あるいは状況的因子に置き変えることが可能」とする「ものだから」を用いることで、「『日

本語らしさ』のあるやりとり」が求められたとも換言できるだろう。そこから（2）のような挨拶的な慣用用法までも生まれたのではないだろうか。

また、連体修飾関係にある「（という）状況」を説明する先行文を分析した結果、どれ程の情報内容・量を盛り込むかは、話者の随意であることも明らかになった。この情報内容・量が、話者の裁量に任されている点において「日本語らしさ」そのものも、ある幅をもって考察することが妥当であると指摘したい。

＊本論文は、日本語用論学会第9回大会（2006年12月9日於桃山学院大学）での口頭発表に、加筆修正を加えました。発表会場において、加藤重広先生、杉本孝司先生から貴重なコメントを頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

注

1 「ものだから」の複合助詞の認定として、類語（意味の近似した他の助詞や複合助詞）の中にあって、全体一語として独特の表現価値を分担している点をあげている。

2 以下のa,bの例のように、過去形接続であると「回想」の意味になるが、「会ったものだから」は「回想」の意にならない。

a　祭りでは、浴衣を着るものだ。（非過去接続：当為）

b　祭りでは、浴衣を着たものだ。（過去接続：回想）

3 東京物語（19‥）[野田高梧、小津安二郎][脚本]松竹

4 麦秋（19‥）[野田高梧、小津安二郎][脚本]松竹

5 日本語と英語の好まれる表現構造として、英語では人間中心であるが、日本語では状況中心に語られる傾向があるとしている。（本多：2005, 151）

6 この効果は（1）の個別的意図性因子を一般的・状況的因子へ置き換える機能を1次的機能とすると、その機能の2次的（副次的）機能から生まれるのではないかと考えられる。

7 連体修飾関係にある p は、ものを修飾する文である。今回の分析「もの≒状況」のどんな状況であるかを説明する文を指す。

参照文献

Brown, P., and S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

本多　啓. 2005.『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象』東京：東京大学出版

三尾　砂. 1942.『話言葉の文法（言葉遣篇）』東京：帝國教育會出版部（改訂版 1958.『話しことばの文法』東京：法政大学出版局、1958.「話しことばを書き終えて」『実践国語』9-212、2003.『三尾砂著作集Ⅱ』東京：ひつじ書房

永野　賢. 1952.「『から』と『ので』はどう違うか」,『国語と国文学』,334, 30-41、1953.「表現文法の問題—複合辞の認定について—」『金田一博士古希記念言語民俗論叢』東京：三省堂、1970.『伝達論にもとづく 日本語文法の研究』東京：東京堂出版

日本語記述文法研究会編. 2003.『現代日本語文法4　第8部　モダリティ』東京：くろしお出版

野田春美. 1995.「『のだから』の特異性」仁田義雄編『複文の研究（上）』東京：くろしお出版

Sweetser,Eve.E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge：Cambridge University Press.

田中　寛. 2004.『日本語複文表現の研究—接続と叙述の構造—』東京：白帝社

角田三枝. 2004.『日本語の節・文の連結とモダリティ』東京：くろしお出版

Semantic extension of English adjectives: focusing on "form" and "use"

Yoshikata Shibuya
National Institute of Information and Communications Technology

Abstract: This article discusses the semantic extension of English adjectives. I will argue that semantic extension of an adjective is motivated by semantic, cognitive/behavioral, discourse-functional, and constructional constraints.
Keywords: semantic extension, adjectives, attribution, predication, synaesthesia

1. Introduction

This article discusses the semantic extension of English adjectives. Referring to Shibuya (2005), Shibuya and Nozawa (2003) (see also Shibuya *et al.* in press) and Shibuya (2006), I will argue that semantic extension of an adjective is motivated by semantic, cognitive/behavioral, discourse-functional, and constructional constraints.[1]

2. Motivation for semantic extension of an adjective

In Shibuya (2005), I argued that the construction plays an important role in determining the meaning of an adjective, suggesting that the attributive construction (e.g. *a yellow jacket*) activates a broader part of a relevant frame than the predicative construction (e.g. *His jacket is yellow.*) does. The empirical generalizations that I made in Shibuya (2005) are as follows:

- In the attributive construction, direct (non-metonymical) and indirect (metonymical) senses (both literal and metaphorical) are available, while in the predicative construction, only direct senses (both literal and metaphorical) are sanctioned.
- The attributive construction tends to have a larger number of metaphorical senses than the predicative construction, but metaphorical senses of the direct sense type can be original (i.e. only found) in the predicative construction.

I argue that the discourse function of attribution is to characterize the referent not only by the direct sense (literal and metaphorical) but also by the indirect sense (literal and metaphorical) so that the speaker can describe the referent in the way s/he wishes to (directly, metaphorically, and metonymically). It is this highly flexible conceptualization allowed by the attributive construction that often causes the emergence of a new indirect sense in this construction. As for predication, I suggest that the discourse function of predication is that it refers to the state of the referent that is immediately salient. Predication works well for aboutness. The poorness in the semantic diversity as confirmed in Shibuya's (2005) survey

reflects the function of predication in that it refers to the state of the referent that is immediately salient.

With the diachronic data, Shibuya (2005) shows that the indirect sense found in the predicative construction originates in the attributive construction (e.g. the evidential use of *serious*, meaning "suggestive of the person's seriousness"). The question to be addressed is: How does an indirect sense which originates in the attributive construction become available in the predicative construction? The scenario I provided in Shibuya (2005) is as follows:

Step 1: An indirect sense occurs in the attributive construction, motivated by the "constructional" property of the attributive construction.

Step 2: Shift of meaning from the constructional property to the "lexical" property, resulting in the occurrence of the indirect sense in the predicative construction.

The first step is where an indirect sense occurs. In the scenario hypothesized here, this takes place in the attributive construction (notice that this is actually suggested by the diachronic data). It is worth emphasizing that the occurrence of the indirect sense is motivated by the constructional property of the attributive construction. Note that the indirectness of the meaning is part of the constructional property. The fact that an indirect sense originates in the attributive construction is due to the fact that the attributive construction encourages an indirect sense to be evoked (i.e. the attributive construction activates the indirect element of the relevant frame).

The second step is where the shift of meaning from the constructional property to the lexical property takes place. This shift involves the process of the indirect sense becoming one of the polysemous senses of the adjective (form-function reanalysis). The indirect sense found predicatively is different from the one found attributively in that the former is motivated by the lexical property of the word, while the latter by the constructional property. The former (adjectival sense shift) is not adjectival metonymy. Adjectival metonymy is the case where the metonymy is on the adjective. The indirect senses found in the predicative construction are not adjectival metonymies. Their occurrence is not motivated by the construction. It is the lexical properties of the adjectives that motivate their occurrence in the predicative construction. By definition, the indirect sense found predicatively is not "really" indirect. The sense whose occurrence is motivated by the construction can be called a non-conventional metonymy, while the one whose occurrence is caused by the lexical property can be called a conventionalized metonymy which is well-entrenched in the lexicon of the language. In the sample of Shibuya (2005), a number of indirect senses were found predicatively. In my analysis, they are all conventionalized metonymies whose occurrence is motivated by the lexical properties of the adjectives.

I maintain that there are two factors working behind the mechanism hypothesized here. The first factor is to do with increase of frequency. The indirect sense with the highest frequency of use occurs predicatively (e.g. *healthy*'s causal type). The suggestion that can be made is that if the utilization of the indirect use happens frequently enough, the sense is taken into the meaning of the modifier (adjective), and then becomes available in the predicative construction. The increase of frequency of use leads to the

entrenchment of the indirect sense so that it is recognized as one of the polysemous senses of the adjective (i.e. recognized as part of the lexical property of the adjective), resulting in it being available in the predicative construction. I call this the "frequency" hypothesis.

The second factor that appears to be working behind the mechanism of semantic extension of an adjective as hypothesized above is to do with semantic constraints. Of the adjectives studied in Shibuya (2005) (i.e. the 50 adjectives), those with (an) indirect sense(s) available in the predicative construction are mostly adjectives of disposition *(brave, cheerful, clever, confident, sensible, serious, wise)* and emotions *(comfortable, sad)*. The fact that certain types of adjectives are more likely to permit an indirect sense in the predicative construction than others suggests that it is not only the increase of frequency but also the "semantic type of an adjective" that also motivate an indirect sense to occur predicatively.

It also appears that the sense type of an adjective also concerns the process for an indirect sense to enter the lexical property. The sample revealed that, in contrast with the indirect sense types such as "manner" (e.g. *his safe return from Philadelphia*), "causal" and "evidential" are very likely to be found predicatively. Note that *serious* is a "dispositional" adjective and the sense type in the examples below is "evidential", which is likely to occur in the predicative construction:

(1) a. "Champagne and popcorn pie," she said, struggling to keep a *serious* face. [FROWN_P.TXT: P18 218]

b. He nodded. "Please. If you're right, and the neuro test is OK, we'll have to get him straight back to Theatre. Or ..." The eyes which met hers were *serious*. [FLOB_P.TXT: P24 202]

My discussion so far has been concerned with the semantic, discourse-functional, and constructional constraints of the semantic extension of an adjective. I have emphasized that the attributive construction causes the emergence of a new indirect sense in this construction. In what follows, we will consider the fact that semantic extension often found in attribution does not occur randomly, by discussing other types of constraints.

Shibuya and Nozawa (2003) proposed a constraint called the Constraint of Sensory Co-occurrence, which reads: In a synaesthetic expression consisting of a modifier and a modified element, the modifier should cause a sensory reaction which is in a strong associative relation with the sense caused by the modified element. Discussing the cases such as *warm color* vs. ?? *red temperature* and *sweet smell* vs. ?? *smelly taste*, Shibuya and Nozawa argued that our adaptive behavior fundamentally forms the "structure of sensory experiences". That is, at the fundamental level, functional differences in sense modalities affect the frequency of sensory co-occurrence, and frequency of sensory co-occurrence is responsible for the formation of the structure of sensory experiences (i.e. it affects the acceptability of an expression). Shibuya and Nozawa also proposed another type of constraint called the Constraint of Emotional Similarity, which reads: In a synaesthetic expression consisting of a modifier and a modified element, the modifier should evoke an emotion which matches with the emotion evoked by the modified element. It was explained, for example, that in *sweet voice* and *fragrant music* it is not the sensory

co-occurrence but the emotional similarity that enables their understanding.

The constraints proposed in Shibuya and Nozawa (2003) are meant to apply to synaesthesia in attributive use only. In Shibuya (2006), I studied six synaesthetic adjectives (out of the 50 adjectives studied in Shibuya 2005) both in attribution and predication. The adjectives studied there were *bright*, *dark*, *loud*, *soft*, *sweet*, and *warm*. In Shibuya (2005), the maximum number of tokens collected from corpora was set to 300, but in Shibuya (2006) I studied all the instances found on the Dependency Index (the average total number of instances of the adjectives studied is 3,153).[2] Details of the study are beyond the scope of this paper, but I would just like to mention that the results provide a positive support for the frequency hypothesis, the cognitive and behavioral constraints proposed in Shibuya and Nozawa (2003), and also the other constraints as suggested above.

3. Conclusion

In this paper, I discussed semantic extension of English adjectives. The main points I have argued here are that semantic extension of an English adjective is motivated by semantic, cognitive/behavioral, discourse-functional, and constructional constraints. The new meaning that occurred, motivated by these constraints, becomes taken into the lexical property of the adjective, after having become entrenched through the increase in frequency. The metonymic senses that are found in predication are those that have become entrenched as part of the lexical property. Semantic extension does not occur independently of the language user's subjective interpretive efforts, and it seems to be the case that some sort of "pragmatic inference" (e.g. reanalysis) is involved in the process of semantic extension of an adjective.

[1] A lot of important discussions had to be omitted from the present article due to page number restrictions. Those interested in more details should refer to the works given in the references.

[2] `http://www.cs.ualberta.ca/~lindek/demos/depindex.htm`

References

Shibuya, Y. 2005. *Concepts and Constructions: An Ecological Approach to Adjectives*. Doctoral dissertation, University of Manchester.

Shibuya, Y. 2006. "A Constructional Approach to Synaesthesia." Paper presented at the 4th International Conference on Construction Grammar.

Shibuya, Y. and H. Nozawa. 2003. "Constraints on Synaesthesia." *Proceedings of the 29th annual meeting of the Berkeley Linguistics Society* (*BLS* 29), 403-414.

Shibuya, Y., H. Nozawa and T. Kanamaru. In press. "Understanding Synaesthetic Expressions." In P. Holz and M. Plümacher eds. *Speaking of Colors and Odors*, Amsterdam: John Benjamins.

使役構文の拡張と語用論的条件

鄭　聖汝
大阪大学
chung@let.osaka-u.ac.jp

＜要旨＞
本論文は、使役構文の成否に関する従来の二つの対立する見解に対し、第 3 のアプローチの可能性を模索したものである。ここでは、従来のように動詞からではなく、名詞句を基盤にした分析を提供する。なお、それによって、我々の日常的な経験的知識に基づく使役講文の拡張が説明される。
【キーワード】：使役構文、動詞、名詞句、潜在能力、合目的性

1. はじめに

使役構文の成否に関して、従来の使役研究では、次のように二つの異なる見解が示されている。一つは、70 年代から 80 年代の使役研究に主に見られる傾向であるが、「*椅子を倒させる」「*注意書を回らせる」のように、対応する自動詞の主語が無生物の場合は、一般に、使役文は成立しない、という指摘である（Shibatani 1973，寺村 1982，Miyagawa 1989，宮川 1989 など）[1]。これに対して、もう一つは、ある一定の文脈さえ与えられれば、上のような例も十分に成立しうる、という主張がある（定延 1991，Kuroda 1993）[2]。すなわち、後者では、使役構文には動詞の種類による制約はないことが示唆されている。例えば、次のような例である。

(1) a. 磁力／念力で椅子を倒れさせた。
　　b. 磁力／念力で椅子を舞台に上がらせた。　(定延 1991)
(2) a. 傾くままに傾かせておくより仕方がない。（ピサの斜塔について）
　　b. あのお湯は湧くままに湧かせておくより仕方がない。　(Kuroda 1993)

本論文の目的は、次の 3 点を明らかにすることである。（ｉ）使役構文の拡張を左右する意味的要因は何か。（ii）それは動詞から理解されるものか、名詞句（が表す存在物）から理解されるものか。（iii）この場合、かかわることになる語用論条件は何か。

まず第 2 節では、従来の研究で提供された言語事実を再吟味し、使役構文は、動詞ではなく、名詞句が指し示す存在物の種類によって、容認度が異なってくることを見ていく。この場合、その名詞句（が指し示す存在物）の意味性質として「潜在能力」を導入し、そこには、その存在物の本来の存在目的に見合ったものかどうか、という「合目的性」が関与することを認め、従来と異なった潜在能力の定義を試みる。第 3 節では、google 検索などを活用し、使役構文の更なる拡張の可能性を分析し、ここでもこの定義が有効であることを確認する。それによって、本論文では、名詞句が指し示す存在物に対する、我々の日常的な経験的知識に基づいた、自然な説明を試みる。結論として、使役構文の成否は、対応する自動詞文の主語名詞句の意味性質によって決定され、さらに、そこから喚起される語用論的状況に左右される、と結論される。

2. 使役構文の制約と名詞句の意味性質

従来の使役研究を参考にすると（Shibatani 1973、井上 1976:下、青木 1977、寺村 1982 等)、大体次のような文が作られる。(3-5）では、自動詞に二つの文、他動詞文と使役文が対応するが、使役文の場合は、名詞句の相違によって文の適格性が異なってくることが示されている。

(3) a. 粘土を｛固めた／*固まらせた｝。
　　b. ゼリーを冷蔵庫に入れて｛固めた／固まらせた｝。
(4) a. 注意書を｛回した／*回らせた｝。　(5) a. ゴミを下水に｛流した／*流れさせた｝。
　　b. 風車を｛回した／回らせた｝。　b. 汚染した水を下水に｛流した／流れさせた｝。

すなわち、これらの例からは、動詞が表すある事象に関して、ゼリー、風車、水などにはあって、粘土、注意書、ゴミなどにはない、と思われる存在物の何らかの意味性質があることを認めざるを得ない。それを、ここでは「潜在能力」(potent）とよぶことにする[3]。この用語は、基本的には、Shibatani（1976: 256）が許容使役の説明に用いた “inherent or programmed potentiality” を継ぐものであるが、ここではそれを発展させ、本論文のオリジナルな考えとして「合目的性」の概念を導入する。

(6) **潜在能力の定義**
潜在能力は、存在物の内的性質であり、外からの直接的な働きかけがなくても、当該事象を自力で引き起こしうるものとして、その存在物に本来的に備わっている（と理解される）性質である。但し、この性質により引き起こされたものと見られる事象は、その存在物の本来の（存在）目的に見合う、合目的性があるものでなければならない。

例えば、注意書と異なり、風車は自力で回れるように設計されている生産物であり、粘土と異なり、ゼリーもまた、その成分であるゼラチンの凝固する性質を利用して製品化されたものである。したがって、セリーが固まることは、生産物として本来の目的に見合った、合目的性から理解されるものである。これに対して、粘土が固まることは水分が蒸発することと理解され、むしろ、粘土の本来の存在価値を失ってしまうことを意味する。ゴミと水の相違に関しても、流れることに関して、それを内的属性として本来的に備わっているものかどうか、という知識が必要である。しかしながら、このような知識は、我々が存在物に対する科学的・専門的知識をもっているからではなく、我々の日常的な経験的知識に基づいて理解されるものである、と考えるべきであろう。

3. 拡張に見られる潜在能力とその認可

母語話者にとって、「*お湯を沸かせる」や「*アイスクリームを溶けさせる」のような使役文は、普通、容認されない。しかし、Google 検索(2004 年 11 月 26 日)では、「沸かせる」19300 件（可能の例が多い)、「溶けさせる」も 559 件のヒット件数がある。次のような例である。筆者の個人的な調査からも、これらの例はかなり容認度があがることが確認された。

(7) a. 私の好奇心を沸かせる本、リスト一覧。
　　b. 興奮する数学---世界を沸かせる 7 つの未解決の問題。
　　c. 大会を沸かせたヒーローたち。　d. 奥様をわかせた「ホット部門」。

(8) a. ・・・焼く色をつけるならオーブンを使いますが、「チーズを溶けさせるだけでいい」という考えだったので、・・・。
b. 14、ほうれん草がしんなりしてきたら、長ねぎと梅ペーストを加え、よくあわせる。
15、仕上げにモッツァレラチーズをちぎって入れ、溶けさせる。→　完成！！
c. でも、ゼラチンをうまく溶けさせることができなくて・・・。

「沸かせる」の場合は、(7) のように、人の心的状態を表す（ことに還元できる）語が目的語の位置にくる例が圧倒的に多い。このことから、人の心的状態のように、自律的であり、したがって、外から直接働きかけることができないもの、すなわち、間接的にしか働きかけることができないものに関しては、使役講文が成立することがわかる。「溶けさせる」も、チーズやゼラチンなど（他にも、心や脳細胞などがあった）になると、容認度があがる。

では、アイスクリームとチーズとでは、一体何が異なるのだろうか。我々の日常的な経験を基盤に次のように分析してみる。表1では、両者の相違が明白に現れていることがわかる。

	アイスクリーム	チーズ
①体温でも簡単に溶かすことができる	○	×
②室温でもすぐ溶ける	○	×
③室温で溶けると、それを好ましいと思う	×	不適用
④オーブンのような、 道具を使って溶かす	×	○
⑤意図的に溶かすときは普通道具を使い、そのとき溶けると、それを好ましいと思う	×	○

表1

すなわち、表1を見ると、直接性（体温）、容易さ（簡単に；存在物の性質による溶けさすさ）、時間的速さ（すぐ）、間接的な関与度（道具）などに関しては、アイスクリームがチーズより、直接的である。一方、③⑤の好ましさに関しては、アイスクリームがチーズより、意図しなくても溶けてしまう可能性が高いので、好ましくない事態として認識される事態が起こりやすい。なお、好ましさは、合目的性からも説明できるものである。すなわち、（料理の場合）チーズは普通溶かして食べるものであるが、アイスクリームは溶けてしまったら食べられない。

つまり、アイスクリームのように、いとも簡単に溶けてしまうような、生起容易な性質をもつ存在物は、普通、使役講文は作れない。これは、次のように一般化できよう。**「存在物の性質による、生起容易な（意図的・非意図的）変化事象には、普通 SASE を付加しない」。**

次の例を見られたい。(9) のように、簡単に割れる性質をもつものは、不適格である。一方、意図的に努力しても簡単には割れないもの、したがって、時間がかかるものは、(10) のように容認される。さらに、(11) は文脈の補充によって、時間がかかる困難な状況を作り上げ、それによって容認度があげることがわかる[4]。

(9) *ガラスを{うっかり／わざと}割れさせた。
(10) 筋肉を割れさせるには、／音を割れさせるには、／反対派の票を割れさせるには、・・・。
(11) そのピアニストたちは20時間コンサートと題して、全部弾くのにざっと一日かかる<<ヴェクサシオン>>という曲を交代で引き続けることにした。演奏は順調に進んだが、最後の奏者の指が急にもつれ、一瞬，曲がとだえそうになった。（たのむ、<<ヴェクサシオン>>をなんとかうまく終わらせてくれ）と、舞台裏の皆は一心に祈った。　定延(1991)

以上、使役講文の拡張には、文脈の補充の場合も含め、名詞句によって喚起される、次のような性質や状況が関与していることがわかる。それは、**合目的性**（好ましさにより認識）、**生起困難な性質**（時間がかかることにより認識）、そして、それ自身が自律性をもつものと見なされることによって、使役者にとっては**間接的な関与の状況**を強いられるもの、として認識されるものである。（詳細は、鄭 2006 の第 5 章を参照されたい。）

4. おわりに

ここで、我々は、(7) で定義した「潜在能力」は、実際にはどのように経験されるか、について、次のように主張できそうである。すなわち、潜在能力には、その現れ方として、合目的性、自律性（または間接性）、生起困難な性質という三つの側面があり、それぞれ好ましさとしての認識や自律性による事象への間接的な関与の状況、時間がかかる事象といった、日常的な経験的基盤がその背後にある。このような理解の上に立てば、(1-2) の例も、なぜ母語話者にとって容認度があがるか、について自然な説明が与えられるであろう。

注

1) これは、所動詞や非対格動詞との関連から指摘されることもある（寺村 1982: 292, 宮川 1989: 208）

2) 生成文法の理論的枠組みの中では、語彙論者（Miyagawa 1989）と統語論者（Koroda 1993）の対立があるが、本論文では、それについては立ち入らないことにする。

3) 類似の用語として、井上（1976: 下）の「自発性」や久野（1973 : 87）の［＋自制的 self-controllable］、Levin & Rappaport Hovav（1995）の internal cause と external cause がある。これらの用語と本稿の「潜在能力」との相違については、鄭（2006）を参照されたい。

4) 定延（1991）には、本論文と異なる説明が試みられている。

参照文献

青木伶子. 1977 「使役—自動詞・他動詞との関わりにおいて—」『成蹊国文』 10, 成蹊大学日本文学科研究室. ［須賀一好・早津恵美子（編）（1995） 『動詞の自他』: 108-121. 東京：ひつじ書房. に再録］

井上和子. 1976 『変形文法と日本語（下）』東京：大修館書店.

久野 暲. 1973 『日本文法研究』東京：大修館書店.

定延利之. 1991「SASE と間接性」仁田義雄（編）『日本語のヴォイスと他動性』: 123-147. 東京：くろしお出版.

鄭 聖汝. 2006 『韓日使役構文の機能的類型論研究—動詞基盤の文法から名詞基盤の文法へ—』くろしお出版.

寺村秀夫. 1982 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』東京：くろしお出版.

宮川 繁. 1989 「使役形と語彙部門」『日本語学の新展開』: 187-211. 東京：くろしお出版.

Kuroda, S. -Y. 1993 Lexical and Productive Causatives in Japan: An Examination of The Theory of Paradigmatic Structure, *Journal of Japanese Linguistics* 15, 1-81. Nanzan University.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. 1995 *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Miyagawa, Shigeru. 1989 *Syntax and Semantics* 22: *Structure and Case Marking in Japanese*, Academic Press, New York.

Shibatani, Masayoshi. 1973 Semantics of Japanese causatives. *Foundation of language* 9:327-373.

Shibatani, Masayoshi. 1976 Causativization. In Masayoshi Shibatani (ed.) *Japanese generative grammar (Syntax and Semantics 5)*, New York : Academic Press.

名詞一語を「文」たらしめるのは何か—構文成立における意味フレームの役割—

横森大輔・山嵜章裕（京都大学大学院人間・環境学研究科）

＜要旨＞

コミュニケーションにおける聞き手は、フレームという知識構造を基盤として、その場で自分自身がどのような役割を担うべきかについて理解を行うことができる。ある種の名詞は、イベントフレームを喚起し、発話すること自体も固有のフレームを喚起するので、名詞一語を発話するだけでも聞き手の役割理解を達成させる場合がある。その場合に限り、名詞一語での発話がコミュニケーション上の機能を持つ。

【キーワード】一語文、フレーム、イベント、聞き手の応答可能性、聞き手の役割付与

1．はじめに

一般的に、「文」とは"主語＋述語"という構造を備えているものとされる（cf.秋元 2002）。しかし、実際に使用されている人間の言語には、名詞一語のみから構成される「一語文」という形式が存在することが知られている（Jespersen1924; 渡辺 1971; Yanofsky1978; Quirk *et al.*1985; 尾上 1998; 本多 2002）。例えば、(1)において、「酒！」という発話に対し、聞き手は「酒を私に頂戴！」という話し手の要求を理解し、反応行動（酒を冷蔵庫に取りにいく）をとっている。ここでの「酒！」という発話は、"主語＋述語"の構造を備えていない点で形式的に不完全ではあるが、コミュニケーションは問題なく行われているといえるだろう。

(1) 谷：あー、よかったー！うれしかー！人生にはこげん幸せな日もあるとじゃねえ！
みき：あるとじゃよー！おい、谷君！**酒！**
谷：うわーっ。冷蔵庫ん中空っぽになりましたばい。この辺でお開きにしときまっしょうか。
[フリーター] [1]

このような一語文という形式は、(1)の対話で偶発的に使用されたものでは無い。むしろ非常に生産性が高く、自然言語の文法体系の一部を成している形式パターンであり、その意味で Fillmore *et al.*(1988)における「構文」(construction)の一種であると言える。

本稿の目的は、「名詞一語だけの発話によって問題なくコミュニケーションが行われるのは何故か」という問いに答えることである。

2．先行研究の批判的検討

2．1　先行研究：尾上(1998)

一語文という現象に言及している諸研究の中で、理論と記述の両面において最も充実しているのは、尾上(1998)である[2]。以下に尾上の論の概略を示す。

尾上によれば、一語文は「その時、その場の心的経験・心的行為（感嘆・希求など）」の表現である『喚体句』（山田 1908）の一種である。一語文のうちで「その発話が名詞一語であることを本質的に必要としている」のは、次のような下位範疇から構成される「存在一語文」だけである。

(2) 存在一語文
A存在承認「とら！」
A１喚体的－感動喚体的一語文《発見・驚嘆》
A２伝達的－存在告知一語文《存在告知》
B存在希求「水！」
B１喚体的－希望喚体的一語文《希求》
B２伝達的－存在要請一語文《要求》（尾上 1998: 897）

存在一語文は、述語を述べないことで、対象の「実・虚の存在に圧倒された叫び」となり、それによって存在承認・存在希求といった機能を果たす。

2．2　尾上説に対する疑問

尾上の特徴づけは、直感的にはもっともらしく感じられる一方で、その曖昧な一般化に対する疑問も残る。というのも、「実・虚の存在」が話し手の心理を「圧倒」するような事物（＝話し手にとって存在／不在が重要である事物）とは、一体どのような基準で決まるのか不明である。これでは、名詞を一語だけ発声すれば全てが一語文ということになろう。例えば、次の対話例をみてみよう。

(3) 愛子：先生、**海！**
桜井：海？海がどうしたんだ！
愛子：行きたいの！海に行きたいの！
桜井：海か、ＯＫ！　[オンリー・ワン]

尾上の論に基づけば、ここでの「海！」という発話は(1)の「酒！」と同じく存在一語文となる。というのも、(3)において「海」が「愛子」の心を「圧倒した」と記述できるからである。

しかし、(1)の「酒！」と(3)の「海！」は、名詞一語であるという形式の点では同じだが、相互行為の中で果たす機能の点では異なっているように思われる。(3)の対話における「海！」という発話は、聞き手からの問い返しによる補足要求が行われていることから、「名詞一語でコミュニケーションが問題なく行われている」とは言い難い。対して、(1)の「酒！」に同様の問い返しを行うことは不適切な対応となるだろう[3]。

(4)　客：酒！
　　店員：ええと、酒ですか？酒がどうかしましたか？

尾上の分析では、一語文の使用がどのような条件で可能で、どのような条件で不可能か基準が明らかでないため、これらを区別することはない。

本稿では、「名詞一語でコミュニケーションが問題なく行われる場合」と「名詞一語では問題が生じる場合」を現象として区別し[4]、両者の違いに注目する。前者では起きていて、後者では起きていないことこそが、一語文の使用を可能にしている要因といえるはずである。

3．コミュニケーションとフレーム／役割の理解

3．1　聞き手による行為の理解

では、「コミュニケーションが問題なく行われる」とはどのような状況だろうか。(3)の「海！」の箇所では、何と言えば問い返しが起こらなかったのだろうか。

(5) 恋人(女)：ねえ、今年の夏は海に連れてってよ。
　　恋人(男)：うん、いいね。行こう！
(6) 恋人(女)：今年の夏は海に行きたーい！
　　恋人(男)：うん、いいね。行こう！

(5)のように、話し手が聞き手に対して行為を明示的に指示すれば、直後に恋人である聞き手の協力的応答が得られ、問い返しは起こらない[5]。しかし、要求する行為の内容を言語的に明示せずとも聞き手の応答が得られるのは、珍しいことではない。(6)の例の聞き手（恋人(男)）は、話し手（恋人(女)）の希望を知ることで、自分がとるべき行為を理解したため、応答が可能になっている。

3．2　行為理解の単位：イベントフレーム

もしも恋人同士が「夏に海に行く」ことを相談しているとすれば、言葉に出して確認されなくとも両者間で前提とされるような事柄が多くある。おそらくその目的は、デートのためであって、漁業のためではない。また、おそらく参加者は当人たち二人だけで出かけるのであって、両親が帯同することは無い。さらに、おそらく移動手段は流しのタクシーではないだろう。

このような前提関係は、「夏に海に行く」ことが単に移動行為を表すだけでなく、「恋人同士の活動」の一部に位置づけられるがために生じる。一般に、このような部分・全体関係からなる経験的知識の構造体はフレームと呼ばれ、人間の様々な認知活動に利用されている。言語表現の理解に関しても、その表現が表す概念は、それが構成要素となるようなより大きな概念的まとまり（＝フレーム）を喚起し、そのフレームとの関係において理解されると考えられる（Fillmore1982）。特に文や発話の理解においては、「誰が（主体）、何に対して（主題）、何のために（目的）、どうやって（手段）」といった、参与者役割の集合である「イベント水準のフレーム」が重要である（黒田 *et al.*2004）。

先の例で言えば、恋人たちは「海に行く」ということを単に＜移動＞イベントとして捉えるだけではなく、よりマクロなイベントとの関係で意味づけることで＜移動＞を概念化している、といえる。例えば、＜移動＞イベントは＜デート＞イベントの構成要素の一つである「デートの手段」の役割を担い、＜エスコート＞イベントの「エスコートの目的」の役割を担っていると記述できるだろう。マクロなイベントフレームが利用されているからこそ、諸項目（海に出かける目的、手段、帯同者 etc.）は言語化されずとも前提として共有されていると考えられる。

3．3　フレームに基づく聞き手の役割付与

行為がイベントフレームという単位で理解されるという点を踏まえると、聞き手が自らに期待される行為を理解する過程は、以下のように捉え直すことができる。つまり、「海に行きたーい！」という言葉に対して「行こう！」と応答できるのは、聞き手（恋人(男)）が【恋人(女)は＜移動＞を望んでいること】を知ったからだけではない。聞き手（恋人(男)）は、【恋人(女)が＜デート＞における「デートの参加者」及び＜エスコート＞における「エスコートされる人間」といった役割を自己に付与していること】及び【聞き手自身が「デートの相手」及び「エスコートする人間」としての役割付与が期待されていること】を理解したからこそ、エスコートを申し出る応答ができたのだ。

以上を一般化すれば、聞き手が発話を聞いて「自分のとるべき行為を理解できる」ということは、聞き手が「自らが主体[6]の役割を付与され得るようなイベントフレームを同定できる」こととみなすことができる、と言える。

4. フレームと役割付与の観点からみた一語文

したがって、名詞一語を聞いて、聞き手が「自らに主体役割を付与するイベントフレーム」を同定できるならば、一語文は問題なく使用されるといえるだろう。このように、聞き手への役割付与に貢献する手掛かりとして一語文を捉えるならば、その役割付与の過程に関わる諸要因に注目することで現象の体系的分類が可能になるはずである。

本稿では、「名詞がフレームの全体に言及するのか、フレーム要素に言及することでフレームを喚起するのか」及び「そのフレームの主体を担うのは誰か」という二つの観点から、以下のような一語文の分類を試みる[8]。

[1] {名詞の言及対象：フレーム全体} / {主体：聞き手}

(7) 城木は防空壕の入口近くに立っていたが、正直のところその中へもぐろうと思った。後方で「**退避！退避！**」という叫びもあがったのである。　[楡家]

ここで用いられている名詞「退避」は、<退避>イベントのフレームそのものに言及しており、また<退避>イベントはこの文脈で聞き手が行うものであるということと併せて、聞き手が主体を担うべきフレームは、名詞によって言及された<退避>そのものであると同定される。ここで聞き手は「退避者」の役割を付与されることを認識したために防空壕に「もぐろうと思った」のである。

このタイプはいわゆるサ変名詞が用いられ、「X！」という一語文は強いてパラフレーズすれば「貴方にはXして欲しい」ということができる。

[2] {名詞の言及対象：フレーム全体} / {主体：話し手}

(8) 愛子：全国のメンバーに連絡を回してもらいたい。
（略　[愛子が連絡の内容を伝える]）
無線の声：はぁ？マジ？
愛子：イエス。とにかく急いで連絡を回して。
無線の声：了解。
愛子：よろしく。　[拾われた男]

このタイプもサ変名詞によってフレーム全体を指すが、話し手自身が遂行している最中のイベントに言及するのが特徴である。(8)では、名詞「了解」が話し手の心内において<了解>イベントが行われたことを表示している。

では、聞き手による行為理解はどのように達せられるのか。ここでは、<了解>それ自体は、話し手一人を参与者とするものであり、一語文で表現することとは独立して成立することに注意したい。すなわち、名詞「了解」が喚起するのは<了解>フレームだが、他者に向って「了解」と発話することによって<了解の表明>や<了解の表明への承認要求>といったフレームも同時並列的に喚起される。したがって、この例で聞き手は<（了解を表明したことに対する）承認>フレームの主体の役割を付与される、と記述できる。このタイプの「X！」をパラフレーズすれば「私はXを行っているので、貴方に可能な対応をとって欲しい」となるだろう。

[3] {名詞の言及対象：フレーム要素} / {主体：聞き手}

(9) 突然、「**どろぼーっ！どろぼーっ！**」という叫び声が外からきこえ、葵が飛び起きる（略）　[空気]

名詞「泥棒」は、フレーム全体ではなく、<拿捕>フレームの要素としての「泥棒」を指し、<拿捕>フレームを喚起する[9]。話し手は、自分では拿捕できないが故に一語文を発しているのであり、<拿捕>フレームの主体は発話が向けられた聞き手である。このタイプの「X！」を強いてパラフレーズすれば「貴方にはXに対してVして欲しい」（VはXに対する典型的な行為）となるだろう。

[4] {名詞の言及対象：フレーム要素} / {主体：話し手}

(10)　みき：おい、谷君！**酒！**　(=(1))

最後のタイプの事例は、冒頭の(1)の再掲である。名詞「酒」は<飲酒>フレームを喚起し、その「主題」（飲酒の対象）として理解される。<飲酒>フレームは、<快楽享受>フレームの「手段」になるため、主体役割を担うのは話し手である。ここで重要なのは<飲酒>が、発話時点で未実現という点である。話し手にとって望ましいイベントである<飲酒>が未実現の状況で、わざわざ発話によって言及することは、その実現を志向しているものと解釈される。そのため、この状況で<飲酒>に向けた準備的イベントになり得る<給仕>フレームが喚起され、聞き手は自らを「給仕者」役割が付与されるものとして理解する。

このタイプの「X！」をパラフレーズすれば、「私はXに対してVしたいので、貴方には可能な対応をとって欲しい」（VはXに対する典型的な行為）となるだろう。

以上の分析を一般化し、一語文における形式と機能の結びつきとしての「構文効果」を定義すれば次のようになる。

(11)　形式：[X！]
機能：[X又はXに対する話し手の行為に関して、聞き手が実行可能な対応をとって欲しい]

しかし、このような一般化はあまりにも抽象的であり、実例の分析への有用性は（無効ではないまでも）疑わしい。これは、尾上(1998)が強調する、一語文が本質的に発話の現場に依存した表現形式であるということを示唆しているように思われる。

5．まとめ

ある発話によってコミュニケーションが問題なく行われるというのは、「その発話に対して期待される応答行為が何か」を聞き手が理解できる場合である。それは、聞き手が「自分は何のイベントフレームにおいて主体役割を担うべきか」を理解できる場合とも言える。ある種の名詞類はイベントフレームを喚起し、発話そのものも相互行為に関するフレームを喚起する。そのため名詞一語の発話だけでも、聞き手の応答行為の決定に必要なフレーム同定と役割付与が達せられる場合があり、その場合に限り名詞一語だけの発話がコミュニケーション上の機能を持つ。

＊ 第一著者連絡先<yokomori@hi.h.kyoto-u.ac.jp>

＊ 本稿は、日本語用論学会第9回大会（2006年12月9日於桃山学院大学）でのワークショップ「語用論と構文の使用」における同名の研究発表に大幅な加筆・修正を施したものである。ワークショップの企画・運営に尽力された李在鎬氏（情報通信研究機構）には、多大なる感謝の意を表したい。

＜注＞

[1] 出典については末尾参照。出典表記の無い例は作例である。

[2] Yanofsky(1978)及びQuirk *et al.*(1985)は英語で使用される一語文のパターンを記述しているが、なぜ一語文が使用可能なのかという説明には踏み込んでいない。また、渡辺(1971: 93-94)は「陳述」の観点から、本多(2002)はジョイント・アテンションの観点から、それぞれ一語文を扱っているが、2.2節で指摘する尾上の問題点は同様に当てはまる。

[3] ただし、以下に示す例のように、聞き手の意図を理解していながら、敢えて無視して補足を要求する場合もある。

子：お母さん、牛乳！
母：牛乳？牛乳がどうかしたの？
子：牛乳とって！
母：自分で取りに行きなさい！

[4] 判別基準として、ある名詞Xが一語で発せられた後に、「Xがどうかしたのか」という補足要求の問い返しが適切ならば、問題が生じており、不適切ならば生じていないと考えられる。

[5] 次のような応答が行われれば、問題が生じている（もしくはそのように振舞うことで会話を楽しんでいる）とみなせる。

恋人(女)：海に連れてって、お願い。
恋人(男)：「海に連れてって」？一体どういうこと？

[6] いわゆる「動作主」に近いが、より広義に様々なイベントの主体を指すことのできる概念として用いている。

[7] [1]から[4]は、相互排他的なカテゴリーではない。特にフレームの主体が話し手でも聞き手でもあるという場合は珍しくないだろう。例えば、共同で泥棒を捕まえることを意図して、「どろぼーっ！」と叫ぶ場合、喚起される＜拿捕＞フレームの主体は、話し手と聞き手の両方である。

[8] 抽象名詞（e.g.「道徳」）や、極端に上位レベルもしくは下位レベルのカテゴリーを表す名詞（e.g.「哺乳類」、「ホモサピエンス」）など、フレームの全体にも要素にもならず、イベントフレームを喚起しない名詞類は、当然のことながら存在する。これらの指示対象は、人間とのインタラクションに関する経験がほとんど生じないからであろう。従って、聞き手が主体となるフレーム同定に至らないため、一語文として使用される状況はほとんど無い。

[9] 「泥棒行為」を指すとすれば[1]の例とも解釈不可能ではないが、実際には難しい。泥棒行為は秘密裏に行われるものだからである。

＜参照文献＞

秋元実治. 2002. "Sentence," 寺澤芳雄（編），『英語学要語辞典』，594-595, 東京：研究社.

Fillmore, Charles J. 1982. "Frame Semantics," In The Linguistic Society of Korea (ed.), *Linguistics in the Morning Calm*, 111-137, Seoul: Hanshin.

Fillmore, Charles J., Paul Kay, and Mary Catherine O'Connor. 1988. "Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of 'Let alone'," *Language* 64(4), 501-538.

本多啓. 2002. 「共同注意の統語論」，山梨正明ほか（編），『認知言語学論考 No.2』，199-229, 東京: ひつじ書房.

Jespersen, Otto. 1924. *The Philosophy of Grammar*. New York: H. Holt and company.

黒田航・中本敬子・野澤元. 2004. 「意味フレームに基づく概念分析の理論と実践」，山梨正明ほか（編），『認知言語学論考 No.4』，133-269, 東京: ひつじ書房.

尾上圭介. 1998. 「一語文の用法—"イマ・ココ"を離れない文の検討のために—」，『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』，888-908, 東京: 汲古書院.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London/New York: Longman.

渡辺実. 1971.『国語構文論』，東京: 塙書房.

山田孝雄. 1908.『日本文法論』，東京: 宝文館.

Yanofsky, Nancy M. 1978. "NP Utterances," *CLS* 14, 491-502.

＜用例出典＞

[フリーター]「フリーターみきの自由日記ページII 心は晴れ模様」（作：石川蛍 '02.8.3 放送）

[オンリー]「オンリー・ワン」（作：徳満亮一'00.05.13 放送）

[拾われた男]「拾われた男」（作：徳満亮一 '05.5.5 放送）

以上、『西鉄提供ラジオ番組「土曜ドラマ館」シナリオ集』<http://www.nishitetsu.co.jp/nnr/inf/drama>より。

[楡家]北杜夫「楡家の人々」，『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』.

[空気]「空気泥棒」（作：内藤鉄平）<http://members.jcom.home.ne.jp/fe.n/>より。

ポスターセッション

Poster Sessions

コピュラ構文の文法化

大阪学院大学　神田靖子　y-kanda@utc.osaka-gu.ac.jp

＜要旨＞

「のだ」の原型は中古の「連体形＋なり」に求められる。この文型は、発話事態（A）に関するコメント（B）という「トピック－コメント」構造のコメント部であるが、名詞文であることから全体で「AはBだ」という名詞コピュラ構文をなしている。「のだ」は、形態的には「連体形＋なり」すなわち「名詞化述語＋指定辞」の各構成素が歴史的変化を経て生じたものであるが、意味機能はコピュラ構文の持つ語用論的効果を受け継いでいる。つまり、コピュラ構文の「断片」が「文法化」したという「構文の文法化」の稀な例と考えられる。

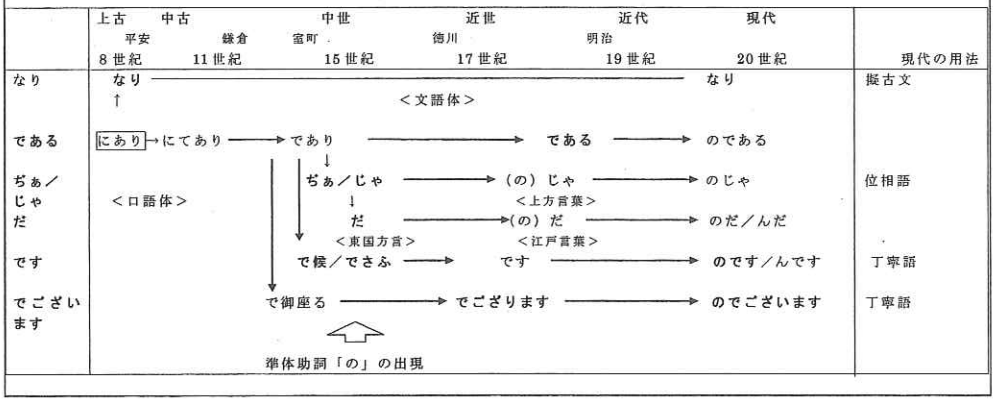
【キーワード】トピック－コメント構造、コピュラ構文、文法化、名詞化述語＋指定辞、語用論的効果

1．目的

現代語の助動詞「のだ」は「説明のモダリティ」を表すとされる（寺村 1983 、宮崎 2002）が、多様なディスコース機能も見られる。そうした意味機能について多くの研究が行われているが（田野村 1990、佐治 1991、1993、野田 1997、名嶋 2007）、本稿は「のだ」の起源を中古の「名詞化述語＋指定辞」が構成する名詞化コピュラ構文に求め、それが通時的変化を経て形態的に確立し、かつその語用論的効果が多岐にわたる機能を生じたことを明らかにし、それによって意味機能の連続性が説明できることを示したい。

2．名詞化述語および指定辞の形態上の変遷

名詞化述語＋指定辞の変遷



初めに、各構成素の歴史的変遷を概観しておく。まず名詞化述語は中古においては用言の連体形であったが、室町期に活用形の混乱が生じ、名詞性を明確にするために、名詞化助詞「の」が用言連体形に付加されるようになり現代に続いている。本来、名詞代用であった「の」が機能を拡大し名詞化助詞となった（佐治 1993、Horie1998）のであるが、これ自体、一つの文法化の例である。指定辞については、平安初期に助詞と存在詞「あり」の複合形「にあり」が変化した「なり」が出現し、後に

連体承接専用の指定辞となったが、今日に至るまで文語体の文章に用いられている。口語の指定辞については、複合助詞「にて」と存在詞「あり」より「であり」が生じ、中世後期にその待遇上のバリエーション「で候／でさふ／でござる／である／じゃ（ぢぁ）／です」などが生じる。また、「じゃ」の東国方言であった「だ」が近世中期に江戸において一般化し、明治期に入って「である」とともに指定助動詞の標準と定められるに至るのである。以上をまとめると「名詞化述語＋指定辞」の変遷は上図のようになる。指定辞「なり」は用言連体形にのみ下接し、同じ形で現代に至るまで文語文体に専用され文法化を経ていないため、本稿では口語における変化を追う。

3．「名詞化述語＋指定辞」の歴史的変化

「名詞化述語＋指定辞」は9世紀の「宣命」に1例ある（春日 1971）が、最古の物語「竹取物語」（900）に見られる用例を原型としてよいだろう。以下にその歴史的変化を見て行く。

Stage Ⅰ　中古～中世前期（平安時代初期～院政時代）

「用言連体形＋なり」の形で、先行する名詞・文・文脈などを受け、それについての説明(1)、話し手の心情(2、3)、疑問(4)といった追加情報を与える文として用いられる。「なり」の多くは終止形であるが、推量助動詞が下接する「ならむ」、過去助動詞の下接する「なりけり」(5)も見られ、現代語の「のだ」と共通する意味機能の多くが出揃っている。

(1)（かしこきたまの木は）かぐや姫のえうじ給ふべきなりけり。（900 竹取物語）

(2)かぐや姫泣く泣くいふ。「さきざきも、申さむとおもひしかども、『かならず心まどはし給はん物ぞ』とおもひて、いままで過ごし侍りつるなり。」（900 竹取物語）

(3)をとこもすといふ日記といふ物を、をむなもして心みむとて、するなり。（935 土左日記）

(4)つくづくと見るにむらさきの物がたりに、宇治の宮のむすめどもの事あるを、いかなる所なれば、そこにしもすませたるならむと、ゆかしく思し所ぞかし。（1006 更級日記）

(5)たつは、なるかみの類にこそありけれ。それがたまをとらんとて、そこらの人々のがいせられなむとするなりけり。（900 竹取物語）

Stage Ⅱ　中世後期（室町時代～安土桃山時代）

口語指定辞の多様な変化形（ぞ／である／で候／でござる／じゃ等）が一般化し、文語との分化が顕著になる。指定辞は連体形に直接下接するが、終助詞の付加(6)も現れる。意味機能に変化はない。

(6)両頭蛇…是ヲミレバ死ルヂャゾ（1592 蒙求抄）

(7)汗ノタツタ処へ米ノ粉ヲヌルテ候。（1592 蒙求抄）

Stage Ⅲ　近世（徳川時代）

口語文体での「の」の使用が一般化する。上方では「ぢぁ」(8、9)が専用され、江戸では中期から「だ」の使用(10～12)が一般化する。断定辞に推量・否定の助動詞が下接した形、複文内での使用(11)が増加する。19世紀初頭より「のじゃ／のだ」の形でほぼ現代語と同様の用法が確立する。

(8)なにをいふのぢぁコレ九平次。この徳兵衛粗相はせぬ。（1703 曽根崎心中）

(9)これなう乳母、覚悟々々と言ふていづくへ連れて行くのぢぁや。（1747 義経千本桜）
(10)そして金曾木の柏屋が來たら、翁草の後篇と、拾遺の玉川を持て來なと、そふいふのだヨ。（1732 春色梅児譽美）
(11)女の子一人で宅を出たのだから案じるとわるいからはやく歸しやせう。（1732 春色梅児譽美）
(12)ぢめへだそうだから、相應な所をみたてに、出て居るのだろう。（1787 通言総籬）

StageIV　近代・現代（明治時代～20 世紀後半）

音韻弱化した「んだ」の使用が増加し多様な用法となる。複合終助詞的用法(16)や、要求緩和の標識(17)、語りの標識(18、19)といったディスコース機能が拡大し、さらに確認疑問の標識への移行(20)の傾向も示している。

(13)善く覺えてお置き。來年の今月今夜は、貫一は何處で此月を見るのだか！（1900 金色夜叉）
(14)僕が好きというんじゃないけれども、あなたはなんでも人と違ったものが好きなんだと思ったんですよ。（1919 或る女）
(15)作法の厳しい家だ。きっとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ。（1924 注文の多い料理店）
(16)あなたっていつも遅刻するんだから。本当にもう…（1992 女性の言葉）
(17)あのう、この本、貸していただきたいんですが…（1992 女性の言葉）
(18)えー、ここに指定が入っているものが来るんですね。で、えーと、場合によって違うーんですが、で、えーと、行間と、あのー、文字指定は入るんですけども、えー、（女性の言葉）
(19)花江さんなんて女もいないし、デモも見たのじゃないんです。（1947 トカトントン）
(20)A:あなたって甘いものが嫌いなんだ。　B：そうなのよ。（1998 実録会話）

4．コピュラ構文の基本的解釈と文法化のプロセス

以上、「名詞化述語＋指定辞」の変化を概観したが基本的な意味機能に大きな変化は見られない。では何が「文法化」したのだろうか。

1)「トピック―コメント」構造

最古の用例「連体形＋なり」は、Aという既定の(given)事態（状況や文・文脈などで表される事柄）について新情報(new)（B）を与えるという「トピック（A）―コメント（B）構造」のコメント部と考えられる。コメント部とは「先行発話の実体について補完的に述べる文」(v.Kuppevelt1998)であるが、日本語では主題のあり方と関連して、属性叙述という類型的な性格を持つ（益岡 2004）。さらに、コメント部が名詞コピュラ構文であれば、それは基本的に「A（という既定のもの＝筆者補注）は何であるかの答えを求める文である」（西山 2004）ため、属性という読みに加えて同定、定義など 5 通りの読みができるという。最初期の資料における「名詞化述語＋指定辞」文も状況・先行文・文脈といった先行する発話事態についての説明、事態に対する心情のような追加情報を与える機能を果たしており、これが名詞コピュラ構文の読みと合致する。つまり、最古の資料において意味機能のプロトタイプが一つに特定できないということは、書記体として残る資料の成立以前にコピュラ構文の読みが「名詞化述語＋指定辞」構文として認識されていたのではないかと推測される。

2) コピュラ構文の語用論的効果の文法化

このようにして成立した「のだ」は以下のような段階を経て様々な機能を発展させたと考えられる。

① 形式と構文の持つ語用論的効果：ある形式には一定の語用論的効果がある。上述のようにコピュラ構文は「Aは何であるかの答えを求める」（西山 2004）という語用論的効果を持つ。つまり、話し手がAという既定の事柄について「語用論的推論」(Searle1964)をした答えとしての「主観的判断」を表す文である。そのため「のだ」の基本的意味は「解説」であり「説明のモダリティ」を表すとされるのであるが、上述の名詞コピュラ構文の読みに加えて、以下のような要因による語用論的強化から（ ）内のような様々な機能を表す用法を確立したと考えられる。例えば、a. 判断内容についての話し手自身の確信度という要因では、Aという事態についての判断内容Bが「確信の持てない」ものであれば「推量」となる。既定の事態に基づいてその原因理由を推論するという backward inference（澤田 2006）の一形式と言え、「のようだ／のかもしれない／のじゃないか」などは推量の断定を回避する変化形と考えられる。その他、b. 判断内容の情報の縄張り（内部感覚・感情の打ち明け／他者情報についての推量）、c. 発話の方向性（納得／宣言）、d. 聞き手との心理・社会的関係（高圧的指示／親しさの標識）といった要因が挙げられる。

②ディスコース機能への拡大：さらにある機能が一定の文脈で使用されると語用論的に新たな機能を生じる(Brinton & Traugott2005)。例(16)では「のだから」が主観的判断を正当化しようとする文脈で使われることが慣用化して、非難の表示機能を獲得している。(18)では「のだ」の指すスコープが話し手の話そうとする談話全体へと拡大することによって、「語りの標識」というディスコース標識へと変化している。(20)では納得の表示機能が聞き手に向けられることで「確認疑問」へと移行している。これらは文脈誘発的に文法化した結果であり、「主観性(subjectivity)」から「間主観性(intersubjectivity)」を持つ用法への移行を示している。

5. コピュラ構文の文法化の特徴

以上のように、コピュラ構文は複数の文法化を経て現代語の「のだ」になった。その文法化の特徴は次のようである。①指定辞の文法化：存在詞「あり」が助詞と結合して指定辞「だ」に変化したVerb-to-TAM auxiliation(Kuteva2001)。②構成素「の」の文法化：名詞代用であった「の」が名詞化助詞へと機能を拡大した（Horie 1998)。③コピュラ構文の語用論的効果の文法化：「名詞化述語」を表示する「の」と指定辞「だ」とはコピュラ構文の「断片」である。すなわちコピュラ構文の語用論的効果が、「構文の断片」である「のだ」という形で言語化したものであり、「構文の文法化」(Heine & Kuteva2002)においても稀有な例と言えよう。他の文末辞「わけだ」「ことだ」のような語彙(lexeme)の文法化とは異なった過程を経ている。

残る問題は、中古において「連体形終止」が会話で使用され、「連体形＋なり」は改まった文脈に多く見られるという点である。「なり」は待遇上の必然性から丁寧さを表すために付加されたと推測される。指定辞を欠く「連体形終止」すなわち名詞止め文との関連も検討していかなければならない。

【主要参考文献】

Brinton,L.J. & E.C.Traugott.2005. *Lexicalization and Language Change*: Cambridge

Kuteva, Tania.2001. *Auxiliation* An Enquiry into the Nature of Grammaticalization:Oxford

西山佑司.2004.『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房

「説明」を表す日韓語の名詞性述語の対照研究
-「のだ」と「kes-ita」を中心として-

氏　名：　金　廷珉・堀江　薫
所　属：　東北大学大学院国際文科研究科

＜要旨＞
本研究の目的は，日本語の「のだ」とそれに対応する韓国語の形式「kes-ita」の対照を通じて両形式の類似点と相違点を明らかにすることである．日本語で書かれた小説と韓国語の翻訳版に現れる用例を収集して比較した結果，「のだ」は先行文脈と関連付けて背景の「説明」を表す場合に「kes-ita」と対応する傾向があること，日本語の「のだ」の方が韓国語の「kes-ita」に比べ使用頻度が高いことが確認された．「kes-ita」に比べて「のだ」は，先行文脈との関係づけを明示的に示す機能が文法体系の中でより確立しており，そのことが使用頻度の高さに反映していると考えられる．

[キーワード]　「のだ」「것이다 (kes-ita)」名詞性述語　日韓対照研究

1. はじめに

日本語の「のだ」は「説明を表すモダリティ」の形式として知られており (益岡 1991)，これまで多くの研究がなされてきた (田野村 1990, 野田 1997, 名嶋 2007 など). 特に「のだ」は会話において頻出するが，発話状況によって文脈的に異なる意味を持つため，外国人日本語学習者にとって習得が非常に困難である (近藤 2006).

そこで本研究では，日本語の「のだ」に対応する形式と考えられる韓国語の「kes-ita」[1]を取り上げ，両者の使用頻度及び対応関係を考察し，両形式の類似点及び相違点を明らかにすることを目的とする．

2. 先行研究

日本語の「のだ」に関しては多くの先行研究が存在する．例えば，益岡 (1991) では「のだ」を「説明のモダリティ」とした上で，「帰結説明」と「背景説明」に分類している．また，最近，関連性理論を用いた語用論的な観点から分析した最新の研究も見られる (近藤 2006, 名嶋 2007) . 野田 (1997) は，スコープの「のだ」とムードの「のだ」に2分類されることを提唱した上で，日本語の「のだ」を英語，フランス語などにおける「のだ」に相当する形式と対照し，日本語の「のだ」がそれらの形式に比べて多用されると述べている．

また，日韓対照の観点から「のだ」と「kes-ita」を論じた研究として Horie (2003) や印 (2006) が挙げられる．Horie (2003) は「のだ」を“factual evidential marker” とし，日本語の「のだ」に比べて韓国語の「kes-ita」は頻繁に用いられないことを指摘した．一方，印 (2006) は「感情の有標性，無標性」というパラメータを導入して分析した結果，「のだ」は感情的にニュートラ

ルな場合においても感情的に有標な場合においても用いられるのに対して，「kes-ita」は特に会話文において，感情的な内容の文に用いられる傾向があるという興味深い考察を行っている．以上から，日本語の「のだ」が韓国語の「kes-ita」に比べて頻繁に使用されることは明らかになったが，両言語の相違をもたらす根本的な原因はまだ明確にされていない．

3. 研究方法及び調査結果

本研究では調査のデータとして，日本語で書かれた小説『窓ぎわのトットちゃん (黒柳徹子著)』とその韓国語翻訳版[2]それぞれ 1 冊分を用いて日本語の「のだ」が韓国語ではどのように訳されているのかを調べた．

まず，日本語の「のだ」文が韓国語でどのように表されているかを数えた両者の対応関係の結果を表 1 に示す．

表 1.「のだ」と「kes-ita」の対応関係

	韓国語	日本語
対応する	115 (34.0 %)	339 (100%)
対応しない	171 (50.4 %)	
別の形式	53 (15.6%)	

表 1 において「対応する」は日本語の「のだ」が韓国語の「kes-ita」で訳されている場合を指す。「対応しない」は，日本語では「のだ」が使用されているが，韓国語では裸の動詞の形が用いられている場合を指す．最後に「別の形式」とは，「kes-ita」も用いられず，動詞の語幹に「連結語尾」や「終結語尾」などが付加されている場合を指す．

表 1 に示されるとおり，日本語の「のだ」の使用頻度が韓国語の「kes-ita」に比べて高いことが分かる (339 個のうち，115 個が対応)．両形式が対応している場合の例文を観察してみると，(1)-(1'), (2)-(2') のように「のだ」が先行文脈と関連づけて背景の事情を「説明」を表すとき，両者が対応している場合が多く見られた．

(1)トットちゃんは，(中略) ママの顔をのぞきながら，大声をはりあげていった．「ねえ，本当はスパイなんだけど，切符屋さんなのは，どう？」ママは答えなかった．本当のことをいうと，ママはとても不安だったのだ．(トット : 13)

(1') Thotho-nun (中略) emma-lul chyetapomye
トット - は 母 - を 見ながら
malhay-ss-ta. "Emma! Issci, wenlay-nun
話する - 過去 - 終結語尾 母さん あのさ 本当 - は
suphai-intey, cenchelphyo-lul phanta-ko hamyen
スパイ - だけど 電鉄切符 - を 売る - と言えば
ettelkka? Emma-nun taytapha-ci anh-ass-ta.
どうだろう ママ - は 答える - 否定 - 過去 - 終結語尾
Sasiltaylo malhacamyen emma-nun cikum
事実通り 言えば ママ - は 今
nemwuto pwulanhay-ssten-*kes-ita*.
とても 不安だ - 過去回想 - KES-ITA

(2) 高橋君は(中略)「ぼく，大阪からきたんだ.」といった．「大阪?」トットちゃんは，とても大きな声で聞き返した．だって，トットちゃんにとって，大阪，幻の町，まだ見たことのない町だったんだ．(トット: 135)

(2') Takhahasi-nun (中略) tespwuthye-ss-ta.
高橋 - は 付け加える - 過去 - 終結語尾
"Na-n Osaka-eyse wa-ss-e."
私 - は 大阪 - から 来る - 過去 - 終結語尾
"Osakha?" Swunkan thotho-nun acwu khun
大阪 瞬間 トット - は とても 大きい
soli-lo toymwul-ess-ta. Ku-to kulel
声-で 聞き返す - 過去 - 終結語尾 それ - も そんな
kes-i thotho-eykey issese osakha-nun

こと-が　トット - に　とって　大阪 - は
hwansang-uy tosi　acik　po-n　cek-to
幻想 - の　都市　まだ　見る - 過去連体形　こと - も
eps-nun　tosi-yessten　*kes-ita.*
ない - 現在連体形　都市 - だった　KES-ITA

しかし,「説明」を表す文であっても, (3) のように会話文における質問の答えとして「のだ」が用いられる場合では, 両形式は対応しない. つまり, (3') において二重下線で示したように, 韓国語では「kes-ita」は用いられず, 日本語で訳すると「私は小児麻痺だ」のようになる.

(3) その子の歩くのを(中略) 見つめた. (中略) とても歩くとき, からだがゆれた. (中略) トットちゃんは (中略) その子に聞いた.「どうしてそんなふうにあるくの？」その子は, やさしい声で静かに答えた. (中略)「僕, 小児麻痺なんだ.」　(トット : 46)

(3') Ku ai-uy　ket-nun　mosup-ul poko,
その　子 - の　歩く - 現在連体形　姿 - を　見て
(中略) chyetapo-ki　sicakhay-ss-ta. (中略)
見つめる - 名詞化辞　はじめる - 過去 - 終結語尾
Mom-to　mopsi　huntullye-ss-ta.　(中略)
体 - も　とても　揺れる - 過去 - 終結語尾
Thotho-nun (中略) ku　ai-eykey　mwul-ess-ta.
トット - は　その　子 - に　聞く - 過去 - 終結語尾
"Way　kulehkey　ket-ni?"　Ku　ai-nun
なぜ　そのように　歩く - 疑問形　その　子 - は
sangnyangha-n　moksoli-lo　malhay-ss-ta.
優しい - 現在連体形　声 - で　話す - 過去 - 終結語尾
(中略)　"Na,　soa　mapi-ya."
僕　小児　麻痺 - 終結語尾

ここで, 日本語では (3) の「僕, 小児麻痺なんだ」を「僕, 小児麻痺だ」のような非「のだ」文で言い替えると, 不適格文ではないが, 日本語としてかなり不自然に聞こえる. 一方, 日本語とは対照的に韓国語の場合は (3') で「kes-ita」が用いられると非常に不自然になる. (3) において「小児麻痺だ」という非「のだ」文では先行文脈との関係は表せない. このことについては角田 (2004: 120) でも「名詞＋なのだ」と「名詞＋だ」の相違について同様な指摘がされている. 日本語と韓国語においてこのような相違が現れる理由として 2 つの点が考えられる. 1 つは韓国語の「kes-ita」は日本語の「のだ」に比べて先行文脈との関連性を明示的に提示する機能が体系的に確立していないということである.

また, 2 つ目の理由として, 韓国語の場合「kes-ita」という (説明の) モダリティの形式を用いなくても動詞の終止形により先行文脈との関係づけを表すことができるということが考えられる. 後者の点は, 韓国語における「kes-ita」文と非「kes-ita」文の相違点に関しても今後考察していく必要があることを示している.

4. 結論及び今後の課題

本研究では「のだ」と「kes-ita」について翻訳書を用いて対照分析を行った. その結果, 日本語「のだ」の方がより使用頻度が高いこと, また両者は「説明」を表す文において対応する傾向があることがわかった. ただし, 本研究で用いたデータの数が十分ではないと考えられるため, 今後大規模データの収集を通して以下の (i-iii) に関してさらに追究していく計画である.

(i)　両形式が対応しない原因の解明
(ii) 日本語の「のだ」文と非「のだ」文, 韓国語における「kes-ita」と非「kes-ita」文の違いの分析

(iii) 地の文，会話文に現れる「のだ」と韓国語の「kes-ita」の意味的相違と語用論的条件の明確化

[1] 「kes-ita」の前には「-ㄴ/-던/ -는/ -ㄹ (-n/-ten /-nun/-l・過去/過去回想/現在/未来連体形) 」などの様々なテンスを伴う連体形が前接することができる.しかし，本研究では未来連体形を伴う「-l kes-ita」形式は「蓋然推量」を表すものと考え (野間秀樹 1990)，対象外とする.

[2] 本小説は韓国語のほかにも英語，中国語，マラーティー語など多数の言語で翻訳出版されている.今後，日韓二言語による対照研究よりさらに言語を増やして類型論的な研究として発展させていく可能性を考えて本小説をデータとして選択した.

参考文献

印 省熙 (2006)「日本語の『のだ』と韓国語の『ー ㄴ 것이다』－会話文の平叙文の場合－」『朝鮮語研究 3 』朝鮮語研究会編. くろしお出版, 51-94.

近藤安月子 (2006)「『のだ』が指標する話し手の主観性」『月刊言語』, Vol. 35, No.5. 大修館, 68-73.

田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」 の意味と用法』. 和泉書院.

角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の連接のモダリティ』. くろしお出版.

名嶋義直 (2007) 『ノダの意味・機能－関連性理論の観点から－』. 日本語研究叢書 19. くろしお出版.

野田春美 (1997) 『「 (の) だ」の機能』. 日本語研究叢書 9. くろしお出版.

野間秀樹 (1990) 「할 것이다」の研究 ― 再現代朝鮮語の用言の mood 形式をめぐって―『朝鮮学報』 129, 朝鮮学会, 1-64.

益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』.くろしお出版.

Horie, Kaoru. 2003. Differential Manifestations of "Modality" between Japanese and Korean: A Typological Perspective. In: S. Chiba *et al.*eds. (2003) *Empirical and Theoretical Investigations Into Language*, Tokyo: Kaitakusya, 205-216.

疑問文の終助詞「か」の付加と省略について―語用論的観点から―

工藤聡子
東京学芸大学修士課程教育学研究科修了生
(harapekori@hotmail.com)

＜要旨＞

本稿では、丁寧体の疑問文文末に着目し、「か」の有無による疑問文の機能を考察した。疑問文の文末に関わる先行研究は文レベルの考察が多く、「か」の有無に関して語用論的観点から考察されたものはなかったため、本稿では会話データを収集し、前後の文脈も考慮し分析を行った。

そのデータから、『「か」の省略された疑問文(「か」省略疑問文とする)は情報要求機能だけでなく、「確信はないが、前後の文脈等からなされた予測や判断を、確定的なものにするために問いかける」という確認要求機能ももつ』という仮説をたてた。仮説は「のだ」疑問文との置き換え、「もしかして」との共起関係から検証され、丁寧体の「か」省略疑問文は、確認要求機能をもつことが示された。

【キーワード】: 丁寧体　「か」省略疑問文　「か」付加疑問文　情報要求　確認要求

1．はじめに

普通体の疑問文は、終助詞「か」の付加・省略により与える印象が異なる。「か」の付加された疑問文(「か」付加疑問文とする)は、「か」省略疑問文に対し、野田(1995)は「男性的」「丁寧さに欠ける」と指摘している。一方、丁寧体の疑問文については「「か」を用いると自然」、「用いないと柔らかい印象を与える」との指摘のみである。普通体とは異なり、明確な違いはないのであろうか。

野田(1995)は「か」の有無に関して、丁寧さに関わると述べているが、本研究では機能に着目して考察を行った。野田(1995)も含め、本研究に関する先行研究はいくつかあるが(荘司 1992 等)、それらは文レベルの考察であり語用論的観点から考察されたものは数少ない。本稿では、丁寧体の疑問文に着目し、会話内で多く見受けられる「か」省略疑問文の機能を明らかにするため、文レベルではなく前後の文脈もあわせて考察を行った。

2．従来の疑問文に関する研究

荘司(1992)は、述語の形態により、必要とされる疑問化の要素が異なることを指摘し、疑問化に抵抗するとされている「ダ」には、最も疑問化の要素が強い疑問語が必須となり、「デス」には上昇調イントネーションと疑問助詞「か」、「φ」には上昇調イントネーションが必須要素となることを指摘している。

終助詞「か」については益岡(1992)が真偽判断の不定性、もしくは、関係する領域内に不定要素が存在するということを表すとしている。この「か」に対する捉え方は荘司(1992)、野田(1995)ともに一貫しており、疑問文を成立させる要素というよりも「多用される形式」であると述べている。更に野田(1995)は、「か」が不定性を表すということから、文末に付加することで「聞き手に応答を要求するという話し手の態度を明示

する」と指摘し、「か」の有無が文体や丁寧さに左右されると説明している。

しかし、荘司(1992)、野田(1995)ともに、作例を通した考察であるため、語用論的観点からの分析まではなされていない。前述の通り、普通体の疑問文は「か」の有無に丁寧さに関わるため制約がある一方で、丁寧体の疑問文にはそのような制約はないようである。本稿では語用論的観点から考察することにより、「か」省略疑問文の機能に言及する。

3．会話データ

本稿では、丁寧体の疑問文を分析対象とするため、初対面同士の会話を使用した。日本語母語話者同士の会話データ(20分)4組、日本語母語話者と日本語学習者(上級レベル・日本語能力試験1級合格者、または大学・大学院で専門的に研究できるレベル)との会話データ(20分)9組から「か」省略疑問文を抽出し、考察を行った。なお、日本語母語話者と学習者の会話データに関しては、母語話者のフォーリナートークの可能性を考慮し、フォローアップインタビューで確認をとり有効とみなしたものである。

4．仮説

本来、疑問文は「話し手が自分にとって不明なことを聞き手に問いかけ、情報の供給を受けようとする文」(野田 1995:117)であるが、データに出現した「か」省略疑問文のうち、確信はないものの真偽に対し予測・判断がなされており、それを問いかけるといったものが見受けられたため、仮説をたてた。

仮説：「か」省略疑問文は、真偽判断の不定性、もしくは関係する領域内の不定性を問いかけるといった情報要求機能だけでなく、確信はないが、ある命題内容に対する判断や予測がついており、それを確定するために問いかけるといった確認要求機能をもつものもある。

本稿では、確認要求を「ある程度、命題内容に対して判断がなされており、それを聞き手に問いかけて確認するもの」と定義する。

5．検証方法

①副詞「もしかして」との共起関係、②「のだ」疑問文との置き換えの2点から仮説の検証を行う。

宮崎(2005)は、疑問文と副詞「もしかして」が共起する場合は、「話し手が当該命題が成立する可能性を考慮しているといった含意をもつ」(p22)と説明している。確定ではないが真偽の判断がなされており、それを問いかける確認要求機能をもつのなら、「もしかして」との共起は可能である。

「のだ」疑問文については、吉田(1994)が「確認的質問」「予断をもった質問」と述べ、また、野田(1997)では「話し手にとって不明なことを質問しているわけではないという点で、典型的な質問文の性質を欠いている」(p127)と述べているように、確認要求として機能する「か」省略疑問文と、「のだ」疑問文は機能的に類似しているといえよう。

仮説は以上2点をもとに検証を行った。

6．情報要求機能

(1)の会話例は、典型的な疑問文として機能する「か」省略疑問文である。

(1)　日本語母語話者(JM)：24歳/院生/東京出身
　　モンゴル人日本語学習者(MM)：29歳/研究生/学習歴12年/日本滞在歴10ヶ月/1級

ﾗｲﾝ番号	発話者	発話内容
264	MM	よく行きますかー？、海とか。
265	JM	海はー、海はーあんまり行かないですね、
266	JM	昔はー、プールによく（あー）いったんですけどー。
267	MM	んー。
268	JM	プールとか行きます？。
269	MM	<笑いながら>ん、全然。
270		<二人笑い>

(2)　？もしかしてプールとか行きます？
(3)　？プールとか行くんですか？

前後の文脈からも、MMがプールに行くだろうと判断されているとはいえないため、「もしかして」との共起は原則的にはできない。また、「のだ」疑問文との置き換えも容認度は決して高くはない。やはり、「プールとか行きますか？」「プールとか行きます？」が自然であろう。このように、単に「か」が欠落しただけの本来の疑問文の機能をもつものももちろん存在する。

7．確認要求機能

次の(6)の例は、自己紹介のなかで、相手に知らないだろうと思いつつ自分の指導の先生の名前を挙げたところ、思いがけず「あー」と声をあげ、知っていそうな様子であった。そんな様子から、JPは「知っているかもしれない」と判断し、その判断を確定的にするために質問するというものである。

(4)　あっ、もしかして知ってます？
(5)　あっ、知ってるんですか？

この場合、「もしかして」を文頭においても、「知ってるんですか？」と「のだ」疑問文と置き換えをしても、問題なく文脈に沿って自然であるため、情報要求ではなく確認要求として機能しているといえよう。

(6)　日本語母語話者(JA)：30歳/院生/東京出身　日本語母語話者(JP)：23歳/院生/東京出身

ﾗｲﾝ番号	発話者	発話内容
21	JA	そっちは先生誰ですか？。
22	JP	あたしは、なんか、全然このへんとは関係ない先生で【名前】先生…、
23	JA	あー。
24	JP	っていう。
25	JP	あっ、知ってます？。
26	JA	あー知ってますよ。
27	JP	あっあのー【専攻名】の。

8．まとめと今後の課題

疑問文の終助詞「か」の有無に関して、従来の研究では語用論的観点から論じられていなかったことから、本稿では会話データをもとに考察を行った。普通体の疑問文文末は丁寧さに関わるという制約がある一方で、丁寧体の疑問文においては丁寧さには大きな違いが見受けられないため、今回は機能に着目をし、情報要求という典型的な疑問文の機能だけでなく、文脈等からある程度真偽に対し判断がなされそれを確認するために問いかけるという確認要求機能もあることを、仮説の検証を通して明らかにした。

しかし、疑問文の成立には終助詞だけではなくイントネーションも大きく関わっている。今後の課題としては、このイントネーションの扱いが挙げられる。今回、丁寧体の「か」省略疑問文が確認要求として機能することを明らかにしたが、もちろん、「か」付加疑問文においても同様の機能をもちうるであろう。そうなると、確認要求は「か」省略疑問文独自の機能であるとはいえなくなるが、本稿では荘司(1995)を基準にして疑問文と認定している。荘司(1995)は、述語が「デス」「φ」(「ダ」「デス」以外の述語の言い切りの形)は上昇調イントネーションが必須であるとしているが、「か」付加疑問文で確認要求として機能する際には、イントネーションは下降調になるのではないか、と捉えている。今回の考察の際にもいくつかそのようなものが見られたが、イントネーションと「か」付加疑問文の機能に関しては次回の課題となろう。

参照文献

荘司育子. 1992.「疑問文の成立に関する一考察―デスという形式をめぐって―」、『日本語・日本文化研究』、2、39-50、大阪外国語大学

野田春美. 1995.「～ノカ？、～ノ？、～カ？、～Φ―質問文の文末の形―」、宮島達夫他(編)『日本語類義表現の文法（上）』、210-219、くろしお出版

1997.『の(だ)の機能』くろしお出版

益岡隆志. 1991.「不定性のレベル」、『日本語教育』、７７

宮崎和人. 2005.『現代日本語の疑問表現―疑いと確認要求―』ひつじ書房

吉田茂晃. 1994.「疑問文の諸類型とその実現形式―ノデスカ／マスカ型疑問文の用法をめぐって―」、『島大国文』、22、1-13、島大国文会

数量詞遊離構文の意味用法—日中対照的立場から—

洪　雅琪（東北大学大学院生）

1．はじめに

日本語において、従来数量詞遊離[1]（Quantifier Floating、以下「QF」とする）と呼ばれる現象について議論されてきた先行研究は少なくないように思われるが、それに対して中国語に関する研究は十分とは言い難い。よって、本稿では数量詞遊離と呼ばれる現象が起こる時、それがどのような構文に現われるのか、そして、それぞれの文の中において、QFと結びつく先行詞にはどのような性質があるのか、またQFを容認する動詞はどのような意味を持つのかの問題を中心に対訳コーパスを用いて、中国語との対照を行う。

日本語では数量詞遊離は典型的に「NCQ」型で表わすのに対して、中国語のほうでは、便宜上李（2006:176）に倣って「客人…7 位」のような形をとる遊離数量詞[2]で示すことにする。本稿では日本語の表現を基本にし、それと対応する中国語の表現を取り上げて対照させながら考察する。具体的には、日本の民話、現代小説で中国語への翻訳が出ているもの、そして補充的に日中辞典の用例から、遊離する数量詞の用例を取り出して分析する。

2．遊離数量詞の生起する位置

山口（2005:120）は日本語と中国語の遊離数量詞を比較したところ、最も顕著な違いとしては日本語の遊離数量詞が文中の様々な位置に生起するのに対し、中国語の遊離数量詞は基本的に動詞の補部位置にしか生起しない点であることを指摘しており、次のような例を挙げている。

(1)　他燒了三本書。（彼は3冊の本を燃やした）＜遊離なし＞
(2)　他燒書燒了三本。（彼は本を[燃やすにあたって]3冊燃やした）
(3)　他把書燒了三本。（彼は本を3冊燃やした）
(4)　他書燒了三本。（彼は本は／を3冊燃やした）
(5)　書,他燒了三本。（本は／を彼は3冊燃やした）

（山口ibidの例（23）～（27）による[3]）

次章で述べるように、実際のデータを分析するにあたり、日本語の数量詞遊離構文に対応する(3)のような中国語訳文がしばしば見られるので、ここではこういった“把” 構文を伴う場合に注目し、その意味的な特徴を見出すことを試みる。

3．他動詞目的語に見られる特徴

本章では他動詞目的語からの遊離について、実際に対訳コーパスで多用される “把”構文を含む例文を取り上げて、その意味と用法を考察する。

Miyagawa（1989）が主張する相互 C 統御条件及び非対格性の仮説による分析で予測されるように、山口（2005）はその考え方を想定し、日本語だけではなく中国語でもそういう制約があると説明している。そして日本語と同様に、直接目的語からの遊離の場合、山口（2005）では直接目的語は D 構造において、数量詞と姉妹関係を持つ位置に生成されると仮定し、S 構造で目的語が“把”フレーズへ移動しても、その痕跡が VP 節点内で数量詞と相互 C 統御の関係を保つために、数量詞の遊離が許容されることが解釈できると指摘されている。

(6) a. 張三送了三本書給我。〈張三は私に 3 冊の本を贈ってくれた〉 （同例（34））
b. [IP張三 [VP [PP把書] [VP給我] [VP送了三本ti]]]]
〈張三は本を私に 3 冊贈ってくれた〉 （同例（34'））

(7) a. [IP 他 [VP 燒了 [NP 三本書]]] （同例（33））
b. [IP 他 [VP [PP 把 e] [VP 燒了 [NQ 三本] [NP 書]]]] （同例（33'））



上述したことについて、実際のデータには類似した例文が見られる。(8) と (9) では、名詞句の「プリント“講義”」「本“書”」は前に数量詞の「一部“一份”」「一冊ずつ“一本本”」が介在しているため、動詞“給”“抽出來”と隣接しておらず、そのため動詞“給”“抽出來”からそれぞれ対格を付与されないので、“把”の補部位置への繰上げが義務的に起こり、“把”から格を付与されて「格フィルター」を満たすことによって成立すると考えられる。

(8) そのプリントを（私に）一部ください。
把那個講義給我一份 （日中辞典p.105）

(9) 本当なら、本棚の本を一冊ずつ引っ張り出して調べるのだが、それをやるには、まる一日以上かかりそうなので、今日は諦めることにした。
本來應該把書架上的書都一本本抽出來檢查,可是做起來可能需不只一整天的時間,決定今天放棄。 （三毛猫の推理）

一方、興味深いことに存在数量詞[4]の場合では遊離数量詞が連体数量詞に置き換えることができるのもあれば、あるいは遊離数量詞が連体数量詞に置き換えると意味のズレが生じてしまい、不適格になるのも見られる[5]。柴谷（1978）によれば、遊離できる数量詞は「Q ノ NQ」型から「NCQ」型への派生だと考えられるが、実際のデータにはそうではない例もある。

(10) a.プリントを一部ください。（（把）講義給我一份）
b.一部のプリントをください。（給我一份講義）

（11）（12）（13）はいずれも遊離数量詞から連体数量詞に置き換えると、容認性が低く不自然になるだろう。（13a）は一つの財産を二つに分けるという意味をしているのに対し、（13b）はそ

もそもの財産が倍になってしまうと解釈される。つまり、前者と後者の文の意味が対応していないと考えられる。また、工藤（1995）の分類をこれらの動詞に当てはめてみると、「わける」「つくる」のような客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞及び「飲む」「吸う」のような主体動作・客体接触動詞が多数を占めることが分かった。このことから、遊離数量詞文に見られる動詞が「結果」の含意と深く関係しているのではないかと推測できよう[6]。

（11）a.後先を3センチのばした。（(把) 両端延長三公分）
　　b.？＊3センチの後先をのばした。（？＊延長三公分両端）
（12）a.直線を2倍に延長する。（(把) 直線延長一倍）　（日中P.210）
　　b.？＊2倍の直線を延長する。（？延長一倍直線）
（13）a.…家のありったけの財産を二つにわけて、その一つを、びんぼうな家の子にやりました。
　　（就把家中所有的財産分成兩份，一份送給窮小孩。）　（ふるさと）
　　b. ？＊…家のありったけの二つの財産にわけて、その一つを、びんぼうな家の子にやりました。（＊就分成家中所有的兩份財産，一份送給窮小孩。）

4．非対格動詞主語に見られる特徴

（14）が示すように、非対格動詞主語からの遊離においては「も」「しか」などのような強調ストレスを伴う例が多く見られる（高見 1998、久野 1978）。李（2006:174）によれば、中国語の遊離数量詞文は数量詞を強調する語感があると述べられるように、日本語の遊離数量詞文に対応する中国語の遊離数量詞も強調する意味をしていると解釈できる。

（14）救急車が怪我人を乗せて走り出す様子もなく、パトカーが二台も[も]やって来たので、ずっと十二階のベランダから様子を見ていた佐藤博史は、父親の身の上が心配になってきた。
　　救護車並沒有要載走傷者的樣子,警車來了兩輛,一直站在十二樓陽台往下看的佐藤博史有點擔心父親的情況。　（理由）

5．まとめ

以上のことからも分かるように、日本語の遊離数量詞文に対応する中国語の遊離数量詞文では、従来他動詞目的語と非対格動詞主語からの遊離のみ容認されやすいことが検証された。QF と共起する他動詞目的語の場合、中国語の構文には“把”を伴う構文が多く見られた。それは、“把”の補部位置への繰上げが義務的に起こり、“把”から格を付与されて「格フィルター」を満たすことによって成立するからだと考えられる。存在数量詞の場合では遊離数量詞が連体数量詞に置き換えることができるのもあれば、または意味のズレが生じてしまい不適格になるのも見られ、そして客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞及び主体動作・客体接触動詞が多数を占めることが分かった。

〔注〕

[1] 数量詞遊離に関しては、従来の研究で名詞句から数量詞が移動して派生されると議論されてきたいわゆる「派生」説（神尾 1977、柴谷 1978、奥津 1983 等）より、数量詞が遊離した位置に最初から基底生成されるとする考え方が有力であることから（高見 1998、三原 1998、山口 2005 等）、本稿では日中両言語ともこの基底生成の立場を取ると考えている。
[2] 李（2006）によれば、「ある所に三匹の子豚が住んでいました」のような【Q ノ NC型】に現れる数量詞を連体数量詞とし、「ある所に子豚が三匹住んでいました」のような【NCQ型】に現れる数量詞を遊離数量詞と称される。本稿ではその呼び方に従うことにする。
[3] 本稿では印刷の都合上、中国語についてすべて繁体字を使用することにした。
[4] 加藤（1997）は「三人の学生」や「二枚の紙」のような数量詞を存在数量詞とし、それ以外のものを非存在数量詞と名づける。
[5] 奥津（1983、1996）では「2000CCの車」「十二文の足袋」のような数量詞を「属性Q」と、「三本の瓶」「二リットルの酒」のような数量詞を「数量Q」としており、移動できるのが「数量Q」のみであることを示している。
[6] 三原（1998）参照。

〔用例出典〕（　）内は本発表で用いた略語

＊　宮部みゆき『理由』新潮文庫（由）
　　陳寶蓮訳『理由』臉譜出版 二OO四 台北
＊　赤川次郎『三毛猫の推理』角川文庫（推理）
　　楊樂朵訳『三毛貓推理』時報文化出版 二OO五 台北
＊　松本張清『ゼロの焦点』新潮文庫（焦点）
　　張麗姍・黃盈琪訳『零的焦點』商周出版 二OO六 台　北
＊　浜田広介・西山敏夫・宮脇紀雄・平方久直『ふるさとのはなし』（全 10 巻）さえら書房（ふるさと）
　　林雪星訳『日本民間故事選』寂天文化 二OO五 台北
＊　北京対外経済貿易大学他編集『日中辞典』小学館（日中）

〔参考文献〕

神尾昭雄．1977．「数量詞のシンタクス＜日本語の変形をめぐる論議への一資料＞」、『月刊言語』、6-9、83-91.

加藤重広．1997．「日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析」、『富山大学人文学部紀要』、26　31-64.

工藤．1995．『アスペクト・テンス体系とテクスト—現代日本語の時間の表現』、ひつじ書房.

三原健一．1998．「数量詞連結構文と結果の含意」、『月刊言語』、27、第 6-8 号.

Miyagawa, Shigeru. 1989. *Syntax and Semantics 22: Structure and Case Marking in Japanese,* New York: Academic Press.

中川正之・李浚哲．1997．「日中両国語における数量表現」、大河内康憲編、『日本語と中国語の対照研究論文集』、95-116.

奥津敬一郎．1983．「数量詞移動再論」、『人文学報』（東京都立大学人文学部）、160、1-24.

奥津敬一郎．1986．「日中対照数量表現」、『日本語学』、5、70-78、明治書院.

李瑞芳．2006．「談話における数量詞表現」、『日中言語対照研究論集』、8、165-177.

柴谷方良．1978．『日本語の分析—生成文法の方法—』、大修館書店.

高見健一．1998．「日本語の数量詞遊離について—機能論的分析【上・中・下】」、『月刊言語』、27、第 1-3 号.

山口直人．2005．「中国語の遊離数量詞」、『日中言語対照研究論集』、7、114-131.

実験に基づく「流れる」の語形の意味グループ

*鈴木幸平　**李在鎬（りじぇほ）　**黒田航
(*神戸大学大学院　**(独) 情報通信研究機構)

Most studies on polysemous verbs in Japanese assume that a polysemous verb has a central meaning and a semantic network which remain constant irrespective of the inflections it takes. In this paper, I argue that the central meaning as well as semantic network and preference on arguments varies with the inflections a verb takes through two psychological experiments on *nagarer-ta* (past tense of 'flow') and nagarete-ita (past progressive of 'flow').

【キーワード】中心的意味、意味構造、心理実験、多次元解析

1. 先攻研究と本研究の位置づけ

動詞の多義に関する研究には、記述的立場、自然言語処理の立場からの研究（宮島 1972, 池原 et al. 1997)、認知言語学に基づく研究（籾山 2000, 鷲見 2000, 国広 2006)、実験に基づく研究（鈴木 1994, Sandra & Rice 1995)等が存在する。しかし、多くの研究では分析が抽象的な語(lemma)のレベルで行われ、語形毎の記述が必要、という想定を行ったものは少ない。しかし、この見方では以下のような例で問題となる。

(1) a. 子供が流れた。(cf. ＜流産＞の意味)
　　b. ??子供が流れていた。
(2) a. ??斜面が北に流れた。
　　b. ?斜面が北に流れていた。
(3) a. 契約が流れた。
　　b. 契約の流れ。

(1), (2)は同じ動詞でも語形の違いにより容認度が変わる例である。また、(3) a は＜イベントのキャンセル＞、b は＜イベントの進行＞を表しており、同じ lemma の派生形でも表す意味が異なっている。

動詞の「テイル」形が表す意味に関しては金田一 (1976), 工藤 (1995), Hirakawa (2003) 等の研究がある。これらの研究は動詞の lemma が持つ意味に接辞の意味を積み木式に足し合わせるアプローチを取り、接辞、「テイル」は動詞のアスペクト特性により、大まかに「動作継続」「結果継続」のいずれかの意味を発現すると主張する。例えば、「流れる」は金田一では「継続動詞」、工藤では「主体動作動

詞」に分類されるため、接辞、「テイル」は＜動作継続＞の意味を表すと予測される。しかしながらこの種のアプローチでは以下のような例について別途説明が必要である。

(4) a. 川が流れている。
　　b. 橋が流れている。

これらは同じ動詞の「テイル」形であるが、異なる解釈を要求する。(4)a はいわゆる、＜動作継続＞で解釈されるが、b は＜動作継続＞だけでなく、「橋が(下流に)流れてしまった」、という＜結果状態＞の解釈も取り得る。また、Hirakawa (2003)は動詞が非能格動詞か、非対格動詞かにより「テイル」の意味が分類可能だと主張しており、「流れる」(非対格動詞) は＜結果継続＞のみを表すと予測されるが、この主張は金田一、工藤の主張と矛盾し、(4)の事実とも合わない。

2. 方法

本研究では各語形が他の語形から独立した中心的用法や意味構造を保持している可能性について検証するため、二つの実験を行った。実験 1 は 56 人の被験者を 28 人ずつのグループにわけ、それぞれのグループに「X が{流れた/流れていた}」のいずれかの刺激文を提示し、1 分間で X に当てはまる語をできるだけ多く書き出すよう指示する事例産出課題である。結果は意味毎(コーパス調査等により別に設定した) に産出された数と平均順位を計算/分類し表 1, 2 で提示した。実験 2 では 48 人の被験者を 24 人ずつのグループに分け、「X が{流れた/流れていた}」のいずれかの形式の刺激文が印刷されたカード(X には「計画」等が入っている)12 枚を各々のグループに配布し(刺激文については図 1, 2 を参照)、文意の類似性に基づいて分類するように指示した。二つのグループに提示された刺激文はアスペクト以外は同じである。結果は同じ用法に分類された頻度を指標とした多次元解析により図 1, 2 で提示した。

3. 結果と考察

まず、実験 1 の結果を提示する。

意味グループ	回答数	平均回答順	表現例
＜液体の移動＞	30	3.25	水、汗、血、涙
＜液体全体の移動＞	21	1.57	川
＜液体中の物体の移動＞	25	4.92	葉、木、桃、靴
＜具体物の移動＞	12	4.08	金、人
＜抽象物の継続＞	29	4.24	曲、時間、音楽
＜情報・雰囲気の伝達＞	7	3.71	情報、沈黙、噂
＜気体の動き＞	12	4.66	風、雲
＜イベントのキャンセル＞	3	8	話

表 1「流れていた」事例産出課題結果

意味グループ	回答数	平均回答順	表現例
＜液体の移動＞	35	2.31	汗、血、涙、水
＜液体全体の移動＞	7	3	川
＜液体中の物体の移動＞	22	5.23	木、橋、桃、葉
＜具体物の移動＞	5	16	金、人
＜抽象物の継続＞	10	3.2	時間、時、音楽
＜情報・雰囲気の伝達＞	3	3	うわさ
＜気体の動き＞	2	4	雲
＜イベントのキャンセル＞	26	3.23	予定、話、計画
＜その他＞	4	3.75	子供

表 2「流れた」事例産出課題結果

本稿では紙面の都合で細かく議論する余裕はないが、顕著な違いが見られた項目に付いて数点述べる。まず、どちらの語形においても＜液体の移動＞が最も多く産出された中心的意味である。しかし、用例毎に見ると「流れていた」で最も頻繁に挙げられた具体例は「川」で 21 回挙げられているが、「流れた」のそれは 7 回と大きな違いがある。同様の傾向は回答の平均順位でも見られる。逆に、「流れた」で 24 回と最も頻繁に産出された具体例である「水」は「流れていた」でも 17 回と頻繁に産出されていたことを考えると「川」のアスペクトの違いによる産出数の違いは際立っている。また、「流れた」で 26 回産出され、2 番目に頻繁に産出された意味であった＜イベントのキャンセル＞は「流れていた」では 3 回しか挙げられていない。逆に「流れていた」で 2 番目に頻繁に産出された＜抽象物の継続＞は、「流れていた」では 29 回産出されたが「流れた」では 10 回しか産出されていない。これらから両語形で主語名詞への偏好や、中心的用法が異なることが主張される。

次に実験 2 の結果を提示する。

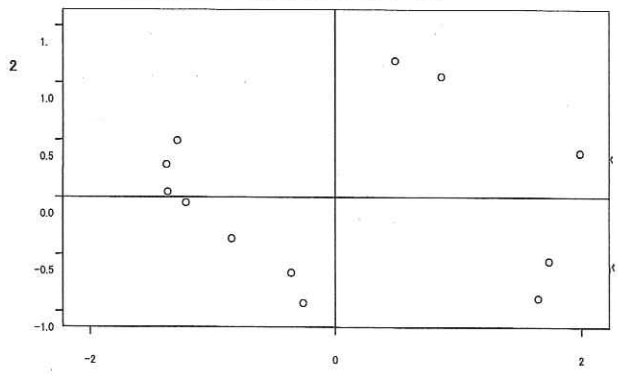


図 1 「流れていた」グループ分け課題結果

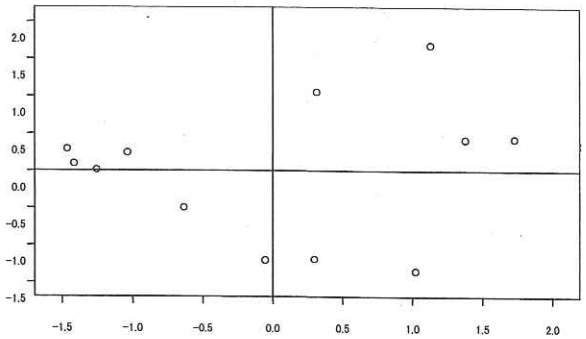


図 2 「流れた」グループ分け課題結果

図 1, 2 より、両語形は主語名詞に具体物を取る例文ではほぼ同じ分布を示す一方、主語に抽象物を取る例文ではかなり異なった分布を見せている。例えば、「流れた」(図 2)では「月日」を主語に取る例文は「金」を主語に取る例文と近い位置にプロットされているが「流れていた」(図 1)では「沈黙」と近い位置にプロットされている、というように違いが見られる。このように実験 1、2 より両語形で X に当てはまる主語名詞の典型例が異なり、それぞれの用法間の距離、意味構造が異なっていることが主張される。

4. まとめと課題

本論では実験を用いて「流れた」「流れていた」という同じ動詞の二つの屈折形と共起する主語名詞について考察した。その結果、各々の語形は主語に対する選好が異なり、他の語形から独立した中心的用法や意味構造を保持し得ることを主張した。最後に今後の課題を述べる。

1. 動詞が生起する構文の違いによる意味分布の異なりについての調査
2. コーパスを使用した用法基盤モデルに基づく調査の裏付け

3. 他の動詞を対象とした調査

1について、各々の語形がどのような構文と結びつきやすいか、また、そこでどのような意味を示すかについて研究が必要である。2について、本研究では語形の違いによって選好等が異なる背景にどのような要因が関わっているかに付いて一切触れられなかった。今後この点についてコーパスを用いた検証が必要である。3に関しては今回得られた結果が「流れる」に特有の現象であるかを他の動詞を対象とした調査により検証し、一般化を図っていく必要がある。

参考文献

Hirakawa, M. (2003). *Unaccusativity in Second Language Japanese and English*. Tokyo: Hituzi Syobo.

池原悟、宮崎正弘、白井諭、横尾昭男、中岩浩巳、小倉健太郎、大山芳史、林良彦. (1997). 『日本語語彙体系』. 岩波書店.

金田一春彦(編). (1976). 『日本語動詞のアスペクト』. むぎ書房.

工藤麻由美. (1995). 『アスペクト・テンス体系とテクスト』. ひつじ書房.

国広哲也. (2006). 『日本語の多義動詞-理想の国語辞典 II』. 大修館書店.

宮島達夫. (1972). 『動詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告 43). 秀英出版.

籾山洋介. (2000). 「発話動詞の分析(2)-「呼ぶ」の多義構造の記述を中心に」. 『日本語論究』 6. 和泉書院.

鍋島弘治郎. (2000). 「水の比喩: 日本語の比喩研究における方法論に関する一考察」. 『日本言語学会 120 回大会予行集』.

中本敬子. (2005). 「意味フレームの実在性: HFN/ FOCAL の心理学的妥当性の検証」. 『認知言語学会論文集』, 5, 563-566.

Nomura, M. (1996). "The ubiquity of the fluid metaphor in Japanese: A case study", *Poetica-An International Journal of Linguistic-Literary Studies,* 46, 41-75.

野村益寛. (2002). 「<液体>としての言葉-日本語におけるコミュニケーションのメタファー化をめぐって」. 大堀嘉夫 (編). 『シリーズ言語科学－3認知言語学 II カテゴリー化』 (pp. 37-57). 東京 : 東京大学出版会.

Sandra, D & S. Rice. (1995). "Network analyses of prepositional meaning: Mirroring whose mind-the linguist's or the language user's?". *Cognitive Linguistics, 6*(1). 89-130.

鷲見雪美. (2000). 「動詞「通る」の多義構造」. 『日本語論究』 6. 和泉書院.

鈴木敏明. (1994). 「実験的方法による多義語の分析」. 『言語研究』, 106, 45-73.

高見健一, 久野暲. (2006). 『日本語機能的構文研究』. 大修館書店.

Pragmatic Sluicingの手続き的意味[1]

瀬楽亨
慶應義塾大学大学院

〈要旨〉本稿では，「なぜ，Pragmatic Sluicing (PS)の容認可能性には強い制限がみられるのか」という問題を，関連性理論の枠組みで取り上げる．PSの容認可能性が限られているのは，PSの言語形式に符号化された手続き的意味が，語用論モジュールの演算過程に制約を与えるためであると論じる．
〈キーワード〉関連性理論，手続き的意味，Subsentential Utterances

1. はじめに

本論文では，Subsentential Utterances (SU)[2]のタイプとして，Pragmatic Sluicing (PS)という構文を取り上げる．PSは，「先行発話を持たず，疑問詞で発話が終了する間接疑問文」と定義する．(1)のBobの発話は，先行発話を持たず，'why'という疑問詞で終わっている間接疑問文であるので，PSの例である．このPSを解釈するためには，(2)で例示されているように，'the gun went off'という構成素を補う必要がある．

(1) [As soon as John produces a gun, it goes off before Bob's eyes.]
Bob: Oh, I wonder why. (Otsu 2003: 107)
(2) *Oh, I wonder why the gun went off.*

Hankamer and Sag (1976)以降，PSは，(3)に示すように容認可能性が制限された言語形式として分類されてきた('#'は，その発話が容認不可能であることを示す)．

(3) [Hankamer produces a gun, points it offstage and fires, whereupon a scream is heard]
Sag: #Jesus, I wonder who. (Hankamer and Sag 1976: 407)

しかし，PS以外のSUでは，そのような容認可能性の制限はみられない（注2を参照)．すなわち，PSの制限された容認可能性は，PSに特有の特徴であると言える．従って，本稿ではPSの言語形式に注目し，「なぜ，PSの容認可能性には強い制限が見られるのか」という問題について，「関連性理論 (relevance theory)」(Sperber and Wilson 1995)の枠組みで説明することを試みる．関連性理論では，ある種の言語形式には，発話解釈に対する言語的制約として「手続き的意味 (procedural meaning)」が符号化されていると想定されている (e.g. Blakemore (2002))．ここから，次のような仮定をもとに，論を進めていく．

(4) PSの言語形式に符号化された手続き的意味が，PSの容認可能性を制限している．

2. 先行研究

SU に関する先行研究は，'a sentential analysis'という立場と，'a nonsentential analysis'という立場に分類することができる (Progovac et al. (2006)).

前者は，「SU には音声化されていない構造，もしくはスロットが存在するので，SU は文の形式を持っている」とする立場である (e.g. Stanley (2000), Merchant (2004)). 後者は，「SU には音声化されていない構造やスロットは存在せず，SU は語用論的な情報が自由拡充されることで解釈される」とする立場である (e.g. Carston (2004), Stainton (1994, 2006)).

これらの 2 つの立場のうち，どちらが PS の分析として妥当であるかは，経験的に決定されなければならない．Seraku (2007)は'a nonsentential analysis'を支持する証拠をいくつか提示しているが，本稿では，動詞句削除に関する議論のみを紹介する．(5)の John の発話は，動詞句削除の例である．この動詞句削除が容認可能であるのは，'the gun went off'という言語的な先行詞が存在するためである．

(5) [As soon as John produces a gun, it goes off before Bob's eyes.]
Bob: I wonder why the gun went off.
[Soon after Tom uttered, the rifle also goes off.]
John: And that rifle did, too.

興味深いことに，(5)の動詞句削除の例は，(6)では容認不可能になっている．ここから，(6)の動詞句削除には，適当な言語的な先行詞が存在していないということが示唆される．

(6) [As soon as John produces a gun, it goes off before Bob's eyes.]
Bob: I wonder why.
[Soon after Tom uttered, the rifle also goes off.]
John: #And that rifle did, too.

すなわち，(6)の Bob の発話の統語構造は，(7)ではなく(8)であると考えられる（'<~~the gun went off~~>' は音声化されていない構造を，'ϕ'は構造が存在しないことを示す). 以上の議論をもとに，PS を(9)の構文情報を持つ言語形式として定義することができる．

(7) I wonder why <~~the gun went off~~>.
(8) I wonder why ϕ.
(9) 主節＋従属節 (疑問詞＋ϕ)

'A nonsentential analysis'の代表的研究である Carston (2004), Stainton (1994, 2006)の提案は，(10)としてまとめることができる．

(10) SU は，最適な関連性を持つ想定スキーマ (assumption schema)をもとに，自由拡充 (free enrichment)によって解釈される．

それでは，PS の手続き的意味は，自由拡充と想定スキーマのどちらに制限を与えるのであろうか？自由拡充とは，定義上，言語的な制約を受けない操作である．よって，PS の手続き的

意味が制限を与えるのは，想定スキーマに対してである．次節では，PS の手続き的意味について論じる．

3. PS の手続き的意味

3.1. 提案

Seraku (2007)に基づき，PS の言語形式 (i.e. (9)で示される構文情報)には，次の手続き的意味が符号化されていると提案する．

(11)　PS の疑問詞と同じタイプのスロットを持ち，動的な状況を表す想定スキーマを構築せよ．

3.2. 分析

本節では，(11)の提案をもとに，PS の容認可能性について説明する．まず，(12)の例を検討する．(12)は(13)のように解釈可能だが，(14)のように解釈することはできない．

(12)　[Mary is a classmate of Bob. Although he is not familiar with her, she seems to be angry with him. Suddenly, she hits him powerfully. He says to her:]
Bob: Tell me why.

(13)　*Tell me why you hit me.*

(14)　*#Tell me why you are angry.*

この解釈可能性の対比は，(11)の提案をもとに次のように説明することができる．まず，(13)の解釈には(15)の想定スキーマが，(14)の解釈には(16)の想定スキーマが必要である．(15)の想定スキーマは，疑問詞と同じタイプである「理由」というスロットを持っており，動的な状況を表しているので，(11)の制約に矛盾しない．一方，(16)の想定スキーマは，疑問詞と同じタイプである「理由」というスロットを持っているが，静的な状況を表しているという点で，(11)の制約に矛盾する．従って，(16)の想定スキーマは PS を解釈する際に利用不可能な情報になるので，(12)の PS を(14)のように解釈することはできない．

(15)　MARY HIT BOB FOR SOME REASON X.

(16)　MARY IS ANGRY FOR SOME REASON X.

次に，(3)の PS が容認不可能であることを説明する．(3)の発話状況では，最適な関連性を持つと思われる想定スキーマは，(17)/(18)に示すように，複数個存在する．これらの想定スキーマは，共に(11)の制限に矛盾しない．(17)/(18)のスロットである'X'は「動作主」であるという点で疑問詞のタイプと合致し，どちらの想定スキーマも動的な状況を表している．

(17)　X FIRED A GUN.

(18)　X SCREAMED.

しかし，(3)の発話状況では，(17)/(18)のどちらがより関連性の高い情報であるかを決定する

ことは難しい．よって，どちらの情報を選択するべきかを決定するための処理労力が不当にかかってしまい，結果的に(3)の PS が容認不可能になってしまうと説明できる．もし，この分析が正しければ，「(17)か(18)のどちらか一方のみが明らかに関連性の高い状況では，(3)の PS は容認可能になる」と予測される．例えば(19)の状況では，(18)の方が明らかに関連性の高い情報になっている．この状況では，予測通り，(3)の PS は容認可能である．

(19) [Bob and Tom hear someone scream in the middle of the night.]
Bob: Jesus, I wonder who.

このように，PS の解釈に必要な想定スキーマは，PS の手続き的意味の制約を満たすだけではなく，最適な関連性を持たなければならない．

本節では，(11)の提案をもとに，PS の容認可能性を説明することを試みた．以上の議論をもとに，PS の容認可能性について，次のような一般化を行うことができる．

(20) 最適な関連性を持つ想定スキーマが，PS の手続き的意味と矛盾しない場合，そしてそのときに限り，PS は容認可能になる．

4. 提案の意義

PS の手続き的意味は，表出命題への制約として機能するので，真理条件的である．Iten (2005), Wilson and Sperber (1993)などの先行研究では，真理条件的な手続き的意味を持つ言語形式はあまり指摘されていない．本研究は，新たなタイプの真理条件的な手続き的意味を提示することで，手続き的意味の分類的研究に貢献することができる．

---

[1] 本論文は，Seraku (2007)に基づいている．第 9 回日本語用論学会大会において，多くの方々から有益なコメントを頂いた．ここに記して，謝意を表したい．

[2] Subsentential Utterances (SU)とは，文としての形式を持たないが，命題内容を伝える発話のことである．(i)では，'John's father'は名詞句であるが，'The man near the door is the father of John Adams'という命題内容を伝えている (Stainton 1994: 271-272).

(i) [The speaker is pointing at the man near the door.]
John's father.

参照文献：Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning*. CUP. / Carston, R. 2004. Relevance Theory and the Saying/Implicating Distinction. In L. Horn and G. Ward. (eds.) *The Handbook of Pragmatics*. Blackwell, 633-656. / Hankamer, J. and I. Sag. 1976. Deep and Surface Anaphora. *LI* 7, 391-426. / Iten, C. 2005. *Linguistic Meaning, Truth Conditions and Relevance*. Palgrave. / Merchant, J. 2004. Fragments and Ellipsis. *L and P* 28, 661-738. / Otsu, T. 2003. Surface/Deep Anaphora and Contextual Assumptions. *Linguistic Sciences* 38, 105-116. / Progovac, L. et al. (eds.) 2006. *The Syntax of Nonsententials: Multidisciplinary Perspectives*. John Benjamins. / Seraku, T. 2007. Procedural Constraints on Subsentential Utterances. Ms., MA thesis, Keio University. / Sperber, D. and D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*, 2nd edn. Blackwell. / Stainton, R. 1994. Using Non-Sentences: An Application of Relevance Theory. *P and C* 2, 269-284. Stainton, R. 2006. *Words and Thoughts*. OUP. / Stanley, J. 2000. Context and Logical Form. *L and P* 23, 391-434. / Wilson, D. and D. Sperber. 1993. Linguistic Form and Relevance. *Lingua* 90, 1-25.

(seraku@otsu.icl.keio.ac.jp)

Reference and Metaphor in Copular Sentences: Description of Metaphor in terms of Extended Mental Space Theory

Natsuko NAKAGAWA (n_akagawanatuko@yahoo.co.jp)
Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

<Abstract>

This essay argues that the Lakoffian theory of metaphor encounters difficulties in describing the process of understanding metaphorical expressions, especially, metaphorical copular sentences with proper nouns. To solve these problems, this essay supports Reddy's notion that metaphor is a violation of reference, and attempts to describe the process of understanding metaphorical copular sentences within the framework of Extended Mental Space Theory (EMST). A literal referent, on the one hand, satisfies the property (or properties) crucial to determining the sphere of reference; a metaphorical referent, on the other hand, does not satisfy the property crucial to determining the sphere of reference. Contradicting sentences are parallel to metaphorical copular sentences in that they also ignore the property crucial to determining the referent; in this case, however, the member which satisfies the crucial property is excluded from the category. These notions enable us to describe the process of understanding metaphorical copular sentences with proper nouns by improving EMST so that it more accurately reflects the properties of referents.

【Keywords】 reference, metaphor, categorization, behavioral purposes, alteration of concepts

1. Introduction: problems with the Lakoffian theory of metaphor

The purpose of this essay is to describe and explain metaphorical copular sentences (especially with proper nouns) within the framework of Extended Mental Space Theory (EMST: Sakahara 2000; Sakai 2000; Togo 2005).

Although Lakoff & Johnson (1980) correctly pointed out that metaphors are important, we cannot apply the Lakoffian way of describing metaphor to (1); Lakoffian description like HE IS THE EDISON or MR YAMADA IS THE ICHIRO tells us nothing about these metaphorical expressions.

(1) a. He is *the second Edison.* (*Genius English-Japanese Dictionary*)
b. Mr. Yamada is *the Ichiro* of this team.

What is more, we know little about the relationship between metaphorical expressions and "literal" expressions. Although Lakoffians claim that metaphor is to understand something in terms of some other thing (cf. Lakoff & Johnson 1980; Lakoff 1993: 203), the "otherness" or being different is not necessarily a definite concept because members in the *same* category are *different* to some extent. For example, Chihuahua and dachshund belong to the *same* category dog, but they are *different* to some extent. Traditionally this kind of issue has been studied in the field of reference, and is related to the question of what literal meaning is.

2. Proposals

Reddy's (1972) notion of reference and metaphor seems to be able to solve the problems presented above. This essay attempts to describe the process of understanding metaphorical copular sentences by EMST and Reddy's theory of reference and metaphor.

Reddy (1972) claims that words are mental representations and that literal expressions refer to that which satisfies their properties crucial to determining the sphere of reference. The word *wolf*, for example, is a mental representation such as visual images of a wolf (color, size, shape, behavior, etc.), knowledge that it lives by hunting, that it howls, that, according to some fairy tales, it may attack people, and so on. The literal *wolf* can refer to representations which satisfy the

properties crucial to determining the sphere of reference; in this case, visual images of the wolf seem crucial properties. Reddy claims, on the other hand, that metaphorical expressions refer to that which does not satisfy the properties crucial to determining the sphere of reference. In the expression *he is a wolf*, for example, the mental representation of *he* (*he* is probably a male human being) does not match the crucial properties of *wolf*. The expressions in (1) are well described by this idea. In (1b), for example, a mental representation of *Mr Yamada* does not satisfy the mental representation of *Ichiro*, so this expression is thought to be metaphorical.

Reddy claims that every concept is altered in every utterance by setting a threshold or criterion to classify elements. Thresholds are changed according to the purpose of behavior. For example, let us consider an expression like (2).

(2) France is hexagonal. (Reddy 1972: 171)

This sentence may be *true enough* to people who work with crossword puzzles, but may not to a geometry teacher who wants to explain what is hexagon to his students. "The factor implicit in the observed behavioral differences, and expressed in the notion 'true enough,' is that there is what we might call a "behavioral threshold" generated by the context and goals of each individual" (ibid: 172). "[H]umans have a single kind of concept that admits of continuous degrees of fit, which they can employ in ways that are strict or loose depending on their purposes, by the simple expedient of setting a threshold for the minimum fit they will accept" (ibid: 174). It depends on the behavioral purpose whether something and another thing belong to the *same* category or to *different* categories.

This idea is formulated best in EMST by improving it to represent varying degrees of matching between referent and mental representations.

3. Description of the process of understanding metaphorical copular sentences

In EMST, there are three basic spaces: *shared knowledge*, *context of use*, and *linguistic context* as shown in Figure 3.1 (cf. Togo 2005). *Shared knowledge* is a stock of the elements that the speaker and the hearer(s) share. *Context of use* stocks elements in the location of participants at the time of speaking. For the sake of simplicity, however, we will not employ *context of use* in this essay. What is said, namely, what is expressed in linguistic expressions, is logged initially in *linguistic context*. Mental spaces (Fauconnier 1994) are stored here.

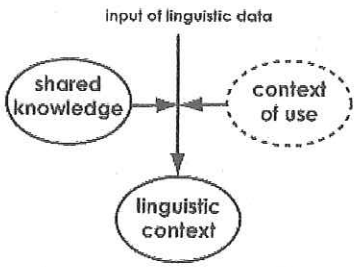


Figure 3.1. Discourse Model (Togo 2005)

Metaphorical copular sentences belong to predicational sentences (Declerck 1988). The process of understanding predicational sentences is represented by EMST as in Figure 3.2. When the speaker utters "B is A," the hearer understands the utterance in the following way;

i) The hearer has already known or identified the target *b* by earlier context and thus it has already logged in the *linguistic context*.
ii) When the hearer hears "B is A," the trigger *a* is logged in the *linguistic context*, and s/he recalls the knowledge of *A* from the *shared knowledge*.
iii) The hearer chooses the appropriate part of properties according to the behavioral purpose and then connects the selected properties to the corresponding properties of the trigger *a*.
iv) Finally the hearer connects the properties of the trigger to the corresponding properties of the target *b*.

Figure 3.3, on the other hand, shows that *A*'s property crucial to determining the sphere of reference (the circled property) is not sent to *a* and thus to *b*. Instead, the property which determines prototype (the property in the rectangular) is sent to *a* and thus to *b*. The two spaces in the *linguistic context* are separated for the same reason as the spaces in contradicting sentences are separated (cf. section 4). In understanding (1b) in section 1, for example, *b* corresponds to *Mr Yamada* and *a* to *the Ichiro of this team*. The process of understanding both metaphorical and literal copular sentences is identical except that the crucial properties in the decision procedure are not employed in understanding metaphorical copular sentences.

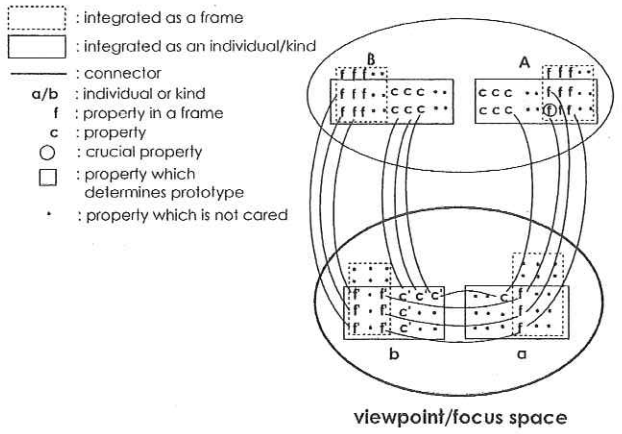


Figure 3.2. The process of understanding literal copular sentences

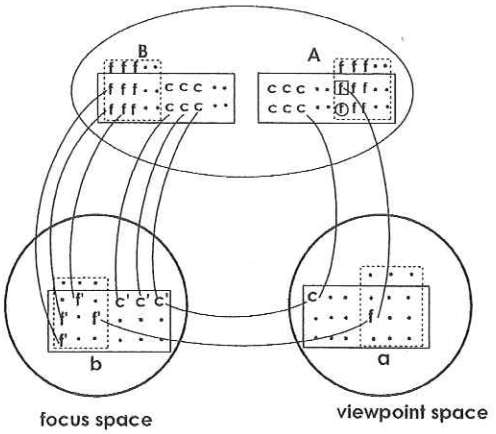


Figure 3.3. The process of understanding metaphorical copular sentences

4. Contradicting sentences

Metaphorical copular sentences have much in common with contradicting sentence, which is a special type of predicational sentence.

Sakahara's (2002) observation and explanation of contradicting sentences is quite similar to Reddy's theory of reference and metaphor. Consider (3) below:

(3) A cat that can't catch mice is no cat.

In the contradicting sentence (3), a set of cat is judged by two different criteria. As a result, the category *cat* divided into two categories: typical cat and untypical cat. The category *cat* is divided in the same way behavioral thresholds classify elements in Reddy's theory.

Unlike metaphorical copular sentences, however, contradicting sentences exclude the members which are usually classified into that category; even the excluded members satisfy the properties crucial to belonging to the category, and only prototypical members are included in the category. In (3), for example, although a cat which does not catch mice is actually still a cat, the cat is excluded from the category *cat* by restricting its threshold strictly. On the other hand, metaphorical copular sentences include members which do not have important properties crucial to belonging to the category. In (4), for example, although *Stuart* does not have properties crucial to belonging to the category *cat*, *Stuart* is included in the category.

(4) Baby Stuart is our little cat.

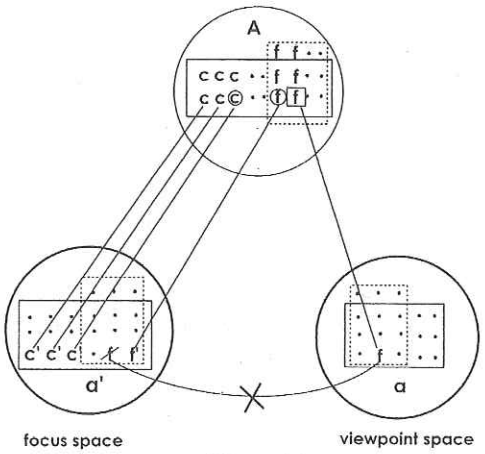


Figure 4.1.
The process of understanding contradicting sentences

The process of understanding contradicting sentences is presented in Figure 4.1 (Cf. Sakai 2005). While *a'* (*a cat that can't catch mice*) satisfies crucial properties, *a* (predicative *cat*) has only the prototypical property of *cat*. The two spaces are separated because the propositions in these two spaces cannot go together. For example, spaces are separated

when one space has only cats that catch mice and another space has cats that do not necessarily catch mice.

Metaphorical copular sentences and contradicting sentences involve similar categorization process.[1] Contradicting sentences, on the one hand, exclude the members which satisfy crucial properties. Metaphorical sentences, on the other hand, include members which do not satisfy properties crucial to belonging to the category.

5. Conclusion

This essay attempted to describe the process of understanding metaphorical copular sentences especially with proper nouns. This essay supports Reddy's notion that metaphor is a violation of reference, and attempts to describe the process of understanding metaphorical copular sentences within the framework of Extended Mental Space Theory (EMST). A literal referent, on the one hand, satisfies the property (or properties) crucial to determining the sphere of reference; a metaphorical referent, on the other hand, does not satisfy the property crucial to determining the sphere of reference. Contradicting sentences are parallel to metaphorical copular sentences in that they also ignore the property crucial to determining the referent; in this case, however, the member which satisfies the crucial property is excluded from the sphere of reference. These notions enable us to describe the process of understanding metaphorical copular sentences with proper nouns by improving EMST so that it more accurately reflects the properties of referents, and to enrich or specify the Lakoffian approach to metaphor, where the notion of the *sameness* is not clear.

Note

1. Although it is difficult to refer to a proper noun as a category, the basic process of reference is thought to be identical in both cases with proper and common nouns.

Selected References

Declerck, R. 1988. *Studies on Copular Sentences, Clefts and pseudo-clefts*. Holland/USA: Leuven University Press.

Fauconnier, G. 1994. *Mental Spaces: Aspects of meaning construction in natural language*. Cambridge: Cambridge University Press.

---------- 1997. *Mappings in Thought and Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, G. 1993. "Contemporary theory of metaphor." In Ortony, A. ed. *Metaphor and Thought* (2nd ed.), 202-251. Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, G. & M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: Chicago University Press.

Reddy, M. 1972. *Reference and Metaphor in Human Language*. University of Chicago PhD Dissertation.

坂原茂. 2000. 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」. In 坂原 ed. 『認知言語学の発展』, 213-249. 東京: ひつじ書房.

酒井智宏. 2005. 「矛盾文と条件文の解釈スキーマ」. フランス語フランス文学会秋季大会研究発表.

Searle, J. 1978 "Literal meaning". *Erkenntnis* 13: 207-224.

---------- 1993. "Metaphor." In Ortony, A. ed. *Metaphor and Thought* (2nd ed.), 83-111. Cambridge: Cambridge University Press.

東郷雄二. 2005. 「名詞句の指示とコピュラ文の意味機能」. In 『指示と照応に関する語用論的研究』: 1-59.

山梨正明. 1988. 『比喩と理解』. 東京: 東京大学出版会.

Acknowledgements

The following people helped me and advised me a lot: Yoshihiko Asao, Ayako Kishi, Kow Kuroda, Mayo Matsubara, Kanae Mori, Hajime Nozawa, Keiichiro Seki, Katsuyoshi Takahashi, Naohiko Tamai, Daisuke Yokomori, and many other students and alumni in the research rooms of Professor Togo and Professor Yamanashi as well as the members in the study meetings of Discourse and Pragmatics and Generative Lexicon. Aaron Faiola helped me to make some metaphorical expressions in English.

I am grateful to all of the above mentioned persons for their encouragement and insightful comments and questions.

付　録

入会案内

［入会手続きについて］
以下の手続き（1）と（2）をお済ませください。

●手続き（1）
電子メール（または事務局宛の郵便）にて以下の「記入の項目」をご記入の上、
rantaroa2 at gmail dot com
（関西大学・山本英一宛）
（スパムメール防止のためにこのような表記となっております。）

へお送り下さい。なお、その際、「会費を払い込んだ」（あるいは「払い込む予定」）かどうかを付け加えていただければ幸いです。メールをいただければ、事務局よりreplyをいたします。なお、今後の会員の住所・所属変更は、必ず事務局宛にメールか郵便でご連絡下さい（あるいは、学会時にお申し出いただいても結構です）。

- 記入の項目
  - 名前（ふりがな）
  - 郵便番号及び住所
  - 電話番号／Fax番号
  - 所属
  - 教員か学生か団体かの別（教員、大学院生、学部生、非常勤講師、一般、団体など）
  - E-mail address

●手続き（2）
年会費（一般会員：5,000円、学生会員：4,000円、団体会員：6,000円［平成18年3月21日運営委員会決定］）を郵便局に備え付けの郵便振り込み用紙で、以下の口座にお振り込み下さい。

00900-3-130378　　口座名：日本語用論学会

（＊こちらに届く郵便振り込み用紙が、字がかすれて読めない場合がありますので、郵便振り込み用紙のみでの新入会員申し込みではなく、必ず上記手続き（1）と（2）をお済ませくださるようお願い申し上げます。）

＜個人情報の取り扱いに関する御連絡のお願い＞

本学会では、この度、学会の更なる発展と会員相互の連絡交流の促進を計ることを念頭に、会員名簿を作成することになりました。名簿の発行に付きましては、近年、特に個人情報保護の観点から、様々な問題が指摘されていることは御承知の通りです。そこで、本学会でも、これらの情報につきましては、その適正な取扱いの確保と個人の権利や利益の侵害の防止を図る為、その公表には慎重な取り扱いをさせていただく所存であります。つきましては、新しく本学会に入会希望をお届けの際には、

1. 氏名
2. 住所
3. 所属（身分＜教員、学生、非常勤等＞）
4. 電話番号
5. ファックス番号
6. メールアドレス

のうち、項目別に、会員名簿上に掲載を不可とするものがありましたら（また代替の情報がある場合はその内容を）事務局にメールでご連絡いただきますようお願いします。

=== 記 ===

『語用論研究』は毎年 12 月に刊行、Newsletter は毎年 4 月末と 10 月末にお送りしています。会員になられると、『語用論研究』、Newsletter、大会プログラムなどをお送りいたします。なお、2005 年度より新たに、毎年の大会で発表された論文をとりまとめた『大会発表論文集』(Proceedings)を大会後に発行することになりました。

日本語用論学会規約

第1章　総則

第1条　本会は「日本語用論学会」(The Pragmatics Society of Japan) と称する。

第2条　本会は語用論ならびに関連諸分野の研究に寄与することを目的とする。

第3条　本会は次の事業を行う。

1．大会その他の研究集会。

2．機関誌の発行。

3．その他必要な事業。

第4条　本会は諸事業を推進するため運営委員会および事務局を置く。

第5条　運営委員会の承認を経て、支部を各地区に置くことができる。

第2章　会員

第6条　本会の会員は一般会員、学生会員、団体会員の3種類とする。

第7条　会員は、本会の趣旨に賛同し所定の手続きを経て本会に登録された個人及び団体とする。

第8条　会員は諸種の会合及び事業の通知を受け、事業に参加することができる。また、所定の手続きを経て、研究集会で研究発表し、機関誌に投稿することができる。

第3章　役員

第9条　本会に次の役員を置く。任期は2年とし、再選を妨げない。

会　　長　　1名
副 会 長　　1名
事務局長　　1名
運営委員　　若干名
会計監査委員　　1名

また、顧問を置くことがある。

第10条　運営委員会は、会長、副会長、事務局長および運営委員から構成される。

第11条　会長、副会長、および事務局長は運営委員会で選出され、運営委員は会員より選出される。

第12条　運営委員会は次の任務を遂行する。

1．機関誌および会報誌等の編集・刊行にかかわる事項の決定。

2．大会および研究集会等にかかわる事項の決定。

3．予算案および収支決算案の作成。

4．その他運営委員会が必要と認めた事項。

第13条　運営委員会の中に次の委員会を置く。委員は運営委員会の議を経て会長が委嘱し、兼任することができる。各委員会は会務を遂行するために、運営委員会の承認を得て有給の事務助手を置くことができる。

1．編集委員会
2．大会運営委員会
3．事業委員会
4．広報委員会

第14条　各委員会の業務を調整するために代表連絡会議を開く。代表連絡会議は、会長、副会長、事務局長、編集委員長、大会運営委員長、事業委員長、広報委員長から構成される。

第15条　本会の会則は、会員総会で承認を得るものとする。

第16条　会員の中から会計監査委員を1名選出する。任期は2年とし、1期に限る。

第4章　会議

第17条　定例会員総会は、年1回会長がこれを招集する。また、必要な場合、臨時会員総会を招集することができる。

第18条　定例運営委員会は、必要に応じて、年1回以上招集される。

第5章　会計

第19条　本会の運営経費は、会費、寄付金等を以てこれに当てる。

第20条　事務局は、予算案および収支決算書を作成し、運営委員会の議を経て、会員総会で承認を得るものとする。ただし、収支決算書は会計監査委員の監査を受けなければならない。)

第21条　本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第6章　事務局

第22条　事務局を事務局長もしくは運営委委員の所属する大学に置く。

第7章　事務局および委員会に関する細則

1．事務局は、事務局長、事務局長補佐、会計、会計補佐から構成され、対外折衝、運営委員会・総会の企画・運営、会員名簿の管理、会費の徴収、会計、機関誌・大会予稿集等の販売、会員への連絡など、学会の運営にかかわる諸々の業務を担当する。事務局は、業務を遂行するために、運営委員会の承認を得て有給の事務助手を置くことができる。

2．編集委員会は、委員長、副委員長、委員から構成され、機関誌『語用論研究』の編集と刊行に関わる業務を担当する。
3．大会運営委員会は、委員長、副委員長、委員から構成され、大会企画と大会実行の二つの業務を担当する。大会企画担当の委員は、ワークショップ、研究発表、シンポジウム、講演等、大会全般を企画・提案し、大会予稿集Program and Abstractsを編集・刊行する。大会実行担当の委員は、会長から委嘱された大会開催校委員と協力して、大会の実行にあたる。
4．事業委員会は、委員長、副委員長、委員から構成され、講演会、セミナー等の企画、運営、実行にあたる。
5．広報委員会は、委員長、副委員長、委員から構成され、会報誌・Newsletter、ホームページ等の編集と発行に関わる業務を担当する。

第8章　会長選出に関する細則

1．この細則は、会則第9条と第11条のうち、会長の選出方法と任期について定める。
2．会長は、会員の中から、就任時に65歳以下のものを運営委員の投票によって選出する。投票は郵送による無記名とする。
3．投票の結果、過半数の得票を得た者を会長とする。過半数を得た者がない場合、得票上位者2名についての決選投票を行う。尚、得票数が同数の場合は、最年長者を会長とする。
4．前条によって決定された会長は、改選の前年度の定例総会において承認を得るものとする。
5．会長の任期は2年とし、2期までとする。
6．会長選挙管理委員は、現会長が運営委員会の中から必要数を選出する。

附則：この細則は、平成17年10月5日から実施する。

平成10年12月5日（制定）
平成15年12月6日（改正）
平成17年10月5日（改正）

『大会発表論文集』(Proceedings) 執筆規定

1. 執筆規定

1．用紙・枚数：　A4 用紙、横書き。「研究発表」は 8 ページ以内、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」は 4 ページ以内（注：要旨、参考文献を含む)。字数は自由。

2．書式：

a．余白は上下 30mm、左右 25mm とする。1 行文字数、行数、段組などは自由（ただし、文字のサイズは極端に小さくしないこと）。

b．原稿の 1 ページ目には、タイトル、氏名、所属(E-mail アドレスは任意)を記し、そのあと 2 行開けて要旨、本文を続ける。

c.　「はじめに」または「序論」の節は 0．からではなく、1．から始めること。『語用論研究』の執筆要領と同様。

d. 例文の前後は 1 行、各節の前は 1 行開ける。

e. 注を付ける場合は、巻末とし、本文と参考文献の間にまとめて入れる。

f. 参考文献のフォーマットは『語用論研究』の執筆要領に従うこと（本学会のホームページ http://www.soc.nii.ac.jp/psj4/　参照）。

3．要旨：

a．　日本語または英語の要旨（10 行以内）と【キーワード】：（5 個以内）を添えること。

b．　要旨の位置は＜要旨＞ないし＜Abstract＞をページの左上に記し、原稿の 1 ページ目には、タイトル・氏名・所属と要旨、本文の間にそれぞれ上下 2 行ずつアケで記すこと。

見分けのイメージ（1 ページ目）

タイトル○○○

氏名○○
所属○○

＜要旨＞

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【キーワード】：1、　2、　3、

本文

2. その他の注意事項

a．執筆者は、前年度の大会の「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」での報告者に限る。

b．内容は、大会発表に沿ったものとする（但し、必要な修正を施すこと）。

c．使用言語は原則として日本語または英語とする。

d. 原稿はそのまま写真印刷するので、鮮明に仕上がるよう文字の大きさの他、濃さにも注意すること。ページ番号は原稿の裏面に鉛筆で記すこと。

e.『プロシーディングズ』に掲載した内容は、さらに発展させて、『語用論研究』に投稿することができる。その場合は、必ず十分な加筆・修正を施すこと。

f. 別紙(A4)に次の事項を記入して提出すること：

①「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」のいずれであるか。

②発表論文タイトルと発表者名（日本語）　氏名（ふりがな）

③発表論文タイトルの英語訳と発表者名のローマ字表記。

④連絡先：E-mail アドレス

＜第 10 回大会で発表された方へのお知らせ＞

第１０回『大会発表論文集』(Proceedings) （第３号）

掲載論文原稿執筆のお願い。

日本語用論学会では、2005 年度より、毎年の大会で発表された論文をとりまとめ、大会後に、『大会発表論文集』を発行しています。つきましては、今年度の大会の「研究発表」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」で、発表されました皆様には、以下の要領で原稿を提出していただくことになりますので、予め、お知らせいたします。尚、原稿の提出先や提出期限等の詳しいことは、追って、ＨＰやニュースレターでもお知らせします。次号（第３号）の発行は、来年度の大会時となります。

（日本語用論学会　事務局より）

編集後記

『日本語用論学会　第9回大会発表論文集』(第2号)をお届けします。日本語用論学会では、2005年度より、新たに毎年大会で発表された論文をとりまとめ、大会後に、論文集を発行することになりました。今回の論文集では、研究発表19件、ワークショップ発表19件の、ポスターセッション8件、合計46件で、第9回大会でのほとんどの発表者が投稿して下さいました。この論文集の発行によって、大会で発表された研究が多くの人に読まれ、語用論研究がますます発展することを願っています。第10回大会後は『日本語用論学会　第10回大会発表論文集』(第3号―10周年記念世界大会―)を発行する予定ですので、どうぞご期待ください。

(『大会発表論文集』編集担当：余　維)

日本語用論学会　第9回大会発表論文集　第2号(2006)
(Proceedings of the 9th Conference of the Pragmatics Society of Japan)

発　行　日　2007年11月3日

代　表　者　澤田治美

編集・発行　日本語用論学会　事務局(The Pragmatics Society of Japan)
〒594-1198 大阪府和泉市まなび野1番1号　桃山学院大学　林宅男　研究室内
TEL：0725-54-3131　FAX：0725-54-3202

印　　刷　(株)田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入
TEL：075-343-0006　FAX：075-341-4476

PSJ

©日本語用論学会

編集後記

『日本語用論学会　第9回大会発表論文集』（第2号）をお届けします。日本語用論学会では、2005年度より、新たに毎年大会で発表された論文をとりまとめ、大会後に、論文集を発行することになりました。今回の論文集では、研究発表19件、ワークショップ発表19件の、ポスターセッション8件、合計46件で、第9回大会でのほとんどの発表者が投稿して下さいました。この論文集の発行によって、大会で発表された研究が多くの人に読まれ、語用論研究がますます発展することを願っています。第10回大会後は『日本語用論学会　第10回大会発表論文集』（第3号―10周年記念世界大会―）を発行する予定ですので、どうぞご期待ください。

（『大会発表論文集』編集担当：余　維）

日本語用論学会　第9回大会発表論文集　第2号（2006）
(Proceedings of the 9th Conference of the Pragmatics Society of Japan)

発　行　日　2007年11月3日

代　表　者　澤田治美

編集・発行　日本語用論学会　事務局（The Pragmatics Society of Japan）
〒594-1198 大阪府和泉市まなび野1番1号　桃山学院大学　林宅男　研究室内
TEL：0725-54-3131　FAX：0725-54-3202

印　　刷　（株）田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入
TEL：075-343-0006　FAX：075-341-4476

PSJ

©日本語用論学会